

後立山からヒマラヤへ

戦後半世紀の歩み

2005年11月

大阪大学山岳会

後立山からヒマラヤへ

戦後半世紀の歩み



P29峰西面（1961年5月、ベンスキャンゾから。山本光二氏撮影）



アプサラサス（ベースキャンプから。中央左が主峰。石原敏雄氏撮影）



サンゲマルマール（C 3から望む1峰、2峰。撮影者不明）

はじめに

会長 大野義照

大阪大学山岳会は、戦後間もない1949年、まだ学生だった徳永篤司前会長や大島輝夫氏らによって設立された。それからの山岳会・山岳部の半世紀は、白馬岳主稜の厳冬期初登攀等、北アルプス後立山連峰で厳冬期のルート開拓をおこなった創生期、ヒマラヤ遠征に熱情を注いだ60年から70年、ヒマラヤ登山でもライトエキスペディションが中心になった80年から90年、若い会員が減少した半面、OB仲間の山行・懇親会が盛んになった90年代以降と区切られるように思う。

この間の70年には住吉仙也登攀隊長に率いられた第4次遠征隊によってP29峰（7835¹）の東面からの初登頂を成し遂げることができた。しかし、残念なことに、初登頂者である渡部洋隊員とシエルバのハクバ・ツエリンを失った。登頂に至る経過を簡単に述べると、61年春の第1次隊は、地図の空白部であった西面から登頂の可能性を探った。登山隊というより探検隊であった。63年秋の第2次隊は、困難とされていた東面からのルートを探ったうえ西面にも回り、両ルートを比較した結果、東面から方が登頂の可能性が大と判断した。その後、ネパール政府は約5年間、登山を禁止した。解禁になった69年秋、第3次隊が東尾根から頂上に至る氷壁途中まで迫り、翌70年秋の初登頂につながった。

これら4次にわたる遠征隊は、登山活動だけでなく、キャラバン中に各種の学術調査にも力を入れた。第1次隊は西面の地形調査、第2次隊はツラギ氷河や葉草・生葉の調査、第3次隊は住民の歯学面の調査、第4次隊はブリガンダキ沿いの民家の調査をおこなっている。ソデグロナベツルが

秋にチベットからインドへとヒマラヤの高峰を越えて渡ることを確認し、写真撮影に成功したのは第3次隊である。

62年にはスキー部など関係体育会クラブと協力して白馬山麓・梅池に山小屋「梅の木寮」を建設した。冬山の新人合宿や個人山行に大いに利用するとともに、毎年夏の終わりには徳永前会長、山田朝治前山岳部長を始め、現役、OBが集った。その山小屋は96年の大雪で傾き、一般学生の利用が少なくなっていたこともあり、解体され、自然に戻された。その後の夏の白馬集会は、山岳部創生期からお世話になっていた長野県白馬村の対岳館に場所を移して続いている。76年にはカラコルムのアプサラサス峰（7245呎）に初登頂、84年には若いOBと現役主体のチームで、やはりカラコルムのサンゲマルマール峰（7050呎）に初登頂した。

2000年からは「時報」に代わる新しい会報「OUMC」が毎年発行されるようになり、2001年夏には白馬村の対岳館に会創立50周年を祝う記念碑が建てられた。また、近年は、総会、白馬集會、新年懇親会のみならず、東京支部の会員を中心に積雪期登山や日帰り山行、種々の懇親会が企画され、会の活動が今まで以上に活発になってきたことは誠に喜ばしい限りである。

それに比べて気がかりなのは、近年の現役山岳部の低迷である。部員数が減少し、部員が一人もいない学年さえあったほどだ。このような状況が続くと、山岳部の良き伝統が伝わらない、技術が伝承されない、それが事故につながるという悪循環すら懸念され、4年間で卒業していく大学山岳部固有の課題が顕著になっている。この問題に対処すべく、会として今まで以上に現役への援助をおこないたいので、特に若いOB諸氏の協力に期待したいところだ。

近年、大阪大学では教養部が解体され、1年次から専門学部にも所属し、専門科目の講義を受ける機会が増えている。本来、大学は学問を学ぶ場であるとともに、人間教育の場でもあると思う。他学部の学生と寝食を共にし、自然との共生を目指し、危機管理を学ぶ山岳部は、その意味で人間教育の場を提供しているともいえる。このような点からも会員諸氏に現役への一層の支援をお願いしたい。終わりに、P29登頂後、下山中に逝った故・渡部洋君がベースキャンプから日本へ送った通信文の中から一部を紹介して、これから続く人々に贈る言葉としたい。

「天気の良い時は頂上をみつめ、しみじみ思う。ただあの一点に誰かが立つために今まで、そして今もお、どれほど大勢の人が努力をしていることか、それでもなおそれが可能かどうか判らないのだ。何のためにこんなことをするのか？ 誰にもうまく説明はできない。仮に登頂に成功したとしても何がどうなるというものでもない。われわれの他には誰もいないのだから、見ている人もなく、声援がとんでくるでもなく、褒賞によって報われる訳でもなく、ただの自己満足で終るのだ、まったく無償の行為とは今われわれがやっていることだろう。（中略）ぼくは今でも、少しのためらいも、後悔じみたものも、まったく感じていない。ただ自分が選んだこの途を、限られたこの時間の一刻一刻を、精いっぱい、少しの取りこぼしもしないように努めるのみだと思うばかりだ」

（報告書「P129 1961〜1970」より）

2005年11月

目次

はじめに……………会長 大野義照

写真 P 29峰など初登頂した海外の山々

大阪大学山岳会創生記

1948年1月8日 遠見小屋の一夜……………大島輝夫

部活動は旧帝大以前から 山岳会誕生前史……………篠田軍治

△再録▽「時報第一号に寄せて」……………5

◇第1部 国内の山行

後立山連峰から黒部へ……………8

部員増が支えた上廊下横断……………14

「中継ぎの時代」を振り返って……………17

積雪期黒部上廊下の完全トレース……………22

山岳部中興の記……………25

△再録▽1949年冬山合宿・厳冬期の白馬岳主稜▽53年春山合宿・後立逆縦走▽53年冬山合宿・

天狗のコルより槍往復▽56年春山合宿・春の黒部下廊下横断について▽59年春山合宿・黒部川上廊

下積雪期初横断▽61年11月富士山遭難報告▽63年春山合宿報告・日本海より五竜岳へ▽64年春山合

宿・双六より針ノ木岳及び三俣新人合宿▽76年冬山合宿・剣岳北方稜線▽78年冬山・穂高主稜線縦

走▽90年3月山行・鹿島槍くS字峡く剣岳▽93年11月春山偵察山行事故報告

◇第2部 海外遠征

P 29初登頂(再録)……………住吉仙也

8ノの荷物輸送に四苦八苦……………西川元夫

P 29 隊に参加して	田中喜樹	119
P 29 とアップサラサスの思い出	三澤日出夫	124
ビッグホワイトピークと雪男の足跡	二木節夫	126
ロブジェビーク遠征記	奥山宏臣	127
アイランドピーク遠征の思い出	大倉徹雄	129
△再録▽P 29 の10年▽P 29 隊の見た「そでぐる鶴」について▽アップサラサス登頂		
▽1984年カラコルム・サンゲマルマール登頂		

◇第3部 山岳部いまむかし

若手会員座談会「大学山岳部はどこへ」

思い出の人々

篠田軍治▽水野祥太郎▽徳永篤司▽恩地裕▽山田朝治▽丸山与兵衛▽家田千尋▽尾藤昭二

▽坪井圭之助▽佐藤茂▽渡部洋

写真で見る半世紀

随想「思い出すまま」 難波恒雄▽久保三朗▽三枝礼子▽岡田博司▽丸山庄司▽山本彰三▽高田邦雄

コラム「あの時」 16 31 112 125 148 158 171 179

◇資料編

大阪大学山岳会の歩み(表)

記録に見る戦前の山岳部活動

旧会報「時報」総目次

あとがき

カット 三枝礼子・辻川 眞

大阪大学山岳会創生記

1948年1月8日 遠見小屋の一夜

大島 輝 夫

大阪大学山岳会の正式の発足は1949年（昭和24年）であり、会として最初の活動は同年春の徳永、大島による雨飾南尾根の初登と見るべきであると、初代会長の故篠田軍治先生は、会報『時報』1号（1950年1月）に書いておられる。しかし、実は、その「事始め」は48年1月、遠見小屋で私と徳永が出会ったことである。私が阪大生であることを知った徳永が、初対面にもかかわらず「阪大に山岳部をつくりませんか」と声をかけてきたのである。

45年8月、戦争が終わり、各大学山岳部も、復員してきた人たちを中心に復興の歩みを始めていた。阪大の前身である大阪帝国大学にも戦前から山岳部はあったが、戦後の混乱の下、実質的な活動は見られなかった。48年1月、私は理学部数学科の学生であったが、神戸一中（現在の神戸高校）時代からの山友達で京大山岳部員の土佐洋一君に誘われて京大山岳部の遠見尾根冬山合宿に特別

参加した。計画は遠見小屋からの五竜往復で、メンバーは私を含め5人であった。

そのころの学生登山界ではヒマラヤを意識した極地法が主流であったが、浪高・東大山岳部OBで、復員してきた佐谷健吉氏らはラッシュアタックを主張していた。

1930年代、英国は重装備のエベレスト遠征隊を何回も送っていたが、シプトン、ティルマンらはライトエキスぺディションの優位性を主張していた。ティルマンは36年、ナンダ・デヴィ（7816¹）の登頂でこれを実践していたから、佐谷さんもその影響を受けていたのかもしれない。そして、それを実際に示すため、48年1月4日、徳永と共に、遠見小屋から鹿島槍北壁、荒沢を経て鹿島村まで、途中でビバークをしながら40時間に及ぶラッシュアタックに成功した。

私たちは1月8日、細野（現在の八方）から遠見小屋に入った。雪の少ない年だったので、ブッシュに苦しみながら小屋に着いたのは夜8時半であった。途中、日が暮れかかったころ、毛リリーダーが「徳永が後から登ってきたな」と言ったのを覚えている。これはアタックの後、遠見尾根にデポしたスキーを回収するため、一人で登ってきたのであった。遠見小屋は我々と徳永だけであったが、たまたま部屋に徳永と私の二人だけとなった時、

最初に記した言葉をかけてきたのである。

翌日、徳永は、体調が悪いと言つて、スキーを回収せずに下山した。我々は12日、濃霧のため出発が遅くなり、スキーをデポした後の白岳の登りでラッセルに苦しみ、結局、そこで引き返した。帰りに佐谷さんと徳永のスキーを回収して小屋まで下ろしたが、そのスキーにはシールが釘で打ち付けてあった。

48年に発行された神戸高校（旧制神戸一中）山岳部報『群巒』19号には、OBの記録として「3月16、21日遠見小屋 大島他1名」とあり、「連日雨の為、大遠見往復の外に何も出きず発熱して下る」とある。この時、徳永と私は遠見小屋に入り、残したスキーを持って下りたのである。この後すぐ、佐谷、中西久雄、徳永の浪高OBパーティーは、浪高山岳部の懸案の一つであった白馬三合尾根の積雪期初登に成功した。一方、私は旧制東京高校の現役と共に、梅池の成城小屋から唐松岳まで縦走する計画であったが、落倉に着くと、成城のパーティーが白馬山頂付近で遭難し、数名が凍死、生存者は頂上の小屋にいるとの報に接し、計画を中止して救援活動に従事した。細野に戻ると、佐谷さんの置き手紙があり、地図入りで三合尾根登はんはんに成功した旨と、私が貸したブルムスのガソリンコンロがテントの中で火災を起こし、

外に放り出したと、断りが記してあった。

1月に徳永と知り合つてから3月に山行を共にするまで、互いの家を行き来したはずだが、今は確かな記憶はない。また、佐谷さんとは、それまでに日本山岳会関西支部の会合でお会いしていたと思うが、どのようにして知り合つたのか覚えていない。

関西支部のルームは戦前から、御堂筋の堂ビルの向かいの大阪貯蓄銀行ビル3階にあった。廊下を隔てて西岡一雄氏の好日山荘があり、戦時中から大賀寿二氏もおられた。地の利もあつて岳人のたまり場となり、情報交換の場でもあつた。京大の土佐と私は中学時代に西岡氏と徳高に行を共にしたこともあり、また私は理学部に近かつたので、よく出入りした。関西学生山岳連盟の会合もこのルームで行われた。そんなこともあつて、私は、阪大山岳会が正式に発足する前から関西学生山岳連盟の会合に出たり、また、52年の日本山岳会入会以前から関西支部の会合にも出席したりしていた。篠田先生は、戦後いち早く復活した日本山岳会の関西支部長をしておられたから、阪大山岳会発足以前からお会いしていた。また、篠田先生のご紹介で、工学部山岳部の長田氏や藤谷氏と会つていたし、六甲と一緒に行ったこともあつた（この2氏の名は阪大山岳会の名簿にはない）。

48年11月、富士山で、日本山岳会の企画による関東、関西の学生の合同登山が行われた。吉田口五合目の小屋での夜、極地法かラッシュアタックかで佐谷さんと早稲田の関根さんが向かい合って論戦となり、関根さんが「そんなことでエベレストが登れるか」と怒鳴ったのが昨日のことに思われる。この時、阪大からは徳永大島、藤谷の3名が参加した。関東勢は山頂往復だけであつたが、関西勢は、関学隊と混成隊とが各々山頂にテントを張って1泊した。関学隊には清滝、藤木氏らがついて、混成隊には私のほかに住吉薫氏（市大医学部）らがついた。翌朝、関学の片山全平氏が登ってきて、関大の人が滑落負傷したので、すぐ下りるようにとのこと、急ぎ下山した。49年4月、私は理学部化学科に再入学し、徳永と2人で4月の雨飾南尾根初登はん、6月の阪大山岳会の正式設立へと続くのである。

ここで関西学生山岳連盟について触れておきたい。同連盟は29年、大阪医大在学中の水野祥太郎氏（阪大山岳会第2代会長）が京大の高橋健治氏らと協力して、当時の「行き詰まり」を打破せんとして結成したものである（連盟報告1号、30年）。戦前は、千島、済州島などへ合同遠征をおこなっていた。水野氏はその後、神戸の津田周二氏と協力して35年の日本山岳会関西支部設立にも

尽力されたが、特に関西学生山岳連盟に愛着を持っておられた。戦後のある時、私に「今までずっと総会には欠席したことがなかったが、先日は行きかけたが、何とか途中で引き返した」と言われたこともあつた。

このように関西学生山岳連盟は阪大と関係が深く、私も戦後の復興に努力した一人であるが、近年は加盟各校の部員減少に伴って自然消滅状態と聞く。しかし、これは逆ではないだろうか。部員が少なく、独自の活動が難しくければ、各校が連盟に結集して力を合わせるのが本来の行き方ではないかと思う。関東の大学では日本山岳会学生部が定期的に会合を開く一方、海外にも遠征隊を出している。99年9月には北京大学と合同で四川省の雪宝頂（5588⁸）に遠征隊を送り、7大学の現役10名と学生部指導委員2名が参加、7名が登頂したほか、04年には夏休みを利用してネパール・ムスタンの6650⁸峰の初登頂にも成功している。

関西でも学生山岳連盟への再結集が望まれるが、それが難しければ、日本山岳会関西支部に学生部を設置することを考えてはどうだろうか。関西支部は昨年、独自の海外遠征隊を出し、西ネパールの6529⁸峰などの初登頂に成功したばかりだし、十分検討に値するテーマだと思ふ。

（1952年理学部卒）

部活動は旧帝大以前から

山岳会誕生前史

大阪大学における山岳部活動の始まりは1949年（昭和24年）の山岳会設立のはるか前、戦前にまでさかのぼることが近年明らかになった。発端は日本山岳会（JAC）が百年史編さんのため、30年までに創設された学校登山クラブについて調査を依頼してきたことによる。29年から30年は多くの大学山岳部がJACへ入会する一方、関東、関西に学生山岳連盟が結成されるなど横断的な組織が整った時期で、旧大阪帝国大学の前身である府立大阪医科大学、国立大阪工業大学でもすでに山岳部があり、活発な活動をしていくことがわかった。当会では誕生以来、こうした戦前の歴史をきちんと伝承してこなかったため、この機会に戦前を知る先輩らへの調査を加えて次代に残すことにした。大阪帝大は31年に大阪医大を引き継ぎ、理学部を新設して開学。33年に大阪工大を合併し、戦後の48年に文科系学部を新設して総合大学の形を整えた。また49年の学制改革で国立大阪、府立浪速両旧制高校を編入して教養部とし、新制大学となった。

JACの記録では、大阪医大山岳部は29年に発足し、31年には大阪帝大医学部山岳部に、33年には大阪帝大

山岳部として登録されている。JAC入会は36年4月で、この時の会員番号1659が今も阪大山岳会に引き継がれている。他方、故水野祥太郎氏らが設立した関西学生山岳連盟の当初からの加盟校で、その後の加盟校には大阪工大や旧制浪速、大阪両高校の名前も見える。32年には連盟事務局が大阪帝大にあったとの記録も残る。

大阪医大では28年から白馬山麓の細野（現在の八方）でスキー合宿をし、翌年には水野氏らが厳冬の唐松岳に登頂している。水野氏はRCCでも活躍し、当時の山岳専門誌『ケルン』に欧州の登攀記録の翻訳や登山に関する論文をたびたび寄稿し、『岩登り術』『山野スキー術教本』の著書もあつた。

工学部の前身である大阪工大には、そのまた前身の大阪高等工業学校時代（大正時代）から山岳部があり、芦屋のロックガーデンや道場の岩場で岩登りの練習をしていた。夏は北アルプスに登り、冬は関、野沢温泉でスキー合宿をしている。31年の晩秋には木曾駒で遭難事故を起こしている（JACの記録など）。

戦後発足した阪大山岳会（部）には旧制浪速高校山岳部から多くのメンバーが入部。戦前から山岳界でも高く評価された浪高の後立山における活動の実績と伝統が新山岳会に継承された。

（巻末に関連資料）

時報第一号に寄せて

篠田軍治

過去の阪大は幾多の優秀な部員を出してはいるが、全体としての纏まった行動にはあまり大きな足跡を残していない。併し、これは阪大の山岳部員が山岳界に何等の貢献をしていないということの意味しない。或は学連の事業に、或は出身校の後輩の育成に、隠れた業績は多々ある。唯、学内に於て新人を養成したり、学校単位での大きな行動のようなものだけが活動の対象であると、部の存在意義を狭い意味にとるならば、活動は明かに不活発なものであつたと言えよう。

併し新制大学が発足してみると従来のような行き方は許されなくなった。初年度の入学者は新制高校の卒業生と旧制高校第一学年の修了者である。今までのような旧制高校三ヶ年を終えた者だけの集りとは違つたものになつただけに、その行き方も当然違つたものでなければならぬ。旧制高校でやつていたようなことも勿論必要になつて来て、今までのような外国の大

学クラブ式の行き方で納まりかえっているわけにはゆかない。他面、今まで理科系学部では、漸く纏まりが出来てこれからのいう時に卒業研究や何かで色々な行動上の障害にぶつかり、高校では直結する学部がないだけに漸く動けるようになった時分にはもう卒業して分散してしまうという悩みがあつたが、これは大体に於て解消したものと見えよう。

こゝまで述べて来て、阪大には北校（浪高）、南校（大高）が教養部及び法経学部、文学部（浪高内）の二学部として生れ出たことを附加すれば、阪大山岳会という全体的な組織が出来上るべきであり、又如何なる性格のものであるか別に取り立てて説明しなくても、O・Bの諸氏にも理解してもらへることと思う。併し、この機会に戦争末期から今までの経過を記述しておくことも無意味なことではないであらう。

戦争の末期、学風会が報国団式なものに改組され、各学部会が無くなつて、山岳部も鍛錬本部内の行軍山岳部の形で一本のものになつたが、勿論、本来の行動はするに由なく僅かに年一回の強歩大会を主催したり、燈火管制下でさゝやかな山の集いを時々催して山やスキーを語り合う程度のことしか出来なかつた。戦災や疎開の慌しさの中に失われた資料も少くはなかつた。

当時、自分はポツダム宣言の内容を地方新聞で知って霧の中に初めて尾根が見えたような気持を味わうことが出来た。併し、それは長い長い尾根であるように思われた。それでも終戦という悲しい現実の中に、遠く困難なものには違いないが、ルートがはっきりと見えて来たことは何物にも換え難い喜びであった。それは、寒さは段々と酷しくなつてはきたが、夜明けまでには、あと何時間、もう大丈夫というあの気持であつた。

併し部の再建は中々捗らなかつた。阪大には学徒出陣が無かつただけに旧部員の復員を期待するわけにはゆかない。兎に角、出来ることからやつてゆかなければならないので、二十一年の秋から細野のスキー合宿を計画して、その冬に曲りなりにも実行に移すことが出来て、第一回の神鍋の大会で優勝し、最終回戦技スキー大会という名で行われた時にも有終の美をなすことの出来た伝統あるスキーを復活することの出来たのは、友田君はじめ熱心な部員の献身的な働きによるものである。

こうしてスキーの方は再建の第一歩を踏み出すことが出来たが、山の方はスキーのように纏まつた行動をしなくても曲りなりにも山行が出来るだけに軌道に乗るには案外手間取つた。工学部で戦後最初の夏山報告

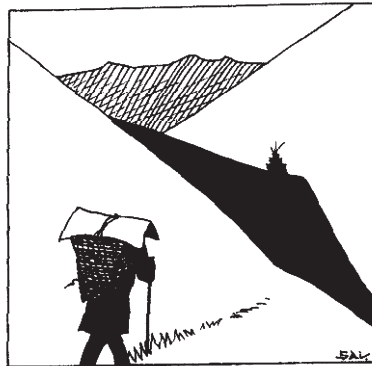
会を催せたのは二十三年であつたが、まだまだ内容的には乏しいものであつた。従来とでも、又とない名コンビを形成すべき筈の人間が卒業まで全く知らずに過してしまつた例は多い。こうした苦い経験が又も繰返されそうな状態にあつた矢先、徳永、大島両君の春山での初顔合わせが全く偶然なことで行われた。出身校も学部も学年も違つていたので全く顔見知りでなかつた者同志が同じ阪大であるという綱で固く結ばれた時、こゝに部の再建というよりは建設の第一歩がはっきりと踏み出されたのであつた。

だから会の実質は発会式以前に出来ていて、実際の活動も二十四年春の雨飾行を最初と見るべきである。そして間もなく思い掛けなく予期以上の新人部員を得て、会の外観も整えることが出来たのである。報告に現われているように今までの経過は順調にすくすくと伸びてきたと言えよう。併し、それだけに来るべき今後の試練に対して十分な覚悟が必要である。今後もあるだけ記録を纏めて、反省検討に資したいと思う。

戦後の学校山岳部の動きは大体に於て戦前の復習であると言つて差支えないかと思う。これも大体曲りなりにも終つたような観がある。阪大も、新制大学の方のトレーニンングは九月から始めたばかりではあるが、

会の動きもこの冬山で一つのピリオドを打ったものと
考えられる。学生山岳界と同調して阪大も一つの転機
に立っているわけである。昭和七年、八浜氏の後を受
けて阪大編入直前の現工学部の前身、大阪工大の山岳
部に自分が関係した当時もやはり一つの転機であった。
冬の滝谷、屏風岩も一応片付いて、これからは当時の
言葉で言えば「長い尾根をビバックしながらキャンプ
を進めて行く行き方」だけしか残っていないように思
われていた。併し、これはあまりにも狭い考え方で、
もう少し自由な考え方をしていたら、スケールの小さ
い部でも、もつと違った行き方があった筈である。今
違った条件下で同じような転機に再会して、当時のこ
とがまざまざと憶い出されるのである。

(1950年1月「時報」1号より)



(ネパール・ブリダングタ)

第1部 国内の山行

後立山連峰から黒部へ

田島 汎

創設当初

大阪大学山岳会が結成に向けて動き出した1948年頃は、いわゆる学制改革が進行しており、新制大学の学生は教養課程の間は学部を問わず一堂に学ぶこととなった。これによって学部ごとにキャンパスが異なるという、集团的スポーツ活動に対する阻害要因が改善されたことも、山岳会結成と立ち上げへの追い風になったと言える。このようにして阪大山岳会は新制大学1期生が入学してきた49年に、現役の山岳部だけでなくOBも含めた集団としてスタートを切ったのである。

新設の山岳会の主力ともいうべき現役山岳部は既に大学に在籍していた旧制の学生だけでも10余名を集めたが、さらに新入の新制の学生からも7、8名の参加があり、数の上だけは立派な陣容となった。しかし、実力はお寒い限りで、特に本格的な積雪期登山の経験のある者は4、5名に過ぎず、あとは、やる気と体力だけはあるが……といった有様であった。こうした状況をふまえ、初めての

集合山行であった50年の冬山は未経験者の訓練を兼ねて荷上げとサポートをやり、少数の経験者が一気に頂上を目指すというラッシュユタクテイクスを採用し、厳冬の白馬主稜登攀の成功という成果を得た。この結果は単なる成功というにとどまらず、阪大山岳会の基礎を固め、更に前進しようという点において非常に有意義な一歩であったと言えるだろう。もしこの時に事故でも起こしていたら阪大山岳会の後はどうなっていたかわからなと思うほどの重要な一歩であった。

失敗で育んだ実力

白馬主稜の成功で最初の壁を乗り越えた阪大山岳会は次の目標に向かって歩み始めた。それはわれわれが目の前にして親しんできた後立山々系を積雪期に縦走しようというものであった。50年の春山は新制の発足の遅れから旧制と新制の春休みが食い違い、別々の行動となったが、それぞれに積雪期の稜線を歩いて経験を積んだ。また4月には有力な部員が何名も加わってきた。これらをふまえ51年の冬は雪中の幕営と登攀の訓練を目標に杓子の双子尾根に入った。ところが、この年は稀に見る猛風雪と豪雪に阻まれ、先に小日向のコルに上った先発と、後からこれを追う隊とが2日間にわたって連絡が途絶す

ることとなり、この間、上では主食が不足し、下ではお
かすがないという事態が発生した。

これは荷上げの際の計画・運営の不備を露呈したもので、以後はこの経験をふまえ、食料・燃料・その他装備
一切をどのように仕分けし、どのように運ぶかということ
に十分配慮し、失敗を繰り返さなくなったことは収穫
であった。また悪天候による連絡の途絶や日程の遅延な
どについても貴重な経験を得ることが出来た。双子尾根
の途中までしか行けなかったから計画自体は失敗だった
が、いろいろな教訓を得た山行でもあった。

雪山の経験を積んだ部員をある程度揃えることが出来
たので、その年の春、後立山全縦走に挑戦することとな
った。この計画は、縦走隊が針ノ木から雪洞によって露
営しながら歩を進め、途中の冷池と唐松にサポートを上
げて物資を補給して白馬に至るというものであったが、
縦走隊の一人がスバリの下りでスリップ事故を起こして
中止のやむなきに至った。しかし、後で考えてみると、
この計画は縦走隊の負担があまりに重く、よほどの好天
に恵まれない限り成功は難しかったであろう。この反省
から縦走隊を小人数・軽装にして行動力を高め、一方、
サポートを充実して稜線の要所に拠点を設けて支援する
という態勢が必要であるとの認識を持った。この為には

雪山で活動出来るメンバーの更なる充実が急務とされ、
以後これに基づいた計画が展開された。

52、53年の冬、主力メンバーは後立山より天候が良く
て行動日数の多くとれる南アルプスの北岳と聖岳を対象
に選び、積雪期登山のトレーニングの場とした。これら
の山行では、厳冬の3000m級の稜線での行動、強風
によるテントの破損、物みな凍るマイナス20度以下の低
温の中での登山活動など多くの貴重な経験をえた。他方、
下級生部員は一部上級生やOBの指導のもと八方尾根に
てスキー及び雪中露営の訓練を行い、来るべき計画に向
かってレベルアップに努めたのである。

この間にあって52年春に杓子の双子尾根から不帰を越
えて唐松を往復する計画を展開した。この山行は当時山
岳界で盛んに行われ始めた「極地法」をわれわれも一つ
やってみようということと、来るべき縦走に備え、着実
に拠点を建設していくことのリハースルといった2つの
狙いがあった。結果は、多少の悪天もあつたが、十分に
実力を発揮し見事に成功させることが出来、今までの訓
練の結果が着実にレベルアップにつながっていることを
実感した。どうやら阪大山岳会も前方の視界が開けてき
たような気がしてきたのである。

貧乏登山隊奮闘記

阪大山岳会の発足時、人的なスキルの貧困は先に述べた通りであるが、装備の方もまことに粗末であった。

一応、各学部及び阪大に吸収された旧制の浪速高校と大阪高校の装備を引き継いだ、戦中戦後の混乱期に散逸した物もあるようで、目ぼしい物はあまり無かった。大学からの補助は微々たるものであったし、会員達の経済的事情も良くなかったから、新しい装備を次々と購入することはとても出来ない相談だった。とにかく現有の装備を何とか使いこなしながら、足りない所は工夫してやっていかなければならないという状況であった。

まず積雪期用テントであるが、浪速高校のもの1張とビヴァーク用の小型テントが一つ（このテントは冬の北岳の稜線で強風により破損し廃却した）、後に大阪高校のものが見つかったが、これは本来2対あるはずのポールが1対しかなく、途中で手ごろな木を切って担ぎ上げて代用したというエピソードのあるような代物だった。だからといって拱手しているわけにはいかない。テントが無ければ雪洞でいこうと随分これを使用した。50年の春山では、八方尾根の中継キャンプも五竜頂上の前進キャンプも雪洞を使ったし、その後、双子尾根やら後立山の稜線などでも盛んに雪洞を活用した。お陰で雪洞の掘

削については阪大流とでもいうべき独特の手法を考えだし、効率的に掘削する術をマスターした。

その間にあって、ある年の春、積雪によって埋没した雪洞の中が酸欠状態になるという事態に遭遇し、幸い大事には至らなかつたが、雪洞に於ける換気の問題という経験を積むことが出来た。51年暮れに夏用のテント1張を冬用に改造し、比較的低い所で訓練用などに使用することとし、続いて53年にはようやく新品のナイロン製テント1張を購入することが出来、若干余裕を持って山行に対処出来るようになった。

携帯用石油コンロはラジウスのものが1、2台あり、それを使っていたのであるが、何しろ燃料が市販のガソリンを買ってきて缶に詰めて運ぶものだから、ゴミなどが混じっていて噴射口の目づまりに悩まされた。50年頃からは米軍の放出品が比較的安価で出回るようになり、これを購入使用した。これはアルミ鋳物のケースに収まっていてコンパクトで携帯性が良く、燃料噴射口がノズルによる開閉式になっていて穴づまりがないので使い勝手が良く重宝した。

ザイルは数本あったが、半ば消耗品である上にメンバールが増えればそれだけ数がある。専用のものは高価なので、あるOBのあつせんでその勤務先の製品である船舶

用ロープを安く分けてもらった。多少使い勝手は良くないけれど結構役にたった。52年の春山で、美津濃に勤務していたOBからナイロン製ザイルの提供を受けて初めて使用したが、従来のマニラ麻と違い、凍ることも雪の付着することもなく感激したものである（今では当たり前のことなのだが）。

積雪期宿営用のマットレスは、当時は防水布にカポックを縫い込んだものが主であったが（まだエアマットは殆ど出ていない）、これも数が足りないのを補う為にベニヤ板を60センチ角くらいに切ったもので代用した。表面に防湿性塗料を塗るなど工夫をこらしてそこそこ使用物にはなったが、やはり厚みの関係で断熱性に劣るのはやむを得なかった。リュックサックの上にベニヤ板を縛り付けてスキーを履いている姿なんて、いま思い出しても苦笑を禁じ得ない。

個人装備も大変だった。戦争とそれに続く戦後の混乱で会員達の父兄も経済的に余裕のある人は少なく、潤沢に小遣いがもらえるような状況ではないので、個人装備を揃えるところまで手の届く者はいなかった。従って諸先輩から借用することとなる。シーズンになると、あそこでピッケルとアイゼン、こちらでシュラフザックというように借りて歩いたものであった。朝鮮動乱が始まっ

た50年頃から米軍の除隊兵の装備を放出したとみられるシュラフザックやウインドヤッケが回り始め、皆こういう物で何とか装備を整えていった。一方、身につける物も当時は一般的に品不足であったから、とても登山用として専用の品を揃えることは出来ない。そこで自宅の押し入れの隅に入っていたような物を引っ張り出して何かと工夫して着ていた。古い背広の上衣やチョッキに中折帽、旧日本軍の払い下げのズボンやシャツ、ズボン下など、関東軍（旧陸軍の満州派遣部隊）の防寒靴や手袋等々、果ては子供用の腹巻きで作った目出帽など、みんな何とか手に入る物にそれなりのアイディアを加えて身につけていた。何のことはない、現在のホームレスのような格好で山登りをやっていたわけである。

食料もいろいろ工夫した。わけても積雪期のテントや雪洞での主食は当初、餅だったが、目方が重いし単一のものだと飽きもくる。そこでパンを考えたが、低温下で長時間持つて歩くと澱粉がベータ化して食べられない。石油コンロで焼くわけにもいかず、考え出したのが蒸すことである。アルミの板を飯ごうやコップフェルの寸法に合わせて切って小穴を沢山あけ、それに短い足をつけて中敷きとして蒸し器とするのである。パンはもとより餅などもきれいに蒸し上がり、食事のバラエティーも増え

て随分重宝した。副食のほうもそれなりに知恵を絞りに、カレー味、みそ味、スープ味（既に固形スープが市販されていた）のローテーションなど食事の変化も考えた。山登りをやれば皆お腹をすかせて何でも食うとはいっても、やはり食事は変化があつて美味しいものが明日への活力となるわけで、貧しくとも乏しくとも、それなりに頭を使つていかねばならないと痛感した次第である。なお、当時の行動食は、メンバーの家庭から都合して持ち寄つた小麦粉を支給して焼かせた乾パン（市中ではまだ食品関係は潤沢ではなかつた）に缶詰のジャムくらいで、非常食として羊羹（これも貴重品だつた）を携行していたことを記憶する。

戦後の社会的に不安定の中、会員達が経済的に恵まれなかつたことは先に述べたが、この点が大きく出たのは山行への参加率の問題だつた。みんな山へは行きたいが、先立つものが足りない。そこでアルバイトなどに精を出して稼ぐのだが、目標通りお金が貯まらなかつたり、あるいはアルバイトの日程との調整がつかなくなつたりして山行を諦めるというようなケースがよくあつた。したがつて部員はかなりいるが、山行となるとうまく人数が集まらないということも計画時には折り込んでおかなければならないというのが当時の状況であつた。

56年の黒部下廊下横断の時でさえ、どうしても参加者が不足し、急遽OB2名の参加を得て計画を実行し成功させることが出来たのであつた。しかし、こうした状況も社会的な安定とともにだんだん解消に向かい、阪大山岳会も成長軌道に乗り始めたのである。

いよいよ成長軌道に

53年春、満を持して再度の後立山縦走計画を実施することとなつた。計画は、縦走隊を2名とし、笹川谷の大沢と八方尾根からサポーター隊を入れ、大沢隊は新越乗越付近に拠点を設けて針ノ木を回ってくる縦走隊を迎え、冷池を経て鹿島槍までサポーターする。一方、八方隊はその頃整備された白岳と八峰キレットの小屋を利用して拠点を作り、鹿島槍で縦走隊を迎えて唐松までサポーター、あとは縦走隊が単独で白馬を回つて下山というものであつた。ここで一つの問題は、大沢隊が新越乗越付近に直接登る適当なルートがあるかという点だつた。これを検討している時、針ノ木方面から写した写真で大沢小屋の少し下から岩小屋沢岳と新越乗越の中間に突き上げている尾根に可能性を発見し、試登の結果、この尾根がルートとして好適であるとの結論を得て懸案は解決した（この尾根は新越尾根と命名し、位置と登攀の容易なことか

ら新越方面への絶好の荷上げルートで、その後もよく利用した)。かくて計画は特に問題もなく整々と実行され、ここに年来の目標は達成出来たのである。

縦走が終わったら次に何をするか。この時、後立山から黒部川を隔てた立山方面に目が行くのは自然の成り行きであった。そうだ！黒部を渡って立山へ行こう、かつて積雪期に黒部を渡った例はあるが、それは仙人ダムを渡ったのだから、われわれは下廊下を横断しよう、これが次の目標となった。

まず後立山から黒部に下るルートが問題であった。地図を広げて2、3のルートを当たってみたが、最後の所が名にしおう下廊下の岩壁となっていて、とても川まで下れない。そこで先の例にならい立山方面からの写真を調べたところ、鳴沢岳から黒部の方へ下っている尾根に脈がある。早速、偵察したところ、末端で鳴沢の谷に出れば川筋まで問題無く到達出来ることがわかった。しかも、うまい具合に鳴沢の出口に電源開発の測量のための吊り越もある。かくてルートは確定した。一方、メンバーの面では、この頃になると一部有力メンバーが卒業して、合宿に参加するのが難しくなる半面、有力な新人も入って来て、いわゆる交代期に差しかかってきた。そこで、これら新人を鍛え、またOBも含めた会としての実

力の向上を図るために、54年冬には穂高・天狗のコルから槍の往復、55年冬は鹿島槍東尾根、56年冬は双六から鷲羽へと計画を展開し、真冬の稜線を歩き、寒風や豪雪と戦い、それぞれ貴重な経験を積み重ねた。機熟して56年春、いよいよ黒部に挑戦。長雨にたたられて日程は大幅に遅延したが、黒部下廊下横断に見事成功し、アタック3名は内蔵助平を経て真砂岳の頂上に立った。かくて阪大山岳会は2つ目の目標も成し上げて、また一歩前進したのである。

この頃ともなると、阪大山岳会はメンバーも豊富となり、経験も積み実力もついてきた。積雪期に展開する計画も天候などに左右される面はあるものの、ある程度の結果が出せるようになってきた。56年ころといえば、社会的には「もはや戦後ではない」と言われ、経済もおいおい高度成長路線に乗り始め、会や会員の経済的基盤も好転してきた。山岳界ではこの年、日本隊がマナスルに初登頂し、当会としてもヒマラヤ経験者を1名得ることが出来たし、世の中に起りはじめた登山ブームは会への順風となってきた。会の発足から丸7年、どうやら阪大山岳会の前途は開けてきて、その先にはヒマラヤも見えてきたのである。

(1953年経済学部卒)

部員増が支えた上廊下横断

野 田 憲一郎

登山ブームの時代

1953年5月の英国隊のエベレスト初登頂をきっかけに、わが国でも登山への一般の関心が高まった。この傾向は、56年5月、徳永篤司会長が参加した日本の登山隊がマナスル初登頂に成功したことで、ブームと呼ばれるほどの盛り上がりを見せた。山岳部員数も過去にない数になり、当時、主流であった極地法による積雪期登山が展開しやすくなった。59年春の黒部上廊下横断は33人という豊かな戦力が成功の大きな要因だったと思う。ただ、なぜか55年度入学の年代が欠けていたうえ、57年度から新人が急増したため、数年間は中堅層、リーダー層の手薄さが目立った。ちなみに59年の名簿では4年生9人、3年生15人、2年生15人、1年生6人の計45人が掲載されている。

一方で、急増した部員に対し、装備の手当てが追いつかず、老朽化したものを後生大事に使った。そんな中で夏テントが槍ヶ岳の肩で強風のために裂け、縦走中止に

至ったこともあった。ザイルは、ナイロン製はまだ貴重品で、依然として船舶用の麻12^ミを150^ミ購入して30^ミずつに切り、部室のあった医学部記念館の屋上から懸垂下降して柔らかくして使った。テントやヤツケの生地も木綿やビニロンが主流で、O Bの寄付によってナイロン製の冬テントを新調した時は、凍らなくてうれしかったし、のちにテトロンのテントができた時には、その軽さと扱いやすさに目を丸くした。

個人装備も、朝鮮戦争で使われた米軍放出のシユラフザツクやヤツケが主流であった。靴は当初はクリンカーやムツガーの重い鋏靴だったが、ビブラム底のものが次第に優勢になっていった。荷物の重量は「貫」で表していた。

食糧は、米主体から、軽量で保存の利くパンの比率が上がっていった。当初は食べにくく、「ゴムパン」などと呼ばれ、評判が悪かったが、57年度冬の赤牛岳の時、メーカーの神戸屋のご協力を得て、保存性がよく、食べやすく、栄養価も高いパンを開発した。秋に荷上げしたが、冬に使用した時、品質の劣化もなく味も好評で、その後もしばしば使用した。野菜の軽量化も乾燥ホウレンソウなどに取り組んだ。中華ソバ（玉蘭印）も主食として多用した。

上廊下横断まで

56年春の黒部川下廊下横断成功後、部の目標は上廊下横断に移った。55年冬、すでに双六岳―雲ノ平―源流―薬師岳の企画があつたが、1週間にわたる風雪のため、鷲羽岳登頂および黒部源流に少し踏み入つたのみで終わった。そこで57年春、烏帽子岳から東沢乗越へテントを出し、赤牛から上廊下の偵察を試みたが、メンバーが計画より減つてしまつたうえ、中盤の悪天候のため野口五郎岳までしか進めなかつた。

57年冬には厳冬期の赤牛岳登頂（戦後初）を計画した。赤牛岳は北アルプスの最奥部にあり、当時は積雪期の記録も少なく、未知の要素が多いこと、上廊下の核心部に近いことから、まことに魅力的な目標であつた。この年から部員の数が急増し、荷上げの能力が増強したので、55年冬の経験を踏まえて食糧、装備150キを双六小屋に荷上げし、冬に備えた。ここをベースに鷲羽乗越にACを出し、風雪による停滞は多かつたが、好天の1日をつかみ、ラッシュで赤牛岳の登頂を果たした。

58年春には4年生が卒業、3年生がいないので、2年生がリーダーとなつて台宿を実施した。新人が多く、極地法を展開する人数は揃つたが、2年生も極地法の経験がなかつたので、わかりやすい鹿島槍天狗尾根を選び、

極地法の訓練をおこなつた。好天に恵まれ、CIIを天狗の頭、CIIIを鹿島槍吊尾根に出して、五竜岳、爺岳を往復した。CIでは10人用の大型雪洞を作るなどテント不足対策だけでなく、阪大らしいキャンプ作りができた。同年冬の台宿は、春の上廊下横断に備えた極地法トレーニングの性格が強く、現役28名、OB5名という大パーティーで涸沢岳西尾根を舞台にキャンプを3つ出し、北穂高、奥穂高に登つた。春に大規模な極地法を展開するのに必要な訓練ができた。

上廊下積雪期初横断

59年春の黒部川上廊下積雪期初横断は、阪大山岳部にとつて56年春の下廊下横断以来の大プロジェクトであつた。濁小屋↓烏帽子小屋↓東沢乗越↓黒岳↓赤牛岳↓北西稜↓上廊下↓スゴ乗越↓千寿ヶ原という長大な、しかも、その間に稜線から黒部の谷底に降りて再び稜線を越えるという累積高度差も大きなルートは、この3年で充実したメンバーが総力をもつて当たらなければ達成できない手ごわい相手だつた。また赤牛岳北西稜や上廊下核心部の積雪期の状況など未知の部分も多かつた。

58年夏から秋にかけて赤牛岳や上廊下に3次の偵察を出し、赤牛岳北西稜、スゴ沢の状況を調査の結果、北西

稜からスゴ沢出合へ降り、黒部川を渡渉してスゴの頭へ
抜けられる見通しがついた。これをふまえてB Hを鳥帽
子小屋、C Iを野口五郎岳、C IIを黒岳と赤牛岳の中間、
C IIIを赤牛岳頂上、C IVを赤牛岳北西稜2200^{トビ}トビ

クとし、ここから3名がスゴの頭を越えて千寿ヶ原へ抜
けるという大計画となり、11月に双六小屋に400^キの
食糧、装備を荷上げの後、全ルートをとレースした。
59年3月、総員33名で合宿開始。合計1^ト余の荷物と

あ の 時

久しぶりに細野の与兵衛の家に行きました。現在の呼び方で言えば、白馬村八方の対岳館です。1952年山岳部に入り、最初の冬のスキー合宿に参加、咲花のゲレンデで、生まれて初めてスキーを履き、その後もたびたび利用した懐かしいところです。駅から歩いて対岳館を目指しました。いかに変わろうとも、近づくとき昔の面影が残っているでしょう。たいして迷わずに到着しました。

中庭で、川島、近両先輩や後輩の皆さんと昔話に花を咲かしている時、突然、川島先輩が「おい、李さん、昔、槍沢で残飯を拾って食ったことがあったな」と、例の太い声で話しかけられました。何しろ53年のこと、何もかも貧しく、現在の感覚では信じられない時代の出来事でした。

剣での夏合宿の後、我々、川島、土屋、李中は、剣沢二股より内蔵助沢をへて黒部の下の廊下、上の廊下を偵察し、南沢より稜線に出て、西鎌を縦走し、槍沢に下り、日没後に

槍 沢 で 残 飯 拾 っ た

二股に到着しました。剣沢を出発して8日を経過し、米があと1食分しか残っていない状態でした。そんな中、場所はよく覚えていませんが、比較的良好的状態で相当な量の握り飯弁当の食いかけを発見、その夜、我々の飯と混ぜて、おじゃにしました。翌朝、最後の米で朝飯をとり、徳沢で残金を気にしながらアンパンを1個ずつ購入、これを最後の食事にして徳本峠を越え、終電車間に島々に到着しました。記録によると、到着は21時30分でした。

当時の徳本峠よりの下り道は木馬道で、ひどく歩ぎにくく、長い長い道でした。また、小生の靴は、編上靴と呼ばれる旧陸軍の粗製濫造の軍靴で、2回の山行きで口が開く代物でした。常時、針金を携帯し、口が開くと針金で縛って、なんとか下界までしのごのが常でした。この時も例外でなく、島々を目前にして針金が役に立ちました。約50年前のわが山岳部古代史の一こまを披露させていただきます。

(李中 勝)

稜線上のB H、長い補給線などの条件にてこずる局面もあったが、C IVから黒部川岸までの猛烈なブッシュが完全に雪に埋もれていたこと、渡渉も膝の深さであったことなど好条件にも恵まれ、24日間で成功した。トランシーバーなどの通信機器もない時代で、スゴ乗越のアタック隊と対岸のC III、C IVとがヘッドランプの光で成功の合図を交わした感激はいまだ記憶に残っている。これだけの大イベントが事故もなく1回で成功したことは

大きな自信になった。

56〜59年の夏の合宿ほか

56年夏は剣岳・真砂沢出合にBCを置き、東面の岩場を登った。後半は剣―槍縦走など。

57年は新人20名、OBと2年以上11名、計31名で横尾にBC、一部は奥又白池にACを出し、穂高および周辺で合宿した。後半は槍―白馬縦走など。

58年はさらに多数の新人を迎え、43名という空前の参加者を得て、冬用テントまで動員、剣岳・真砂沢出合で合宿したが、悪天候で停滞が多かった。後半は立山―北穂高縦走、剣―雲ノ平―烏帽子―白馬など。

59年は30名で槍ヶ岳・千丈沢で合宿。北鎌尾根東面のあまり知られない岩場を、半ば探検的興味を持って登った。後半は黒部川上廊下、源流周辺など。59年冬の合宿は、スバリ岳・赤沢岳周辺、および白根三山―大唐松尾根下降。次の目標を模索しつつの分散合宿だった。

次への課題

56〜59年の期間を一言でいえば、規模の急拡大の時期だった。この戦力によって初めて、黒部川上廊下横断が成功したのであるが、極地法ばかりでは各部員のオー

ラウンドな登山者としての成長とは相容れない。残った課題は、部としての共通目標の設定・追求と大勢の部員個人の主体性を両立させるにはどんな山登りをするか、同時に、次に我々の主な舞台をどこにするか、だった。60年春以降、これらの課題が次の世代に引き継がれた。

(1960年経済学部卒)

「中継ぎの時代」を振り返って

梶本孝治

還暦を過ぎて振り返ってみると、我々が現役として活動した時期は、山岳会50周年の前半、それも早い時期に位置するわけですが、幸い、健康に恵まれ、ウィークデーは神戸・三宮のオフィスで、週末は現役時代から「我が庭」のように親しんできた六甲山を歩き、均衡理論のレオン・ワルラスの言葉「静かに行く者は健やかに行く。健やかに行く者はより遠くまで行く」の日々を過ごしています。一人の凡庸な老登山愛好者として、山岳部現役当時を振り返ってみたいと思います。

先年、NHKテレビで放映された「未来の教室」で、

ラインホルト・メスナーが、生まれ育ったオーストリア南部のアルプス山麓の地で少年少女達に登山の基礎を教える1編を注意深く見ました。その中で彼は「登山において最も重要なことはそれぞれの能力に応じた自分にふさわしいルートを選ぶこと。同時にこれは登山においてだけでなく人生においても最も重要なことだ」と繰り返し述べていました。当然のことではありますが、「超人」ともいわれる登山家の言葉だけに説得力がありました。

「人生」自体を考えてみても、人がどのように自らの能力を考え、人生設計をし、希望して仕事に就くのか。社会心理学では、人それぞれの成長過程で、その要因となる「キャリア・アンカー」が介在するといわれています。同じような視点で「登山家」もしくは「登山者」が、無数とも思われる選択肢の中から、なぜ、その山、そして、そのルートに挑もうとしたか、どんな「アンカー」が介在したのかを、その人々のその後の人生を含めて思いめぐらせてみるのも興味深いことだと思えます。

我々が入部した1959年から卒業した63年までの数年を考え直してみると、山岳会の歴史において1つのターニングポイントを迎え、新しい時代に向かつての「中継ぎの時代」であったと思います。まず入部時点は、その直前の春山合宿で積雪期黒部上廊下横断に成功し、部

全体にその余韻がたどっていました。同時に阪大山岳部創設期の白馬主稜から後立山、黒部下廊下、上廊下といった「伝統の系譜」の終焉の時期でもありました。その後数年間の「スバリ岳、赤沢岳西面」（59年冬山）、「薬師岳東面」（60年春山）、「剣岳八ツ峰末端からの完登（未完）」（60年、61年春山）なども黒部の延長戦であり、総仕上げをめざしたものであったかとも思われますが……。しかし、創設期からの、山行目標を1つの流れに収斂させて進めた時期が終わり、「収斂から発散へ」と山行目標を発想し直す、新しい時代への移行期に当たりました。この流れの背景としては、既にこの時代、パイオニアワークを至上とする立場からは、国内では魅力ある山域が無くなっていました。現実的なレベルで海外、とりわけヒマラヤが登場する時代に入ろうとしました。

私達の新人時代は、日本隊のマナスル登頂に触発された登山ブームの影響か、1、2年上の部員数が急増し、当時の中之島の部室、集会所での毎週の例会の出席者は、多数の医学部、理学部の院生を加えて30人を超え、熱気ムンムンとした状況で、部運営、合宿山行も必然的に転機を迎えていました。59年夏、60年夏と続けて「槍・千丈沢合宿」に参加したのですが、当時「バズーカ天」と呼んでいたバズーカ砲を思わせる軽合金製支柱の特大テ

ントにリーダー達、上級生、若手OBを加え30数人が一同に会しての翌日の登攀ルートの発表時は、古き良き時代の「大ヒマラヤ遠征隊」もかくやと思われ、「大学山岳部の栄光の最後の時代」であつたと思えます。

さらに登山用具の面でも大きな転換期でした。新人時代は創設期の先輩達と同様、シユラフザック、防寒具等の大半は米軍放出品でしたが、上級生になるころは、普及し始めたナイロン製の国産品に替わり、ザイル、テント等も後半は第1次P29遠征隊の持ち帰り品が装備に加わり、その軽さとコンパクトさに目を見張つたものです。従つて用具の面からも機動力が一段と強化され、積雪期の山行がポラーメソード主体からラツシユタクティクス、縦走形式へと多様な戦術を駆使出来る「転換期」を迎えていました。言わば、私達の世代は、戦後期の終焉から経済の高度成長期へのターニングポイントを迎え、その後、日本の社会全体が沸騰する直前の時代を、ひたすら山に没頭して過ごしていたのです。

山岳部の中堅から上級生へ向かう3年生として60年を迎える頃、新たな課題が生まれました。それは大学の山小屋建設（後の「梅の木寮」）と阪大山岳会として第2次P29遠征の機運が高まつたことで、共に山岳部は支援活動に迫られました。

山小屋建設については、夏を迎えたある日、篠田先生の研究室に呼ばれ、山小屋建設の構想と最有力候補地として白馬・梅池が上がっていることをお聞きするとともに、設計を担当される建築学科の足立教授の現地調査の案内役を仰せつかりました。その夏の終わり頃、現地の猪股直衛氏と一緒に足立教授を案内し、「神の田圃」から梅池小屋辺りまでの広い地域を、ブヨに喰われながら背を没する熊笹の茂みに入り込んで歩いたのが懐かしい思い出です。無論、その折は知る由はなかつたのですが、その後、62年夏の「梅の木寮建設ポツカ合宿」、同年冬の「梅の木寮をベースとした新人スキー合宿」など、梅の木寮は我々と数年後輩までの世代にとつては「汗と涙と雪まみれ」の「青春の墓標」になるのです。

梅の木寮を語る時、忘れられないのは、当時、「山岳部付学生課出向」との表現がふさわしいような役柄で、天性ともいえる折衝力でもって現地関係者、大学関係者との折衝推進役、そして建築資材のポツカ合宿のリーダー役を果たし、すでに伝説化した山本彰三君（当時、浜田）の獅子奮迅の活躍です。もし彼の登場が無ければ、阪大の山小屋建設はあと数年後となつたことでしょう。

長年の夢が実現したその冬、木の香もかぐわしい梅の木寮をベースとした初めての冬山合宿を行いました。外

の吹雪のほえる音と「ごうくごうく」と燃え盛る薪ストーブを囲んで語り明かした日々は、まさに「至福のひととき」でした。その後、この仲間から多数がP29峰第3次遠征へ、カラコルム・アプサラサス登山隊へ参加しました。中でもP29峰の初登頂をなすとげ、下山時に帰らぬ人となった渡部君はその時は1年生部員でした。また同期の三澤君はP29峰第3次遠征へ、さらにアプサラサス登山隊長として当時語り明かした夢を為し遂げ、山岳会の新しい歴史へ中継ぎ役を果たしました。今思うと、梅の木寮は私達の世代にとって「青春の墓標」であると共に、山岳会新時代の「揺りかご」でもありました。しかし、私はその後、梅の木寮へは一度しか訪れませんでした。傷つき、リゾート化した地に「青春の墓標」を見るにしのびなかつたからでしょう。

梅の木寮建設と並行してP29峰第2次遠征の支援活動が進みました。63年には山岳部の部室のあった建物に「大阪大学中部ネパール学術調査隊・準備室」が開設されました。当時、卒業後の進路を父の事業を継ぐべく決め、時間のわがままが許される私が実質的な「事務長」の役割を買って出ていました。その頃の登山用具、山の記録、山の本、時報などは武庫之荘の実家に置いていた

ため、阪神大震災の後、瓦礫と共に多くを失いましたが、たまたま事前に持ち出していたのがピッケルと、その準備室の様子を克明に撮った写真アルバムでした。このアルバムには隊の物資の調達、バックキング作業の様子、黒板一面に書かれた食品リスト等々……、そして作業に加わった現役の後輩達の姿もあります。6月、7月の暑い盛り、屋上で上半身裸でカートンボックスのペイント塗りに精を出す渡部君はじめ数年後の第3次遠征隊の主力をなすメンバーの若々しい姿です。また、連日のように多くのOBが顔を出されていました。すでに鬼籍に入られた先輩方も見られます。とりわけ梱包された装備を神戸港へ搬送するトラックを見送る篠田先生のおだやかな安堵の表情が印象的です。

今改めて、当時の山岳会が一丸となってP29峰へかけた熱意を感じます。その時は意識しませんでした。私は、遠征隊を送り出すこれらの膨大な作業を現役部員へ手配するポーター頭の役割を通して、山岳会の熱意を後輩達に伝えようとしていたのかも知れません。それは次に述べる、それ以前に引き続いて起きた事故がもたらした存続の危機を乗り越えて山岳部を再出発させようとの願いでもありました。

私の責務としては、やはり不幸な事故のことを伝えね

ばならないでしょう。少し年度を遡り、P 29 峰第 2 次遠征隊を送り出す 2 年前の 61 年度、私達が 3 年生の時に大小いくつかの事故が続いて起きたのです。特記すべき一つは、夏の剣岳・真砂沢合宿時に当時 2 年生部員であった岡久君がチンネ上部の G チムニーくぐりクラックルートをトップで登攀中にハーケンが抜けて 20 呎墜落し、ザイルにぶら下がって止まった事故です。私も事故発生時チンネ上にいたので、間もなく現場に着きましたが、多量の出血に染まった負傷者を目前にして、下ろさねばならないチンネの高度に恐怖心で足がぐくぐくとすくみましました。翌朝を待って 1 年生部員を除く総勢で左方ルンゼにハーケンを連打、4 本のザイルで吊って下ろし、三ノ窓雪渓、二股から真砂沢出合、剣沢から弥陀ヶ原ホテルへ収容するのに 3 日半かかりました。チンネの現場から負傷者の輸送まで多くの他大学山岳部の協力をいただき、大阪から O B 数名に応援を仰いだ山岳会創設以来の大事故でしたが、幸いにも負傷は足の骨折だけで命には別状なく済みました。

同年 11 月には山岳会創設以来初めての死亡事故が起きました。アイゼン歩行訓練を目的として富士山にて氷雪訓練を行ったのですが、当時、入部数カ月月の 1 年生部員の堀井昭彦君が吉田大沢と燕沢の中間の尾根道を歩行

中、突風にあおられ、燕沢へ滑落したのです。私はその日、前日に続いて横尾君達と山頂を往復してテントに帰り、事故を知ったのですが、急ぎテントを撤収し五合目の小屋へたどり着くと、既に堀井君はシュラフに包まれた亡骸として小屋の隅に横たわっていました。その朝、少年のあどけなさの残った彼がその夕にはこんな姿になるうとは、茫然とその場に立ちすくみました。

その後、40 年余りを経て、これらの事故を振り返ってみると、やはり山に対する「慢心」や「油断」があったと思います。「登山」は、その能力の極限へ挑戦する勇氣と、起こりえるあらゆる危険性を見極める細心の注意力を求めているのです。

最後に、先年秋、北穂高にて魔がさしたとしか言いようのない転落事故で亡くなった山本久夫君のことを書かねばなりません。彼は入部は 2 年生からでしたが、学年は同年で、数々の山行を共にし、また卒業後一時、神戸の英国婦人宅にて共に英会話を学んだ仲間で、山岳部でこそ先輩顔をさせていただきましたが、学ぶことが多かった有能な人材で、社会に出てからの活躍はそれを裏付けています。社会的な重荷をおろし、また気楽な山行をご一緒しようと思っていただけに残念でなりません。

(1963 年工学部卒)

積雪期黒部上廊下の完全トレース

甲 田 吉 彦

1965年から68年の部の状況について若干触れながら、ここでは特に積雪期黒部上廊下の完全トレースについて記してみたい。

青春時代の大部分を山登りに費やした者の一人として今改めて、当時書き残したものの、或いは記録、文献等を読む時、光り輝いていた若き日の自分を発見するものがある。とにかく、よく議論をした。そもそも山登りとは個々の人格が持つ心情、情熱の素直な表現であり、その対象が山であり、未知なるものへの憧れであるといった風な、分かったようで分からない議論だった。

我々が入部した65年（昭和40年）の部員数は4年生6名、3年生9名、2年生3名、そして新人が8名の計26名であった。富士山での事故のショックも漸く癒えつつあった部内では、部の活動は如何にあるべきか、熱い議論が重ねられていた。曰く、「登山学校」「パイオニアワーク」「スポーツアルピニズム」であり、更には部活の対象を海外に求め得るか等々、時を忘れて語り合ったも

のだった。

当時の大学山岳部全般に言えることであつたが、部の活動として、いわゆるパイオニアワーク的な山行が多く望めない中で、登山学校的な活動を中心にせざるを得ない状況があつた。こういった状況下にあつて我々には幸いにも、後立山から黒部へと展開された阪大山岳部の流れの中における一つの帰結として積雪期の黒部上廊下完全トレースがあつた。積雪期におけるこの地域は、未だ我が国に残された数少ない未踏の地であり、そこに至るアプローチの困難さは比類がない。このフィールドワークを完成させることは、とりもなおさずヒマラヤ遠征へと繋がっていくものである。即ちポラメラメソッドによるアプローチ、そしてラッシュアタックによるトレースが当時の我々の具体的なターゲットとなつた。

我々が積雪期の目標として上廊下完全トレースを選んだのは66年秋であつた。以来、積雪期、無雪期を問わず、総力を黒部上廊下及びそのアプローチである赤牛岳周辺に投じた。同時に、与えられるであろうチャンスを見逃さない為に、体力的、技術的なレベルアップに努めた。67年5月には予備的な山行を赤牛岳周辺に展開し、かなりいい感触を得た。夏には2年部員も上廊下をトレースし、上級生全員が上廊下の概念をつかみ、更に11月に水晶小

屋跡に約300^キの荷上げを行い、無雪期にできることはすべて済ませた。この間、広島大学隊が廊下沢出合から金作谷出合まで積雪期初トレースをしていたことを知り、大きなショックを受けたが、計画を続行することにした。

当初の目標は、まず上廊下本流にテントを下し、雪の状態を見ることであり、サポートの入る各尾根をトレースすることにあった。もちろん、あわよくばという気持ちがあったことは否定できない。赤牛岳へのアプローチは、67年春はブナ立尾根を使ったが、68年は双六からのルートを探ることにした。テントは赤牛岳ピーク付近と霞平、そしてスゴ沢出合と3カ所出したが、結果的にはこれが非常に好配置であった。

3月13日に先発隊が入山して、4月4日に全員無事下山した春山合宿であったが、以下に記録の要点のみ記したい。(詳しくは「時報」15号参照)

× ×

「アタック記録」

- スゴ沢出合―廊下沢出合往復
- 3月27日(晴) メンバー田中、石原 スゴ沢出合6・30 ↓廊下沢出合7・30 ↓帰幕8・15
- スゴ沢出合―金作谷出合往復

- 3月28日(晴) メンバー田中、石原 スゴ沢出合6・30 ↓金作谷出合7・20 ↓帰幕8・20
- 金作谷出合―岩苔小谷出合先

- 3月29日(快晴) メンバー甲田、中岡 霞平CS6・20 ↓金作谷出合7・00 ↓90度屈曲点7・35 ↓岩苔小谷出合8・35 ↓出合上流先9・15 ↓赤牛BC14・00 ↓帰幕15・00
- スゴ沢出合―口元のタル沢

- 3月29日(快晴) メンバー的場、石原 スゴ沢出合5・30 ↓廊下沢出合5・45 ↓口元のタル沢の廊下入口7・00 ↓口元のタル沢出合9・00 ↓「岩魚の宝庫のト口」往復9・30 ↓10・00 ↓霞沢CS12・10 ↓帰幕14・00
- 口元のタル沢―下の黒ビンガ往復

- 3月31日(晴時々曇) メンバー甲田、的場 霞平CS7・00 ↓口元のタル沢出合7・30 ↓下の黒ビンガ8・30 ↓ニセビンガ直下9・15 ↓口元のタル沢11・00 ↓霞平13・30 ↓赤牛BC15・30

◇

かくして念願の完全トレースがなされた。何年かかかるかわからなかった計画が、初めてのアタックで成功したのだ。この成功には天候が幸いしたことは確かだったが、与えられたチャンスを逃さなかった部員の頑張りに負う

ところ大であった。特に新人たちは持てる力を充分に發揮した。上級生も有機的に各々の力を出してくれた。1つの事故も無かったことだけでも立派なことである。むしろ初トレースはおまけたと考えている。

そしてP29報告書の中で篠田軍治先生が「このとき（積雪期上廊下完全遡行）のメンバーが第三次隊に貢献してくれるものと期待をもっていた……」と書かれていくように、我々の次の目標はP29遠征へと連なっていく。第3次遠征隊に田中、甲田が参加、登頂した第4次隊には田中、石原、黒岩の3名が参加することができた。

今は亡き場幹史君（67年度サブリーダー）が「時報」15号に「積雪期の上の廊下の概観」と題してレポートを残している。抄録を記す。

◇

黒部上廊下はすり鉢の底のように兩岸絶壁である。その上の斜面も特に薬師側などは大体において急斜面である。薬師の各カールからは急峻な沢が落ちていく。東側斜面ということで積雪期には非常な危険が予想される。下の黒ビンガ、口元のタル沢、上の黒ビンガ、金作谷出合上流などに見られる大きなト口は積雪期には完全に埋まらず、兩岸絶壁の為、へつるにしても、かなりの困難

が予想される。こういったところが実際に黒部に入るまでの予想であった。

だが、今合宿で、その予想はかなり覆された。第一印象はとにかくのどかな風景なのだ。スゴ沢左岸や廊下沢ではカラ松が雪面に独特の枝振りで見影を落としているし、青いト口には岩魚が悠々と泳いでいる。しぶきを上げて、本流の雪を割りながら枝流から雪解け水が合流する。スゴ沢のテント地からは薬師中央稜が青空をクッキリと切っている。

（中略）

とにかく我々の見た黒部はかなり快適な沢であった。デブリの跡は兩岸到るところに見られ、どんな小さなルンゼや凹地であっても雪崩は起こっている。その為、前記のト口の部分の通過は楽であった。下の黒ビンガは、そのすぐ下流の左岸の沢から大きな底雪崩が出て本流を完全に埋めているし、上の黒ビンガは無数の兩岸のルンゼからのデブリが続き、夏には苦勞するト口は雪の下である。

（中略）

広河原は予想通り水面が出ていたが、兩岸には雪面が続き、デブリによってスノーブリッジを渡って左岸、右岸どちらでも進むことが出来る。廊下の中にト口

が出ていて困ったのは、下の黒ビンガ下流と口元のタル沢出合上流のト口だが、いずれも左右にルートを求め得た。

(中略)

最後に、暗い岩壁に張り付いている蒼水や、うすい水色に光る見事な氷瀑が美しかった事を付け加えておく。

(1969年基礎工学部卒)

山岳部中興の記

松尾敬志

1973年、私が入った頃の山岳部は低迷していた。部室を訪ねた時、部員は事実上2名で、存続が危ぶまれる状態であった。その後、新入生4名と探検部出身者ら3名が入部し、トンネルのはるか向こうに明かりを見いだした感じがした。しかし、例年、雪上訓練を兼ねて行う5月の新人山行は、上級生が少ないことから大峰山でという異例のものであった。夏の劔岳合宿は、2年目の部員2名に新人7名ではとてもこなせない、OB8名の応援を得た。OBの食料も荷上げするため10^{kg}の米袋が

個装となり、室堂からの歩荷は1人当たり50^{kg}を超えた。そのせいか、バテる新人が続出し、1日目は劔沢、2日目で二股、3日目でやっとベースの池ノ平に着くという有様だった。こうして新人の実力養成を目的とした夏合宿は成功裏に終わり、部は確実に息を吹き返した。

OBの支援で再生へ

冬は薬師岳、春は北海道の東大雪に決まった。冬は藪田、高橋両OBの指導の下、春は2年生がリーダーシップをとり、独り立ちすることになった。夏の縦走や11月山行はその偵察に充てられ、アイゼン合宿は御嶽山で行った。例年にない豪雪で、9人による猛ラッセルの末、2日目でようやく五ノ池に。その経験を通して新人は着実に育っていった。冬の薬師岳のアプローチは長かった。ラッセルに次ぐラッセル。アイゼンをつけたのは頂上アタックの2時間のみであった。しかし、この泥臭い山行で学んだものは多い。基礎体力の重要性、雪の中のルートファイディングや赤旗の立て方、天気を読みなど、ある意味で以後の阪大山岳部の根幹をなすものであった。春の東大雪は、新生した部の力試し山行であった。スキーを用いたアプローチや、ピバークによるアタックなど、新しい試みもなされた。しかし、2年生2人、1年生4

人のパーティーは思わぬ事故に遭った。トムラウシ岳アタック隊のサブリーダーがジバーク中に足に火傷を負い、隊はベースキャンプに戻らず下山してしまつたのだ。力不足を認識させられる山行となつた。

翌74年は新人6名を迎えた。後藤(3年生)をリーダーとした陣容は3年2名、2年7名、1年6名。5月の新人山行は白馬で行い、上級生パーティーは徳高へ行つた。夏合宿は黒部川源流の兎平をベースに沢登りを主体にし、縦走は立山―西穂と槍ヶ岳周辺へ。冬は横尾尾根から槍ヶ岳、春は天狗尾根から鹿島槍ヶ岳、爺ヶ岳への縦走を目指した。冬は、スキーを用いたアプローチで槍ヶ岳アタックに成功、1年生を3000位の稜線へ上げることでもできた。春は3年生、2年生各1名、1年生6人に高橋OBという思わぬ構成になつたが、天狗尾根はフィックスに次ぐフィックスで難場を凌いだ。鹿島槍稜線で1年生がスリップする事故はあつたものの、大事には至らなかつた。

75年は松尾(3年生)をリーダーに新人8名を加えて18名となり、AAVK(関西学生山岳連盟)でもプレゼンスを示せるまでになつた。5月は白馬で新人山行のかわら、3年生2人で白馬主稜を登攀した。別に北鎌尾根登攀と魚沼三山へも出かけた。冬は前穂北尾根―前穂

高岳、春は大日尾根―劔岳を目標とした。積雪期に徳高・劔を登れるようになるのが我々の夢であつた。夏合宿は奥又白池をベースに前穂の岩場を登攀し、さらにベースを涸沢に移して滝谷を登攀した。この合宿はOB3名を含む総勢22名による充実したものであつたが、3つの事件に遭遇した。

1つ目は入山時である。島々より徳本峠越えという古くからのルートを辿る途中、徳本より下りてきた登山者に、「豪雨のため二股上流の橋が流され、小屋の人が流された」と連絡を頼まれた。急ぎよ、島々へ引き返し、消防団等へ連絡した。2つ目は、「前穂で仲間が滑落した。助けて欲しい」と夜中に頼まれ、救出に向かうとともに、警察への連絡に走つた。遭難者を奥又白池まで運び、ヘリコプターに乗せた。3つ目は、前穂北尾根で滑落した遺体を引き揚げて欲しいと警察から依頼があり、収容に出かけた。これらの事件を通して事故の悲惨さを思い知るとともに、部が事故への対処をできるまでになつたことを知つた。

夏の縦走は樺平―劔岳―針ノ木、黒部上廊下、南アルプス奥西河内廻行、そして十勝岳―化雲岳と盛りだくさんであつた。11月は冬・春の偵察を兼ね、前穂北尾根―奥穂―西穂、奥大日尾根―劔―樺平、小窓尾根―劔―早

月尾根の3パーティー。御嶽山でのアイゼン合宿の後、冬の前穂北尾根に挑んだ。前穂隊は3年生2名と2年生4名とし、新人は白馬へ。天候には恵まれなかったが、前穂の頂上に3年生2名が立つことができた。春は全員で劔岳に向かった。奥大日尾根は長く、劔御前まで6日かかったが、新人は前劔アタックに、上級生は劔岳アタックに成功した。

劔岳北方稜線が目標に

76年、佐野（4年生）をリーダーに新人3名を加えた部は目標に近い構成となった。過去3年間、3年生リーダー、時には2年生リーダーで危ない橋を渡ってきたが、4年生をリーダーに切れ目なく部員がいることで、安全かつ高度な山登りにチャレンジできることになった。5月山行は、新人は白馬岳、ほかに白馬岳スキーツアー隊、前穂隊、滝谷隊を出した。年間の目標を冬の劔岳北方稜線に設定し、夏合宿は劔岳で行った。多い日は5隊が岩登りに出かける、かなり岩に偏った合宿であった。縦走2隊は白馬岳―槍ヶ岳、甲斐駒ヶ岳―茶臼岳という遠大なものであった。冬の劔岳北方稜線は、佐野と3年生3名の赤谷尾根―劔岳縦走隊、それをサポートする早月尾根―劔岳隊に分かれ、総力を挙げた。初日から雨に祟ら

れ、2週間余りの山行で太陽を見たのは数時間というシビアなものとなったが、早月隊は1年生を除く全員が劔岳の頂上を踏むことができた。一方、冬の北方稜線の状況はやはり凄まじく、縦走隊ではスリップなどが相次ぎ、這々の体で馬場島にたどり着いた。春は槍ヶ岳を中心に3つのパーティーを出した。

77年、明神（4年生）をリーダーに4年生7名、3年生6名を擁する部は、さらに高度な山行を目指した。5月は白馬新人山行のほか、北岳バットレス、劔岳八ツ峰縦走、明神岳東稜へも出かけた。夏合宿は槍ヶ岳・千丈沢にベースを設け、北鎌尾根側稜を中心に硫黄尾根、遠くは滝谷まで出向いた。縦走は甲斐駒―光岳―寸又峽と双六―雲ノ平―劔岳であったが、上級生パーティーは滝谷―西穂、下又白谷―菱形岩壁を登攀した。冬の合宿は毛勝山西北尾根―毛勝北峰アタック、明神岳―前穂、および小窓尾根―劔岳に、春の合宿は宇奈月―劔岳と目標を定めた。冬の劔・穂高は天候に恵まれ、全て順調にこなすことができた。単に好天だったからの成功ではなく、偵察・デポ・サポートなど山行のタクティクスが充実してきており、天候に恵まれなかったとしても、それなりの成果を収めることができたと思う。一方で、テントのポールを忘れるなど、信じられないミスも始まった。春

山は、教養部のスト解除の余波で計画見直しを迫られ、悪天候も重なって宇奈月から赤谷山までとなつてしまつた。

78年、森保知（4年生）をリーダーに新人6名を迎えた部は、槍・穂高を中心に活動した。5月は岳沢をベースに、偵察も兼ねて岩稜歩き主体の合宿に。夏合宿は横尾本谷にベースを置き、屏風岩を主軸に赤沢山、滝谷、前穂高を登攀する。岩登り中心のものであったが、雪上訓練、ピバークなどもこなした。縦走は後立山（扇沢―朝日岳）と南アルプス（奥西河内沢―北岳）に行った。このころから沢登りも盛んになり、10月の個人山行では大台ヶ原・堂倉谷や東ノ川を遡行している。冬山合宿の槍・穂高は、横尾尾根から槍ヶ岳・南岳を目指す隊と、西穂高―奥穂高―槍ヶ岳を経て横尾尾根を下る縦走隊の2パーティーで、順調に山行を終えた。その4年前の冬にも横尾尾根―槍ヶ岳を手がけたが、当時の目標が槍ヶ岳アタックと新人を主稜線へ上げることだったのを考えれば、隔世の感がある。春合宿は、2週間の日程で裏銀座（ブナ立尾根―烏帽子―槍―中崎尾根）を縦走した。

79年、金谷（4年生）をリーダーに新人8名を迎えた部は総勢20名になったが、事故の多い年であった。5月は白馬での新人合宿のほか、冬合宿に備えて後立山（唐

松―種池）の偵察を行った。剣岳八ツ峰にも出かけたが、このパーティーがⅦ峰の下りで滑落事故を起こした。夏合宿は真砂をベースに剣岳で行った。入山早々、社会人パーティーの遭難救助を行ったが、自分たちも源治郎Ⅰ峰中央ルンゼでハーケン抜けによる滑落、八ツ峰三稜では雪渓崩壊による滑落、Ⅵ峰Dフェースでの滑落と、事故続きであった。縦走には立山―槍ヶ岳、北岳―茶臼岳、黒部上廊下、剣北方稜線（毛勝山―白萩山）の4パーティーが出たが、北方稜線隊は猫又山で落石にあい、2名が負傷した。冬合宿では遠見尾根から五竜岳をアタックして、さらに鹿島槍へ縦走隊を出し、春合宿は雄山東尾根隊と奥大日尾根隊が剣御前で合流し、剣岳をアタックした。

80年、浅井（4年生）をリーダーに3年生と2年生各6名という布陣となった。新人は6名入部したが、3名はやめていった。5月の新人歓迎山行は岳沢で行い、ほかに剣尾根、北鎌―岳沢、鋸岳―甲斐駒へも出かけた。夏合宿は剣岳で真砂をベースに、岩登り中心に行った。縦走は南アルプス全山縦走（甲斐駒―光岳）、越後三山―朝日岳、後立山・裏銀座（白馬―針ノ木―笠ヶ岳）、そして北海道（大雪山周辺）にも行った。10月にも後立山、中央アルプス、八ヶ岳、白山、奥秩父へ縦走隊を出

し、11月は冬の毛勝山、春の天狗尾根の偵察と、魚沼三山へ。木曾駒でアイゼン合宿の後、冬の毛勝山に2パーティー（北方稜線縦走・西北尾根）で挑んだ。天候は悪く、西北尾根隊は豪雪のため毛勝の頂上を踏めず、デポなど縦走隊のサポートに終わった。縦走隊は毛勝山にたどり着き、西北尾根を這々の体で下ったが、西谷ノ頭付近で1名がトレースを見失って迷い、遭難の一步手前であった。春合宿は表銀座縦走と鹿島槍天狗尾根―蓮華岳の縦走に分かれ、表銀座隊は雪洞の多用を試みた。

部の基本はリスク管理

以上、73年から8年間の山岳部の足跡を辿った。私は入部以来、徳島大学に赴任するまでの17年間、うち10年間は監督として山岳部と歩みを共にした。その間、大きな事故に遭遇しなかったのは幸いであったが、これが単なる僥倖であったとは思っていない。大学のクラブ活動としての山岳部の基本はリスクマネージメントにあり、いかにリスクを抑えて目的を達成するかであろう。この具体的な手法は、先輩から教わり、自ら考え、そして後輩に伝えてきた、いわば阪大山岳部の伝統と考えたい。大学山岳部におけるアカデミック登山の根幹をなすものは、個々の経験の蓄積を分析し、再構築し、実践して検

証する、科学的な行為と方法論だと考える。誰がやっても、同じようにやれば同じような結果が得られるということである。大学山岳部は4年生がリーダーシップをとり、新人を迎えるという形態をとらざるを得ず、毎年、リーダー層が代わることから、リスクマネージメントとその方法論の伝達が最重要課題となろう。これらはマニュアルでは伝達しにくい部類のもので、実際の山行を通じて教える方が実効性は高い。

しかし、この伝達法は大きな欠点を持っている。何らかの原因で伝達が途絶えると、次の世代が危険にさらされることである。その可能性が最も高いのは、部員数の減少、そして、それに続く学年の連続性の欠失であろう。実際、私の入部した73年にはこの危険性があった。この危機を理解していた山岳部長、監督をはじめOB各氏の協力で何とか凌いだのである。ここで2つのポイントが挙げられよう。1つ目は、当然ながら部員の減少を防ぐこと、各学年で最低でも2名は確保したい。2つ目は、OBの部活動への参画である。特に若手OBの参画は重要である。OBになってからも山行や反省会などに参加するのは、山岳部員としての責任であることを、監督は折に触れ言及し、説諭する必要がある。実際、現役の4年間はOBのお世話になっているのだから、ご恩返しは

当然であろう。

最後に論じたいのは、大学山岳部とは何かについてである。私が入部した頃の山岳部は、「一度、廃部にしてしまおう」という意見が出たほどの低迷ぶりであった。それが、4年後には部員数は20名近くとなり、夢であった部の人的復活と厳冬の剣岳北方稜線踏破も達成できた。その意味で、私達の世代は不遇ではあったが、幸せであった。当時、上級生が少なかったため、山行のレベルは低かった。どの大学も部員数減少の悩みを抱えていたが、積雪期の岩壁登攀などのレベルはまだ維持しており、少し肩身の狭い思いをした。夏はブツシユこぎ、冬はラッセルで、今考えても泥臭い山行であった。

しかし、我々には明確な目標があった。「今はこの程度だが、近い将来、必ず先輩や他大学に負けない山行を」というコンセンサスである。石油ショック前後の日本経済同様、「今は苦しくとも将来がある」という風であった。しかし、日本経済のその後を見ても分かるように、豊かになっても問題は山積みであり、決して幸福を実感することはない。このように振り返ると、部が目標に向かって努力していた時期が最も幸福であったように思える。そして幸運なことに、先輩達にも恵まれた。

難しい目標設定

だが、その次からが問題となってくる。実際、以後のリーダーは目標設定に苦慮している。社会人山岳会と違って、毎年、リーダー層が代わり、新人を迎える大学山岳部には、おのずと限界があり、次々と先鋭化していくのは体制的に無理がある。ここに大学山岳部の苦悩があり、山岳部とは何かという根元的、かつ正解のない問題との悪戦苦闘が続くのである。

結論的にいえば、大学山岳部とは、そこにいる人間が作り出すものであり、いかようにもなり得る集まりであろう。最低の共通項は、「山に登るクラブ」というだけである。山岳部に入る学生の目的は、登山技術を身につけたいとか、岩登りをしたいとか、仲間が欲しいとか、様々であろう。リーダーは、これらの人々に登山技術やリスクマネージメントを教示し、様々な要求に応えるべく、夢のある目標を提示しなければならない。大変ではあるが、登山技術やリスクマネージメントについては、システムさえできていれば、それほどでもない。問題は目標設定であろう。特に、中・長期の目標設定は難しい。パイオニアワークは魅力的な目標ではあるが、もはや日本では望むべくもない。しかし、考えてみると、「年々歳々、山相似たり 歳々年々、人同じからず」である。

新人にとっては、どの山も未知の体験であり、常に困難と、それに呼応する満足を与えてくれる。事実、我々が何回かチャレンジした冬の劔岳北方稜線は常に困難を伴っており、遭難の憂き目を危機一髪で回避してきたというのが実情である。いつの時代も困難な山は困難であり、その価値はいささかも減じない。

「夢のある目標」の設定でリーダー達は悩んできたし、

あの時

「穂高より槍往復」の冬山合宿を数日後に控えた1953年(昭和28年)

12月中旬のある日、必要なハーケンを求めべく、淀屋橋近くの好日山荘へ行った。店の向かいにある日本山岳会関西支部のルームをのぞくと、諏訪多栄蔵さんが一人で本を読んでいた。冬山計画の概要を話し、ハーケンの必要数などについて意見を求めたところ、総数30本、縦10、横20でよいという話になり、好日へ同行してくれた。

店には西岡、大賀両氏がいて、直ちに30本が揃えられた。「支払いはいつものやり方で」と言うのと、西岡さんは「まあしょうがないわなあ」と気のない返事をした。当時、金のない私達は、ハーケンを入手する時、現物を借りて山に行き、帰阪後、使った分だけの支払

ハーケンの買い方

いをするのを常とした。横で聞いていた諏訪多さんは「うまいこと、やっとなるなあ。使い残しを引き取るのは葬式のお返しと同じ。穂高で死ぬなよ。貸した人が困るからなあ」と笑って出て行った。

山から帰ると、早速、好日山荘へ。使用分は勿論、残置されていたのも抜き取ってきたので、40本近くあった。ただ、未使用分の引き取りについて大賀さんのチェックは厳しく、少しでも傷のあるのは容赦なく不合格になった。

支払いを済ませて街に出て、いよいよ卒業か、と思った。長く厳しいサラリーマン生活の現実を知らなかった私は、「月給をもらったら、山靴を新調しよう」などと、あくまで能天気であった。

(山本 光二)

これからも悩むことであろう。今回、この原稿を書くにあたり「時報」を再読したが、「リーダー所感」には感心させられるものが多い。私は現在、大学の教員をしているが、これだけのことを書ける学生が今どれくらいいるかと思ってしまう。一つには、山岳部のリーダーの責任の重さがあるろう。リーダーの判断ミスは遭難につながるの無論のこと、明確な目標や求心力がなければヤル

気のある部員は離れてしまう。リーダーは否応なく「山岳部とは何か」「我々はどうかあるべきか」について考えざるを得ないのである。その答えは、「登山学校」であったり、「志の異なる個々の山屋の集まり」であったり、「課外活動としてのクラブ」であったり、はたまた、「冬の劔岳」や「屏風岩」であったりする。この問いの答えに正解はなく、自ら苦

悩しつづき見つけ出さなければならぬ。そして、その過程において人間的に成長するのではないかと思う。

私も、50歳を過ぎた今頃になって、若い時分に何故山に登ってきたかが、やっと分かってきた。実をいうと、山へ行く前はいつも不安で、夜行列車では眠れなかつたし、初日の歩き始めはいつも、山へ来たことを後悔した。それなのに性懲りもなく何故山へ行ったのだろうか？胸の中を注意深く探っていくと、自分に自信を持ちたかつたからだという気がする。山岳部を続けられたのは、たまたま私に合っていたからであろう。人は何かを心の拠り所に生きていくものだが、私の場合は、山、そして山岳部であった。そして、山や部の活動を通じて得たものは多く、その大きさをこの年になって身に染みて感じている。登山（山岳部）は遭難のリスクを伴うため、安易には勧められないが、私自身の経験からも、そのリスクをかけ、チャレンジする甲斐はあると断言したい。

（1980年歯学部卒）



（ネパール・ブリガンダヤ）

△再録▽

1949年冬山合宿

厳冬期の白馬岳主稜

徳 永 篤 司

1. 第1次アタックの失敗と白馬主稜登攀の予測

われわれ阪大山岳会が1950年の冬期、この白馬主稜を計画したとき、予め次の如き事が考慮された。

(1) 取付点 猿倉台地より杓子支稜の裾をまいて大雪溪に出る以上、大雪溪から白馬沢より廻り込んで地形上の主稜末端から取付くのは、傾斜の緩い長所はあるが、時間的に相当なロスである。その為には大雪溪から直接、主稜の末峯めがけて横から取付く事。但し、その附近で比較的取付けそうな処は夏季は草つきとガレ場であるためナダレを考慮して日の出前に稜線に出てしまわなければならない。

(2) 登攀時間及び隊編成 最高約10時間、テクニクよりアルバイトに向く2人より3人パーティを必要とする。

(3) 降路 大雪溪。原則として頂上小屋を使用せず

など。

これは1948年の3月と7月、浪高山岳部として登った三台尾根と主稜の経験に基いて割り出されたものであった。第1回アタックに失敗した30日の状況は、冬の主稜が予想以上に頑強であることを教えてくれた。このため、①サポートを先頭に立て、引返し可能なギリギリまでラッセルに使い、アタックを温存する②出発時刻を30日の4時より早くする他に、全行程のピッチを意識的に上げねばならない③スキーを稜線最後まで上げる事などを附加せねばならなかった。

結果から逆に見て、以上の予測はまだ不完全極まるものだった。相当過大に評価していたにも拘らず、実際の主稜はもつともつと頑強だった。所要時間も予想の倍近く掛かったし、サポートに多くを期待するのは無理だった。更に重要な点は、われわれが余り問題にしていなかった最後の雪庇が、全く主稜初登の田中伸三氏の云われる通りだったという事である。田中氏は学連報告の中で、厳冬期における主稜を登攀不能なりとし、雪庇の切れない事をその理由に挙げて居られる。2. 出発より猿倉台地まで

元日の夜、細見を徹夜させ、食事の準備をする一方、刻々の天候変化を観察して貰った事は非常に良かった。

2日午前2時にたたき起こされたわれわれは、食事をすまして30分後に全員外に飛びだす事が出来た。細見は殆ど完全に出発準備をやつてのけた。

最初は一時出発をためらわせた空模様ではあつたが、登るにつれて杓子尾根が鮮かに見え始めてきた。天候が快晴に向つたのではなく、実は猿倉台地の高度に雪の層が狭つており、それが原因で北股で曇り、猿倉小屋で晴になるといふカラクリが判つたのはもつと後だつた。所謂、烈風後の晴天でない点で30日と変らなかつたが、しかし冷え切つたように冴えた白馬の全容に初めて接する事が出来るという事が何より心を弾ませた。

猿倉小屋では主稜をねらう中京山岳会は既に半時間前にサポートをラッセルに送り出し、後発のアタックと残留の人達が残つていた。すぐ上の猿倉台地で我々はこのサポートに追いつき、先になつた。30日のときはラッセルとルートを選択に時間を食ひ、夜が明けてから取付いていた。台地から大雪渓まで、杓子支稜の裾をまいて幾つもの沢と隆起が折重なつてゐる。遠近感の不明な夜間、これを一々気にしてゐたのでは時間を食うばかりである。少々の登りや下りは問題ではない。長走沢を渡つたわれわれは真一文字に大雪渓へとトラバースを始めた。松久と久保、小沢を交代に先頭に

立てて。約1時間後の午前5時、われわれは大雪渓の真中に立つことが出来た。黒々とした山影をその面に横たえて白銀に光る巾広い帯が杓子の鞍部に上つてゐた。その彼方、ぼつかりと開いた稜線の窓に氷のリンネに飾られた西の星空がチラリとのぞいた。冷え冷えと音もなく吹き下ろす風と共に、大雪渓の底を伝わつて凍りつく夜明け前の寒気が体をゆすぶつた。見通せるかなり上部まで、雪面には一つのデブリもなく、左手に杓子尾根が鋭くつき立つてゐた。予想した如く、すぐ右手の一合雪渓と呼ばれる沢の横の傾斜は急であるがスキーで取付くのに適してゐた。

1分の休みもなく、其のまま全員、主稜側面の登行を開始した。折からトラバースルートにあたつて、中京山岳会の携行する懐中電灯が点滅して続いた。風こそないけれども、絶好の登攀日和が訪れようとしてゐる事は疑いのない事実だつた。それをわれわれは全く申し分のない完全さで、絶好のコンディションでしっかりとつかむ事が出来たのである。全力を本日に傾倒して、どんな事があつても登り切ろう。嵐の様に心の底をかき立てて吹荒れる情熱と感激が烈しい闘志に入り交つて全身を流れた。

東の空が美しい様子が映えて、静かに1月

2日の太陽が東の涯から微笑みかけた。その清々しい夜明けの陽光は、過去に於いて報いられた事のなかったわれわれに対して、今日を逃がして他に絶対に機会のない事を教えてくれる様な明るさで照し出した。

3. 白馬主稜

輪カンのラッセルは膝より少し上までもぐつたが、冬としては良くも悪くもない雪質だった。取付きで小沢と別れ、稜線直下のスキーデポ地で、サポートの松久、久保にスキーを托した。徳永、大島、家田のアタック3名は、長い長い主稜の稜線を交代でラッセルし乍ら頂上へ出発した。振返ると、太い樺の横でひとかたまりになって準備する中京山岳会の人達から離れた雪の中に、われわれを見守る松久と久保が立っていた。彼等はこれから5人分のスキーを担いで降り、飯を炊いて又迎えに上ってこなければならなかった。松久、久保、小沢はラッセルに酷使された体で、細見は徹夜で全員の出発準備に忙殺された身で、4人共、見事に晴れた、得がたい今日1日をこたごたと麓でサポートに費さねばならなかった。

30日のときの引返し点でアイゼンに代えていたとき、中京山岳会アタックの熊沢リーダーと鈴木氏が追いついて来られた。10時過ぎである。此処から頂上まで、

別に相談した訳でもなかったが、何時の間にか両隊一つになって行動した。対抗して競争する他のスポーツに比し、登山に於ては協力すべき点があるだけで対抗すべき何物もない。一面識もなかった両隊が白馬主稜に対し抱き合って登る事が出来たのは登山家として無上のよるこびであった。

夏季、一面に茂ったハイ松スギの主稜、前半は充分に雪が乗ってふわりとした感じの急なリッジが只上り一本に延々と曲りくねって続いているだけである。左手にあたって、雪をもつけぬ頂上直下の岩稜が恐ろしい迫力でせまっていた。越中側から吹きつける風に雪煙を巻き上げる頂上の稜線が碧空を区切り、そこから真一文字に大雪溪へ、1948年の3月、浪高OBとして登った三合尾根が岩峰を並べて立っていた。右手には白馬以北の稜線と白馬主稜とに包まれて、白馬沢の雄大な景観が人間の介入を頑として退けていた。足許の雪を巻き上げる烈風は絶えずわれわれを悩ました。しかし何処までもウインドクラストの稜線は出てこず、却って不安定な足場は粉の様に崩れた。既に引き返すという事を忘れたわれわれは一度の休憩もなく交代でラッセルを推進した。正午頃、高度から云えば遙か下、大雪溪の上部にあたる2点、頂上をめざす中

京のサポートを認めて双方から呼び合う事が出来た。見返れば視野の始めから深いラッセルの跡が一本、われわれの登行を刻みつけるように延々と足許まで続いていった。

夏季、主稜の後半部はガラガラの岩場と不安定なりツジの連続となり、ルートは3つの岩峰によってさえぎられる。頂上に接近するに従って加速度的に増加する傾斜は頂上直下の凄惨な岩場でオーバーハンングを作り露出している。ルートは其処を避けて100m程の一枚岩のガレ場を登りつめ、山頂標より10m程北側に出るのである。

記念すべき最後の悪場は先ず第三岩峰（かりに頂上から順に第一、第二……と名付ける）より始まった。そこで、われわれは60度の斜面に付いたパウダースノーを全部払い、岩場を出して進まねばならなかった。汗ばんだトップとは反対に、後は頭から雪をかぶって寒気と斗った。日没が迫った。第三峰上の稜線では、折角苦心して作ったトップのラッセルを後の者は使えなかった。足場の雪がずって、登行に際して落ちるおびたらしい雪のためにラッセルの上に同じ努力でラッセルをしなければならなかった。ナイフリッジを渡った第二岩峰を夏季われわれは北側をまいて荷物をつり

上げた。今、吹き寄せられて積もった十数mの雪のためオーバーハンングは下にかくれて3分の1くらいをあらわしていた。ここでアンザイレン。夏迄通り右をまいたが、上部に上行不能の一枚岩が2、30m続いているので、やむなく中止し、左側に廻り込んだ鈴木氏が熊沢氏の肩から成功した。その間、3m程の高さである。

日は没した。雪をかき出して登るのが一番良い方法には違いなかったが、既に第二岩峰で日没になったわれわれには、そんな悠長なことは出来なかった。事実、一々雪を払っておれば、明日の朝までかかっても頂上にゆけそうになかった。膝から下を足の裏の様に使って、或いは両腕を雪面に突込んで登行を続行した。苦肉の策である。アイゼンの全く効かぬ足場は危険を極めた。ハイ松を1本1本掘り出して辿り着いた第二岩峰直下で、正面から左手へ続くオーバーハンングと右手の一枚岩にわれわれは遂に行手を阻まれて了った。頭上2、30mに迫った頂上まで、一度スリップでもすれば絶対に助からないと思われる恐ろしい粉雪の斜面——われわれに残されたルートはそれ以外になかった。午後7時、くずれ始めた荒天と烈風に吹きまくられて頂上直下に立ったわれわれ5名はここで致命的な、

しかも決定的な問題に直面させられてしまった。約3mの高さに大きくそり返った堅い雪と氷の城壁が、びったりと完全に上方を閉じて、今や灰色に溶け込んだ頂上の稜線の遙か下方まで、切り崩せそうな、接近出来る個所は1点として見当らなかつた。

そして、落ちないで止っておれるギリギリの処で、左腕を壁の中につつ込んで雪を抱き、辛うじて振り上げたピッケルの上で、とても届かぬ厚い雪庇が冷く笑っていた。くずれ落ちる雪を空しく頭からかぶるだけであつた。こうなれば最早トンネルを掘るより方法はなかつた。約1時間の苦闘の後、全く失望した我々は足場に掘った穴を広げ、雪庇下の壁に5人入れる棚の様な穴をあけた。漸く訪れ始めた睡魔がラッセルに綿の如く疲れた体に抗すべくもない力で襲いかかつてきた。沈黙の中でくずれ落ちまいと思う5つの肉体が、何くそと立上る5つの魂と闘っていた。

「もう一度やつてみよう」。棚の底を足場に家田が大きくそり返ってピッケルを一振りした。そのとき、意外にも、あまりにもあつ気なく、ぽつかりと雪庇が口を開いたのである。退却ではなく前方に向つて運命はその扉を開いた。苦闘する主稜登攀隊と、同時に邁進する阪大山岳会の前途に向つて。たたきつけて来る雪

を交えた烈風、8時30分われわれは遂に頂上に立った。

4. 降路

初め、本計画で、われわれは主稜自体より登頂以後の行動を慎重に取扱つた。

それは

(1) 白馬山頂附近で2日間のリングをし、甚だしいものでは頂上小屋と村営小屋の間で道に迷つて遭難したという例がある様に、視界の望めぬ頂上附近は特に尾根が広くて非常に迷い易い。従つて降路には山頂標を探し出し、出来ればアンザイレンしたままで雪庇沿いに下る事が必要である。

(2) 降路に使う大雪渓は、降雪時は常に雪崩れるものと見なければならぬ。これと主稜完登後の頂上着時間とを考慮するとき、雪崩に関して登頂後直ちに下降し、どか雪に閉じ込められる恐れのある頂上小屋は原則として使用すべきではない。

などであつたが、実際、全て簡単に運んだ。頂上で待機していた中京のサポートのの方に小屋へ抱き入れられ、暖い翌朝を山頂小屋で迎えたわれわれは、よく締まった大雪渓を真一文字に下り、3時間後には元気に根拠地に下ることが出来たのである。

11・00 頂上小屋発—大雪渓—1・00 デポ地点—2・

1953年春山合宿 後立逆縦走

尾藤 昭二

30 北股小屋
〔登攀時間記録〕 2・00 北股出発―3・00 〓 3・20 猿倉小屋―5・00 白馬尻―7・00 〓 7・20 スキーデポ―10・00 アイゼン、中京山岳会と合流―15・00 二峰下、アンザイレン―17・30 一峰下トラバース―19・00 雪庇下―20・00 頂上小屋（泊）

〔第一次、第二次アタック隊員編成〕

アタック第一次（12月30日）

アタック 加藤、大島

サポート 家田、松久、細見

残 留 徳永、久保、小沢

アタック第二次（1月2日、3日）

アタック 徳永、家田、大島

サポート 松久、久保、小沢、細見

〔白馬岳東面に於ける主要な記録〕

1931・3・31 白馬主稜（積雪期初） 神戸商大

〓 田中、関学 〓 秋山

1934・7・17 白馬主稜（夏初） 浪高 〓 中村、

河原、盛岡

1936・8・1 白馬三合尾根（夏初） 浪高 〓 佐

谷、中西、徳永

〔時報〕 1号より

まえがき

積雪期後立縦走は既に戦前、立教大が冬季2度試みて惜しくも失敗せられ、その後、昭和18年春に関学大の井上氏等により、白馬より針木に到る正縦走が成功せられた。私達は数年間主力を後立山に注ぎ、針木より白馬に到る逆縦走を目標にして来たが、殊に1951年春の逆縦走失敗以来は、部員全体のそれへの情熱は固かつた。

縦走に際しては、従来とも問題にせられ、且つ常識的に考えられる八峯キレットと不帰は50年、52年の春山で我々も一応積雪期の問題を解決した訳なのであるが、一般に看過されている針木・冷間の問題の重要性を推察した私達は、これを加えた3点を中心としてサポート隊の配置を考えた。一方、縦走隊は、サポート隊の進展に歩を合して、純アタック形式に各区間前進しようとするもので、従ってその精神的、肉体的負担を能う限り除き、必ず縦走を完遂し得る十分な余力を

縦走隊に残す事が計画の骨子であった。従つてサポーター隊の負担は可成重くなる訳であるが、その為にサポーター隊を出来るだけ大部隊にし、その大半を全く荷上げのみに使用して稜線迄のポツカを円滑、且つ容易にし、更にポツカ進展に伴い、次々と下山せしめて縦走隊と縮小したサポーター隊が稜線上で長期間堪え得る様に計画した訳である。勿論、必要な場合はサポーター隊全員が荷物を各小舎に残して下山し、縦走隊独力で行う事を考に入れてのすべてであつた。此のサポーター作戦には稜線迄の登路として極めて容易にして便利な良きルートが不可欠の条件であつた。それが一方を八方尾根、他方を冬山テイサツ以来一応新越尾根となつた訳である。

尚、先述の針木・冷間はそれ自体としての問題と云うよりも、その全縦走に於けるウエイトが極めて重大と考えたのである。私達は偵察隊を送り、大沢小舎から新越乗越への容易な登路を発見し、それを解決出来た事は全計画をスムーズに進める大なる誘因であつた。

〔計画〕

縦走隊Ⅱ川島 勇(Ⅰ)、住吉仙也
サポーターA隊Ⅱ田島 汎(Ⅰ)、山本光二(食)、大村

一生(会)、六戸 元、鷺沢 忍、李中 勝
サポーターB隊Ⅱ尾藤昭二(Ⅰ)、坪井圭之助、東兼(食)、近 璋三、小沢逞夫、土屋 直、立花直治、木村裕一

一、縦走隊

I. 大沢小舎―針木岳―新越乗越

II. 新越乗越―冷小舎

III. 冷小舎―キレット小舎

IV. キレット小舎―唐松小舎

V. 唐松小舎―白馬岳―細野

二、サポーター隊

A. 大沢小舎をベースとし、新越乗越に雪洞を進め、冷小舎迄サポーターし、鹿島槍釣尾根迄縦走隊に同行する。

B. 八方尾根より稜線に上り、五龍を越えて不帰をサポーターする。

三、連絡

両サポーター隊の境点を鹿島槍釣尾根とし、標識を立てる事。尚、その他あらゆる場合を想定してその連絡を決めた。

四、偵察隊を全計画行動開始前に先発せしめ、新越乗越への登路及び扇沢を偵察せしむ。

〔行動記録〕

3月23日(小雨)

縦走隊・A隊Ⅱ大町(11・30)―寄沢(13・30)―

黒沢営林署小舎(14・30)

B隊Ⅱ細野(14・00)―黒菱小舎(17・00)

昨22日夜、全員大阪を出発し、大町では偵察に加つた縦走隊と最後の打合せを行い、隊編成を行つて、お互の完斗を折りつつ分れた。午後、小雨の中を縦走隊・A隊はバス、トラックを利用して寄沢附近迄入り、容易に黒沢の営林署小舎迄荷上げ出来た。一方、B隊は久保先輩も加つて頂いて全員細野から黒菱小舎に入った。

24日(晴)

縦走隊・A隊Ⅱ黒沢(9・00)―大沢小舎(15・

30)

B隊Ⅱ黒菱(7・00)―唐松小舎(13・30)

縦走隊・A隊は途中、新越尾根末端に荷をデポし、一気に大沢小舎に入った。B隊は尾藤、近の2名のみ唐松小舎に入り、小沢、土屋は唐松小舎迄荷上げ、他は上樺に荷をデポして黒菱小舎に下つた。午後、尾藤、近は再び上樺の荷の一部を小舎に荷上げた。久保〇Bは下山して頂いた。

25日(曇後風雪、麓は雨となる)

A隊は雨の為新越尾根下部に荷上げて引返す。

B隊坪井等6名は早朝黒菱を出発、途中風雪化してきたので、小沢、木村、立花の3名を上樺に荷をデポせしめて計画通り下山せしめ、坪井、東、土屋の3名は唐松小舎に入った。午後、風雪中を尾藤、坪井は牛首偵察、東、近、土屋はデポした荷を全部小屋に運び入れた。稜線の荷上げはスムーズに進み、風雪の音を聞きながら明日は休養と皆の顔がほころんでいた。

26日(風雪) A、B隊共停滞

27日(稜線は風雪、麓はガス後晴)

A隊Ⅱ大沢(10・00)―国境稜線(15・30)―16・

20)―大沢(18・30)

天候を誤り、出発はおくれたが、午後は完全に晴れ、稜線の雪洞予定地迄荷上げを完了出来、愈々次の晴天には縦走隊出発という段取りに至つた。

B隊、停滞。

28日(高曇)

縦走隊Ⅱ大沢(4・30)―針木峠(7・00)―8・

00)―針木岳(10・00)―スバリ岳(11・40)―赤沢

岳(14・30)―鳴沢岳(16・00)―新越雪洞(17・

30)

鷺沢の準備により縦走隊は、満天の星空を仰ぎつつ小舎を出た。凄みのある籠川本谷をチラチラ2ケの電灯が進み、ワカンでのラッセルも、もどかしい様だが、黙々と峠に向つて直登、5時電灯を消す。最後の雪庇を右に巻いて峠に立った。朝食後間もなく空模様がおかしくなつてきたのですぐ出発した。ポコポコもぐり乍ら稜線を進み、10時、縦走第一峯の針木岳頂上を踏んだ。白馬は遙か彼方に頭をのぞかせているのみだ。下降はアンザイレンして慎重に下つた。堅雪にゆるんだ新雪のあるのは危険極りない。更にスバリへは雪と岩のナイフリッジや急な雪面を上り下りしながらそれを越える。次は夏道を利用して漸く赤沢岳に着いた。ほつと一息入れていた時、新越尾根上部を進む点々としたサポート隊を見付けた。如何にも頼もしい姿に見える。

更に同様な上り下りを繰り返して鳴沢岳を越えた。

その下降の急雪面も非常な注意を要したが、愈々雪洞も間近くなつてきた新越乗越附近はラッセルがひどく、おあずけされた犬の様に眼ばかり先に進む。5時半漸く迎えられて雪洞に入った。

A 隊Ⅱ大沢（9・00）―雪洞（14・30）

夜中から炊事して縦走隊を送り出した鷺沢以外の5

名は、残余の荷を持つて出発。国境稜線到着後は直ちに雪洞建設、5時半、縦走隊を迎え入れた。折から降り出した雪の中を田島、柵中は大沢小舎に下つて行つた。

B 隊Ⅱ唐松小舎（8・30）―白岳小舎（12・30）

高曇で風もある変な天候であつたが、B 隊の5名も出発し、牛首もアンザイレンして稜線通り下り、昼過ぎ白岳小舎に着いた。近、土屋を往路を帰りに直ちに下山せしめ、尾藤、坪井、東の3名は五龍頂上まで荷上げし、鵬翔会の雪洞に入れ、ぶらぶらと下る頃より雪が降り出した。

29日（風雪） 停滞

30日（風雪） 停滞

31日（ガス・強風） 停滞

薄日がさす様でガスも間もなく晴れる様に思われたのでA 隊は出掛けたが、やはり引返し、B 隊も五龍頂上迄行き、荷作りして待つたが遂に引返した。夜、さえ渡つた月光は実に物凄く山々を照し出していた。

4月1日（快晴）

縦走隊・A 隊Ⅱ新越雪洞（8・30）―種池（11・30）
12・50）―冷小舎（16・00）

雪洞を撤収して、岩小屋沢岳のラッセルをすまして

種池へ着いた頃は風もなく、ポカポカと日が照り、皆、車坐に坐り込んで茶をわかしたりして昼食を摂った。爺岳を過ぎて冷小舎を目の前にする頃より再びラッセルに悩まされた。冷小舎は屋根の3分の2を出しているのみで掘り出しに1時間半要したが、奥の部屋は雪もなく、少し手入すると気持ち良い小舎になった。

B 隊Ⅱ白岳小舎(9・00) — 五龍岳(10・00) — 10・30) — キレット小舎(19・30)

五龍頂上で荷作りして出発した時、8貫の荷があった。五龍の下降は、アンザイレン40米4ピッチで急雪面を直降、少し右ヘトラバースし、夏道に沿ったりして上り下りを繰り返したが、重荷の我々のピッチは遅く、夕闇迫る7時半漸く小舎に着いた。愈々計画も本道に入った感がある。

2日(晴後ガス)

縦走隊・A 隊Ⅱ冷小舎(9・00) — 南檜頂上(11・20) — 12・30) — 冷小舎(A 隊のみ)

B 隊Ⅱキレット小舎(8・30) — 釣尾根(11・00) — 南檜頂上(11・30) — 12・30) — キレット小舎(14・30)

何れの隊も今日こそ会える様な気がしていた。縦走隊・A 隊は冷を出て南檜頂上に向う頃よりガスが出だ

し、頂上に立った時には釣尾根の方向さえわからなかった。何気なく「ヤッホー」と呼んだ時、丁度、釣尾根から南檜に向っていたB 隊には聞き慣れた声だった。俄然、B 隊のピッチは上り、ヤッホーを呼び乍ら一步一步ステップを切りながら頂上へ。遂に11時半、頂上で喜びの握手を交わした。車坐になつて昼食、相互の苦勞を語り合い乍らも、誰の眼にも明日への喜びが輝いていた。記念写真もすんで、縦走隊はB 隊に導かれてキレットへ、A 隊はそれを見送り乍ら彼等が1人ずつガスの中に消えて行き、声も届かぬ様になると急に歯の抜けた様な寂寥感に包まれ、黙々として冷小舎に引上げた。さてキレットは我々の予想よりはるかに良く、小舎から小八迄は北穂会のトレースがあり、夏の針金が使用出来、又、大八はその頭の岩角にザイルを巻き京大のピトンに確保して40米のザイルを下げ、キレットボーデンより黒部側を巻く所は、一部針金も出て居り、更に10米ザイルを固定して簡単に通過した。又、釣尾根よりキレットへの下降はガスに包まれていた為でもあるが、トレースがなかったら仲々容易でないと思われた。

3日(曇後雪)

A 隊Ⅱ冷小舎(8・00) — 新越乗越(14・00) — 大

沢小舎 (18・40)

不安定な天気、夜明け前から考えていたが、ラッセルとシュプールの事を考え、遂に冷小舎を撤収、何日振りかで大沢小舎に帰った。

B 隊・縦走隊Ⅱ休養停滞

4 日 (風雪)

A 隊Ⅱ大沢小舎撤収、下山。B 隊・縦走隊Ⅱ停滞。

5 日 (大体晴)

縦走隊・B 隊Ⅱキレット小舎 (11・00) — 白岳小舎 (15・00) — 唐松小舎 (17・40)

天候を見ながら出渋っていたが、遂に出発。身も心も軽い5人の足取も早く4時間で白岳小舎に、1時間40分で唐松小舎に入った。素晴らしい御馳走をして明日を祝福し、サポート隊は夜おそく迄、明朝の準備を行った。

6 日 (ガス後風雪)

縦走隊Ⅱ唐松小舎 (7・00) — 不帰二峯 (9・30) — 鐘ヶ岳 (13・30) — 雪庇下ピバーク (16・30)

B 隊Ⅱ不帰二峯より引返し — 唐松小舎 (10・20) — 11・30 — 黒菱 — 細野 (15・00)

朝から剣に雲がかかり、風もあって思わしくない天気だったが、出発は誰の心にも固く決っていた。縦走

隊・B 隊は7時出発。唐松岳を越えて、三峯の黒部側を巻き、二峯の下降は針金を利用出来たが、更に末端に30米ザイルを固定して全員で下り、尾藤は更にエボシ岩上部に上り、同ザイルで縦走隊のエボシ岩信州側トラバースを確保。此処で縦走隊はB 隊と分れを告げた。時刻は9時半、折から雪がちらちら降り始めていた。

不帰を越え、天狗に上った頃より本格的な風雪化し、夏道が僅かに浮き出して見えるのを頼りに漸く天狗池に着いた。それからは磁石と地図とカンを頼りに2時間近くも掛って鐘岳登路の夏道に辿り着いた。兎に角出来る限り白馬の小舎迄行こうと鐘岳を越える迄はよかつたが、更に杓子に向う稜線が分らず、一時、黒部側への尾根を下ったり又雪の斜面が全く判別出来なかつたりして3時間近くも行きましたが、遂に断念、ピバークに決した。少し逆戻りして鐘岳を下り切ったコルの雪庇の下を少しならしてツエルトをかぶり、もぐり込んだ。夜になって降雪が烈しくなり、両側及び正面から圧迫され、遂に2人共体を接して身動きも出来ぬ迄になった。それでも少し眠れた。

一方、B 隊は縦走隊を案じ乍ら、風雪中を唐松小舎を撤収、八方尾根を下り細野に下山した。夕方、坪井

は細野に居た大村と雨の中を猿倉の近く迄迎えに行つたが、縦走隊は下りて来ず、明日の天候を気にし乍ら夜中細野に帰つた。

7日(快晴)

縦走隊Ⅱビバーク地(6・45)―白馬頂上(9・30)―白馬尻(10・40)―12・00―細野

日出前より準備を始めていたが、快晴の朝の寒気は烈しく、出発迄2時間も要した。晴れた稜線では白馬迄の進路がそのまま目の前に置かれ、昨日探した尾根も今朝はアイゼンも快く、瞬く間に過ぎて白馬頂上に縦走最後の足跡をしるした。一気に大雪渓を下り、馬尻で長い間休み、後はもう下界の道だとボコボコもぐり乍ら猿倉を過ぎて下つてゆくと、北股取入口少し上手で尾藤、坪井、東、大村に迎えられ無事成功の握手を交した。どっかど雪の上に下した腰は、もう容易に上らなかつた。ポカポカと春の陽を浴びながら川の水音に聞耳を立てた。細野に帰つた時はもう5時も過ぎていた。

△新越尾根について▽

新越尾根(仮称)とは、大沢小舎の少し下手から乗越の岩小舎沢岳寄りの所に上る尾根である。冬季の偵察によりこれを認め、今回春山行動開始前に偵察隊を

出して、これが登路として容易な尾根である事が分つた。偵察隊は大島輝夫OB(上)、久保三朗OB、川島勇、住吉仙也、田島汎のメンバーで、当尾根及び扇沢偵察の目的で3月16日大阪を発ち、17、18日で大沢小舎に入り、19日快晴を利用してこの尾根を登り、更に岩小舎沢岳を越えて種池、扇沢を経て下降し、一気に偵察を完了した。

さて此の尾根についてであるが、寡見にして殆んど耳にした事がないので、その詳細を説明しよう。

先ず取付は尾根末端から行うのが最も簡単である。大沢小舎から本谷を少し下ると新越沢出合に出、更に行くとな谷がやや左に曲り、次に右に曲ろうとする所の附近が末端部で、蓮華側やや上手の河岸段丘に大きな数本の木が見えるのが良い目標である。この取付点から、ぐんぐん登ればよいだけで、大した所もない。大部分ブナ、モミ、更にカンバに覆れて居り、平均傾斜も大した事もなく、大沢小舎から6時間足らずで登り切る事が出来る。2、3注意を附加すると、枝尾根が多いから下降の際間違わない様にし、特に標識等をつけた方が良好だろう。又、ルート図の①②の部分には注意すべきで、特に雪の状態の悪い時は警戒しなければならぬ。更にジャンクションでは雪庇というより

左図の如く雪が盛り上った程度で、簡単に国境稜線に出る事が出来る。(図は省略)

あとがき

1. 稜線の雪の状態は一般的に良好で、特に不帰キレットは、可成針金を使用出来た。その他種池附近のラッセル及び鳴沢・針木間が案外悪い事には留意すべき事である。

2. 小舎について特に記すべき事といえば、針木小舎は雪が入り使えないのは例年の事であり、又冷小舎は今春は屋根の3分の2のみ出ていたのであるが、埋まっている場合も十分考えられるから予め位置を確かめておく必要がある。

3. 全行動をふり返って見る時、何といつても開始に先立つ新越尾根の発見とサポート隊に於る運営、特に稜線迄の荷上げを一気に進める事が出来た点などが成功の一番大きな要素であったろう。しかし、この計画がこうした縦走に於ける最も良い物とは決して言えない。私は登山に対するフィロソフィから尚一層好ましく且つ高度な計画―縦走計画―を考えながら筆をおく。

〔時報〕5号より)

1953年冬山合宿

天狗のコルより槍往復

山本光二

昭和28年の春、数年来の夢であった後立山縦走に成功した我々は、積雪期に於ける次の目標を何処にしようかという事に就いて少なからず迷っていた。唯、皆が理解していたのは、春の稜線上での行動がさしたる支障もなく行われ得る様になった今、次は冬の国境稜線こそ会の進むべき当然の方向だということ、我々の後立山での諸々の成果は一度は他の場所で確かめられなければならないということであった。極端に云えば、後立を除いた冬の稜線であれば何処でもよいといった気持をもっている者さえいた。しかしながら我々の休暇は限られており、天候の悪い剣や、アプローチの長い北岳で長期間稜線で生活し得るとは思われなかつた。結局、遠山川の軌道を利用できる南アルプスの南部と穂高とが対象として残り、種々議論が尽されたが、何れとも決しかねた。冬の目標が未決定の儘に、夏山合宿は剣で行われたが、その頃から未だ見ぬ冬の

穂高の国境稜線が次第に強い魅力をもつて仲間の間に意識され始め、先輩の中にも、今こそ幾多の山岳団体の記録ある穂高で、阪大山岳会の実力を試す絶好の機会だと云われた人もあつて、秋山を前にして、冬山は穂高にすべく決定をみた。

ルートは最初、西穂から北穂が考えられたが、西穂から奥穂を計画しているところが三校もある様子なので、天狗の科尔から槍往復に決められた。但し天狗の科尔は天幕を設置し得る場所が少ないので、此処に他のパーティの天幕が2つ以上ある場合には、明神最南峯より北穂を第二計画とすることにし、その決定は専ら先発隊の偵察結果によることとした。

先に述べた如く、種々の学部より成る我々のパーティは時間的に非常な制限を受けており、我々の行動可能の期間は正月の前後に約2週間あるのみであつた。この様な状況の下にあつて、天狗の科尔より槍往復という、かなりの長大な計画を実行するには、ある種のスピードを必要とした。それは、最先端キャンプを出発した利那に、ポーター・システムから完全なラッシュユ・タクティックに移行し得る程大きな攻撃力をもつたアタック隊を、如何にして最もスピーディに北穂頂上まで前進せしめるかという課題との対決を意味した。

このため我々は、一方でナイロンテントの購入や8ミリの細引の使用による装備の軽量化をはかると共に、他方、先発隊のデポと、サポート隊の活用によつて岳沢には何ら中継キャンプを設けず、天狗の科尔までの荷上げを全員1日13時間の行動という一種のラッシュユにより一挙に解決せんとした。かくしてポーター・システムでもなくラッシュユ・タクティックばかりとも云えない、一種奇妙な計画は次第にその形をととのえて来た。最後に問題となるのは、現役の中で穂高に経験のある者が極めて僅かしかいないことで、アタック隊の川島、尾藤ですら北穂から槍の間は夏も通つたことがない程であり、一時は夏山を穂高にするべきだつたと後悔した位であつた。しかし他面、我々の大部分にとつて未知の場所、しかも冬の稜線ということは大きな魅力でもあつた。そしてそれだけに文献は一層の熱心さで輪読され、秋の三度にわたる偵察の後、大体ルートについての成算を得たときは実に嬉しく、期待で胸がふくらんだ。

○メンバー

C III隊

アタック 川島勇 (CL)、尾藤昭二 (SL)
サポート 木村裕一

ＣⅡ隊 山本光二（Ｌ記録）、土居直

ＣⅠ隊 東雍（Ｌ）、宍戸元（食糧）、李中勝（装備）

サポーター隊 住吉仙也、広橋茂、抱忠男、林伸一、

山本進一郎

○行動概況

12月22日 先発隊の山本（光）、土屋、木村、抱、大

阪発

23日（曇時々雪） 先発隊、中の湯泊。

24日（晴） 帝国ホテル木村氏宅に入り、装備点検。

釜トンネルの上からスキーをはいた。

25日（高曇） 先発隊はホテルで、天狗のコルには

現在、学習院パーティのみしか天幕を設けていないこ

とを聞き、計画は第一案に決定、以後はポツカに専念

することにし、天狗沢出合より少し上、標高2200

米附近に荷物をデポする。（デポⅠ）

本隊の川島、尾藤、住吉、東、宍戸、広橋、李中、林、

山本（進）大阪出発。

26日（風雪） 先発隊は前日と同じ場所まで荷上げ、

本隊は沢渡泊。

27日（快晴） 先発隊は今日こそ天狗のコルに達し

ようと思ったが、前日の降雪のため天狗沢のラッセル

は胸までもあり、遂に午後4時あきらめて、天狗沢が

左俣に分れてから少し登った左側の尾根の末端附近に
デポする。（デポⅡ）。本隊は帝国ホテルに入る。

28日（小雪） 土屋、木村をテントの整備と飯焚に

残し、他は全員で天狗のコルに荷上げし、ＣⅠ設営後、

川島、住吉を残してホテルに下る。この日尾藤、東は

ラッセルのため一同より1時間早く午前5時先行した

が、デポⅡ附近で学習院パーティが下山されるのに遭

い、ラッセルは大いに助かった。尚デポⅡに於けるち

よっとした手違いのため、本来のＣⅠ用テントをデポ

に残してしまったので、ＣⅠには止むなくＣⅢ用のナ

イロンテントを張ったが、このことは後に計画を實質

的に1日遅らせるに至った痛恨の失敗であった。

29日（高曇） 川島、住吉は口バの耳までのザイル・

フィックスを行い、他は林、抱を除き全員、残余の荷

物一切と共に再び天狗のコルに至り、4人用テント一

張を増設して、午後4時ＣⅢ、ＣⅡ、ＣⅠの各隊はＣ

Ⅰに入り、住吉、広橋、山本（進）は夕闇迫る天狗沢

を下って行った。

30日（風雪） 停滞

31日（風雪） 停滞 午後5時、気温零下28度。

昭和29年1月1日（快晴） 凄い風の音に、たまされ

て天候判断を誤り出発が遅れる。8時半、川島、山本

は先行し午後3時奥穂小屋までのフィックスを完了する。尾藤、宍戸、李中はテントの張替及荷物の整理を行い、東、土屋、木村は奥穂頂上のCⅡ建設予定地にポツカしたが、ポツカ隊がスコップを上げるのを忘れたため、CⅡ用のブロックを予め切っておくことができなくなった。第2の失敗であり、後にCⅡがつぶされる原因はここにもひそんでいた。この日は一日中、春と間違う様な寒にのどかな快晴であった。

2日(晴後風雪) 7時、朝食中に東が右腹の痛みを訴える。盲腸炎らしいのでペニシリンを注射し、クロロマイセチンを服用させ、宍戸、李中をつけて下山せしめる。ところが全く幸運なことに、このとき太田敬氏と共に徳永、大島両先輩が天狗沢を登って来られ、外科医たる徳永先輩は天狗沢の途中で直ちに東を診察された結果、東は正しく盲腸炎であることが判明した。一同少なからずがっかりしたが、東のことはOBで引受けようという大島先輩の確言を有難く聞き、安心して10時半出発する。

奥穂に着き(12時)、尾藤、木村はフィックスのため涸沢槍の下りまで行き(午後3時)、残る3人でCⅡを建設する。CⅡ設営場所は初め奥穂頂上の前穂側の予定であったが、岳川側よりの風が強い上に雪量が

少くブロックが切れないので、テントが老朽していることも考えて奥穂小屋側へ少し下った処、「登高9号」にある、慶応の方がかつて高所露営研究のためにテントを張られたという位置に変更した。吹雪が烈しくテント設営はかなり困難であったが、午後5時には完成し、フィックスに行った2人も帰り、漸く落着くことができた。

尚、東とこれに同行した徳永先輩及び宍戸、李中はホテルに泊り、太田氏と大島先輩は奥穂まで我々と同行された後、涸沢へ下られた。

3日(快晴) CⅡ設営位置が悪く、起きて見ると奥の3人は動けない程埋められていた。掘出しや荷物の整理に手間どり10時出発する。CⅢへのポツカは1人約4貫、午後3時半北穂頂上に着く。山本、土屋は直ちに引返し、6時CⅡに帰着、CⅢは北穂頂上に快適に設営された。遂に攻撃態勢はととのつた訳である。一方、東には徳永先輩が同行して沢渡へ下り、大島先輩、宍戸、李中は中の湯附近までこれに同行し上高地に泊る。

4日(風雪) CⅢ、CⅡは停滞。宍戸、李中は大島先輩及び太田氏と共に天狗沢を登り、2日朝以来来たんであったCⅠを再建設して太田、大島両氏と別れ

てこれに入る。この頃よりCⅡの生活条件は次第に悪化しつつあった。設営場所が吹き溜りの底にあるためいくら除雪しても四方からさらさらと際限なく雪が滑り落ちてき、30分足らずでもと通りになった。おまけにCⅢ建設後持ち帰ってCⅡに置くはずの大シャベルをCⅡで日没に迫られたためキャンプ完成前に帰途についたので持って帰れず、十能の様な小シャベルでは除雪の能率はてんで問題にはならなかった。さらにもつと悪いことにはラヂウスが8日朝以来調子悪く、よく見るとハンダが破れ、其処からガソリンが吹き出していた。

5日(晴後風雪) CⅢ隊川島・尾藤は槍アタックに成功した。CⅢには食糧が4日分しかなかった。従つて3日目にアタックをすることは、その次の日には是が非でも撤収しなければならぬことになり、斯様な冒険は許されないから、2日日のこの日晴天にめぐまれたのは全く幸運であつた。

CⅡ(6・20) — 南岳(11・00) — 肩の小屋(12・40) — 大槍登頂(2・00) — 南岳(5・00) — 横尾本谷北壁直下(7・00)

(以下アタック隊川島の手記による)

尾藤も私も北穂から槍迄の稜線を一度も歩いたことがなかつたので、明るくなるまで待つてCⅢを出発し

た。キレットへの下りは昨日の新雪がふわりと乗つていてコンデションはよくなかつた。北穂小屋すぐ下のルンゼで突然、板状雪崩が発生し、私の足許からかなり大きな雪板が音もなく滑り落ちて行つた。少し下つてからアンザイレン、信州側を絡み乍ら下降を続けた。北壁はどこにあるのだろうか。我々は文献によつて北壁中のルンゼを下りれば横尾本谷に出られることを知つていた。どれがそのルンゼだろうか。突然、絶壁の上に出た。眼下には広いカールが見え、対岸には南岳が聳えていた。そしてその遙か向うには、我々が望んで止まない大槍が穂先を覗かせていた。

目的のルンゼは一目で分つた。針金を伝い、岩峯を巻いてルンゼ詰のコルに出ようとしたとき、尾藤が軽い叫び声を上げた。ピッケルのシャフトが折れたのである。このままアタックを続行すべきか、引返すべきかに暫く迷つた。引返せばもはや再びアタックするだけの余力は我々にはなかつた。

「行こう」。彼の決然たる声で、我々は又前進を始めた。ルンゼを真一文字に駆け下り、カールの底でザイルを解く。昨日の新雪で膝を没するラッセルである。ワカンはCⅠから先へは全然上げてなかつた。それで南岳から一つ手前のピークへのリッチを直登し、ここ

から稜線を辿った。南岳の登りも恐ろしく悪い処である。南岳からは広い稜線を中岳、大喰岳と処々ラッセルし乍らも快適に突走り、昼過ぎ槍岳の肩の小屋に着いた。大槍登頂は午後2時であった。

少し前から天候は悪化し始めていたので大急ぎで帰途についたが、大喰岳にかかる頃から風雪になった。中岳の下りでは下り口が分らず少し迷った。南岳手前のピーク辺りより風雪は烈しくなり、ルートを失うことが屢々で、全く磁石とカンだけが頼りであった。漸く南岳肩のコルに着いたときは既に夕闇が迫っていた。ルンゼを真一文字に下ってカールの底に出た。腰迄のラッセルである。日は全く暮れ、風雪は一向に衰えない。岩蔭で小憩の後、電灯を頼りにCⅡ迄強行しようとして北壁のルンゼに向ったが、往きにはなかった岩場にぶつかり前進困難となった。あきらめて少し引返し、岩を背にツエルトを被ってビバークする。小型のプリムスがあつたので、まずまず快適なビバークであった。

(手記中断)

アタック隊が苦斗を続けているとき、CⅡでは、はるかに陰気な生活が始まっていた。吹き溜りの底に埋もれて昼でもローソクをともしねばならない程暗いのは前日と変らないが、ラヂウスの調子はいよいよ悪く

なり、使用中はまるでピストンの如くポンプを押さねばならず、ケロシンの不完全燃焼による悪臭はテントに充満した。カバーのない土屋のシユラフはバリバリに凍り、腹の冷えた彼は腹痛を訴え出した。無理もない。CⅡではこの日から湯も飲めないようになっていた。昼過ぎ、CⅠの穴戸、空中が連絡に来たが、CⅡには彼等の湯をいやすだけの水すらなかった。

6日(風雪後晴) アタック隊CⅢに帰着する。
(アタック隊川島の手記続き)

完全に明るくなるのを待つて8時ツエルトから外に出る。未だ雪は止まないが、地形の判断は出来た。我々は北壁の直下、左寄りにビバークしていた。昨夜の岩場は北壁左端の岩稜だったわけである。腹迄のラッセルに苦しみつつ往路のルンゼを登る。稜線に出た途端に物凄い風雪に迎えられた。漸くの思いでCⅢに帰りついたときには、2人共指先を軽い凍傷にやられていた。(11時)

(手記終り)

CⅡでは夜が明けると、薄明りの中に殆んど身動きも出来ないでいるお互いの姿を見出した。ローソクをつけ、カチカチのフランスパンをかじりながら相談する。昨日の晴天にアタックが行われたことは間違いない

い。その成否はとにかく、CⅢの残余食糧より考えて次の晴天には撤収が行われるのは確実である。だから、なんとかこのテントであと2日程生活し得ないだろうかと思ひめぐらした。ラヂウスは殆んど使用不能になつてゐる。その上ラヂウスの故障のため、意外に多くのローソク、マツチを費したので、ローソクは1本、マツチは15本足らずになつてゐることを知つた。ここに至り、漸く奥穂小屋への避難を真剣に考え始めた。今CⅡを放棄することは、ポラー・システムの完全な破綻を意味する。しかし、それは安全性の限界を超えて行動する理由になるだろうか。2時間近くも考えたが、遂にCⅡ放棄を決定し、シュラフ、食糧等の必要品を持つて物凄い風雪の中を奥穂小屋に入った。

CⅠ隊、停滯。

7日(風雪) CⅡ、CⅠ隊共に停滯。CⅢ隊は、我々の計画はぎりぎりのもので、CⅢには食糧の余裕が余すところ1日分しかないことを考え、昼頃、薄日が差してきたのに力を得て、独力でCⅢの撤収を行つた(13時半出発)。気温低く何もかもバリバリに凍つていて、かなりの重荷であつた。涸沢槍にかかる頃より予想に反して再び風雪は烈しくなり、涸沢岳の登りではフィックスが深く雪に埋まり、ピッケルで掘り出す

のに半時間もかかつた。顔面は吹きつける雪に凍りつき、思考力も凍結したかの様に、前へ進むことだけ頭にあつた。最後のフィックス2本は放棄し、漸く涸沢岳に立つことができた。

ここで電灯を出し、何度もルートを誤りつつ辛うじて穂高小屋に辿り着いた(午後6時半)。そして、其処で彼らは始めてCⅡの破綻を知つたのである。それでも人数が5人に増すと少し陽気になつた。木村だけは、指先をかなり強い凍傷にやられ「痛い痛い」と云いながら、指を湯につけていた。

8日(快晴) 快晴だが風が強く気温も低い。CⅢ隊員は撤収を今日にすべきだつたと後悔したが、昨日のアルバイトのおかげで、今日は一部上高地まで撤収しようといふことにする。10時、川島、山本は前日残して来た涸沢岳のフィックスを取りに行く。その間に残る3名は、折から登つて来たCⅠ隊の2名と共に雪に埋もれたCⅡを撤収し、午後1時半CⅠに向つて出発した。皆、荷が重いので、悪場ではかなり緊張させられた。川島、山本は最後尾からフィックスを撤収しながら来たので知らなかつたが、ジャンダルムのトラバースで土屋が頭に落石を受け、危く滑落しそうになるといふ全くぞつとするような場面もあつた。フィッ

クスが細引3米程とピトン1本を残して、他は完全に撤収されたのは4時半、その頃先頭はすでにC Iに着いたが、C I撤収には時間が遅すぎるので、土屋、宍戸、木村は上高地に下り、他はC Iに泊った。一同やれやれといった気持だった。

9日(曇) 天気は悪いが、いやに暖い。荷物を大きく4つに分け、各人がそれを引きずったり転がしたりしながら天狗沢を下る。岳沢には上高地から3人が迎えに来ていた。

10日(雨) 装備の乾燥がすんだのは昼。春山の計画に必要なため全装備を7人が背負うと1人宛12貫程にもなった。午後2時、雨の中を上高地を出発、坂巻までと思ったが、中の湯に来たときは真暗であった。中の湯に着くと、すぐ湯に飛び込んだ。湯の中で歌をうたいながら今度の山行を回想した。

今冬の計画は文字通りぎりぎりのもので、そのために反省すると枚挙に遑のない程失敗があった。たしかに厳しさという点では過去に阪大山岳部が行った如何なる計画も及ばない程のものだろう。それだけに不完全な面もあったが、これをとにかくやり終らせたのだ。全く嬉しいことだった。こうして湯に入っている今でさえ、問題は山積している。第一、明日は1人当り12

貫の荷を沢渡まで下ろさなければならぬし、卒業試験は迫っている。先輩は勿論、そこら中に借金があるのだが、それにも拘らず自分も含めて、皆によくやったと拍手でもしてやりたい様なほのぼのとした気持が湯の香と共にお互いの間にたちこめていた。

(「時報」6号より)

1956年春山合宿 春の黒部下廊下横断について

宍戸 元

雪晴れの朝、新越乗越から見る景色は実にすばらしい。その中でも剣が、源次郎を中心に平蔵谷、長次郎谷、八ツ峰と、凸凹を激しく浮き出させ、これを男性に例えるなら、そのずつと下、黒部溪谷との間に座を占める内蔵之助平は清らかな乙女にも例えて良いだろう。その純白な肌を見せる乙女の前には右に大タテガビン、左に丸山の大岩壁のナイトが聳え立っている。私達はいつしかこの乙女の魅力、いや魔力の虜になっ

は、欣喜雀躍として“ふるさと”ともいうべき後立山へと、又再び大沢小屋に立戻つて来たのである。この行動は意識的に考え出されたというよりも、知らず知らずの間に期せずして私達お互の心に芽萌えた、もつとも自然な流れであり、誰の脳裡にも不思議さも疑問も生ずる余地はなかった。

かくて、私達は後立生活の間に記憶に残つた岩小屋沢岳北峯から西北に派生する長大な、しかもゆるやかな尾根（岩小屋沢岳支脈）に眼を注いだのである。更には又、岩小屋沢岳といえは、すぐに新越尾根に結びついていった。この尾根は既に逆縦走の際サポートに使用し、私達の自家菜籠中のものになつていた。次第に考えはまとまり、大沢小屋をベースとして新越尾根―岩小屋沢岳支脈―黒部下廊下―内蔵之助沢―同平という線が地図の上に書き込まれた。

54 年

54年春は、多数の卒業生を送り出すなど参加者の都合により、A隊（川島L、山本光、土屋、久保OB、田島OB）、B隊（尾藤L、宍戸、広橋、三枝、山本進、西川、岩永）に分け、A隊は岩小屋沢岳支脈の下降偵察を計画した。しかし、同支脈2100米にACを

出したが、計画不備と食糧不足のため、数日振りの快晴の日に撤収を余儀なくされた。肝心の黒部への下降路を発見出来ぬままに終つた。

B隊は3名の横断アタック隊を出す予定だったが、アタックメンバーの中に病氣、不参加が出るなどしたため、計画を放棄し、翌年に備えてA隊の果せなかつた偵察を続けることとした。そこで新越中尾根にAC（1800米）を出し新越沢を下降したが、黒部別山の壁を間近に望む所、黒部本流への落口も間もないと思われる地点で、止むなく滝のためには下降を断念し、岩小屋沢岳支脈末端から新越沢に出ている2本の平行ルンゼを登つた。このルンゼは主稜線からも一眼でそれと分る特徴的なもので、このルンゼの頭が支脈のほぼ末端であろうと思われる。私達はこの頭（ドーム、1800米）より下廊下唯一の泊場である榛木平を樹間にちらちらと見るに止まり、黒部本流の河原にさえ下り立ち得ずに引返した。

この54年の偵察の結果、私達は無雪期の中に徹底的に後立山から黒部への下降路の偵察、特に実際に下廊下から逆に後立山側に取付いて見る必要性を強く感じた。何故ならば、どこにルートをとるにしても下廊下右岸を形成している1300米から1800〜200

0米までの壁が常に問題となるからであった。

そこで夏の下廊下偵察となり、尾藤（一七）、小沢、坪井、東、空中が棒小屋沢より榛木平にはいり、そこにベースを設置することとなった。その時の尾藤の記録から引用すると、下廊下横断に関し、全く白紙に戻って考え始めた榛木平生活1週間の偵察活動の推移は、黒部下廊下横断に関する決定的なことは、先ず渡河自体は吊越の出来た現在、スノーブリッジを利用するよりは吊越が優先する事は問題にならず、その存在する場所であること。次は立山側に於いては内蔵之助沢を利用するのが最も容易である事から、此処に鳴沢小沢出合にて渡河し、内蔵之助沢に出る線に対して、後立から如何にしてこの黒部に下り立つかという点に焦点はしぼられた。勿論逃げ道の事も考慮に入れてである。即ち、鳴沢小沢出合及び鳴沢出合を春の横断点と想定したが、其処より内蔵之助沢出合までの部分及び吊越使用不能を考えると鳴沢出合の方が有利なので、一応鳴沢に下るルートを考えて。次に鳴沢両岸の尾根より鳴沢に下る斜面は、左岸の方が遙かに傾斜が少く、且つ左岸尾根末端の方が右岸より高度が低いので極めて条件が良い訳なのだが、右岸尾根末端まで登ってみると、何とか春の登降が出来るだろうということが分

つた。所が主稜線よりの状態を遠望すると、左岸尾根は赤沢岳より出発するもので、赤沢岳に近い部分是非常に傾斜が急で、而も鳴沢右岸をなす鳴沢尾根より遙かに長いものであった。恐らく春にはBCとなるであろう新越乗越の事を考え合せると、一層鳴沢尾限の方が良いと言えよう。かくして此処に新越乗越より鳴沢岳に登り、鳴沢尾根を下って、その末端より急斜面を鳴沢に下り、その出合の吊越を渡って、立山側は内蔵之助沢より内蔵之助平に至るルートを考えたと決めた。しかし、谷底とブッシュに視界を妨げられた偵察は、盲人の象を触るの図に等しかった。鳴沢尾根を登った時などは、その帰路に於いてさえ、どうかすると道を誤る位で、複雑な地形で、しかも5万分の1でも細部に至るまで正確であるとは云い切れない後立山黒部側において、とてもそのルートを正確且精細に把握することは至難の技だった。

そこで黒部渡渉点（鳴沢出合の吊越）を中心に全ルートをとレースすべく同年秋、偵察隊を2パーティ（立山側・宍戸L、佐谷、住吉OB、後立山側・坪井L、西川、戸井、田島OB）を出し、鳴沢尾根の全貌を知ること努めた。ここで私達は未知の土地を歩き且偵察することにより部分的に知るこの出来た知識

を一つのものに集結していくのが如何に興味あるものであるかということがわかり出して来た。それとともに、もはや登り尽された感がないでもない北アルプスに於ても、まだかかる未知の世界の存在することに驚き且喜ぶと同時に、冠松次郎氏・堀田小原氏など先人の努力に敬意を払わずにはいられなかった。

55 年

かような状態において55年春の黒部横断計画（宍戸CL、木村SL、坪井、西川、山本進、三枝、四方、岡田、村瀬、寺田、和田、尾藤OB、東OB）となった。この時は有力メンバーをフルに使えたため、大沢小屋をBHとし、内蔵之助平に最終キャンプを置き、剣をアタックしようという遠大な計画であった。だが、1200米という高度にある下廊下の積雪について若干予備知識に欠ける点がないでもなかった。ただ前年の春、新越沢を歩いて見た感じから、ピッケルもアイゼンも役に立たない、湿った重い雪であろうと推測した事は誤りではなかったのだが、同じ位の高度にある籠川谷の扇沢出合とか、弥陀ヶ原称名滝に比べて3000米の山々に囲まれた下廊下は前者に数倍する積雪量のあることは、全く予想外のことであった。そのた

め前年秋に補強工作を行っておいだ吊越は滑車が立山側で雪に埋まっていたため働かず、スケールの大きな下廊下にあつては他の渡渉の手段もなく、計画は失敗に終わったのである。

それに加えて下廊下は積雪は多いにもかかわらず、気温は矢張り1200米並の暖かさのため、湿った重い腐った雪は私達にいろいろと不愉快な思いをさせた。樹間、陽の当る場所、北斜面、ラビーン・ツークと雪の性質は千変万化の様相を示し、私達は片時もそれに注意を払わずにはいられない。更には雪崩とシユルンドの間から見られる怒濤に気を配らなければならぬ。換言すれば、岩と氷の稜線と同様、いやそれ以上の精神の集中を必要とするのである。即ち、かかる積雪期の谷歩きに於てこそ、自然は我々人間にもっともデリケートな神経を要求してくるのかもしれない。しかしその反面、春の黒部のようにどこを通つて帰るにしても3000米の稜線を越えなければならぬ。いわば井戸の底にあつて絶え間ない水の轟音を聞きながらも、それに動じないタフな神経を持ち合せていなければならぬのである。

56 年

下廊下について知るものを知った私達に、56年春には「成功」という一言がやって来るのである。前年の秋に前回の轍を踏まないよう滑車を後立山側に留置いたのが功を奏したのである。この横断ということにおいて、吊越の状態如何が成否の鍵を握るといつても全く過言ではないとつくづく思うのである。この年の春は参加者が少数のため、前回のような往復ということとは不可能であり、計画を大幅に縮小し、アタックが鳴沢出合より、内蔵之助沢、立山稜線、弥陀ヶ原と考えることになった。

〔行動報告〕

〈メンバー〉

アタック隊 (L) 宍戸元、(装) 西川元夫

(食) 岡田博司

サポート隊 C2 (L) 坪井圭之助、山田良平

広橋茂 (OB)

C1 大井孝和、一山幸代

田島 汎 (OB)

3月19日 宍戸、坪井、岡田、山田、大井、一山、

大阪発。

3月20日 雨 20年振りの大雪とかで、開拓部落の

はずれ辺りからラッセルがある。寄沢飯場泊り。

3月21日 晴 新越尾根と扇沢のほぼ中間、籠川東谷左岸の台地に関電の小屋が新築された。新越尾根を使うに際し、大沢小屋より万事都合がよいので此処をB日に変更した。去年、大出・大沢間の荷上げに貴重な5日間というものを浪費したため、今度はこの間だけ人夫を雇うことにした。私達は寄沢から大沢にはいるが、人夫は大出からトレースを伝って追いかけてさせることになっている。宍戸は人夫との打合せのため単身大出へ下る。

約束の人夫3名は既に大出にやって来ていた。大町案内人組合の規定で自分の個人装備(2貫)を含めて6貫しか担げないというのを、事情を説明し、10貫ずつ担がせた。やっと荷造りし始めたかと思うと、今度はこの荷物では関電小屋まで3日の行程だといひ出す止むなく日が暮れたら途中でデポし、荷を軽くして関電小屋にはいるという線で納得させる。1人の人夫においてはおカメラを肩にかけ一体何をやりに来たのかと詰問したくなる。白沢に大半の荷物をデポし6時頃到着した。

3月22日 晴 後発の田島OB、広橋OB、西川、10貫の荷を持って到着。前夜、夜汽車に揺られてきた

こと、昨日の人夫のことを考えながら、3人の労をねぎらう。先発隊は荷物の整理を完了する。

3月23日 晴 B H—C 1 荷上げ。C 1は例年雪洞を設営している主稜線の信州側に建設する予定で、取りあえずデポする。今春は沢では積雪が極めて多いにもかかわらず、稜線上では鳴沢岳、岩小屋沢岳辺りでは既に夏道が顔を出している。

3月24日 雨 停滞

3月25日 雨 停滞

3月26日 雨 停滞

3月27日 晴 全員C 1に入る。雪が少いたため9名はいる雪洞を作るのはいささか難渋する。いつもやる阪大方式をやめて、斜面と平行にトンネル式の雪洞を苦心して作る。少々時間がかかったが、快適なのが出来た。

3月28日 晴 雲海の上に針木、蓮華が朝日にかがやいている。一面の雲海が少しづつ薄らいで、先ず大沢が見え、次いで籠川が大町へと姿を露してくる。出発する日には雪で覆れていた大町が黒く見える。一条の煙がたなびいている。更に遠くは四阿、根木、浅間、八ヶ岳、富士山が雲の絨緞の上に頭を出している。カシャ、カシャとシャッターの音を響かせる。

黒部はと見ると、内蔵之助平、丸山、黒部別山、剣

と、昨年そのままに白と黒の縞模様を巡らして静まり返っている。アタック隊とC 2隊はC 2にはいり、C 1隊の田島OB、大井がサポートしてくれる。一山はC 1、C 2間は鳴沢岳を越える悪場がある上、昨年よりテント間隔を延した所でもあるし、帰りに時間を喰い、悪場を越える前に日が暮れた時のことを考え、キーパーをさせる。この様な快晴に1人雪洞にいるのはさぞ退屈でたまらないだろうが、彼女なりに能力に応じて山の味を満喫してくれば幸いである。

3月29日 雨 C 2停滞、C 1停滞。田島OBは会社の休暇がなくなるので、単身大町に下山。

3月30日 曇一時雨 C 2のテント場は、南は針葉樹の太木に囲まれているが、北は断崖をなして鳴沢小沢に落ち込み、左手から鹿島槍を始めとして後立山が遠望出来る、すこぶる見晴しの良い処である。西はといえば、剣は樹の陰で残念ながら見えないが、黒部別山と、その正面に別山沢を抱き、その下には下廊下の心臓部が続いている。ここに昨年は2ヶ所のスノーブリッジがかかっていたが、今年はずっかり埋って、ここでも大雪の年だということがはつきり理解させられる。しかし空はと仰げば、乳色を呈し、それが鹿島槍のあたりから次第に稜線に融け込んで山と空の境界が

不鮮明になってくるという、あまりはかばかしくない空模様である。西の空がいくらか明るいのに望みをかけて出発する。

アタック隊は個人装備、サポート隊の3名はアタック7日分の食糧装備をもって、1人平均3×4貫の至って軽い荷で鳴沢尾根を下降する。やがて私達は前衛華道のオブジェにでもなりそうな白骨樹をメルクマールに左折し、鳴沢右岸の急斜面へとルートをとって行く。例の湿った雪と岩、その間に永年の間に累積して出来た腐蝕土がはさまって、この両者が何の関連もなく混在しているこの斜面は昨年同様、私達に苦渋を与える場所である。ザイルフィックスして雪の上にはステップを切って一步一步慎重に下るが、そのステップも腐れ雪のためバカでかいのを作らないと物の役に立たない。馬蹄状の岩壁の上を右に2ピッチトラバースすると、この斜面から徐々に隆起し、次第に大きな尾根をなす、私達が末端尾根と呼ぶ尾根の起始部に到達する。ここには一昨年秋の偵察隊のつけた大きな鈍目が残っていたので、地点の確認に役立った。ここからはザイルの助けもはなれ、鳴沢へ一目散に降ればよい。午後1時、又1年振りに鳴沢出合にやって来た。対岸はと眺めれば水面から氷雪の壁がオーバーハング状

に切り立っている。その高さは30米もあるだろうか。その壁の上から2、3米のところ私達の頼りとする吊越のワイヤーが顔をのぞかせている。しかし私達が秋に補強した両岸にわたして置いたたぐり綱は見るも無慚に後立側で切断されて奔流の只中に垂れ下っているではないか。だが滑車はちゃんと手のとどく所に健在であるのは何よりだ。早速、渡河用に用意した補助ザイル(60米)を出して工学部の西川が技師長となって渡河工作にかかる。

落ちついてもう一度対岸を見ると、氷雪の壁の下には雪融けのためか濁流が渦を巻いて流れている。昨年は印象的だった雪帽子をかぶった流れの中央の岩も、ザイルフィックスをして水汲みにさえ降りられた河原もすっかり濁流にかくされている。更には氷雪の壁に黒くべつとりと印されている土砂の具合から一時の物凄い増水が推察され、ただただ自然の威力の大きなこと、その壮観さを想像して今更ながら驚くばかりである。

1時半、トップの坪井が10の瞳と1ケのレンズの注視のもと滑車をたぐって行く。立山側がやや低くなっているの思ったより楽に進んでいく。60米の補助ザイルの延び切った時に思わず両岸から万歳の声がある。私達の仲間にかわからぬこの感激のシーンを

記念すべく、折から降り出した雨にカメラのぬれるのもかまわず何回も何回もシャッターを切った。吊越は小さな滑車とそれに吊り下げられたブランコ腰掛を連想するような粗末な止り木から出来ている。それに身を委ねて急流の上を渡るのは決して心持良いものではないが、1人ずつ、それからリュックを1個1個と渡し、3時、私達は濁流をはさんで東と西に別れた。

（以後アタック隊の記録）

遂に降り出した雨にずくずくに濡れたアタック3名は吊越地点を後にした。濁流から灰色の空に吸い込まれている鳴沢の壁が鳴沢の左岸から下流へとつづき、本流の左に転ずるに沿って折れ込んで視界から去って行く。右手は黒々とした赤沢の壁が根元に雪を蓄え、それが堤になって立山側と同じふうには濁流につづく。

そして、この壁は鳴沢右岸へと移って行く。ここには赤沢尾根に鳴沢から登るわずかな、しかも唯一の可能性があるように思われるが、実際に取りついたら例の不安定な雪にさぞ悩まされることだろう。

私達は、本流左岸の雪の急斜面を内蔵之助沢の出合を目指してトラバースを開始した。雨のためか、気温の高いためか、恐らくその両方のためだろう、雪は水をたっぷり含んだ腐れ雪で、ピッケルを根元まで突き

さし、脚を前に出すと、足首と膝の中間位までもぐって、それでどうやら安心出来る足場になる。それを待って反対側の脚を出して同じ動作を繰り返していくわけだが、下が切り立った堤であり、その又下は折からの雨で水かさを増した黒部であつてみれば、いやでも慎重にしないわけにはいかない。若しスリップすれば遙か下流の仙人ダムで水死体として発見されるのがおちなのだから。

それでも上部がすぐ針葉樹の森林帯でもあり、デブリが余り出ていないのがせめてもの慰めであつた。鳴沢の出合から一転した所で1坪あまりの平坦な場所を見付けて小憩。ここにリュックを置き、部分的に出てくる夏道を発見し、例のいやな雪面から草付きを倒木沿いにアンザイレンして取りつく（半ピッチ）。更に1ピッチ同様な斜面を降り、今度はシュルンドの中を進んだ（ノンザイル）。この辺りから日が暮れ、一層行動に困難の度が増して来た。

しかし私達はどうしても出合に行かねばならなかつた。かかる雨で融けたり、くずれたりする雪の斜面は1時間でも通るのが遅ければ遅いだけ通りにくくなるので、一刻も早く通り抜けるのが賢明な方策であると思つたからだ。最後に、濁流に突き出た岩壁を、西川

の電灯に導かれてトラバース（1ピッチ）。ようやくにして7時に出合についた。夏道ならば棧道と河原を通って、たった30分ばかりの行程を正味3時間もかかってしまった。雨は止んだが、ずくずくに濡れた私達はふるえながら不二家のソフトドーナツを食べた。油で揚げたドーナツはかさかさせず、つめたくもなく、おいしいはずであるが、3つも食べる気がしなくなった。内蔵之助沢の左岸を少し登り、森林帯の最下端のいかかえもあるような針葉樹の根元をならしてテントを置いた。急斜面ではあるが、森林帯である上に積雪は案外少しし、その上用心に大木の根元を選んだので雪崩には絶対安全な場所であるが、やはり気分的に快適なテント場というものではなかった。それでもラジウスが快調な音をたてて湯がわく頃にはすっかり元気も回復して、胃袋が満足する頃には既に夜中の1時になっていた。

3月31日 曇 昨夜は夜半になってもクラストせず、天気も一向に冴えないので、明日は予定の停滞とばかりぐっすり寝込み、起きた時は既に10時をまわっていた。大阪での計画では、雪崩を避けるため内蔵之助沢は昼間は歩かず、快晴の日の夕方から行動をおこすことになっていた。然し実際には宵の口にはまだクラス

トせず、むしろ明け方から午前9時頃までに通過するのがもっとも安全であるように思われるので、それに沿って計画を変更した。

昨年も今年も鳴沢尾根を行動中に毎日幾度となく雪崩れていた丸山の大岩壁が1日中ずつと静まりかえっている。もはや今年は雪崩の大きなのは出尽したようだ。しかし丸山から出ているデブリは扇状に拡がって右岸を埋め尽し、行動中に見舞われたら絶対に避けられそうにない。夏道は右岸、即ちこのデブリの下にあるのだが、ここはかなりはつきりした台地を形成している。夏歩いたときはブツシユに邪魔されてよくわからなかった地形も今眼前にしっかりと焼きつけられる。デブリは扇の要に近い方で直角に横切った方が安全だし、それに第一、沢通しより楽そうなので、結局ほぼ夏道通り、つまり台地の上を通ることに決めた。岡田が朝食用にコーヒーをテルモスにつめるのを待つて午後4時就寝した。

4月1日 案の定、1時間寝坊したが、シユラフから顔だけ出してすするコーヒーとクラッカーの食事は意外に時間をかせぎ、午前4時に出発出来た。歩いてる間に東の方、新越乗越の方から空が白み出して来た。今や所をかえて後立の稜線を眺めているわけだが、

山肌は樹木が一面に出ていて、雪山のすばらしさが少しもない。籠川谷から見ると、まとまった美しさを見せる鳴沢岳も平面的で、いささかがっかりする。ただ赤沢が猫の耳を中心に所々雪のついた岩肌を見せて周囲を圧している。しかし内蔵之助谷というところは案に相違して実に明るい谷だ。もしこれで雪崩という危険を考えないでよいとしたら、私達を文句なく有頂天にさせてしまったに違いない。

かねてから問題だった内蔵之助平入口の滝も九分通り埋っていて簡単に通過し得た。もし積雪が少なくて出ていたにしろ右岸にルートをとれば容易に通過出来ると信じる。夏本流から梯子段乗越への分れ道の辺りで小休止、出合からたった1時間40分で来てしまった。余りあつけないのでびっくりする。流れが顔を出しているので、水を汲んで飲む。『うまい』。平の中央部のこのあたりは針葉樹・岳樺があり、どこを向いても雪崩の危険は全然考えられないが、特に丸山よりがテント設営には快適に思われた。晴れていれば朝日がさし染め、雪面がキラキラと輝いて絶好の景色を展開させるだろうに、どんより曇った空には望むべくもない。それどころか真砂、立山の稜線から空模様があやしくなつて来て、7時、遂に風と共に雪が降り出して来た。

稜線は時々すごい風の音をさせ吹雪いているようだし、幕営することに決めた。丸山の西2281米の三角点から出ている尾根をまわった所、三田平を小高くしたような台地の上である。

4月2日 快晴 吹雪の割に気温が高く、テントの中はすっかり水びたしになってしまった。こんな時にはナイロンテントほどみじめなものはない。つめたいシュラフの中でこの朝ほど待ち遠しかった朝はない。しかし、お蔭で待望の朝日に輝く内蔵之助と後立を見ることが出来た。飽かず眺めては時折シャッターを切つて3人共なかなか出発する気にはならなかった。

梯子段乗越を通らないで、直接、内蔵之助源頭のカールをつめ、2時半稜線に立つ。稜線間近かで鹿島槍を眺めながらラジウスで沸かした茶の味は何とも忘れがたい。稜線は風こそ強いが、弥陀ヶ原には天狗から室堂、一ノ越と一筋のシュプールが出て、スキーヤーたちが春スキーを楽しんでいるらしい。別山乗越には川島先輩が3人を待っていた。思いがけなかったことなので、びっくりする。当然のことではあるが、夜遅くまで四方山話に花が咲いた。小屋の屋根に吹き付ける風の音を子守歌に、乾いた蒲団はあるし、すばらしい睡眠をむさぼることができた。後は弥陀ヶ原を一目

散に下ればよいのだ。

〔時報〕 8号より

1959年春山合宿

黒部川上廊下積雪期初横断

山 本 信 樹

戦後、阪大山岳部が再建された当時、すでに篠田先生その他一部の人々が上廊下に目をつけていたのであるが、当時は主に後立山周辺で多く積雪期合宿が行われ、まだ稜線の行動に確信が持てなかつたので、この問題は長い間取上げられずにいた。しかし積雪期の目標が後立連峰において稜線を行動しうる段階に入ってくるに従い、黒部川の横断に手をつけ、数多くの準備と失敗が積み重ねられて、遂に昭和31年春、宍戸、西川、岡田の3氏によつて初めて鳴沢↓内蔵之助平↓立山と横断に成功し、これから次第に上廊下の方に焦点が移つて来た。そして31年冬期、木村裕リ―ダー他10数名が蒲田温泉―大野間沢―双六小屋―雲の平のコースをとつて薬師岳アタックの計画を実行したが、運悪

く延べ2週間以上にわたる吹雪のため失敗した。さらに2年して、33年冬期、岡田博司リ―ダー他7名が三俣小屋横にテントを出し、赤牛岳にアタックを試みた結果、6名のアタック隊が14時間のアルバイトで無事成功し、黒部上廊下横断計画が次の目標としてはつきり浮彫されたのである。

しかし、これを実際に行う段になると数多くの解決せねばならない問題に直面せざるをえなかつた。即ち、

1. 黒部川上廊下は谷が非常に深く、その両岸は非常に急傾斜、或は絶壁で、この登行は困難である。

2. 積雪期の黒部に関する限り、大正15年の西堀氏等の記録ぐらいしかない。

3. 陸測地図は不正確をきわめ、誤りが非常に多い。

4. 高度2200m以下では猛烈なブッシュである。

5. アプローチが長いのでテントが最低4張必要であり、テントを新しく2張作らねばならない。

6. 春は増水するのでスノーブリッジがかかっているかどうか不明である。

7. 東沢乗越附近及び黒岳周辺の難場をポツカ隊が事故を起こさずに通れるか否か。

8. 最後に、優秀なメンバーが20名以上必要である等である。

第1、2、3の問題を解くために、33年夏から延べ4パーティが赤牛岳の周辺に入った結果、11月に野田、米林、山本、田村、佐藤のパーティが赤牛岳頂上より尾根を下って上廊下のスゴ沢出合に下り、ここで50米の徒渉をして対岸に渡り、スゴ沢をつめてスゴ小屋にたどりついた。その結果、ブッシュは非常に密であるが、積雪期にはこれが完全に雪の下になるかも知れない事や、スノーブリッジが期待出来ない事、又スゴ沢には大きな滝が2つあるけれども春には雪崩のためにうまってしまいかも知れぬ等の事がわかり、このルートが唯一つの可能なルートである事がはっきりしたのである。

第5番目のテントの問題は33年12月に解決されたので、問題は如何にして円滑に赤牛岳まで荷物をボツカするかという事と、新人に稜線で荷物を担がせて良いかという問題が残された。しかし、これはやってみるより仕方がない事であった。

実際の行動計画は別表を見てもわかると思うが、B Hを烏帽子小屋、C Iを野口五郎岳、C IIを赤岳と黒岳の間、C IIIを赤牛岳、C IVを赤牛岳北西尾根上2200mのピークに出す。そして計画を3つの段階に分け、第1の段階ではB Hに荷物と人員を集結する事、

第2段でC IIを建設し、これにC II、C III、C IV、アタック用の必要物資を集め、新人を下山させる。そして最後の段階でC IVまでキャンプを延し、アタックを行う段取りであった。

「期間」 3月10日〜4月2日

「メンバー」 広橋（C I）、山本、兼清、野田、米林、平田、木村、大島、田井、大工原、玉井、笠松、田村、保母、谷垣、中村、錦田、村井、佐藤茂、広瀬、西垣、酒井、高橋、打出、長谷川、佐藤、五百蔵、前沢、黒木、金子、白井、宇野、丸尾

3月11日 平田、野田、佐藤茂、五百蔵、高橋、前沢の6名、濁小屋へ入る。

12日（晴） 6名全員28kgずつかついで7・20濁小屋出発。途中、尾根の取付に60m、尾根途中に1ヶ所ザイルフィックスを行いながら登り、16・05烏帽子小屋着。荷物が多すぎたので濁小屋へ少し残して行った。

13日（風雪） 停滞

14日（晴、強風） 野田、五百蔵、前沢は7・00出発し三ツ岳まで行ったが、強風のため歩けないので荷物をデポして引きかえす。平田、高橋、佐藤は濁小屋に残った荷を逆ボツカするため6・45出発、10・45濁小屋着、18・00烏帽子B H着。濁からの登りは風が強

く、非常に消耗したのでナイフリッチ上に荷物をデポして小屋へ逃げる。本隊大阪発。

15日(晴) 3名、ナイフリッチの荷物をBHへはこび込む。9・00、6名にてCIを建設せんと出発するが、10・30三ツ岳にて平田が不調になり、野口五郎まで入れそうにないので高橋と引返し、残り4名で三ツ岳風下側に雪洞を掘った。

先発及び米林、兼清、広橋、田村を除く21名の本隊は43〜47kgの荷をかついで濁小屋へ到着す。14・30〜15・30、木村、大島を取付の偵察に出し、残りの者は夕刻まで翌日の荷物のふり分けを行い、パッキングを完了す。

16日(快晴) 平田、高橋は前日ハンマーを忘れていったので三ツ岳まで渡しに行く。デポ地雪洞内の4名は9・10出発し、14・00野口五郎岳の次のピークの風下側に雪洞地点を決定した。ここに雪洞を掘り、テントは張らなかつた。一方、本隊は6・10濁小屋を出発し、2・30烏帽子小屋着。山本、大島、笠松、玉井は梱包と荷物整理のためにBHに泊まる。BHにて平田、高橋と計6名で荷物を石油缶につめ始め、CIVとアタック食を整理する。

17日(雪、気温高くガス濃し) CIから佐藤、野田が偵察に出たが、東沢乗越手前にて悪天のために引

きかえず。BHでは梱包を続行し、夕刻完了。濁小屋では黒木、丸尾以外17名が黒部第5発電所まで往復。7・46発、10・10帰る。

18日(晴) 野田、佐藤、CI8・45発、11・10東沢乗越着、15・00フィックス終了。16・50テント着。

東沢乗越では、尾根上は雪が深く積って岩がかくれているので悪場はない。しかし新雪が10cm程積っている。古いクラストした雪とのなじみが悪い。東沢乗越の登り大斜面に50米、その上の岩場に20米のフィックス。さらに赤岳との間に2ヶ所フィックスを行う。BHより山本、玉井、大島、高橋はCIへ各自18kgずつ荷上げを行う。6・30発、11・30CI着、15・00BH。

濁から19名は各自20kgずつかついで烏帽子へ入った。6・30発、14・00BH着。

19日(快晴) CIでは全員晴天停滞。CIIまでのフィックスが完了したし、皆、連日の行動で相当疲れていた。休日とする。

BHより山本、広瀬、村井、大工原、田井、玉井、谷垣、高橋、打出、保母がCIに入り、他の11名がこれをサポートした。午後はBHからCIに新しく雪洞を完成し、合せて15名の露営が可能になった。

BH6・45発、11・30CI着。12・30サポート隊発、

15・00 B 日着。

20日(雪・風強し) C I 停滞。B H、広橋、米林が入って活気づいた。B Hでは少々の雪をはねかえさんものとはばかりに荷上げを強行したが、三ツ岳まで到り強風のために断念し、荷物をデポして引きかえした。

21日(晴) 野田、村井、広瀬、佐藤及びこれをサポートする10名はC II建設のために8・05 C I 出発、9・10 東沢乗越、11・00 赤岳・黒岳間のテラス上にキャンプサイトを決定する。13・00 サポート隊帰る。

15・30 C I 着。C IIに入った4名及びサポート10名はそれぞれ18 kg ずつかついでなので、団体装備200 kgをC IIに入れる事が出来た。C IIにテントを張っている間に、野田、村井は黒岳のフィックスに出かけ、16・00 テントへ帰る。

B HからはC Iへボツカが入る。長谷川がC Iに入った。このボツカによってB HからC Iへの荷上げが全部終了す。先発隊が最初に作った雪洞は天井が沈降してきて床から天井まで60 cm ぐらいになり、水がポタポタ落ちてとても使えなくなつて放棄した。

22日(風雪) 停滞。朝になつてみると雪洞の入口が完全に埋まってしまつて、朝というのに夜中と変らない。雪洞入口の掘出に半日をつぶした。五百蔵が右

脇腹が痛むといつて昨晚は一睡もしていないというので、盲腸ではないかと心配したが、盲腸でもないようである。早くB Hと連絡をとりたいと思うが、天気が回復しないので連絡を出す事が出来ない。C I、C II、B Hとも停滞。

23日(風雪) 五百蔵は食欲を取りもどし、痛みも少し軽くなつたが、とても歩けない。B H、C I、C II 停滞。大島は痔がひどくなつて薬もきかない。

24日(小雪) 23日夕刻から天気は回復しはじめたので、21・00 保母、大工原がB Hへ連絡のため雪洞を出たが、強風のため危険を感じて引きかえして来た。それから一眠りして24日1・00 目がさめてみると、雪洞内が月明りでうす明るい。風もおさまつたので、保母、大工原を起こしてB Hからの応援を求めなるべく連絡に行つてもらふ。B H 4・30 着。

B Hでは連絡を受けるとすぐ、電報をうたせる為、丸尾を下山させ、続いて木村と他2名がショイコ、タシカをとり葛温泉へ行く。田村、西垣、白井、中村、酒井、佐藤毅、金子が五百蔵をC Iに下した。五百蔵は歩いて帰つた。

米林、広橋、平田の3名が新たにC Iに入つて、C Iにてボツカ計画表を再検討した。保母、大工原が学

校の進学手続きでは是非下山したいというので、稜線メ
ンバーが不足し、仕方なく新人の高橋、打出、谷垣を
起用する事に決定し、平田は調子が良くなればC II或
はC IIIに入ってもらう事にした。

赤牛手前に12・00、C IIの既設テントはそのままに
して、新テントをC IIIに持っていったが、悪天で予定
地まで行けずに赤牛手前に雪洞を掘って入る。

25日(快晴) BH↓C II田村、兼清。C Iにて各々
9 kgの荷を追加してC IIに入る。C I↓C II広橋、米
林、田井、谷垣、打出、高橋の計8名が入る。C I↑
C II山本、平田、大工原、玉井、保母、BH↑C I↑
C II長谷川、前沢。タイム8・00 C I発、9・15東沢
乗越、10・50 C II食事をとる。11・45帰り発、13・
30 C I着。

前日、五百蔵を下し、広橋、米林が入って計画をた
てなおしたあとの快晴で、意気ようようとボツカに出
発した。サポート隊は22×24 kgの荷物をかついでC II
に入り、残りの者は8×10 kgの荷をかついで上ったが、
新雪も少く快適に進んだ。サポート隊はC Iへ帰った
のが早かったので、夕暮まで雪洞を快適なように改装
したり干物をする。

26日(ガス) C Iでは午前中、視界わずか100

m足らずで、風が出れば危ない天気である。昼頃まで
様子を見ていたが、風が出て来ないので11・30出発準備
を始めた。平田の調子は相変わらず良くないので1人
C Iに残ってもらい、14・45出発。視界が悪いので1
00 mおきに竿を立てて行くが、稜線を歩いていても
雪庇の輪郭さえ見えなくなつたので、晴れるのを待つ
事1時間半、16・30再び出発。17・07東沢乗越。東沢
乗越をすぎてから又ガスが濃くなつてくる。かまわず
これをつきぬけて赤岳の上につく頃、夕焼の真紅がガ
ス染めて、我が家についたようにほつとした。西の
空は雲海が低く水平線を作り、赤岳には星がきらめく。
18・30 C II着。

山本と一緒に来た3名は天候が悪化したためC Iへ
帰るのを中止し、2つのテントに分れて入る。2個の
シュラフをつないで8人入り、V2テントに7名、
V1テントに5名寝たが、全く窮屈な一夜だった。

27日(快晴) 目ざまし時計が4・00ジリジリと鳴
った時は全くうらめしかった。4・00起床、玉井、大
工原、保母6・15 C Iへ帰るため出発、C IIの9名は
C IIIへ入る。広橋、米林は個人装備の上に8 kg、又サ
ポートの7名は20 kgの装備食糧を持ち、7・00出発。
黒岳のフィックスの上に新雪が20 cm程積っている。黒

岳で京大のパーティ9名が軽装で追いついて来てザイルフィックスの所で彼らに先に行ってもらった。黒岳周辺から赤牛までの稜線は一昨年、昨年の冬や秋に比べると、ずっと雪が多い。特に黒岳の周辺はずっと尾根通しにトレースが出来たので時間が大いに短縮出来た。黒岳の下りの大斜面はテカテカに凍りついていて新雪もほとんど乗っていない。ここに野田は50mのフィックスを設けていた。黒岳から赤牛までは晴れば問題のない尾根だ。

11・10 C III着、12・25 サポート出発、15・20 C II着
C IIIは赤牛岳頂上から北西尾根を50m下った所に建設してあった。

C IIIからは同日、野田、広瀬がC IV予定地のピーク2200mまで1時間で下り、約2時間の登りでC IIIに帰った。

C III 野田、広瀬、村井、佐藤、広橋、米林

C II 山本、田村、兼清、田井、打出、谷垣、高橋
(全員C IIIまでサポート)

C I 撤収

B H 平田、玉井、保母、大工原、笠松

28日(曇後快晴) B H 撤収す。C II 隊 8・10 発、10・55 C III着、14・30 C II着。

明け方は風が強かったが、8時頃には風が止み、C II、C III間2時間45分の新記録を立てた。C IIIで北側急斜面に雪洞を掘りながらふと下を見ると、C IVの黄色いテントが点のように見えるではないか。まだ正午を過ぎたばかりだ。馬鹿に早い。田村、打出、田井は食後、C IIへ引きかえした。テント設営がすみ、雪洞が完成する頃、P2の上に3人の黒い影が見えはじめた。雲が去って快晴となる。

C III 隊 8・00 出発、9・30 ピーク2200m着、テント設営、11・00 発、13・00 C III 帰着。米林、佐藤、村井の偵察隊兼サポート隊は広橋、野田、広瀬にサポートされてピーク2200(通称赤牛台地)にC IVを出した。その結果、予想に反して雪の状態もよく、C IVまではアイゼンのままで行ける見通しがついた。山本、広橋、兼清、野田、広瀬がテントに入り、谷垣、高橋は雪洞に入る。

29日(曇、強風) C IV 偵察隊米林、村井、佐藤は河原まで下りて橋をかけた。

C III 隊 4・00 起。8・20 出発、9・25 C IV 着、食事。10・15 出発、12・15 C III 帰着。

森林限界から下の心配していたブッシュはすっかり雪の下になり尾根の形がはつきりしているので、視界

さえよければまず間違える事はない。このあたりまで下ると雪がべとつき、それまではクラストしていてアイゼンがよくきいていた雪が、アイゼンの下に10cmも団子になる様な湿雪に変わって全く始末が悪い。しかし気温は高いから、風が強いにもかかわらず手袋がなくとも大して冷たく感じない。

CⅢの者は食糧の余裕が出来たので、入山以来初めての満腹感を味わった。合宿の成功を祈りつつ8・00寝る。30日(風雨強し) CⅡ、CⅢ、CⅣ停滞。29日夜シユラーフに入ってからだんだん風が強くなり、テントをバタバタと打つ音が聞え始め、夜半に入って猛烈な風がテントをひきちぎらばかりに横なぐりに吹いて、今にも裂けはせぬかと思われる程だ。朝起きてみると足元の低くなっている方が一面の水たまりで、シユラーフとキスリングを取去ってみると、深さ10cmたらずの池になっている。すぐに他の3名を起してシユラーフをまるめ、濡れては困るものを全部かたづけした。食後、寝床の一策としてグランドシートを10cmばかりT字型に裂いたら2、3分の間に水は消えた。終日雨又はみぞれが降り、風が強かった。

赤牛のCⅢは、雪庇の発達状況や吹きだまりの様子から、風が南西から吹くと判断して頂上の西側にテン

トを南北に張ったが、風は西から吹きあげてきたので真横にうける様になった。今後ここへテントを張る者は注意すべきである。CⅡ、CⅣのメンバーも難儀している事だろう。

31日(晴、風強し) CⅡ田村、打出が鷲羽岳まで往復す。CⅢ停滞、CⅣアタック出発。

CⅢにて。テントのベンチレーターから見える空の色が青に変った。思いはCⅣに走り、アタックはどうしているかと心配される。終日テントの雪かきや干物をしたり食糧、装備の整理をする。夕食が終ると気がそわそわし出す。29日にCⅣの者と決めて来た7・00、7・30、8・00のアタックとの連絡時刻がせまってくる。

連絡は、先ず7・00にアタックは連続5分間、懐中電灯で信号を発し、それをCⅢ、CⅣで確認すればただちに5分間連続点灯する事になっている。しかし昨日の天気のことを考えると、雪崩を避けて今晚スゴ沢を上る見込みが大きいから、おそらくまだ灯は見えないだろう。6・50各自ヘッドランプの明るさを確かめて外にとび出す。雲海がぐつと低く、日本海から西北へ水平線を作り、空との境目あたりがまだ夕日の赤みを残して赤く、葉師岳が黒々と前に立ちはだかり、鋭い輪廓がその黒さを目に焼きつける。右下には黒部第四

発電所の照明灯がはつきりしている。3分前、風がようやく身にしみて寒くなり出し首筋がぞくぞくする。

しかし、よく見るとスゴ沢の所だけうっすらと白くガスがかかっているのが見える。残念なるかな、これではうまくいかぬかも知れぬ、目の錯覚であろうか、スゴの頭へ続く尾根の中間に何かちらちらと見える様な気がする。7時1分前(私の時計で)、見よスゴ乗越あたりに今までなかった灯が見える。非常に明るい。富山の町の灯ではないか。いや、確かにアタツクの連中だ。夢中で電灯をつけ、スゴのコルの方へ向ける。

灯りはじつとして動かない。1分過ぎにC IVからの灯りがこちらに見えた。まずは成功だ。夢のような気がする。C IVとアタツクの灯りが一直線上に見え、C IVの灯りが何かを言っているように思われる。4人抱き合うようにして互に手を握り歓声をあげて、しばらくしてコルの灯が消えてからテントに入った。

4月1日 エイプリルフール(晴、無風)

C IV 12・00 撤収、C III 15・30 食事、16・00 C II 帰着
7・00。

アタツクの後の虚脱感があるのみ。雨の後であったが温度が下がったので雪は固かった。10・00 C IIの3名が連絡のためにC III到着。C IVの連中が帰ってくるの

を待っていたが、14・00になっても現れないので、高橋、広瀬と共に先に帰らした。山本、谷垣が迎えにP2まで下った所でC IVから兼清、村井、佐藤は重い荷にあえぎながら上ってきた。C IIIに付いた時は午後3時を過ぎていたが、天気がよいのでC IIまでがんばった。

4月2日(晴) 9・00 出発、烏帽子BH 16・00、濁小屋21・00。

フィックスザイルをはがしながらBHへ帰った。BHには10人用食糧3回分が缶につめて残されてあったのは全く嬉しかった。しかし翌日の天候が不安であったので、最後のがんばりを続け、濁についた時はフラフラであった。

後 記

合宿は結果から云えば成功した。又、大体予定通りの行動がとれた事は幸運であった。アタツクが出るまでは成否は五分五分であると思われたが、唯の一回の試みによつてうまく行ったのは、あつけないという言葉があてはまるかも知れない。これは明らかに良い条件がそろっていた為であろう。しかし少し反省して見る事がある。

先発隊は、計画表によれば本隊が追いつくまでにC

Ⅱを建設し終っていることになっては、実際には先発隊の装備が予想以上に多く、B Hへ入るために3日もかかり、おまけに平田が身体の調子を悪くしたので計画通り行動出来ず、その精神的負担は大きかったようだった。出来ればもう少し荷物を軽くする様に注意するとか、絶対確実の範囲内で行動出来る様に精神的な余裕を持てる様にすべきであった。

行動計画では、第一段階では尾根にも難しい所がないからというので停滞日数を少なく見積っていたが、予想以上に天気が悪くB Hの食糧は不足を極めた。それに反しCⅡ、CⅢ、CⅣでは食糧が半分以上余り、持って帰れないものを少なからず放棄したのである。従って全体として前半は食糧が不足し、後半では余ったのであるが、春の合宿では日があつにつれて天候が良くなる事を考慮すれば、合宿の停滞の取り方はほぼ一定で良い様である。

隊員については、はつきり云つて非常に残念でならなかった。というのは特に2年生の中堅部員が身体の不調や進学手続その他によつて5名もの多くの者がCⅡから先に入らなかつたのである。それ故、合宿を継続するためにはどうしても新人を登用せねばならなくなり、隊員の安全という点で大きなマイナスとなつた

事は動かせないのである。

以上、気のついた点のみについて述べたが、合宿がうまく行つたのは合宿に隊員全員が真面目に取りくんだことが最も大きな力となつたのだと思つてゐる。

(「時報」10号より)

一九六一年十一月・富士山遭難報告

酒井次郎

△はじめに▽

一九六一年十一月廿五日、我々は富士山で岳友堀井昭彦君を失つた。創立以来、無遭難という輝かしい伝統を遂に守り切る事ができなかった我々山岳部員一同は、亡き岳友の冥福を祈り、再び事故を起す事のない様尽さねばならない。

夏山シーズンに岡久、大川、打出と三つのスリッパ事故を起した後、我々は度重なる反省会を持ち、その原因を追求し、部長、先輩諸氏の注意を求め、決して犠牲者を出すまいと、今後の部のあり方を根本的に考え直した。その結果、僥倖に恵まれなくとも自力で成

しとげられる対象を選び、先人の歩んだ道をたどって、登山たるものを考え直し、且つ基礎から復習しなおそうとして、遠見尾根のポーターを冬山合宿に決定した。十一月初旬に冬山偵察、及び、春山合宿の為の荷上げを行った。

そして十一月下旬の連休を利用した、昨年行けなかった富士山への雪上訓練の為の山行がリーダー会で立案された。参加者が確定して十一月十六日の部会に、上級部員によって集められた参考資料・スライドによって、富士山の概念をつかみ、気象、地形、及び諸注意を検討した。チーフリーダーを含めた十四名のメンバー構成も整い、廿一日に最終打合せを行って、廿二日の夜行で大阪を出発した。

〔予定期間〕

十一月廿三日～十一月廿六日

〔参加者〕

酒井（リーダー・工四年）

前沢（工四）・梶本（工三）・山本（法三）

横尾（工二）・高田（経二）・笠原（法三）

桑原（工二）・吉川（理一）・牧野（理一）

豊坂（医二）・秋濃（基礎工一）

田井（OB）

堀井昭彦（工教・一）

〔経過報告〕

廿二日夜、大阪発。

廿三日（曇） 富士吉田より小型バスで富士山五合目迄入る。五・五合目から雪があった。七合目にテントを三張設営。午後、大沢でアイゼンを着用して登降訓練。ピッケルによる滑落停止の訓練に力を入れた。

廿四日（晴） 一名テントキーパーを残し、堀井君を含む十三名で、夏道より富士頂上を往復。雪は固くしまっておりアイゼンがよく利いた。午後から強風となる。

廿五日（快晴） 三名（L梶本）は大沢より山頂往復。他十名（L酒井。堀井君を含む）は八合目まで雪上訓練の予定で七時三十分テント発。大沢を通過って状態がよかつたので九合目に到達した。昼食後十一時廿分、下降にかゝった。夏道は風当りが強い為、ツバク口沢側を下り、八・五合目附近で再びツバク口沢を右岸から左岸に戻ろうとした。このルートは昨日通ったルートであった。十一時三十分、突風待避の姿勢から歩行に移る際、二年部員の間には堀井君は右足を滑らしてバランスを崩して滑落、二十米程滑ってピッケルによるストップ動作を行ったが、ピッケルから手が離れ

た為、そのまゝツバクロ沢下部へ滑落して行った。田井〇B、前沢は直ぐその後を追って下降した。酒井等は他のメンバーをテント地に誘導後、現地に急行。

十二時十分、前沢、田井は六台目ツバクロ沢下部で堀井君を発見。頭蓋骨々折、既に脈なし、直ちに人工呼吸を始めた。(人工呼吸は一時半まで行ったが、残念ながら効果はなかった)

十二時三十分、大町山の会の医師が通りかゝり、カンプル注射を行う。堀井君を安定した場所に移し、各人ヤッケ、セーターをぬいで保温に努めた。

十三時三十分、医師により死亡確認。小屋から戸板を運びシュラフに納めて、十四時より収容に移った。

十六時、五合目佐藤小屋に収容。

十七時三十分、下からの自動車到着。田井、酒井がつきそって富士吉田市の吉祥寺に納めた。夜になりテントは撤収困難の為、明朝撤収する事にした。吉祥寺にて、直ちに検死を受け安置。通夜。

二十六日 九時、御家族四名、及び大工原、西川〇B到着。対面、納棺、読経をしていた。だ。及び、葬儀については富士吉田市観光課の方に一切お世話になる。広瀬〇B、高橋、大阪より着。全員そろって市火葬場で十三時十五分たびを行った。十七時、富士吉田発。

二十七日 急行第二撰津で遺骨と共に帰阪。尚、残務整理の為二名富士吉田市に残り、残務整理を終えた夜、帰阪した。

廿八日 午後四時〜五時、自宅で葬儀を行い、午後六時から学生部会議室で事故処理、打合せ会を行った。

△反 省▽

十一月二十九日のリーダー会に於て、今度の事故についてあらゆる面から我々リーダーグループの非を反省した。先ず富士山に於ける事故反省の主問題点を日を追って取り上げて行く。

二十三日。

○小型バスに便乗した事は、雪上訓練を主課題とした山行であったので、時間をその目的に使う為であった。しかし結果的にみると、堀井君の場合は、純然たる素人をいきなり冬の稜線へ連れて上った事になる。

○アイゼン技術の練習を、ピッケルによる滑落停止の練習の前に行った事。当日は、アイゼンをつけてテント設営地まで来ていた為、アイゼンをはずして滑落停止の練習をする前にアイゼンをはいた登降を練習した。その場の雰囲気によって判断を左右された感じが強く、リーダーは小さな事柄にまで細心の注意を払っ

て、正当な判断をしなければならぬという事を全員強く反省しあつた。又、テント地の選定についても「団体行動の際は、最も弱い人の調子に合わせる」という原則を厳格に守つていれば、初めての人にアイゼンをつけさせてまで高所に上がらなくても、適切なテント地を選べたであらう。

二十四日。

○ザイルを使用して、コンティニアスで歩行する事は、我々上級部員でも、まだ習熟してないので、安全度をます物と断言する事が出来ないため、一応コンティニアスによる歩行を行つていない。しかし、今回の山行は雪上訓練を目的とした山行であつたから、リーダーズメンバーが状況判断をして、十分検討しあつた上でない限り、一年生を登頂させるべきではなかつた。

二十五日。

○昨日の経験で、富士山の強風を十分警戒し、他のパーティの事故を知つていたのであるから、より慎重に、パーティの能力を見極めた上で、雪上訓練を行うべきであつた。

○ピッケルによる滑落停止は、前日までの練習を見ていると一寸のスリップぐらいとめる事が出来るだろうと判断していたが、実際にはいざとなつたら夏山合

宿なり、これまで経験した人に比べて、格段の差が現れるという事を頭においておくべきであつた。

以上の主問題だけに限らず、最も強く反省しなければならぬ事は、部員の状況の把握・状況判断に対するリーダーズメンバーの認識がルーズである」という事であつた。現在まで、痛ましい犠牲者が出なかつたのは、全くの幸運であつたにすぎない。再びこの様な不幸を繰り返さないよう、先ずリーダー会のあり方を根本から再確認し、一年生の年間トレーニングの計画を再検討していく事を、全員心から誓ひあつた。それが、もはや山行をともしにする事の出来ない岳友への我々の使命である。

〔時報〕12号より〕

一九六三年春山合宿報告 日本海より五竜岳へ

横 尾 秀次郎

一九六一年に於る一連の遭難事故、しかも、一人の友を失つた、悲しむべき、苦しい時期を経験し、一つ

の大きな転機を我々は経験してきた。そして梶本リーダーの時期は、部の再建の第一歩であり、まず事故を起さないことを主眼に、地味で着実な運営が行われた。そして我々の時代には、それを如何に発展させるか、新しい方向へ向けるか、と云う大きな課題があった。

しかし、沈滞の気分は相変わらずぬげ切らず、春山計画も長く決らぬままであった。只、去年の春山での白馬岳以北の稜線、ないし白馬周辺、朝日岳東面等の地域の広いおらかな地形に心引かれた。又、阪大山の家が、去年の夏山の前半をポツカに費やしたかいあって、梅池に完成し、文句なしに冬山合宿は梅池の調査を兼ねて白馬周辺と決った。そこで春山も白馬周辺を更にトレースし、しめくりたい気持であった。

自分としては、まず高等な技術よりも、出来る限り広い地域を、雪の稜線を、確実に歩き得る能力を養うことが先決と考え、縦走形式を主体とする山行を考えた。そして、いくつもの案が出た。八方尾根―唐松―祖母谷―毛勝山、白馬―日本海、宇奈月―突坂山より後立山連峰へ等々の案が出たが、分散合宿は上級部員の不足から不可能と考え、一つの縦走パーティーで日本海岸の親不知より白鳥山―朝日岳―白馬岳―五竜岳迄の縦走を行い、新人を含むサポート隊が朝日岳へサ

ポートすることに決った。日本海より白馬岳へのトレースは恐らく初めての記録であろうと考えていた(白馬岳より日本海への縦走の記録はかなりある)。しかし、秋に白鳥山へ偵察に行き、そこで先年春に法政大学が同様の山行を行っていることを知り、少なからず失望した。しかし、蓮華温泉より朝日岳へサポートを出すこと、二年部員全員を縦走に参加させること、我部として純粋に縦走形式に依る合宿がはじめてであることの理由から、この計画を実行に移す事に決った。

たまたま此の冬に愛知大学の薬師岳遭難と云う空前の事件が起り、岳界のみならず世間から、大学山岳部のあり方に手痛い批判の声が起り、マスコミも手伝って一大センセーションを引起了。今春もし遭難を起す様な事があれば理由の如何に依らず結果は明らかである。それに何か重苦しい気分があった。勿論、遭難を起さぬ確信はあったが……。

更にOB、監督の間で、今後、春、冬の合宿にはOBが監督として参加し、リーダーグループを補佐する事を決めた。日本の冬山の様に気象、雪質の変化の激しい条件で、大学三年間で十分な知識が得られるとも思えず、年功者の参加により、適切な助言が得られ、危険も未然に防ぎ得ると考え、OBの参加が決った。

只、これを制度化した場合、年により長期の合宿に參加出来る〇Bの居ない場合もある。又、リーダーと〇Bとの間に妙な譲り合う気持があると、かえって危険でさえある場合もある。要は、平素から〇Bとの意見の疎通を盛んにし、極く自然な形で〇Bと現役とが共に部を運営して行ける雰囲気を作ることにあると思う。そうすると、現役の一人よがりもなくなるだろうし、現役の溢れる意気も理解してもらえよう。

さて、年度の計画での問題点は、1. サポート隊と縦走隊が朝日岳でいかうまく出会うか、2. サポート隊を樺池―天狗原―蓮華温泉―朝日岳と云う長いルートに用いること、3. 不帰の通過、4. 連絡方法の4点である。

1. については、サポート隊が早く着いた時は、そのまま三月末迄待機、縦走隊が早い場合は、三月二十五日迄朝日岳で待ち、蓮華温泉へ下り待機することに決めた。しかし、実際には待機の必要はなかったが、サポート隊の最終キャンプが長樺山にあった為、縦走隊があやうく看過する所であった。あの広大な地域での出合いは難しいことではあるが、出発前の最終的な打合せに徹底を欠いた為か、両隊のリーダーの言に違いがあったのは心残りである。2. については、

勿論、確実を期す意味から、樺池より白馬岳へサポートすべきであつたろうが、冬と全く同一のコースであり、変化に乏しいこと、一方、蓮華温泉へ下り朝日岳へのコースは、殆んど人も入らないコースで、しかも変化に富んでいて、スキー使用も可能と考え、日数に余裕を取つて、このコースを選んだ。結果的にはスキー使用の必要はなかったが、一年部員には、苦しく楽しい山行であつたと思える。3. の不帰の通過については、最近の記録では殆んど問題なく通過しているが、関学ルートが最も有望と思われた。しかし、異例の好天で、雪が少く、ほぼ夏道通しに殆んど不安なく通過出来た。4. の連絡方法としてトランシーバーを使用した。4. の連絡方法としてトランシーバーを使用した。4. の連絡方法としてトランシーバーを使用した。4. の連絡方法としてトランシーバーを使用した。4. の連絡方法としてトランシーバーを使用した。4. の連絡方法としてトランシーバーを使用した。

計画は、異例の好天が幸いし、思つた程の困難もなく予定より一週間も早く無事終了し得た。しかし、連絡の悪さが随所に見られるのは心残りであり、綿密な計画を更に心掛けることが大切である。

海拔〇米より出発し、徐々に高度を上げ、三〇〇〇米に迫る後立山連峯を踏破したが、特に、高度の変化に伴う雪質や景観の如実な変化を身をもって体験し得た。事実、長樺山迄の三日間はワッパによるラッセル

に終始した。二五〇〇米迄と、それ以上とは雪質は更に極端に変化した。この点、地形の構造の変化と共に特に興味深く感じた。

◇

縦走隊行動記録

桑原 昭 夫

「メンバー」横尾（Ｌ）、桑原、田村ＯＢ、吉川（前半）、秋濃（前半）、牧野（後半）、豊坂（後半）

三月十五日 昨日からの風邪で頭がどうもすつきりしない。田村ＯＢのお父さんに診てもらおう。「行くなと言つても行くのだから、行つて良い」と言われ、大急ぎで個人装備をまとめ、ルームに行く。ルームにはサポート隊の内張らしきものを見つけ、彼等に届ける事を考える。夜八時十分の汽車に乗り込む。篠田先生始めＯＢの方々の見送りを受け、大阪駅ではてんやわんや。汽車が動き出しザックを数えると、どうも少ない。まずは失敗の巻である。この時、広瀬ＯＢや梶本ＯＢには大変迷惑をかけた。京都駅で田村ＯＢはザックをさがしに大阪駅に。とにかく大変な出発だった。これからの山行では事故のない様注意しなくては、と横尾と話し合う。

三月十六日 五時五十分、市振着、九時四十五分発。

十一時五十分、上路役場着。気も重く、何か不安な我々の気持が、しとしと降る雨の中の田舎の駅での我々の様子とよく調和して、かえって心には安らぎと感じた。九時過ぎ、田村ＯＢ遅れて市振着。秋濃は、サポート隊の忘れたテントの内張を千国の猪股氏宅へ届け、あとから上路の役場に来る事とする。両がわに家を見、人を見ながら北海の漁村を通りぬける。

去年の秋、偵察に来た時、遊んでいた小さな子供に「どろぼうだ」と言われた事が僕の心に浮んで来る。彼等には、大きな荷を負い、きたならしい姿をした者は泥棒としか映らないのだろう。日本海が黒々と広く、実に雄大だ。雨が冷たく背中をはう。上路口から一本杉を経て上路、それから五竜へ向うのだ。足下を日本海の波が洗って白く輝いている。雨がなおも背中を這う。一本杉からは実に雄大に美しく白鳥山が見える。冷たい雨の中で親鳥が羽を拡げ、ひなをあたためている様に見える。ここから日本海ともお別れだ。上路の役場で茶を飲み、今日はここで宿ることにする。横尾、桑原、田村の三人で偵察に出る。結局、楯谷右岸の尾根が適当と思われたので昨年の偵察通りとする。この尾根筋に沿って高度七百米位登り、一日で十分白鳥山を越す確信を得て役場に引き返す。秋濃も千国から帰

つて来て、やっと縦走のメンバーもそろろう。

三月十七日 雨 停滞。出発しかけると雨が本降りになったので、役場にもう一日お世話になる。僕は歯が痛み、涙をぼろぼろ出し、信さんの名アンマの世話になる。田村OBも風邪気味、役場の上原さんと上路的の観光開発の可能性について話している。僕はそれどころではない。頭をかかえ、歯をおさえて寝ていた。「近くの町に土砂くずれがあった様だ。村の人も心配そうだ」。夕方より晴れてきた。明日は出発出来るぞ。

三月十八日 快晴 上路役場出発(3・50)―白鳥山(9・50)―ピーク2/3テント地(15・25)

今日の快晴にかせごととヘッドランプに導かれながら出発。昨日のトレースをたどり、後は尾根らしきところをよって坂田峠への稜線に出る。実にすばらしい。はるか犬ヶ岳を越えて、五輪山、朝日岳が眺められる。あの山の向うに僕らの仲間がいるのだ。去年の春、朝日岳を眺めたのと方向こそちがうが、いつもながら実に立派だ。しかし又ここからは実に遠く見える。ふり返ると春霞の下に日本海がにぶく光っている。白鳥山の頂上は真丸の雪面で、鳥の頭の様で印象的だ。白鳥山より犬ヶ岳への稜線は小さな上り下りが激しく、雪もくさっており、歩きづらい事、消耗する事、甚しい。

特に千二百九米峰より下りが急である。そこから約二百米の登りで小ピークに出る。白鳥山と犬ヶ岳の約三分の二の地点である。(我々はこれにP2/3と名づけたのだが)ここにテントを張る。

三月十九日 快晴 出発(5・50)―犬ヶ岳(9・00)―9・30―黒岩山手前へ

ここまではまったくワツパのみであったが、犬ヶ岳への登りは、雪の下が岩であるので、アイゼンワツパで登る。今にもずり落ちそうな雪の傾斜を、木をつかみながら上へ上へと犬ヶ岳の登り、これは今思い出しでも「しんどかった」事しか思い出せない。犬ヶ岳からの眺めは実に陰げんだ。黒岩平、犬ヶ岳から一本の帯、いや帯ならまだしもヂクザクにまがった一本の線となつてつながっている。

白鳥山と反対に犬ヶ岳頂上は狭く、ザツクを降すのも気をくばらねばならない。一瞬「パサ」と音がして何かが落ちて行つた。記録係の大川がくれた記録ノートがみるみる見えなくなつていった。大きな雪庇が信州側に出ている。北又からの吹き上げがさぞ強いのだろう。犬ヶ岳からの狭く細い稜線は一寸気味悪い。今までの記録では、このあたりはブッシュでいやな所のように書いてあつたが、今年は例年になく厚雪だつた為

か、うまいぐあいに雪庇が出ていて、その上を恐る恐る通る事が出来た。黒岩平のあたりにテントを張る。

その頃から北又の吹き上げははげしくなり、ブロックを作る。二千米との上と下、かくも風あたりがちがうのかとおどろく。ヘルマン・プールの八千米の上と下、それも同じ事なのかな。僕の山日記には犬ヶ岳を「こましやくれた子供」と書いてある。まさしく犬ヶ岳周辺はそんな感じのする山だ。

三月二十日 快晴 黒岩平テント(6・00) — 黒岩山(11・10) — 長梅山雪洞(14・15)

実に美しいながめだ。朝日岳が雄然としてすばらしい。午前中は、暑さと、しまりの悪い雪になやまされながら高度をかせぐ。黒岩山を過ぎて、すこしの所で涼しい風が吹き、雪質もかたくなる。長梅山手前で新しいトレースを見つけ、どこのパーティーだろう、ひよっとしたら偵察隊位のトレースか、などと話し合う。実の所、まさかサポート隊がすでに僕らを待っているとは思わなかった。長梅山と朝日のコルへ下りかける頃、ラストの横尾が後の方を向いて呼んでいる。遠くに真黒い顔をして真白い歯を出して牧野の笑顔が見える。まだ数日しか経たないのになつかしい。それにしてはサポート隊は実に良く頑張ってくれたのだ。

信州側の雪の吹き通しの所へ立派な雪洞が掘ってあった。黒い顔をした笠松OB、豊坂が出て来た。変な出会い方だったが、僕らの合宿の問題点だった、サポート隊と縦走隊のデイトは無事終った。

横尾の足が調子が悪いので、明日は停滞だ。サポート隊、縦走隊とも合宿前半の色々な話に花がさいて楽しい夜だった。それにしても予想以上のサポート隊の活躍にはおどろき、又感謝した。高田もさぞつかれただろう。大川のひげはそろそろ変色しただろうなどといういろいろ考え、なかなか眠れなかった。だが、合宿はまだまだこれからだ。

三月二十一日 快晴 停滞 今日のはのんびり公休日、ひねもすのたりのたりかな、まさしく春だ。

三月二十二日 快晴 長梅山雪洞(6・00) — 朝日岳 — 雪倉岳(11・00) — 三国境(16・10) — 白馬岳テント(17・10)

いよいよ後半の縦走だ。今まで一緒だった吉川、秋濃ともお別れだ。代って牧野、豊坂が加わる。雪倉まで笠松OBと吉川、秋濃にサポートをしてもらう。雪倉山頂でパッキングをしておし、いよいよ五人で行かねばならないのだ。ツシンと重いザックをかつき、今さらながらうんざりする。丁度その時、サポート隊の

高田始め全員で朝日へ来たのとトランシーバーで連絡が取れた。こちらも次々代り、話した。殿下始め新人も元氣そうだ。田村OBはトランシーバーが初めてらしく、気まり悪そうによそ行きの言葉でしゃべっている。山行きもモダン化されているのだ。鉢ヶ岳とのコルの小屋で昼食、無風快晴の中を暑さにあえぎながら登った。白馬の最後の登りはまったく死にものぐるいで歩いた。後から来た北大山岳部の連中が腰にスキーをつけ、サブでおいこして行く。実にしんどい一日だった。

三月二十三日 快晴 白馬岳テント(7・00)―鍵ヶ岳(10・00)―天狗小屋―天狗の頭雪洞

風も少し出て来て、やはり高度を感じる。杓子沢上部で北大山岳部がスキーを楽しんでいるのをうらめしように眺めつつ、時々吹いて来る風に重い荷の為か千鳥足になる。昨日かせいだ為、又、不帰I峯下のテント地があてにならない為、天狗の頭にドンという前もつての約束があるので、今日は昼食もゆっくり天狗の小屋で食う。うまさうな物もなさそうだ、どこも不景気だ。タバコも切れてきた。小屋で「しけもく」拾い。雪洞を天狗の頭の南西面に掘るが、雪は少なく、掘り過ぎると地面に出くわす。テントが有るのでテントを張れば良いのだが、早く着いたし、雪洞の方が撤収が

簡単なのと、風が吹いても僕らのテントよりあてになりそうだからだ。変な雲も出だしている。長い間持った晴天もぼつぼつ終りだ。

三月二十四日 地吹雪 停滞

三月二十五日 地吹雪 夕刻より少し明るくなる。

停滞

帰りしな、猪股氏宅で新聞で読んだのだが、なんと日光で70米位の強風だったとか。何と僕らの貧弱な雪洞は風で入口がけずられ、朝起きた時は入口近くに寝ていた僕と豊坂のシユラフの上に雪が積っていた。一日中雪洞拡張工事で忙しかった。スコップが折れ、ピッケルとコップフェルでの工事は広島弁で言うなら、実に「ヤネコイ」事だった。

三月二十六日 快晴 天狗の頭(6・30)―I峯とII峯のコル(9・00)―10・10)―II峯北峯(12・00)―唐松岳―大黒岳手前のコル(16・30)

実の所、この日の行動は問題があった。前もつての約束では、天狗の頭より一日、偵察の日を考えていた。出発前に家田OBに相談した時も、合宿前に不帰II峯は一度見ておき、それから合宿に入つてはという意見を出され、考えたが、メンバーと時間とが不足し実現されなかった。このような事情のもとに偵察もなく、一

日で通過するのは問題だが、我々は雪洞に今までの余りの食料全部をおき、Ⅱ峯が困難な様なら天狗の頭の雪洞に帰り、じっくり出なおす事を決め、出発した。昨日までの悪天はどこへやら、遠く剣岳、薬師岳、いや北アの全山がみえる。

不帰Ⅰ峯までは別に大した事もなく、Ⅰ、Ⅱ峯のコースにつく。ここは信大始め数パーティーでござったがえしていた。信州側の夏道とほとんど同じあたりには上手にトレースがつけてある。ここで、ほとんどⅡ峯は登攀可能な事がわかったので、資料を調べてる時よく出て来た関学ルートを横尾と僕で見に行った。十一月偵察の時良くわからなかった目印である二本の松の木も雪からよつきり出ているのですぐわかる。しかし、そこまで行くトラバースもあまり歩き良くない。あんな急な斜面を25kg以上もありそんなザックをかついで歩くなんて、考えただけでうんざりする。やはり関学ルートはサブ位なら雪の条件だけあやまらねば（僕等の通過したすぐ後日、表層雪崩が起きてたそうだ）大じょうぶだが、しかし又信州側も鶏卵状に雪が木の上ののつている。僕は他人のトレース通しに行ったか問題なかったが、初めにトレースをつけた人は大変だっただろう。

我々はいつも心配していた不帰Ⅱ峯の北峯でゆっくり昼食を食った。登る途中で出会った人にタバコを六本もらい五人の内タバコをすう者三人で分け、いかにも大切なもののように味わった。唐松までは夏道通しを難なく行った。唐松から大黒へは夏道も二つに分れてる所だが、下の方は雪がべつとりつき、上の方を僕はルートのとして選んだ。雪と岩がミックスしていて、思いがけない悪場だった。幸運な事に今日は一日中無風で助かったのだが、時々、「風が吹いたら、いやだろうな」と思われる様な所もあった。

三月二十七日 快晴 風強し

テント地（6・30）—五竜小屋—五竜岳（8・15）
8・25）—五竜小屋（9・00）—神城スキー場（13・00）—南小谷沓掛猪股氏宅（17・00）

時々、風に足をうばわれながら白岳へ。五竜小屋附近は多くの人でござったがえしていた。どいつもこいつもきたない顔したオッチェンばかり、メチ公には出会わない。五竜へ！ 僕ら合宿の最後の登りだ。時々、風で足を止めながら頂上へ。八峰キレットがみごとに切れている。記念写真を撮り、下山だ。山に行くのが楽しみで、それでいて下山の時の楽しさはその最高なのだ。山へは下りる為に登っているのか？と自問した

くなる。遠見尾根に入ると風は全く感じない。暑さのみだ。時々ふり返り鹿島檜北壁、五竜の東壁を見上げる。実に美しい。僕らの先輩がその美しさに引かれ足跡を残している。頭には下山の喜びと同時に次の山行の計画がねられる。

10時、トランシーバーをいじっていると岡久の声が聞えた。全くかすかに。彼等も元気らしい。11時にも一度、連絡に成功。高田の元気そうな声。彼も僕らの無事を喜んでくれ、意外に早いのもおどろいている様子だ。明日、猪股氏宅で落ち合う事にする。これでサポート隊とも連絡は取れた。あとは猪股氏宅へと神城から汽車で千国へ、千国から皆へとへとになって沓掛け。飯がたらふく食える。なんと五人で二升の米をたいらげた。こたつに入り、知らぬまに寝てしまう。

〔時報〕12号より。サポート隊の記録は省略)

一九六四年春山合宿

双六より針ノ木岳及び三俣新人合宿

(前半部略)

計画は、全員がワサビ平より鏡平を経て双六に至り、

ここから縦走隊が赤牛迄のサポート隊をつけて出発し、赤牛北東尾根より東沢出合に至り、黒部川を遡行して南沢北西尾根より口元の木挽沢出合に降りる支尾根に取付き、北西尾根を越してノ針木谷南沢出合に至り、ここより針ノ木西稜ジャンクション2100mより南沢出合に降りている尾根に取付き、西稜台地をACとして針ノ木をアタックし、帰路は同じルートをたどるという計画である。一方、双六に残った新人訓練を主眼とした隊は、サポートが帰り次第、三俣蓮華小屋に入り、ここをベースとして、鷲羽、黒部五郎、雲ノ平、黒部源流を広く歩き廻るという計画である。

まず双六までは、先発が弓折力ギ尾根の鏡平迄のルートを確認し、この力ギ尾根を使って、途中、鏡平に中継点をおき、双六小屋に入ることとした。双六小屋からは縦走隊6名がサポート4名と出発し、赤岳とワリモのコルに設営し、水晶にフィックスを行い、赤牛までサポートを受けた後、単独縦走を行う。ここに帰路のためのデポを行う。赤牛北東尾根の下りが、荷物が重いことから懸念されたが、実際にはワンポツ力で通過できた。

黒部川遡行は、最も懸念された。特に渡渉の問題と雪崩が心配されたが、雪崩に関しては古い記録である

が、三高の東沢生活のときの雪崩地図を参考にして考慮した。実際面での我々の積雪期の沢に対する知識が希薄なため、その記録の評価が困難であり、これを解決するため1日の偵察を設けることとした。しかし実際には往路では未だ底雪崩の危険はなかったし、かつ新雪雪崩も5分おきにアワとなって落ちる状態で、さして心配はいらなかった。渡渉も実際に行なってみると、水温は夏と殆んど変りがなく、十分に行うことができたが、帰路は増水により雪橋が流されたため、一ヶ所、腰位までの渡渉を強いられた。

次の問題点であった西稜は、関大と京大及び岡山大の記録を参考とした。アタックには4日間をあて、そのうち1日は偵察を行い、できたらそのまま頂上に向かう予定であった。秋の偵察から、ローソク岩付近はスバリ沢側を巻けそうであったが、実際にはスバリ沢側はかなり傾斜がきつく、かつ一部氷化していたのでルートとするのをみあわせ、完全にリッジ通しに行った。サポートはローソク岩までつけ、アタックの帰路を確保してもらうこととした。アタックは16時間を用意した。

三俣蓮華での合宿は比較的問題点が少なく、三俣蓮華以外にテントを出すか否かを考慮したが、人員構成

の関係でテントは出さないことと決めた。

(豊坂記)

△行動記録▽

(メンバー)

縦走隊Ⅱ牧野 (CL、S5) 高田 (E4) 播本 (T3) 大笹 (T2) 原 (S2) 石浜 (T2)

サポート隊Ⅱ吉川 (SL、S3) 中村 (S3) 栗原 (T2) 畑中 (M2)

新人合宿Ⅱ桑原 (T3) 木原 (T4) 豊坂 (M4)

以下新人Ⅱ佐々木、加藤、泉田、辻、出雲路、平岡、細川、渡部、糸井

〔行動概要〕

3月7日 夜、先発3名大阪発。

3月8日 蒲田で今田館の御主人に挨拶の後、ワサビ平まで入る。

3月9日 雪↓曇 2名が鏡平への登路偵察に向かう。

3月10日 晴 昨日の関大のラッセルに助けられて快調にとぼし、弓折までのルートを確認する。

出発7・20 | 鏡平への尾根取付き8・15 | 弓折11・15 | 帰着14・15

3月11日 曇 本隊入山。ワサビ平に4名を残して鏡平の途中までデポに向かう。前夜の雪にうすくなつたトレース通りに行く。非常にうまいルートを取っているが、なにせ大乗間沢のこと安心はできない。ところどころデブリが押し出している。尾根取付より2ピッチにデポ。尚、入山に際しては新穂高までトラックをチャーターした。

新穂高9・00—ワサビ平11・00—12・00—デポ地点14・00—ワサビ平15・30

3月12日 曇時々晴 ヘッドランプを付けてワサビ平を出発、鏡平に向かう。荷物はさほどない。尾根の登りでトレーニングの足りぬ新人がバテる。矢張り参加させるべきではなかったのか。ラッセルも軽く、簡単に鏡平に入る。すぐデポを回収。

ワサビ平5・00—鏡平11・00—デポ地13・00—鏡平15・00

3月13日 曇↓雪 弓折までは尾根通しに行く。大人数であることも手伝ってラッセルは軽い。弓折にかかるころから、槍、穂高の上にいやな感じのうす黒い雲がかかっている。水晶の方も吹雪いている様な感じで、荒れてきそうなので急ぐことにする。双六は相変わらず風が強い。雪が降り出したため、5名を双六に

残し、残りはずぐに鏡平に引き返す。双六小屋には関大が入っているので、我々は階下に入る。2名が三俣蓮華までのカンニングルトをさがしに行くが、ガスのため視界が利かず、途中で引き返す。

鏡平5・50—双六小屋9・40—鏡平10・40

3月14日 鏡平雪、双六雪時々晴 鏡平では終日雪のため停滞。双六の連中は3名が三俣蓮華まで散歩。矢張り尾根通しに行くのが最も良い様だ。双六のピクで鏡平の連中とトランシーバー交信。

3月15日 雪↓曇 一応、前線が通過し、後に大きな前線が控えているので、鏡平の連中は前線の間を利用して出発。新雪のためかなりきついラッセルとなる。弓折に立つ頃より晴れ間が見えてくる。アイゼンを利用してはやばやと双六に入る。双六の連中は風雪のため停滞。2名が樫沢に登り、本隊と一緒に。これで入山以来一週間目に全人員、物資とも双六に集結。まずは一安心。あとは天候の回復を待つのみ。小屋が急ににぎやかになり、話はずむ。

3月16日 風雪 停滞。ラジオは春一番の到来を告げている。真暗な穴ぐらで終日寝る。小屋の汚なさに驚く。確かに一部の岳人の良識を疑いたくなる。

3月17日 雪↓風雪 停滞。階上にいた関大が出発

したので階上に移る。相も変わらず荒れている。

3月18日 風雪 風雪が可成り弱くなったので出発とする。縦走隊6名、サポート隊8名が出発。双六の登りはかなりきついラッセルで、雪崩を危惧して休まず一直線に登る。風が強く、はやくも足指の先が痛んでくる。あとは強風の中をアイゼンを利かせて快調にとぼし三俣蓮華小屋に入る。昼食。ここでサポートの4名が引き返し、残り10名が更に共に向かう。鷺羽の登りにさしかかる頃より猛烈な地吹雪となり風に体をとられる。懸念していたワリモのピークも雪がついているため意外と簡単に通過し、赤岳とワリモのコルに設営する。

双六小屋6・45—鷺羽12・00—CS13・30

3月19日 快晴 風は少々強いが、昨日とうって変わって、ぬぐったような快晴。気温もマイナス12度と一流の冬山並みに。昨日の凍傷がひどい2名を残して8名が喜びいさんで出発。5名は水晶のフィックスに向かう。赤岳側は殆んど夏道通しのルートが可能だが、一ヶ所いやな雪のつまった小さなルンゼにフィックス。赤牛側は予想に反して全然氷化がみられず、簡単にフィックスする。針ノ木がはるかかたにかすんでいる。帰途は全く風がなくなり、写真をとりながらシャツ1

枚でのんびりと帰営する。三俣蓮華小屋のデポ回収に向かった5名も午前中に帰営。午後のはのんびりとエアマットの上でトカゲを楽しむ。

3月20日 風雪 停滞 終日、ブロック作りとホットケーキ作りに精出す。

3月21日 風雪 停滞 出発準備をするも、天気好転せず停滞する。サポート隊が赤牛を往復するのに10時間の好天を必要とすると判断し、無理をさける。風邪が流行り、全員が苦しうに咳込んでいる。夜、喉の痛みが激しく寝られない。

3月22日 風雪 停滞 朝は好天であったが、何となく怪しいので様子をみていると案の定、吹雪出し、沈とする。サポートをつけた縦走の難しさを感じる。そろそろ身体がなまってくるし、気持もイライラとしてくる。明日は好天でありますように。

3月23日 晴 5時に起床。直ぐにテントの入口をあけて天気を見る。雲の切れ目から星がみえる。思わずニタリと笑う。出発時にはかなりの強風となり、時折、地吹雪が襲うが、晴れ間が多いので気が楽である。人数が多いので水晶のフィックスに相当の時間を食う。風邪は未だ勢いを弱めず、全員咳こみながら歩を進める。喉がはれているので呼吸が苦しい。赤牛までは夏

道が出ているので、完全に夏道どうしに進む。サポーターは赤牛頂上より直ぐ引返す。赤牛頂上はガスに包まれ北東尾根が定かではない。昼食をとって様子を見るが、ワンポツカで行ける見通しもつき、天気も好転しないのでピークの北東尾根側に設営する。

C S 6・40—赤牛頂上11・40

3月24日 快晴 烏帽子のあたりが朝焼けで真赤に染まっているが、今日一日、天気は良さそうだ。荷物はかなり重いが天気が良い。頂上直下のヤセた急な尾根を慎重に下ると、すぐに岩峰につきあたるが、黒部側を簡単に巻く。以後は樹林帯迄は快適に駆け下るが、樹林帯に入った途端、股位迄はラッセルとなり、落とし穴も手伝って、下りながら荷が重いのでちよつときついが、全員いかにも幸福そうにハシヤギながら歩く。途中の岩稜も黒部側の急な斜面を使つて巻くことができた。東沢出合付近で京大のパーティーに会う。春こんな所をウロウロしているのは学生ぐらいのものだろう。互に自己紹介のあと、しばらく雑談をして別れる。東沢出合の橋を渡り、対岸に設営。原がさっそく岩魚釣りをするが収穫零。吉川名人の話だと、春は良く釣れるそうだが。

C S 6・40—東沢出合14・00

3月25日 雪 湿雪がシンシンと降る中を3名が黒部川の偵察に向かう。東沢出合より300m位で早くも渡渉を強いられるが、思った程冷くないので安心する。雪崩も、降った雪はずり落ちてしまし、底雪崩もまず心配ない。三高の東沢生活の時の記録と雪橋の位置まで一緒に、変わるようにならない自然に改めて驚かされた。関電の話では口元の木挽沢出合までダムの水が来ているということだったが、平付近までしか来ていない様だ。予定の尾根もはつきり確認できたので引き返す。往復16回の渡渉と湿雪の為、全身ビシヨ濡れでテントに入る。

C S 7・30—口元の木挽沢出合11・30—C S 13・30

3月26日 快晴↓雪 口元の木挽沢までは昨日の偵察通りのルートをととり、簡単に出合に着く。途中、播本が渡渉中にひっくり返つて全員大喜び。口元の木挽沢出合で昼食をとり、身仕度を整えて対岸の南沢北尾根の支尾根に取付く。初めから猛烈なラッセルで、1ピッチで50mも稼げない。先が思いやられる。しばらくするとラッセルは軽くなつたが、ザラメに変わり、下とのなじみがうすいため、トップの作つたトレースがたちまち崩れてしまう。まったく蟻地獄を登っている様で段々苛々してくる。石浜はどうとう本気になつ

て怒り出して大声で喚んでいる。ジャンクシオン19
20 mに着いた頃は雪も降り出し、既にフラフラであ
ったが全くホツとした感じ。明日も雪らしいし、この
調子では明日中に西稜台地まで行く事は無理であると
判断し、明日は南沢出合迄ということにする。

CS 7・05—口元の木挽沢出合10・30—11・45—ジ
ヤンクシオン16・30

3月27日 雪 最初の計画では1920 mのジャン
クシオンより更に200 m程登って尾根を使って針ノ
木谷に降りる予定であったが、ジャンクシオン直下の
沢がかなり安定してそうなので沢を下ることにする。
が、雪崩の心配は抜けず、一列になって真直ぐ一気に
駆け下りる。南沢出合に設営。

CS 8・45—南沢出合11・05

3月28日 曇 漸く西稜に取付く日である。が、雪
質が悪く傾斜もきつく、最初の50 mに1時間もかかり
頭にくることおびた。積雪量がもう少し多かつ
たら楽なのだろうが、意外に少ない。今日中にはどう
しても台地に着きたい一心で苛々しながら黙々と登る。
しかし、この苦勞も西稜台地が見え、その右手に針ノ
木を見るに及んで報われた感じがした。ついに来た。

CS 6・40—ジャンクシオン16・30

3月29日 晴↓雪 昨日の疲れが残っているため偵
察のみを目的として出発。直ぐに「隠砦」なるものに
ぶつかるが、右に左に急斜面を巻いて西稜台地に出る。
ピーナツ岩峰が非常に大きく見える。ピーナツの基部
まではリッジ通しに行けそうだが、時間を食いそうな
のでスバリ沢側を巻いて「樺ルンゼ」に入る。傾斜も
思った程なく、雪質も良いので、割合衆にピーナツの
基部に立つことができた。次の1ピッチは細い、ブツ
シュの出た急なリッジとなっているため10 m位のフイ
ツクスを行う。次の岩峰は可成り手強そう。どのル
ートも似たりよったりで、適切なルートを選びにくい。
雪が降り出したので引き返すことにする。明日は良い
天気になります様に。

CS 8・45—岩峰基部13・30—CS 15・00

3月30日 快晴 5時に叩き起こされる。寒い。思
わずニヤツとして入口を開く。星がキラキラ輝いてい
る。雲一つない快晴だ。播本と石浜が徹夜で靴を乾燥
させてくれていて、ますますやる気がでてる。アタ
ツクの牧野、原、サポートの高田、大笹は4時丁度、
ヘッドランプをつけて出発する。幸い昨日のラッセル
はクラストしており、ピッチがはかどる。ピーナツ岩
峰基部で夜があげる。清々しい。直ぐに岩峰に取付く。

最初、牧野が右寄りのルートを取るが、雪が非常に不安定で苦勞する。右側に5m程のトラバースをする所で一枚岩に阻まれる。全然ハーケンが打てない。ここを越せば以後は行けそうなのだが、1時間程頑張るがとうとう力尽きて高田と交代するが、高田もあきらめる。次いで大笹が左寄りのルートを試みる。5m程の垂直な雪壁に取付く。うまく乗越し、水平に10m程トラバースする。「行けるぞ」と声がかかる。ホツとして後に続くが、全くいやなルートだ。トラバース終了点の小さなテラスからは這松と雪のミックスした50度位の斜面を40m一杯に使って岩峰の頂上に立つ。まだこれからというのに既に9時で、時間的に相当ロスしている。岩峰からは2名づつがアンザイレンして雪と岩のミックスしたナイフリッジを忠実にたどる。スバリ側は雪面が氷化しているような感じで、かつ急傾斜なのでとても巻く気にはならない。針ノ木谷側も雪崩れそうでもちよつと使えない。

10時頃、ローソク岩の最後の岩峰に突きあたるが、岩がもろく大いに手こずる。細い岩稜を馬乗りになって進み、11時核心部を抜け出る。ここでサポートと別れる。アタックの2名は時間も遅いし、明日の天気が悪そうなので頂上までノンストップで行くことにして

すぐ出発する。

第1ギヤップの下りはスバリ沢側を少し巻いて底に達し、登りは真正面からブッシュを掴んで強引に登り切る。後はクラストした所を選びながら、ものも言わず、がむしやりに歩く。全くの快晴で猛烈な暑さだが、止まってヤツケを脱ぐ時間が惜しいので我慢する。

頂上直下の岩壁も真中を走るバンドを利用して難なく乗り切り、2時頂上に立つ。2人で握手を交わし、残り少ない煙草をわけ合つて喫む。たちまち30分が過ぎ、記念写真をとって駆け下る。第1ギヤップでテントとの通話でアタック成功を知らせる。ローソク岩にかかった時には既に6時になっていたが、明日の天気は怪しいというテントの意見で、サポートがつけてくれた捨て縄で時間を稼ぐ。朝登るのに苦勞した岩峰も2回のアップザイレンで降りきる。ここでちようどとつぷりと日が暮れ、ヘッドランプをつける。全くいいタイミングだ。あと30分遅かったら岩峰上でピヴァークを余儀なくされるところであった。後はテントまで踏み跡をたどりながらブラブラと歩く。東の空が薄明るくなっている。月の出らしい。8時過ぎテント帰着。16時間動いた割には全然疲れを感じない。明日は南沢出合までなので、夜遅く迄アタックの残った食糧を食

べながらダべる。良い一日であった。

アタックⅡCS 4・00—ピーナツ岩峰基部5・00—
岩峰上9・00—ローソク岩11・00—頂上14・05—14・
30—ローソク岩基部19・00—CS 20・30

サポートⅡローソク岩引返し点11・45—CS 18・30

3月31日 快晴↓晴 ラッセルの跡を辿る足も軽い。
天気は良いし、アタックは成功したし、荷物も軽くラ
ッセルもなく、かつまた加えて下りともなれば気分の
良い事限りなし。たちまち南沢出合に着く。針ノ木谷
のせせらぎを見ながらザックに腰かけていると、つく
づく幸福感を味わう。エッセンが乏しくなってきたの
がつらいが、明日はたらふく食えるだろう。

CS 9・00—南沢出合11・45

4月1日 晴↓雨 往路の沢は雪がしまり、ラッセルも苦にならない。黒部川は相当増水している様だ。底雪崩があちらこちらに発生してデブリが押し出している。往路に使った雪橋が崩れていたため渡渉回数が増える。東沢出合にテントを張る。デポのカンが一つ何か動物にやられたらしくカラップで全員ガツカリする。これで赤牛頂上までは、また腹を空かせて歩かねばならない。

CS 6・10—1920mジャンクション8・50—東

沢出合13・00

4月2日 晴 北東尾根はトレースがうき出ている。思ったより楽に行ける。2400m付近にドン。

CS 6・20—北東尾根2400m 14・20

4月3日 晴↓雨 真赤な朝焼けと共に歩き出す。赤牛頂上のデポは健在。水晶にかかる頃より雨がはげしくなり、赤岳とワリモのコルにテントを張る。夜、暴風雨となりシュラフに池ができる。

CS 6・00—赤牛7・50—CS 14・00

4月4日 雨↓晴 強風と雨はまだおさまっていない。石油缶には半分位水がたまり、昨夜の雨が激しかったことがわかる。午後から晴れたので干し物に大わらわ。

4月5日 快晴 一昨日、昨日の雨で地肌が露出し、全く情ない限りの雪山である。鷺羽の頂上で三俣の連中が双六へ向かっているのが見える。三俣蓮華小屋で吉川の伝言あり、連中は今日ワサビ平まで撤収するとの事。我々も急いで追いつこうと、まずは腹ごしらえとエッセンにとびつくが、あまり多いので却って食欲減退する。双六小屋でサボって暗くなつてからワサビ平に向かう。深夜、ワサビ平の小屋に入る。

CS 6・00—三俣7・40—9・00—双六11・00—

18・30—ワサビ平23・00

(時報13号より。三俣蓮華パーティーの報告は省略)

1976年冬山合宿

劔岳北方稜線

〔期間〕 12月21日～1月7日

〔参加者〕 佐野(L)、住田、明神、山口

12月22日 曇のち雨 馬場島出発(11・20) — ブナクラ谷出合(13・05) — 赤谷尾根取付きCS(14・05) — 1、260m地点デポ(15・00～16・50)

赤谷尾根には10日に専修大学が入山した後、どこも入山していかないとのことで、トレースは全くない。早月尾根取付き直前よりワカンをつけ、左に進路をとる。ラッセルは大したことはない。左に曲がるのが遅すぎた為、5m位のシリセードで道に降りた他は順調に進む。取付きは11月に赤旗を打った所(取入口100m手前)から台地上の所へ入り、一番右端の尾根である(赤旗が多く打ってある)。最初の急登をシングルポツカで登るのは時間的に無理とみて、ダブルをやることにし、今日は取付き手前に設営。半分以上の荷物を

1、260m地点迄デポする。途中、目の前に黒い動く物を見つけ、熊かと思ったが、カモシカだった。テントに帰った頃から雨が降り出し、全員シュラフはビショ濡れ。前途多難の様相を呈する。

12月23日 雪のち曇 出発(7・05) — デポ回収(8・15～8・45) — 1、563mのピーク(10・43) — 1、863mのピーク(13・30) — デポ確認(1、950m) — 1、970m付近CS(14・35) — デポ回収(15・35～15・45)

昨日夜からの雨で濡れネズミで出発。気分はさえない。それでも積雪が少ないので順調にとぼす。昨日のデポを回収し、一気に1、563mのピークに着く。全くあつけない。時間も早いので行ける所まで行くことにして先を急ぐ。途中1、750m手前がナイフ状になっていて小さい雪庇が白萩側に出ていた。又1、863mのピークへの登り手前で少しナイフ状になってはいるが大したことはない。ラッセルは平均して膝位で、馬場島から3日でデポ地点(1、950m)到着という計画が嘘の様である。デポを確認し、少し先の雪の吹きだまつた所に設営。この頃よりガスが晴れてきて夜には満天の星となる。デポ回収し内容を確かめ、9日分持つて出発することにする。残り4日分は

赤谷頂上にデポすることにして再びバックする。この結果、大窓最終到着日は12月27日となる。

12月24日 曇のち雪 出発(7・50) — 赤谷山(9・25) — 9・45) — CS(10・45) — 赤谷山(12・00) — デポ(12・15) — 出発(12・45) — 白萩山(13・30) — 赤兀手前のコルCS(13・45)

計画通り、赤谷山迄はダブルをする。朝、テントから出ると、剣本峰はガスに見え隠れしながらも、我々に黒々とした姿で迫ってきた。いよいよこれからが勝負である。出発時、山口のアイゼンが装着不能で、かなり出発が遅れた。最初の赤谷山への登りで3人パーティーに会ったが、これは専修大のデポ回収隊と分かる。赤谷山の登りは急ではあるが、雪質が良かったのでほとんど心配はなかった。ただ戻る際ルートをはずす可能性があるので赤旗をベタ打ちにする。赤谷山には専修大のベースがあった。その近くに4日分の食糧とガソリンをデポして先に進む。途中、帰途につく専修大アタックパーティーに会ったが、これから先、小窓迄、人の姿を全く見ないことになるとは全く思いもよらなかつた。山口の調子が悪かつたのと、風が強いことを考えに入れ、今日は白萩山の先のコルで泊ることにする。夕方、馬場島に現在位置を知らせてもらう

よう、後発隊に伝言を頼む。

12月25日 雪 出発(8・45) — フィックス完了(11・30) — 赤兀CS(12・15)

昨日12・00の天気図では日本海に低気圧が発生していた。この低気圧に吹き込む南よりの風で湿雪になったのだろう。ヤツケ、オーバースポンはびしょ濡れである。赤兀、白兀間の稜線で前線通過になるのを恐れた。今日は赤兀にテントを設営することにする。明神と住田は赤兀から先1P、フィックスする。テントに入つて前線通過を待ったが、一向にその様子はなく、天気図をとると、まだ日本海にいる。速度が非常に遅い。全くいやになつてしまう。

12月26日 雪 出発(6・35) — 白兀手前のコル(11・20) — 白兀(13・25) — CS

風は昨日とあまり変わらない。前線は通過したはずであり、その割に風が強くないので出発することにす。明神と住田で昨日フィックスした先1Pをフィックスし、その間、佐野と山口で荷物を運ぶ。この先、2人パーティー交互にフィックスと歩荷をやることにする。白兀迄は全くリッジ通しで雪底には用心しななければならぬ。白兀手前のコルから風が強くなり始め、視界は2、3mもない位になる。この時が本当の前線

通過であったことがあとで分かる。低気圧はもののみごとくに我々を裏切ったのである。このコルからの登りは急な雪壁で、フィックスの際、山口が雪崩にあり5m程流されたが、大事には至らなかった。雪壁の登りは予想以上に時間を食い、このため全員手に凍傷を負うはめになる。白兀の頂上にテントをはり、少し下へルンゼ状の所をザイルを使って偵察したが、ルートははつきりしなかった。早月隊は避難小屋に幕営とのことであつた。

12月27日 雪 停滞 4・30に起床したが、風が強く視界が全くない為、9・15の天気図をとる迄待機する。天気図は冬型を示しており、回復の可能性は全くない。この為、終日停滞と決定。

12月28日 雪 偵察出発(10・00)―帰幕(10・30)―偵察出発(13・30)―大窓へのルンゼ上部―帰幕(16・30)

朝起きると、風は弱い、視界は全くない。ルートがはつきりしないので、出発は見合わせ、天候の状態を見て偵察兼フィックスをすることに。午前中、一回偵察に出たものの、昨日と同じルンゼを1ピッチ下っただけ(150×200m)で引き返す。午後から視界が開けてきたので、佐野と明神が再び出る。足

元から崩れていく雪崩が何度もあつた。大窓への下り口のルンゼ迄行つて引き返す途中、3ピッチ、フィックスをしたが、ルンゼに入る迄、もう2ピッチ、フィックスが必要である。

12月29日 雪のち曇のち晴 起床(3・05)―ツェルト内で待機―出発(8・10)―白兀に戻る(8・30)―設営(9・30)―再び出発(14・00)―大窓(20・10)

視界は数mだったが、昨日フィックス工作をしていたので出発する。しかし視界の悪さで時間がかりすぎるようなので、再び白兀頂上にテントを張り直す。

ところが、昼過ぎから明るくなり始め、ラジオも冬型の小康状態と言っていたので、急遽、大窓へ向けて出発することにし、急いで撤収にとりかかった。フィックスが比較的連続し、中間支点も少なかった為、通過に手間取り、昨日の偵察地点へ着く頃にはすでに暗くなっていた。しかし天気は良く、上弦の月明りのもとヘッドランプをつけて大窓へと下る。途中、剣のシルエットが星夜に浮かんでいた。大窓は穴だらけで、非常に歩きづらい所である。富山の町の灯がキラキラと輝いて見え、我々の疲れをいやしてくれた。

12月30日 雪 出発(10・00)―大窓から1つ目のピーク(13・40)―CS

赤谷山に戻る期限は過ぎていたものの、白兀―大窓という考えで前進することにする。これは必ずしも当を得た判断とは言い難いが、ここ迄来た以上、少しでも足を延ばしたいという気持ちの方が作用したためであろう。昨日とはうって変わって再び天候は荒れ模様となる。9・15の天気図を取り、出発を決めるが、若干の不安を伴う。大窓から最初のピークに着く時間で判断することにし、休みなしで登る。途中、登り口に1ヶ所フィックス30mを要しただけで、適度にクラストした急な登りを懸命に登った。予想以上に時間を消費し、池ノ平山のデボ確認に出ようとしたものの、時間的、肉体的に不可能とみて中止、このピークに泊ることにする。食糧はあと4日分しかなく、2/3ずつ消費することにして2日分を浮かす。今日を含めて6日分あれば、明日池ノ平山へ向かい、デボがない場合でもベミカンと合わせれば赤谷山へ戻ることは可能であるという判断である。従って明日前進できなければ戻りしかない。

- 12月31日 雪 出発(8・50)―ローソク岩手前(9・50)―大窓の頭手前のコル(12・30)―大窓の頭(13・15)―デボ確認(17・10)―池ノ平山頂上直下(17・50)

朝起きると依然として雪である。しばらくテント内で待機したが、意を決して池ノ平山へ向かう。ローソク岩迄で1ヶ所きわどいトラバースが5m程あったが、他は順調に行く。ローソク岩は小黒部谷側を巻くが、最初、下に回り込んだ為、雪に下手をさえぎられ、結局、岩壁に雪がくっついていて不安定な所をトラバースする。残置ハーケンがあり、一応ここがルートであることが分かる。多少、時間ロスがあったが、核心部の一つを順調に越せたのはよかった。池ノ平山最後の登りに時間を食いそうだったので、できるだけノンゼイルで行く。途中、大窓の頭からの下りに2ピッチザイルを出した。最後のフィックス地点に到着。この頃より西よりの風が強くなり、息をするのも苦しい程となる。2ピッチでフィックスは終了したが、デボを確認した頃には既にあたりは薄暗くなっていた。結局、池ノ平山直下のCSに全員が到着した時には、あたりは真暗、散々な大晦日となった。ザイルは夜間のため回収を見合わせ、明日天候が回復したら回収することにして、紅白歌合戦を聞きながら1976年最後の日を送った。

- 1月1日 雪 沈殿 今年最初の朝は吹雪である。昨日夕方の交信がトランシーバーの凍結でできず、今朝は寝過ごして再び交信ができない。早月隊の行動が

気になるところである。早々に沈殿と決め、朝からデポの整理に当たる。

1月2日 雪 出発(9・00) — フィックス回収の後帰幕(10・00) — 出発(11・25) — フィックスをして帰幕(15・30)

今日も雪。しかし昨夜からの風はおさまって行動はできそうである。佐野の体調がすぐれず、行動不能の為、明神、住田でフィックス回収、それに山口を加えて小窓迄のフィックスを行なう。小窓は6人天1張があつたとのこと。どこからのパーティーだろうか。

1月3日 雪 出発(7・00) — 設営開始(8・00) — 設営終了(9・30)

朝の交信で、早月尾根のフィックスに関して確認する。早月隊は今日で下山、我々もこんな生活とできるものならおさらばしたい気分である。一応撤収して外に出るが、山口のアイゼン装着に手間取り、午後より天候の崩れる恐れもあつたので、出発を取りやめ、再び設営する(2日分を池ノ平山にデポする)。夜22・30頃より猛吹雪。生きた心地はしなかつた。

1月4日 雪のち曇 出発(11・30) — 小窓(13・20) — 小窓を少し登つた所のCS(13・40) — 設営完了(15・00)

一旦起きるが 風が収まつておらず、再び寝る。9・15の天気図を取り、ラジオの放送で、午後から冬型は小康状態になるとのこと、小窓迄は下ることにする。フィックスがしてあるので順調に下る。小窓には明大の4人パーティーが幕営している。北仙人尾根から入山したとのことで、5日間天気待ちをしているとか。久しぶりに人の顔をみる。天気が良いので先に行きたい気持ちもあるが、三ノ窓迄はテント場がないということもあり、結局、小窓に設営する。小窓からは久しぶりに赤谷山が望まれた。

1月5日 雪 出発(6・30) — 小窓尾根分岐(8・50) — 小窓王トラバース手前(10・35) — 三ノ窓(12・00) — 池ノ谷乗越(13・05) — 13・15 — 長次郎のCOL(15・05) — 雪洞に入る(15・35)

いよいよ三ノ窓入りである。朝、暗いうちから出発する。表層雪崩の危険も去つてはいないが、強硬に突破する。腰迄のラッセルで、非常にしんどいアルパイトであったが、休みなしに明大パーティーと交互に登る。マツチ箱のCOLへの下りで30mフィックスしたが、実際問題としてここはフィックスの必要なし。三ノ窓で1ヶ所フィックスの必要な登りがあつたが、明大のトレースがあつたので、それに続く。小窓王のトラバ

ースはザイル3本を結び1000mのフィックス、三ノ窓でデポ確認をしたが、残り日数の少ないこともあり、デポを放棄して先に進む。長次郎のコレ返は全くノンザイル、池ノ谷ガリーはクラストしていて雪崩の危険はない。池ノ谷乗越からの登りはルンゼをつめる。後は稜線を忠実にたどって長次郎のコレへ。途中、佐野がシユルンドに落ちかけ、ザイルで引き上げる。長次郎のコレで雪洞を見つけ、撤収時間短縮のため、これに入る。夕方、頂上にいる明大パーティーに中継してもらい、伝蔵小屋に現状と今後の行動予定を伝えてもらう。

1日6日 雪のち曇 出発(7・30)―劔頂上(9・30)―9・45)―中尾根に迷いこんだ事を知る(12・05)―早月尾根に戻る(13・05)―2、800m(13・50)―2、600m手前のコレ(14・50)―2、450m付近のCS(16・05)

雪洞生活になれていない為、結局、撤収にテントと同じ位かかる。長次郎のコレからの登りは左の雪壁を登るが、胸までのラッセルで雪崩の危険を感じながら必死で登る。頂上で昨晚、明大パーティーが使用したと思われる雪洞で休憩。全く「感激」という感情はわいてこない。まだ早月の下りという気を抜けない所が残っているだけに気は重い。降りには赤旗がベタ打ち

で間違うことはない。残置フィックスを頼りに慎重に降りる。カニのはさみを過ぎて獅子頭にかかる途中で、視界が2m位だったこともあって、中尾根に迷い込み、時間を大幅にロスする。この間、明神がスリップしたが、事無きを得た。早月尾根に戻ってからは順調なペースで降りる。今日中に安全圏に入りたいという気持ちから休みをあまりとらなかつた為、皆の疲労は極限に達する。2、450m付近で山口がバランスを崩し、5m程スリップしたので、これ以上先に進むのを諦め、小さなコレに幕営する。

1月7日 雪のち曇 出発(8・50)―伝蔵小屋(10・05)―10・15)―馬場島(13・20)―14・10)―伊折(17・05)

今日こそ下山できる!と、皆、一生懸命に降りる。伝蔵小屋までは赤旗が10mおき位にあり、全く心配ない。伝蔵小屋で温いお茶を御馳走になり、しばし談笑して、一目散に馬場島へ。明大、北大のつけてくれたトレースは高速道路で、全くありがたい。馬場島で下山届を出し、タクシーを予約して伊折へ。この長い、17日間に渡る冬山に終止符を打つ。どの顔も無事下山できた安堵感で緩んでいた。

(「時報」16号より)

(記 佐野)

1978年冬山／穂高主稜線縦走

〔期間〕12月26日～1月4日

〔参加者〕森（七） 渡辺 金谷 広田

12月26日 快晴 沢渡出発（8・30）―木村小屋

（12・00）―2、250m（15・00）

富山市内では昨年より積雪が多いようで、ふと春の赤谷山を思いだす。それでもさすがに天気だけは良く、木村小屋で横尾隊と別れて後も高度を稼ぐに従い、空はますます青くなる。しかし稜線への最後の急登辺りから金谷の体調が悪くなり、2、250m付近に幕営する。

12月27日 快晴のち雪 出発（6・00）―西穂山荘（7・

10）―独標（9・15）―西穂高（11・00）―西穂の次のピーク（12・10）……デポ（13・30～15・00）

西穂山荘を過ぎると一段と風が強くなり、完全装備をしていても手がしびれてくる。雪も風に飛ばされてか積る余地がなく、完全にクラストしている。独標に着く頃からガスが始め、西穂の下りのナイフリッジで初めてザイルを出す。広田が吹き溜りに足をとられて落ちそうになり、一瞬ひやりとさせる。西穂の次の

ピークにテント設営した後、デポとフィックス工作に出るが、さすがに稜線をはずれると信州側に新雪が吹き溜まっており、思いがけないラッセルに遭う。ピーク1つ越してデポして、鎖場にザイルフィックスしたまま帰幕する。

12月28日 曇のち雪 出発（6・40）―間ノ岳手前

の科尔（9・00）……デポ回収（9・20～10・20）―

間ノ岳（11・10）……デポ（11・30～16・35）

昨夜の風雪はおさまっているが、ガスで視界が効かないのが残念だ。間ノ岳手前の科尔迄、鎖場と科尔への下りにザイルを2回出して科尔に着く。科尔から昨日のデポを回収した後、飛驒側のルンゼを詰めて間ノ岳に出る。間ノ岳でテント設営後、天狗の科尔鎖場上部にデポをすることにしているが、次々と現われるピークには相当神経をすり減らされる。間ノ岳のルンゼ状の下りとナイフリッジに80mフィックスしておく。

12月29日 曇のち雪 出発（7・10）―天狗の科尔上部デポ地（9・15）―天狗の科尔（10・15）

間ノ岳下りのザイルを回収し終わる頃から雪に加えて風が強くなってくる。天狗の頭は鎖が出ており、しがみついて頭に出る。天狗の科尔鎖場へはトラバース気味に下るが、雪質が悪く、又ガスの為神経を使う。

やつと見つけたコルへの降り口から懸垂20mで天狗のコルへ。この頃はもう吹雪となっており、これ以上進むのを諦め、コルに雪洞を掘る。雪洞には適した雪質で4人納得のいく雪洞が出来上がる。

12月30日 風雪 終日、強風と雪の為、停滞。外ではゴーゴーと風がうなっているのに、雪洞の中は嘘のように静かだ。

12月31日 曇のち雪 出発(7・40)―コブの頭(9・30)―ロバの耳(12・10)―奥穂高(13・20)―白出のコル(13・50)

吹雪はおさまっているが、ガスと強風に加えて、核心部の1つでもあるので判断に迷うが、コブの頭迄でもと出発する。ジャンダルムを越える頃から風はおさまってくるが、さすがにジャンダルムから奥穂迄は一段と難しさが違う。ジャンダルムから15m懸垂して後、ロバの耳まで2組に分れてザイルをベタ張りにする。ロバの耳は鎖が出ており、フィックス40mと15mの懸垂でコルに着く。奥穂に近づくとつれ再び雪混じりとなるが、危うんでいた馬の背は完全なナイフリッジであるけれど膝迄のラッセルの為、それほど恐怖感はない。白出のコルで偵察時のデボを回収し充実した大晦日を終える。

1月1日 曇のち晴のち曇 出発(8・05)―涸沢岳最低コル手前(10・40)―北穂南峰(11・15)―北・南峰間のコル(12・35)……フィックス工作(12・50) (16・00)

西穂稜線上では会わなかった人も白出のコルから急に多くなる。涸沢岳の鎖場は15m懸垂してトラバース気味に40mフィックス。次の鎖場は15m懸垂してトラバース気味に40mフィックス。さらに次の鎖場は15m懸垂して北穂南峰迄ザイルなしに済みます。それでも涸沢岳から最低コル迄は岩と雪がミックスした嫌な長い下りで、膝がガタガタする程に緊張する。南峰への下りは岩が乾いてガスも切れ青空が広がって、まさに穂高の感である。トランシーバー交信で横尾隊は槍ヶ岳第2次アタックに出たことを確認し、4人安心する。こちらは本日中に大切戸を越す自信がないので北峰下りに60m、30m、40mの残置フィックス工作をするにとどめる。

1月2日 曇のち雪 出発(7・00)―大切戸最低コル(11・30)―南岳避難小屋(13・15)

本日はもう1つの核心部を通過するが、朝から地吹雪が激しい。北峰からの下りは、飛驒泣きを越えて1つ目の鎖場が現れる迄全てザイルを使用する。特に、

北峰からは残置フィックスをしたものの雪がグサグサでいやらしく、又飛驒泣きの横ばいは、ガスの中、空中に踊るようでないらしい。切戸の鎖場からは滝谷側の雪はクラストして足元はしっかりしているが、まるで奈落の底にどんどん降りていくようである。最低コルを過ぎると様子は一変し、荒々しい景色から穏やかな山容へと変わる。その景色の中に南岳の登りは黒々とそびえ、異様さを放つ。少々手こずってここを越すと再び広い稜線に出るが、風は相変わらず強く、金谷、広田、凍傷気味となる。

1月3日 快晴のち曇 出発(6・30) — 中岳(7・45) — 槍ヶ岳(8・55) — 横尾尾根分岐点(10・30) — 横尾尾根三のガリー降り口(16・10) — 横尾(16・25) — 昨日迄とうって変わって本日は無風快晴。横尾尾根分岐点から軽装で朝日に赤く染まり始めた槍ヶ岳を目指す。槍の頂から長い中崎尾根を見下ろすが、少し残念な気がする。横尾尾根分岐点から、横尾隊が残してくれたフィックスザイルを回収して尾根をひたすら下るが、所要所に残置フィックスがあり高度を稼げる。それでも樹林帯に入ると木の根っ子下りとなり、ここを登った横尾隊の苦勞がしのばれる。三のガリーから夏道に下るが、三のガリーは雪質さえよければ格好の

下降ルートになる。我々4人、硬いデブリの上を膝がおかしくなるのにもかかわらず、夏道迄走り降りた。1月4日 曇 出発(7・30) — 徳沢(8・30) — 木村小屋(10・50) — 中ノ湯(12・00) — 沢渡(13・40) 横尾から、ただ沢渡を目指す。木村小屋で下山届を出した時には、心から安心したと同時に、緊張感の連続であった事を思つて、改めてひやりとした。

(記 森)
〔時報〕17号より)

1990年3月山行

赤岩尾根く鹿島槍ヶ岳く
牛首尾根くS字峡く
ガンドウ尾根く劔岳く早月尾根

〔期間〕3月21日く3月29日

〔参加者〕藤田(C.L)、東條、蔭山、栃尾

3月21日 天気 快晴 大谷原(6・10)く西俣出合(7・35)く高千穂平(11・10)く2220m(12・45)

完璧な快晴、素晴らしい展望、心地よい風——順調

な登高は約束されていた。ペースは速く、主稜線に達するかと思えたが、それだけに早い時刻に疲れてしまい、最後の急登を残してドン。

3月22日 天気 晴 出発(5・20) 鹿島檜南峰(9・40) 牛首山(11・50) 牛首尾根上2200m(13・55)

赤岩尾根の頭への急登はクラストした斜面を快適にこなすが、主稜線に出たからがやたらに遠い。さらに東條が極めて不調で、牛首山手前で荷分けをする。牛首尾根は全般に広い尾根で易しいが、2302m付近は尾根がいりくんでおり、ルートはもつとも右寄りに行くのが正解。剣岳の展望が素晴らしい。下降するにつれ、黒部別山がどんどん大きくなっている。2302m手前から樹林帯で、木々の間から本峰が見え隠れしている。

3月23日 天気 曇後晴 出発(6・00) 1350mコンクリート製建造物(9・50) 黒部川(16・30)

1460m付近は枝尾根が多く、ルートファインディングは極めて難しい。細い尾根を行くと急にスツパリ切れている所に出、下にコンクリート製の建物が見える。ここをfix45mで下り、建造物を通り過ぎた

所から2回のダブル懸垂をすると、それまで北向きだった尾根は西に曲がる。再び北へ方向を変える辺りで悪いトラバースの後、キノコ雪が出て来る。その通過にfix40m。下にはS字峡の吊り橋が見える。さらにキノコ雪が5個程付いているやせ尾根の下降にダブル懸垂。ここから尾根を末端までたどらずに、やや西寄りに直接黒部川に降り立つようにルートを取る。黒部川の水量は少なく、直接徒渉しようとするが、深い所は腰位までありそうなので断念。栃尾がポリタンのふたを黒部川に流してしまうが、東條が川に飛び込んでナイスキャッチ。本日のファインプレー。

3月24日 天気 雨 出発(6・00) 東谷徒渉終了(7・00) S字峡トンネル(7・50)

雨の中を出発。15m程の岩峰は黒部川をへつる。雨で濡れていて微妙なバランスを要する。東谷の徒渉は膝まで。吊り橋はルンゼ状を30m程つめた後、ブッシュをトラバースする。皆ズブ濡れで、靴下をしぼったテント内は極めて臭い。行程は約半分で、疲れがたまっているので良い休養になった。

3月25日 天気 雪後曇 出発(5・30) 取り付き(7・00) ガンドウ尾根1349m(9・15) 1833mジャンクシオンピーク(14・15) 大滝尾

根の頭手前 (14・50)

吊り橋から真つ直ぐ上のルンゼ状に取り付く。はじめ150m程は傾斜の厳しいきつい登りだが、やがて傾斜も落ちて来て広い斜面になった後、顕著なりッジに移行する。

ガンドウ尾根は

・やせ尾根だが、キノコ雪は小さい。

・大きなキノコ雪、倒木、ブッシュ、岩峰のオンパレードで、トップを行けば楽しそう。1500m付近の大きな岩峰は雪が安定していて直上できたが、コンデイションが悪ければ難しかっただろう。キノコ雪の下り (1550m) で $f i x 12 m$ 。

・何ヶ所か傾斜は厳しくなる。

・1833m直下の登りはきつい。最後に左からまわり込んで、小さな雪庇側から主稜へ上がる。昨日の雨、その後の冬型による気温の低下で、雪はしまり、キノコ雪は安定しており、これ以上ないと思われる程の最高のコンデイションだった。ガンドウの核心を1日で抜けられるとは思わなかった。

3月26日 天気 快晴後曇 出発 (5・45) く仙人

池小屋 (9・15) く池ノ平 (12・30)

大滝尾根へ登りは超急勾配で苦しい。南仙人山手前

のコルへの下りが悪く、 $f i x 20 m$ 。この後は尾根は広くなり、のんびり仙人山へ向かう。この日の核心は池ノ平山への500mの登りで、きついだろうなあと思っていたが、やっぱりきつくて皆バテバテ。雪はクラストしており、雪崩の心配はなかった。南仙人山以降の剣の展望は、「素晴らしい」以上のものだ。何度も立ち尽くして見入ってしまう。幸せなひとときだった。

3月27日 ガス後快晴 出発 (5・45) く小窓 (9・15) く小窓ノ王トラバース (11・30 く 14・45) く三ノ窓 (14・55)

出発時はガスっていたが、見る間に天気は良くなつてド快晴に。小窓手前のコルの下りで $f i x 40 m$ 。岩を支点にして懸垂しても良かった。さらに小窓への下りは、初め10mトラバースした後、ダケカンバを支点にダブルの懸垂。3年前の北方稜線時にはこれで終わりだったが、今回は懸垂終了点の雪面がガチガチにクラストしており、さらにダブルの懸垂で小窓に達する。概して雪面は完全なサンクラストで極めて堅い。したがって小窓への急登は雪崩の心配は全くないが大変つらい。

ここから小窓ノ王のトラバースは、まずダブルの懸垂の後、2ピッチ (15m + 45m) で通過する。状態は

そう悪くはなかったが、この通過に3時間以上かかってしまい、もし荒れていたらと思うとゾツとする。トラバース中、小窓ノ王からずつと氷、つららが落下しうつとおしい。劔尾根、チンネが素晴らしい。

3月28日 天気 曇後雪 出発(5・20) 本峰(7・50) 〓シシ頭fix終了(9・40) 〓2600mピーク(12・50) 〓伝蔵小屋(13・40)

池ノ谷ガリーは状態よく、40分足らずで乗越。劔尾根の頭は左から巻けた。長次郎のコルからの登りはまともガチガチのクラストでダブルアックス。本峰の社は完全に埋まつていた。遙か遠くに鹿島槍を望んで記念撮影。よくもあんな遠くから来たものだ。カニのハサミも状態が良くノーザイル。シシ頭の登りでfix 40m。この辺りから慶大のパーティーのトレースがあった。2600mまでいつものように悪い下りが続く。エボシ岩の次のポコからの下りでfix 45m。昨日に続いてここでもむちゃくちゃ時間を食う。伝蔵に着いた時、やつと終わったとホツとした。

3月29日 天気 雪後曇 出発(9・50) 〓馬場島(13・50)

早月は4度目だから、ただ歩くだけで馬場島だと気を抜いていた。が、ガスで視界も悪くトレースも消え

ている中、ブーツと下っていると、1920・7mから北へ延びる尾根に入ってしまった。幸い、気付くのが早く、40m程登り返して正規のルートへ。馬場島で我々を迎えてくれたのは、「試練と憧れ」の立派な遭難碑だった。いつものように詰め所でコーヒーをこ馳走になる。

このルートは2年前に敗退している因縁のルートだ。2万5千を見ると、嫌になるほど長い黒部越えの計画を無事完登でき、満足感は大い。天候・ルートのコンビネーションともに信じられない程ベストの状態だった。シビアな見方をすれば、成功の最大の原因はこの好条件であつて、パーティーの力によるものではないと思う。体力的には十分だつたと思うが、問題なのは遅すぎるザイル操作である。実際、今回は総ての核心でド快晴でだったが、もう少し悪ければかなり予備を使っていたに違いない。

黒部に降り立つと、北アの真ん中にいるという隔絶感を感じる。これが黒部を越えさせる動機になるのだが、必要条件としてかなりの実力が要求される。今回はラッキーにも成功したが、この程度の力で再び黒部に挑めば、容赦なくはねつけられるだろう。ともあれ、このような計画は大学山岳部にしか出来ないものであ

り、長い山行には独特の満足感がある。黒部はいまだ未知の雰囲気を漂わせている。難しいが短い計画がトレンディなのだろうが、今後、力をつけて再び黒部を目標してくれることを楽しみにしている。黒部は決して山屋を裏切らない。

(「時報」20号より)

(記 藤田)

1993年11月

春山偵察山行事故報告

1、山行計画

「ルート」 早月尾根く劔く立山・雄山く室堂

「日程」 11/1く11/4

〔参加者〕 藤田哲史(1、理3)、前田智(文3)、飯田真宏(理2)

2、事故発生から遺体収容までの行動内容

〈行動日程〉(略)

〈事故までの状況〉

11月1日 雨↓曇り↓雪 7・15馬場島↓13・30早

月小屋

雨の中を出発。雨具を着るが、逆に暑い。1200

mくらいから地面に雪がちらほら見え出す。2、3日前から雪が降っていたそう。危険な場所もないので飯田にトップを行ってもらおう。なかなか速く進め、避難小屋までの予定だったが、時間が早いので早月小屋まで行く。ラッセルは時々、膝下くらいまでであった。早月小屋がいているので使わしてもらおう。服が全部乾き、よかった。

11月2日 快晴 7・00早月小屋↓14・15劔岳↓15・00平蔵の避難小屋

今日は天気良く、予定通り劔へ向かう。よって重荷で行く。獅子頭までも、春山ならいやらしそうな所が多くある。しかし、夏道が思ったより出ている。危険な所は前田、安全なら飯田トップで進む。獅子頭は鎖が出ていて、夏道どうしに行く。カニのハサミも夏道で行け、問題なかった。結局、ザイルは獅子頭前の細い稜線で一回出しただけだった。これもしかし、歩いてみると必要なかった。早月尾根核心ということもあり、一生懸命登っているうちに頂上に着いたという感じであった。頂上は寒いので、さっさと平蔵の小屋へ下った。この日も飯田は特に疲れていたたり風邪をひいたりというような体調が崩れた様子はなかった。

11月3日 快晴 6・00平蔵小屋↓7・30前劔↓8・

00 事故発生

(中略)

(藤田の行動)

8・00 飯田発見。

9・00 前田を呼びに登り始める。

10・00 コル着。前田より富山大の人の話を聞く。

空荷で雷鳥沢ヒュッテに向かう。

12・00 ヒュッテ着。山岳警備隊と連絡。学生部へ

電話。

12・30 森藤さんに事故連絡。

13・48 飯田をへりが発見したとの無線を警察との

電話中に聞く。

15・00頃 飯田の死亡確認の無線を警察との電話中

聞く。室堂の派出所に向かう。

16・00 藤田、前田と飯田の遺体、車で室堂から上

市警察署へ。

(前田の行動)

8・00 コルで待機。

8・20 たまたま通りかかった富山大の高田さんに

へり要請の依頼をする。

10・00 飯田のところへコルを下り始める。

10・30 飯田のところへ到着。

15・00頃 山岳警備隊の人と飯田搬出。

16・00頃 山岳警備隊の人とへりで室堂へ。

(飯田滑落の様子)

前劔から武蔵のコルへ下る途中、大岩があり、稜線
 伝いに下れないので、劔沢側の雪壁を下る。この時、
 飯田、前田、藤田の順であった。下り始めてすぐ飯田
 が前のめりにこけた。アイゼンを引っかけたのか、雪
 が思ったより深く深くバランスを崩したのが原因と思わ
 れる。雪は少しくさっていた。前にうつむけに倒れた
 まま滑落。初めスピードは遅かったが、止まる様子は
 なく、やや急な斜面に入り、そのまま武蔵谷へ滑落し
 ていった。

(藤田発見時の飯田の様子)

飯田は武蔵谷に入ってもなかなか発見出来なかった。
 雪上に血がこすった跡があった。500mくらい下つ
 た幅2、3mの所で飯田発見。飯田の7、8m上に雪
 渓上に岩が突き出ており、その横の雪上に血が50セン
 チ四方くらいついており、そこに当たって止まったと
 考えられる。キスリングは肩からはずれていたが、キ
 スリングに乗るようにしてやや急な斜面に止まってい
 た。ヘルメットはまだかぶっていたが、2つの大きな
 割れ目が走っていた。飯田は発見時は呼吸しており、

藤田が声をかけると言葉ではなく体ではつきりとはならないが反応したように見えた。

急な所にいたので、藤田は、滑落途中に飯田が落としたエンピで、平らな所を飯田の上に作った。飯田はしかし自分では動けず、また藤田も持ち上げることができない事がわかり、飯田の下側にエンピで掘った。途中、飯田のメット、ハーネス、アイゼン、ピッケルの紐など、身を縛っているものは血行に悪いと思い、はずした。飯田は初め頭の痛みに耐えるように頭に手をやったり、あおむきに寝ていると呼吸が苦しいのか、寝返りを打ったりした。飯田は頭に切り傷があり、額右にL字形の大きな切り傷と、鼻と口の間にも2か所の切り傷があった。また顔はむくんで目は開けられない状態であった。額の傷は確保用のテープで止血しようと頭の切り傷に直接まいだが、すぐ取れて効果は無かった。血もどくどくは流れ出ず、だらりとたれる程度だった。呼吸はゼーゼーとなったりスースーとなったりであった。前田が下りてくると思ってたつが来ず、へりを呼ばなければいけないと思い、飯田を5m程下の滝に落ちないようにセルフを取って前田を呼びに行った。

(前田到着時の飯田の様子)
まったく反応なく、藤田によってバイルなどで確保

されていた。呼吸もなく心臓も動いていない様子なので心臓マッサージを試みたが効果なし。セーター、ライツツエルト、シュラフをかぶせEPIをたいた。

(飯田搬出の様子)山岳警備隊による)

剣沢にへりで降り 武蔵谷を遡って現場到着(4人)。到着後、飯田を収容袋に入れ、ザイルを使って剣沢まで背負っておろす。剣沢からへりで室堂へ。

3、事故検討会(要約)

11月6日、近鉄堂島ビル内、大阪大学工業会館会議室に徳水篤司山岳会長、大野義照部長をはじめOB、現役約30人が集まって開かれ、報告と討議のあと、次のような今後の対応を決めた。

- ・部として平日からトレイニングをする。
- ・現実在即した滑落停止(ピッケルストップ)の訓練をする。

- ・これからの山行にできるだけOBの参加を求める。
- ・山岳部の活動としては4年間で登山の定石を覚えることに主眼をおく。

- ・定期的に文部省登山技術研修会に参加する。参加人数は2名とし、その費用は山岳会から支給される。

(「時報」特別号・事故報告書より)

第2部

海外遠征

P 29 初登頂 10年がかかりで悲願達成

住吉仙也



P 29 東面（3次隊ベースキャンプから。玉井康雄氏撮影）

登頂の一日

一九七〇年十月十九日。朝、無風快晴。ここ第三キャンプ（六二五〇呎）の気温は氷点下十五度。モンズーン明けの雲一つない空は、青よりも紫に澄んでいる。正面のP二九、その右、左にマナスル、ヒマルチュリと並ぶ豪華な舞台は、朝焼けのバラ色に輝いている。六時。「今から出発します」。無線機から張り切った渡部の声が凍った空気を震わすと、第五最終キャンプ（七五〇〇呎）を作ったシュルンドから二つの黒点が躍り出る。ここ第三キャンプでは肉眼と望遠鏡での観戦が始まった。

渡部とハクバ・ツエリンの二人はキャンプ下にデポした固定ロープを背負う。シュルンドは難なく通過、ホツとする。次が氷壁中の難場、傾斜六十度、高度差約一〇〇呎。われわれが「蛙岩」とよんでいる露岩の右上。白扇を立てたような浅いヒマラヤ襲の氷壁。スピードは遅いが、確実に、リズムカルな動きで一歩一歩登っていく。渡部がトップ。蹴爪だけでは駄目なのか、ステップを切るのが多い。初め直登、それから左寄りに一ピッチ一ピッチと高度を上げていく。アイゼンの氷をかむ、かれた音が聞えてくるようだ。しかし望遠鏡から離れて目を転ずると、白と紺の無音の世界。そして二人は静止した二つの黒点。朝から渡部がトップ、ハクバ・ツエリンがセカンド。

パートナーの選択は渡部に百パーセントまかせたが、この二人はよほど気が合うのだろう。昨年の遠征以来の馴染みで、今回は特によくザイルを組んでルートを一ひらいていた。ことに渡部は昨秋遠征の帰路から、唯一の中心となつて準備に当たり、その熱意と執着はものすごかつた。またハクパ・ツェリンにとっては、実兄のイラ・ツェリンがサードとしての初遠征で、張り切るのも当然である（一九七〇年ブレの日本エベレスト隊では、チョクレと二人がサードだった）。ともに闘志満々、登頂の気構えがベースキャンプ以来ありと見えていた。

それにしても固定ロープが見えないのはどうしたことだろう。無線機の調子が悪く連絡は難しい。この氷壁を越えるまでは確実にロープをフィックスする約束である。予定でもまだ三日の余裕がある。上部での難場を予想して、降りに固定するつもりだろうか、あるいは氷の条件がよいのか。しかしステップを切っている。それにしても午後の日蔭と寒さ、氷の硬さは充分わかっているはずだが。

十時。時計を見直すほど時間の経つのが速い。小さい氷稜にとりつく。これに続く上部の懸垂氷河断端こそ、数日前にも知らせた一番手こずりそうな所。ここを左に抜ければあとは傾斜も四十五度ぐらいにゆるくなる。今までのリズムが止まり、動きはのろい。この高さは渡部

にとつて初めてだ。渡部がジリジリと動く。ハクパがダブルロープを這うようにして確保している。渡部が止まる。アイスパイルかピッケルを振るう。左右の足場を変える。少し戻る。酸素ボンベは背負っているが、マスクを着けて吸っているのかどうかはわからない。スクリューピトンをねじ込んだのか、止まっていた姿が少しずつ動き出す。また止まる。足場を刻む。一步、さらに一步。見ている私もくちびるをかみ、息をこらえ、苦しくなつては激しく深呼吸し、彼の動きにつれて上体をひねっている。

ギラギラ光る氷のフットライトを浴びながら渡部の動きは変わらない。ハクパとの間隔がかなり広くなつた。この一ピッチで通れそうだ。渡部の動きが止まる。坐り込んだ姿勢。確保に入つた。ああ、やつと越えた。ハク

パがゆっくり動き出す。

十一時。やつと頂上に続く氷稜の左に抜け出る。鏡のような水を背にして二人は休んでいる。何を見、何を思っているのか。

十一時十分。再び動き出す。今度はコンティニューアスで。しかし残念ながら、ここからは氷稜のかけに隠れて見えない。

十一時三〇分。望遠鏡でチラリと見えたが、また隠れる。照りつける日ざしは暑い。朝ここを出発した田中、

黒岩、サーダー、パサン・ノルブは、雪崩跡を第四キャンプへ登っている。代つて第四キャンプからすでに降りてきた大笹、大野は、休養のシェルパと観戦に忙しく、かわるがわる望遠鏡にしがみついている。雲一つなく晴れ渡った紫の秋空は、氷の輝きを一層まぶしくさせる。一次、三次の遠征が念頭をよぎる。

十二時四〇分。再び現われる。やはり渡部トップ、スカイラインを快調にとぼしている。セカンド、ハクパ・ツェリンとの間隔が広いようだ。渡部の調子はよほどよいのだろう。ここまで登れば、あとは問題ない。この辺については、昨年以來、ヒマルチュリ隊やマナスル隊が撮ったもののほか、いろいろの写真を見ながら何度も話し合った所だ。

一時十五分。頂上の小台地が作る雪庇の横で、二人の動きは一つになって止まる。握手し抱き合っている。しかし休みもせず、さらに雪庇の向うへ雄姿は消える。頂上は手中のもの。アンナプルナが見えるだろう。たんまり写真と石をとってこい。

姿の見えぬ時間がやけに長い。相変らずの無風快晴。三時。待ちに待った二人が同じ雪庇の横に現われた。一時間四十五分の何と長かったことか。

すでに陽は傾き、二つの影が長い。背負子はずし、

荷を作り直しているらしい。しかしすぐに降り始める。軽快な動きは変わらず、登りには見えなかつた一歩ごとに吹き上げる雪煙が、あかね色の逆光に輝いて美しい。

四時二十分。やつと下の方に現われた。例の難場の上だ。夕日は主稜線に沈み、逆光の陰で、もう望遠鏡でも見にくい。第三キャンプも寒くてたまらぬ。そこも寒いだろうが、急ぐな。注意しろ。

四時五〇分。わたしは五時の定時交信のためテントに入り、ベースキャンプに「登頂」を伝える。

夕食はうまかつた。わたしにとつて、一年半も続いた遠征食（一九六九年のP二九、一九七〇年のエベレストと今回のP二九）は、食欲があつても喉を通りにくい。しかし今晚の食事は実に豊かに思われた。

七時過ぎ。第四キャンプから三つのライトが降りてくる。誰だろう。不調の無線機に業をにやしたやつに違いない。意外なほど早いスピードで近づいてくる。月明りに黒く長く浮かび上がったトレースを音もなく近づいてくる。シェルパ達のなにか呼びかう声が凍った静かな夜気をふるわせる。

近づいた。もうすぐ……。と突然シェルパの号泣。「どうしたんです」と大笹や大野が問う。「シェルパも登頂すりゃうれし泣きするよ」。私は何気なく答えたが、どうも

住吉登攀隊長がC3から撮った
連続写真



破線が登攀ルート。○をつけた所に2人がいる。×が推定滑落地点。

〈注〉破線が切れているのはルートが隠れた部分を通るため

異様な感じがする。成功の感激にしてはおかしい。シエルパが「ハクパ・ツエリン」といつているのも変だ。アン・ナムギヤルが私の側に来る。老練沈着そのもののシエルパ。「どうしたんだ」と尋ねると、同時に答えが返ってきた。「渡部サーブ、ハクパ・ツエリン、フオールダウン、ダイ」

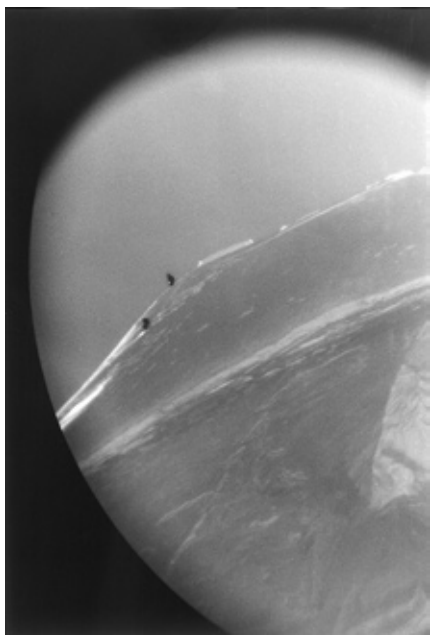
わたしの顔から血の気が引いていくのがわかる。「ダイ？」ともう一度聞きなおすのも、うわの空、しゃがみこんでしまった。一体どうしたんだ。意外にも今日第四キャンプへ登ったばかりの田中、サーダーのイラ・ツエ



午後1時、頂上へ向かう2隊員

リン、パサン・ノルブがかけ込むように到着する。シエルパの号泣が激しい。うるさい。「黙れ」といいたい。

田中から詳細を聞く。「第四キャンプも登頂の喜びに湧いていた。五時前、突然サーダーの叫び声でテントを飛び出した。するとすぐ近くに二つの動かない体が転がっていた。サーダーは『スーッと黒い物が滑って止まるのを見た』という。第四キャンプから一〇〇メートルほどの距離、酸素を持ち全員がかけよったが、そこには手の施しようもない二人が、しっかりとロープで結ばれ横たわっていた」



午後3時、頂上から下る2隊員

サーダーがわたしに抱きついて狂ったように泣き出す。パサン・ノルブは静かに泣きじゃくりながら、わたしを抱く。いったいわたしはだれに抱きつき、だれに向かつて泣けばいいんだ。

シエルパをテントに入れる。一人で見上げる氷壁は、屋の舞台、今起こった不幸とはかわりなく、まったく静かである。夜目にもクツキリと浮かぶ稜線が、次第にゆがみ、悲しさがこみ上げて来た。

(十九日の「日誌」より)

第一次隊よりの経過

七八三五¹⁾の未踏峯。望見したかぎり、よい登路はなく、試登もされていない。山麓の地形も判然としない空白。これが一九六一年のP二九であった。この年、第一次遠征、西面の地形解明。第二次(一九六三)、東面の登路確認。第三次(一九六九)、七三五〇²⁾まで登攀。そして今回第四次(一九七〇)、悲しい事故と共に待望の登頂をなしたのである。

今までの第一、第二および第三次隊について補足要約する。

〔第一次隊〕一九六一年春(隊長篠田軍治、登攀隊長住吉仙也、他隊員六名)

P二九東面は徳永(マナスル三次隊)、住吉(ヒマルチ

ユリ・村木隊)により観察されたが、頂上直下に困難な氷壁があることにより、地形不明の西面に登頂の鍵を求めた。マルシャンディからムシ・コーラを経て入り、この谷の奥からP二九西尾根とも呼ぶべき低い西に延びる尾根を越え、P二九とマナスルから出る氷河(ツラギ氷河)のサイド・モレーン上にBCを設営した。P二九の西面をなす大岩壁は、すでにナムン・バンジャンからの写真(今西寿雄氏撮影)により、登路としては絶望的であったため、このツラギ氷河をつめてP二九とマナスル間のコルに出るルートに望みを托した。しかしこの氷河の奥のアイス・フォールは廊下状をなして狭まり、両岩壁からの雪崩とアイス・フォールそのものの烈しい動きで極めて危険であり、登頂を断念した。

しかし六七〇〇³⁾の試登など、これまで空白か不正確な間違った地図しかなかったこの地域の盲点を解き、ツラギ氷河、氷河湖および、これより流れるドナ・コーラを下ってマルシャンディに帰路をとった。

〔第二次隊〕一九六三年秋(隊長篠田軍治、偵察隊長木村裕一、他隊員三名)

第一次隊の結果から、一応、西面登路をあきらめたかわれは、第二次隊として東面のブリ・ガンダキから偵察隊を入れた。サマからブングン氷河に入ったが、その

奥はアイス・フォールの状況が悪く、東尾根に転じて、比較的安全なルートを見つけ、この東尾根の基部約六三〇〇呎まで達し、登頂の可能性を見付けた。さらに同隊は帰路ラルキヤ・ラを越えてP二九西面も偵察し、第一次隊同様、この面からの登攀ルートは極めて危険かつ困難であり、登路としては東尾根が可能性ありと報告した。

「登山禁止」第二次隊の報告に基づき、登頂を目的とする一九六五年遠征隊の準備にかかったが、相前後してネパール政府のヒマラヤ登山禁止令が出され、計画は中断の已むなきに至った。

〔第三次隊〕一九六九年秋（隊長住吉仙也、他隊員一〇名）一九六九年春、登山禁止令を解除する新登山規則が施行され、同時に許可を得たわれわれは、登頂を狙える初めての隊として第三次隊を送った。同隊は登路として東尾根か、あるいはブンゲン氷河を登るべきか、改めて偵察検討した結果、やはり安全性の上から第二次隊踏査の東尾根ルートをたどり、キャンプを進めた。

十月二十四日、頂上直下、高距約八〇〇呎の氷壁基部、六九〇〇呎にC6を建設。しばらくのヒマラヤ登山禁止のためか、高所ポーターたるべきシェルパの高所での活躍は期待に反し、加えて堅水では何ら頼るべきものはない。幸い、隊員の高所順化は完璧に近く、C6に隊

員のみ八名が一週間以上滞在して氷壁のルートを拓いていった。しかし十一月に入ると気温の低下と共にジェット・ストリームの影響は次第に強く、雪庇や氷塊のルートへの落下ははげしくなり、十一月二日、七三五〇呎までのロープ・フィックスをもって登頂を断念した。

第四次隊・一九七〇年秋

隊長 水野祥太郎（63才）大阪大学名誉教授
 登攀隊長 住吉 仙也（43才）阪大医学部所属、第一次、第三次参加
 隊 員 田井 英男（32才）阪大工学部助手
 三枝 礼子（37才）阪大薬学部卒、東京芸

豊坂 昭弘（29才）大阪警察病院勤務
 大笹 秀一（27才）住友重工（株）勤務
 渡部 洋（26才）理学部研究生、第三次参加
 大野 義照（26才）工学部助手
 田中 喜樹（23才）工学部学生、第三次参加

石原 敏雄（24才）理学部研究生
 黒岩 芳夫（22才）経済学部学生

シエルパはサーダー・イラ・ツエリン (39)、ナムチエ、ラクパ・ノルブ (33、ターメ)、ハクパ・ツエリン (34)、ナムチエ)、アン・ツエリン (コック、46、ナムチエ)、アン・ナムギャル (35、ターメ)、カルサン (36、ナムチエ)、テンジン (32、ナムチエ)、パサン・ノルブ (29、ナムチエ)、カミ・ノルブ (27、ナムチエ)、ナチ (22、ジュンベシ) の十名。ローカル・ポーター・シエルパ六名。キッチンボーイ二名。

第三次遠征を反省検討し、今回は以下の点に特に留意した。

(一) 時期を早めること。(二) 氷壁におけるスピード・アップ。(三) 氷壁途中に建設可能なハンギング・テントの考案。(四) 隊員のみならずシエルパに対しても高所順化のための行動に配慮する。(五) その他はほぼ第三次隊に準ずる。

(一) 時期は第三次より十日は早く九月十日から十月初の五十日間を登攀期間とし、十月二十日前後を登頂予定日とするよう計画した。ジェット・ストリームの来襲は年により異なるであろうが、昨年の経験では十月末から十一月に入ると同時にこの洗礼を受け、気温の低下と相まって、氷壁登路に流落する雪崩や氷塊が急増した(殊に主稜線からの雪庇の崩壊)。事実いまままでのポス

ト・モンズーン期における七五〇〇呎以上のヒマラヤ登攀では、西辺の峰を除くとほとんど十月二十日前後に登頂を成功させている。一方、早ければ早いほどよいわけではない。モンズーン明けが平均十月初旬であること、高所生理的に四〇〇〇呎のベース・キャンプ以上は五日を妥当とし、それを超えた場合、著しい体力の衰退に加えて最後が氷壁登攀では大した成果も期待できないと考えた。たとえ気象や生理条件が幸運に恵まれても、更に長期の登山は食糧、燃料の増量を来たし、ポーターや資金にまで影響を及ぼすであろう。

(二) スピード・アップについては氷壁における気象、殊に風と気温およびこれらに左右される氷の硬度に関係する。局地的な風は致しかたないが、幸いにP二九東面はジェット・ストリームに対し主稜線の風蔭になる。気温は(一)のとおり時期を早めることにより、かなり(約一〇度)和らげられると考えた。氷の硬さに対しては、スクリューピトンの刃を鋭くし、強度を大にしたものを特製し、また全員十二本出歯アイゼンを用意し積極的に蹴爪を使うこととした。同時に氷壁でもっとも肝心なこととは、最終キャンプの建設とロープの固定を完了するまでは、連日ラツシュ・タクティックスの心がまえをもつことであると考えた。

(三) ハンギング・テントは高強度のスクリューピットによるプラットフォーム付きのものを考案して持参した(実際にはシュルンドをキャンプ地としたため使用しなかった)。

(四) 第三次では隊員の高所順化は極めて良好であったのに反し、シエルパは全く不甲斐なく、最高キャンプに泊ったものは一人もなかった。これは順化のための行動管理を隊員にだけ行ない、シエルパの行動はサーダーのチヨタレに任せて、トランスポートの荷の管理のみ隊員がやったためと考えられる。そこで、今回は隊員同様

シエルパの行動にも注意し高度順化を図った。結果は管理したのがよかったのか、あるいは登山禁止解除後一年間に高所の経験をもったためか、昨年比し格段に順化良好であった。

キャラバン

ルートも荷物、ポーターの数量も第三次隊とほぼ同じ。カトマンズ出発は第三次より九日早い八月二十五日。昨年以上の雨を覚悟したが、一九七〇年のヒマラヤは気象異変のせいか、かえって少なく、昨年は刈り入れ前でテ

あの時

1963年のP29第2次遠征が終わったあと、現地に残り、数ヶ月にわたってヒマラヤ山地を放浪しました。シエルパの家に長逗留し、チベット人に化けて、国境のナンパ峠をこえました。日本人では初めてと聞きました。

当時は外国人禁止地帯でしたが、もう時効でしょう。そこからタライのジャングルを抜けてタルー族の部落にとどまり、インドとの国境に着きました。車道はなく、カトマンズからナムチェバザールまで20日、ナムチェからインド国境まで、やはり20日、全部徒歩でした。

いったんカトマンズへ帰ってから、今度は

ヒッピーの仲間入り

フランス、ドイツ人のヒッピー達とポカラからカリガンダキ上流をうろつき回りました。当時、カトマンズにはヒッピーの大集団がいました。おかげで、こちらもかなりイカれてしまい、日本に帰っても適応出来ず、しばらく附抜けてボンヤリしていました。そのころの記録の一部を「時報」13号に投稿しました。また膨大な写真(白黒、カラー、赤外線)があるので未整理のままです。生きていた間に、当時の日記と写真(40年昔!)をまとめるつもりですが、兵庫医大を定年退官後も医療法人に勤める傍ら、ボランティアとしてパキスタンに出かけるなど、手をつける暇がありません。

(田村 俊秀)

ントが張れず困った所でも、今年に至る所に刈り取られたあとの畑が見られた。しかし、アルガー・バザールまではともかく、ここから奥のブリガンダキ治いではマナスル以来全く変わらず、文明の恩恵にも浴していないので道路の改修など望むべくもなく、行程は一日も短縮できない。

九月六日ニヤック着。連日の夕食後ミーティングも熱を帯びてくる。さらにチベット地域に入ると現地人とのトラブルは定例行事となり、頭痛のタネであった。従順なカトマンズ・ポーターをナムルー、リダング、ローの部落民に交替せざるをえない。ナムルーにはチェックポストができたが、全く無力。ローからの入山に当たっては、昨年は無かったのに今回は入山料として一五〇〇ルピーを要求される。今春オランダ隊が二五〇〇ルピーでも入山できなかった事実を知っていたので、馬鹿らしいと思いつつも支払う。一九七一年春の韓国マナスル隊は入山料を払わない代りにサマのチベット人をカトマンズに呼び、ポーターとして雇うとのことだが、金銭出納はいずれが得だろうか。

とにかく第三次隊より十日早い九月十二日、従来と同じ四〇〇〇呎地点にベース・キャンプを建てた。赤や黄色の高山植物がモンストーンの残り雨に濡れて美しい。

(註) キアラパンルートは往路は第三次隊と同じ。帰路はニヤック、パンシンを通らず、その対岸すなわち左岸を通る(…↓デン↓チュゴル↓ジャガート…↓)

登攀

登路はほとんど昨年の第三次隊と同じである。部分的

に地形の変化しているのは当然だが、もつとも大きな違いは、今回は第三次隊のときに比べて十日早いためか、雪線が高度差で約五〇〇呎低く、降雪のたびに雪崩がルートを洗うことであった。流された隊員も何名かいたが、事故にならず幸いであった。しかし各テントは順調に作られ、第三次隊のC2、C4は省略し得た。

九月二十日、五一〇〇呎地点にC1建設(第三次のC1建設は九月二十七日)。ここへの荷上げは雪量少なく大いに捗る。

九月二十三日、C2建設、五八〇〇呎(第三次のC3建設は十月五日)。この東尾根P1付近の地形は第二次第三次、今回とそなたびごとに大きく変化している。局部的に風雪多く、しかも風向不定で、第三次隊はこの上と下にもう一つずつ仮のキャンプ(C2とC4)を作ってルートをひらいた。

P1を越え、東尾根の基部コルにあたるC3予定地六二五〇呎へのトレースは九月二十六日に完了、C3への予定荷上げもスケジュールどおり十月一日に終わった。次いで第三次同様、高所順化のため、いったん全員がBCに集結し、三々五日休養の後、十月五日から後半期が開始された。モンストーンは未だ明けず、BCで降雨も雪と変り、毎日寒い朝夕であった。

十月九日、C3建設、六二五〇呎（第三次のC5建設は十月十八日）。

十月十一日、C4建設、六九〇〇呎（第三次のC6建設は十月二十四日）。ここが頂上直下、東面氷壁の基部である。

この頃モンスーンが去ったのであろう。朝、全天の快晴がやってきた。稜線を画する空は、ますます紺色を深めた。もつとも、地形による局地的現象であろうが、東尾根の三つのピークP1、P2、P3には正午近くになるときまったように雲と雪が現われた。面白いことに、昨年同様、渡り鳥の大群が二陣（二日）に分かれ、朝、六〇〇〇呎から七〇〇〇呎の高さで飛び去ったのもこの頃である。

C4からのロープフィックスは頂上に向かって小気味よく伸びて行く（C4とC5間は全部フィックス）。何よりうれしいのは、無風快晴と氷の硬さであろう。一ピッチのスピード、そしてスクリューピトンをねじこむスピードが昨年に比しはるかに軽快である。十三日、早くも昨年の最高到達点を越え、七四〇〇呎に達する。しかし数こそ少ないが、思い出したように落下する雪庇や氷塊がルートを洗ってヒヤツとさせられる。一度これに流されると、たとえわずかの距離でもシエルパにとっては意気消沈の打撃である。今C3以上には隊員六く八名、シエルパ六く七名。しかも全員快調。ここまでくれば頂

上は何とかしたいものだ。

十月十八日、氷壁途中に最終攻撃キャンプC5を作るべく、田井、大笹、大野、石原、カミ・ノルブの五名がサポートし、渡部とハクバ・ツエリンがこれに入る。横に走るクレバス（シュルンド）の中に絶好の場所を見付け、持ち上げたプラットフォームは不要になる。ここなら風や雪崩の心配はなく、一夜をゆつくり過ごせる。しかもまだ行動中に酸素を使っていないにもかかわらず体調は良好。睡眠時のわずかな酸素が安眠を約束してくれる。

渡部とハクバ・ツエリン。この二人は昨秋以来の親友である。今回も初めからパーティを組んでよく先頭に立つてきた。登頂にも驚くほど意欲的な二人である。C5から頂上稜線は指呼の間である。明日はとにかく確実に固定ロープを延ばしてほしい。

そして翌十九日。この長い、起伏多い一日は、最初に記したとおり忘れられぬ日となった。

事故のあとで

悲しい、いやな一夜があけた。隊員もシエルパも、昨日の、目の前に展げられた登攀で、見えない一時間四十分の登頂を信じているが、他に示すべき確かな証拠は何もなかった。不調の無線機からは、昨日、何の受信も

得られていない。二人の遺体のそばには、もつれ切れた35ミリフィルム約二本分(パトローネはなく、完全露光)があり、破損したフィルム用アルミケース、小手帳一、写真引伸し印画(頂上氷壁のもの)、カメラケースや時計バンドの破片、登攀具の一部とともに空しく回収された。

しかし、渡部の右手には折れたピッケルの頭部がバンドでつながれ、そのブレード基部には、頂上で結んだとしか考えられぬ国旗の白い木綿紐が残っており、またハクバ・ツエリンのそばで、散乱した荷物のなかに、手掌大の赤褐色の石が一箇見付けられたことは、私たちをなぐさめてくれた。

第二登のため、直ちに遺体のクレバス埋葬を計ったが、シエルパは一種のパニック状態であり、一部のものがクレバス埋葬には賛成しながら登攀には反対し、殊にサーダーのイラ・ツエリンはハクバ・ツエリンの実兄でもあって、ベース・キャンプへの収容を強く懇願した。遺体を山中に残置することに対する現地人の宗教的禁忌もあり、やむなくベース・キャンプへの収容に踏み切った。七〇〇坪からの収容はそれ自体危険も多く、ベース・キャンプ収容後の再登攀は時期的にも不可能であり、事實上、これによって再度の頂上攻撃を放棄したのである。

十月二十三日夕。雪煙上げるP二九の向こうに夕日が沈

む頃、暮色たちこめるベース・キャンプに二人の遺体を収容し、サマのヘッドドラマ僧司式のもとに荼毘に付した。

帰路、遺骨を抱いて日本に近づくにつれ、手紙や新聞切抜きで弔意やなぐさめとともに「登頂に対する疑問」の声があることを知ったが、何のあかしもない。確信しておればこそ、なお困りはてたが、客観的、常識的にみればこの疑問は当然のことであろう。

ただ、十九日にC3で望遠鏡を通して撮った写真がうまく写っておれば、強力な証拠になるぞと思いつつも、望遠鏡は普通のものでカメラ用でなく、撮影の距離や絞り、露出時間は種々の条件で撮影したもので、まったく自信なく、帰国後現像してみるまで頼りにはできなかった。伊丹空港に降り立った時も「確信してます。しかしデータを提出して判定を仰ぐほか方法はありません」と消極的な言葉しか出なかった。

幸いにも写っていた写真が、本稿に付された写真である。このスノードームの稜線と頂上は近距離にあつて、かつ、ギャップなどの難場もないことは、他の方角からの多くの写真と併せ見れば明らかであり、C3から見えなかつた一時間四十五分の間に頂上に立てるものと思われる。

写真、ピッケルに残った国旗の木綿紐、赤褐色の石と

ともに内外の山岳人や山岳団体から「登頂確信」のたよりをいただいても、やはり私にとっては第二登が待たれる心境である。

おわりに

「P二九のような山が、そう簡単に登れるものでないことは初めから予想されていたことである……」。これは大阪大学山岳会がはじめてヒマラヤに送った第一次P二九遠征隊の報告冒頭に書かれている文章である。それから十年。四度の遠征が予想されたらうか。

私たち阪大隊がP二九に対して行なつたことは、単に今回の登頂ということだけではない。ほとんど未知であつた山塊にいろいろの方向から可能性を求め、それを一つずつ積上げて今回のゴールに到着したものであつて、これはちよど未知の地理的、科学的方面への探究とまったく同じ心持ちと態度をもつて進められてきた。

計算ずくめで計画をたて準備をすすめても、予期せぬことや分らないことがつぎつぎと出てきて、思い通りうまく行かないのが自然相手の登山であり、ましてスケールの大きなヒマラヤである。ネパールの登山禁止や資金面の問題があり、また山の難しさに比し私たちの非力の故もあろうが、ヒマラヤ登山とはこんなものであろう。

とり返しのかぬ死亡事故こそ痛恨の一事であるが、むしろ一山岳会としてよく遂行できたと感じるとともに、この長期間、有形無形、多くの方々からいただいた御援助の大きさに驚き、改めて深く御礼を申し述べたい。

(一九七一年記)



この稿は阪大山岳会が1975年に発行した遠征報告書「P-29 1961〜1970」に掲載されたのを再録しました。

8トの荷物輸送に四苦八苦

西川元夫

私が参加した1961年のP29第1次遠征では、利用したインド測量局の地図にも空白の地域が広く残つたままで、最も頼りにしたい川の流れも我々の目と足で確かめるしかなかった。当然、ベースキャンプの位置も未定のままの船出だった。ただ、私の心の一隅には、その10年余り前、初の8000^級峰登頂となつたアンナプルナに一回の挑戦で成功したフランス隊の幸運再び、を願う気持ちもなくはな

かった。まさにエキスペディション登山の終末期であり、壮挙的登山の最終期でもあった。目指す山とか地域についての情報の乏しさをはじめ、装備や登山についての総てのことが、今日では想像もつかないほど不便な時代だった。しかし、時間だけはゆるやかに流れ、私どもは登山以前の手柄への係わり合いも含めて、すべての事々を幅広く楽しむことができた。一つ一つのシーンを思い出すにつれ、次から次へと懐かしい思い出が溢れてくる。

ヒマラヤ登山にとつて登山荷物の輸送の重要性は今も昔も変わらないのであるが、それとて、手段、方法については隔世の感を禁じえない。今日ではカトマンズでも、かなりの登山装備が調達出来るようであるし、10トンを超えるような登山荷物でも、インドでの通関をきらつて日本からカトマンズへ空輸してしまうし、更に奥地までヘリや自動車で輸送できる時代となった。ここでは、今とは違った意味で大変面倒なことのひとつであつた荷物輸送について懐かしんでみたい。

当時は、ネパールへ持ち込む荷物は、必ずインドを通過しなければならなかつた。このため、登山隊の荷物はインド入国の際に保税措置をうけた。ネパール、インド両政府の承認のもと、3ヶ月後に全数再輸出するという条件で無税通関をし、保税措置をうけたままインドを通

過してネパールに運び込むのであつた。登山計画をもとに整え集められた装備、食料の総量は約8トとなつた。これを登山計画、輸送運搬計画にしたがつて梱包し、梱包ごとにパッキングリストをタイプして輸出手続きを済ませ、ぎりぎり61年2月17日神戸港出帆のB1ラインのサーダナ号に間に合わせる事が出来た。関係者全員 of 必死の努力のおかげであつた。

船が深夜、第4突堤P岸壁を静かに離れた時、乗船した隊員4名(尾藤、山本光、兼清、西川)は、先ほどまでの忙しさから一度に解放されたためか、しばらくしてから初めて、ヒマラヤに行くんだという喜びに浸ることができた。船は香港、シンガポール、ペナン、ラングーンに寄港し、各港で在留邦人の方々の歓待をうけながら、約一ヶ月後の3月14日、カルカッタに入港した。4名のうち山本光氏と私はラングーンで下船し、空路カルカッタへ先着していた。通関手続きとインド国内輸送の手配を早めるためであつた。通常は1ヶ月はかかるという手続きを、あつちの窓口、こつちの担当部長と、広くて勝手手のわからないカルカッタ税関の中を書類の束を持ちまわつて1週間が必要な署名を揃えることが出来た。私も数え切れないほどの署名をしたが、この時初めて印鑑が極めて優れた事務器械であると痛感した。

しかし、いざというところで酒類の特別申請書が梱包毎に必要だと言われ、これがわかるのに1日費やした。

また、酸素や高所燃料のプロパンガスが、パッキンググリスト上で我国での通称通り、ドイツ語の「BOMB E」となっていたのが税関役人の目にとまり、これを酸素爆弾、プロパン爆弾と解釈されてしまった。こちらの積みは全くうけつけず、港内の倉庫に入れることは勿論、陸揚げすることもまかりならん、と言い張る。船会社からは船が出航するので早く引き取れと言ってくる。結局は領事館の助けを借りることにし、3日間もめた話も、一旦船から艇に移し、艇から直接トラックに積み込んで速やかに港外へ運び出すということで急転直下、話がついた。大岡裁判カルカッタ版である。

勿論その間に、先に陸揚げした梱包は保税倉庫内で税関吏の指定した梱包を開いて一品一品丁寧に検査するほどのパッキングリストとの照合検査をうけた。その後、全梱包は鋼帯を十文字にかけられ、その上に封印された。暑さと湿度と煩雑な手続き、税関吏や港湾人夫たちののろのろした動き、やる気のなさに、いらいらは高まるばかりであった。東京で受けた1週間のビザを1週間延長し、まだ足りないので異例的な許可をえて更に1週間延長した。今日中に出発しなければネパール国境までたどり着

けないという日の深夜、私たち隊員4名と飲料水やビスケットを積み込んだインド製の乗用車2台が、登山荷物を満載した大型トラック2台をしたがえて動き出した。その時は、行く手遙かな旅路への不安よりも、神戸出帆の時以上のやれやれという気持ちでいっぱいであった。車の列はウエリントンの長い長い橋を渡る。目的地はネパール領のバイロワである。

インド国内の輸送手段については複数の選択肢があったが、梱包数が多いことや、カルカッタで人夫の荒っぽい荷扱いを見てからは、荷物の積み替えだけは避けたかった。この点から、国境までに3回もレール幅が変わる鉄道は論外となり、結局は自動車を使うこととした。運送業者との交渉で、積み替えないこと、他の荷物との混載を絶対にしないことを条件にあげると、きわめて自信ありげに確約した。しかし、実際には、道路に橋のない箇所があつて、そこは自動車も人も艇に乗って渡るのであるが、そのつど重量制限から積荷を半減させられ、梱包はトラックから投げ落とされ、川を渡ってから、また積み込んだ。鉄道橋があつてトラックを積荷のまま蓋貨車に乗せて河を渡ったこともあつた。

アサンソール、ブダガヤ、ベナレス、ゴラクプールと釈迦が生まれた地に立つて、その無慈悲な自然に心を打

たれたり、単調な音楽の音が遠く妖しく聞こえてくるなか、大きな蛍の大群が夜空いっぱい飛び交うのに驚いたり、ガンジスの河畔ではインドの人々の信仰の偉大な力に感激したり。政府の役人用の宿泊所ダクバンガロウを泊まり継いで3月27日午後10時、国境ノータンワに到着、検問所の関守をたたき起こした。ビザのきれる2時間前であったが、関守の好意で越境は明日でよいとダクバンガロウへ案内してくれた。

翌日、象の歩く道をすぎて国境を越えた。遮断機もなく延々と続く幅30^{メートル}ほどの空地が道路と交わることで、それと判るだけであった。ガタガタ道を1時間走ったところにパイロウ空港があった。空港といっても、1棟の建物もなく、砂ぼこりがあるもうと舞う滑走路と、その一隅にドラム缶が積んであり、吹流しが1本立っているだけであった。ここで私どもの8^人の荷物は封印検査をうけて解かれ、再び自分たちのものとなった。空港の片隅に真新しいテントを張った。まるで家に帰ったような気分になった。それまでの異国情緒あふれる食事とうつてかわり、その夜は、乾燥牛肉と乾燥ネギを使つてのすき焼きで、4人は生き返つたようになった。

思えば、神戸を出帆して40日後の、憧れのネパール入りであった。ネパールは当時は、まだまだ遙かな遠い国

であった。

(1957年工学部卒)

P 29 隊に参加して

田 中 喜 樹

はじめに

10月18日朝、ふと思ひ出してワントン(渡部洋さん)の命日はいつやった?と、P 29の報告書を見た。翌日だった。忘れていたけど忘れられない1970年10月19日。思い出が32年ぶりによみがえった。あの日は黒岩とザイルを組んで、私が先頭で歩いた。隊長の住吉さんが望遠鏡を見ていた。接眼レンズにカメラを引つ付けて覆いをして、ルート上のワントンとハクバの写真を撮っていた。天気は快晴に近かった。割と暖かく、風はほとんどなかった……。通勤電車の中で、思い出が走馬灯のように駆け巡った。その頃の私は23歳で大学6年目。もう32年も経ってしまった。当時の写真帳を息子達に見せても「ほんまにパパか」と信用してくれない。体重も20^{キログラム}は増えている。去年、山岳部の夏合宿に行つたら、雷鳥沢の登りに4時間

かかった。現実を振り返り、体力の衰えを痛感した。

3 次隊の思い出

69年春。ヒマラヤに行きたくて行きたくて、色んな情報を集めていた。「そろそろ解禁になる」と、大阪市立大の小林君がネパールから帰ってきて話してくれた。住吉さん、大工原さんに報告したと思う。まもなく解禁の報が入った。今でも覚えている。歯学部の大工原さんの研究室だったと思う。甲田君と2人で住吉さんに会い、3次隊参加を申し出たが、「基本的に学生はアカン」。親に「金出してくれ」と言う。「絶対アカン」。親類に頼み回った末、義兄の説得で何とかOKとなったが、最終的に母方の爺さんの許可をというので、大阪から山口県まで夜行で行った。朝着いて爺さんの家まで走って行った。一通り説明すると「頑張つて行ってこい！ 皆にかわいがられるよう自分の職務を全うせよ！」。嬉しかった。

隊員に加えてもらつて食料係を命じられた。マナスルの報告書を精読し、1次、2次の報告を参考にして食料計画を作った。何せ一番下なので、何でもやらされた。でも、充実していた。暑い中、旧理学部の中につくった事務所で準備し、3トの荷物を大阪で通関して神戸港から積み出した。

69年8月1日、神戸港から三沢、渡部、黒田、甲田、田中の5名で出発。横浜、香港経由でバンコクまでフランス郵船の3等船客となった。最初は船酔いにもなったが、神戸商科大のバトラシ、京都大のブータン踏査隊、龍谷大のボルネオ隊ほか、貧乏船客ばかりで、まあ、楽しかった。デッキに出てポーツとしているか、差し入れの酒を飲んでいるかの毎日だった。香港ではオバルチン（チョコレート味の粉末飲料で、高所で一番良いとされていた）を買い込み、街中を半パンに草履で歩き、「慕情」の舞台となったリパルスベイへ泳ぎに行った。金は三沢さんが管理し、毎日の小遣いしかくれないのでピーピーであったが。

香港からバンコクへの航路ではアメリカの戦闘機が飛来し、我々が手を振るとアクロバット飛行をして楽しませてくれた。ベトナム戦争の最中だった。ダンスパーティーがあった。その夜はデッキで日本酒を飲んでいた。ワントンが酔っ払ってダンス会場の食堂に行き、シンガポールに行くという若い女性に申し込んだ。断られてもなお申し込む。「なんであかんのか」。我々が止めると暴れる。そこへ黒田さんが来て、「力では負けへんぞ」と抱きかかえて収まった。その時、流れていたのは森進一の「港町ブルース」だった。今でもこの曲を聞くたびに、

低い天井の食堂でのダンスパーティーと参加していた人達の顔が浮かぶ。

バンコクの港は川を遡って2時間ぐらいの河岸にあった。ここからカルカッタまで、やっと飛行機に乗せてもらった。カルカッタに着くと、先発の住吉さんが迎えに来ていてホテルに案内された。翌朝早くカトマンズに発つので4時起きとのこと。初めてのインド、暗い街、大きな暗い部屋、街路で寝ている人達、らい病の人、緊張とショックで一睡も出来なかった。朝、空港に行ったら、遅れるとのこと。昼頃出発し、乗った飛行機のタイヤは溝がなく、心配でならなかった。カトマンズ上空に着くと、家々の屋根が真っ赤。後で知ったが、唐辛子を干していた。玉井さんが迎えに来てくれた。びっくりしたのは牧野、大工原両先輩が参加すること。また、暇だから、どんな人が来るかと空港に行ったら、故佐藤茂先輩がいるではないか。日本山岳会のエベレスト偵察隊に参加し、当地で食料の米(日本米が一番安い)、紅茶、調味料の唐辛子、ニンニク、岩塩、ダルなどを買って、トラックの来るのを待っていた。

早くキャラバンを始めたいが、荷物が来ないので仕方がなく、いらいらしながら待つて、着いたらすぐに出発できるように準備した。実際、着いた翌日に出発した。

キャラバン中は毎日、紅茶を5、6回も飲み(朝起きぬけのモーニング紅茶、サーブTEA、朝飯の時、目的地に着いた時、夕飯前のイブニング、夕飯時)、雨、湿気、蛭に悩まされ、人種が変わっていくのを観察しながら歩き、3週間かけてベースキャンプに到着した。対岸の山を越えればチベットであった。

登山中のことは割愛して、帰りのキャラバンは2週間で、トリスリバザールに着いたのは11月23日。2番目の姉の結婚式の日だった。祝電も打てず、一人、幸せを夜空に向かつて祈った。

パスポートを落として

帰りの一大事はパスポートを落としたことだった。カトマンズに帰り着いて日本大使館に行くと、「電報で問い合わせると1週間、郵便だと1カ月かかる」と言われ、現地の日本人、宮沢宏昌さんの言葉に甘えて、自宅へ泊めてもらった。そのうち「エベレストにトレッキングに行く日本人がいるから案内してくれ」と頼まれ、「週刊現代」のグラビアを撮影している菅洋志さんと同行した。ルクラまでセスナで行き、その日のうちにナムチエバザールに入った。

村の入り口のチョルテンの所に子供がおり、「チヨタ

レー(3次隊のサーダーで、翌春のJACエベレスト隊で平林さんと一緒に頂上に立った)の家はどこか」と尋ねると、ついて来いとはかりに、さっさと歩き出した。ついて行くと、「ここや」と言う。大声で叫ぶと、チヨタレーが家から顔を出すではないか。息子だった。チヨタレーいわく、「あす日本人が来ると言って、なかなか眠らなかつた」。それでチヨルテンの所で待つていたらしい。連絡もしていないのに世の中不思議なこともあるものだと感じた。聞けばラマ僧になるとのこと。テレパシーはあるのだと感じた。クムジュンにいる植村直己さんに預かつてきた手紙を届けたりして、チヨタレーとポーター1人と共にカラパタルの丘に向けてナムチエを後にした。3日ぐらいで到着。丘から300^ミの望遠レンズでエベレスト南壁を舐めるように写した。初めて見るエベレストは神々しいほどに威圧感があった。その後ぶらぶらして年末にカトマンズに帰り着いた。約2週間の旅だった。

日本へは一人遅れて在ネパール日本大使館発行のパスポートで1月13日に帰ってきた。住吉さんと母親が迎えに来ていた。目頭が熱くなつた。しかし、110^{ドル}で買ったロレックスの時計が税関で引っかかった。関税が払えず途方にくれていたら、ガラス越しに母親の顔が見え

た。係官に「お金を借りてくる」と言うのと、「いったん出て、また入つて来い」と入り方を教えてくれた。帰つて母親に最初に言つた言葉は「金くれ」。ほんまに親孝な息子だった。

4 次隊の思い出

4次隊の準備に当たつては、荷物の到着遅れから時機を逸し、また昼間からガスが出る東面特有の気象条件に翻弄された3次隊の経験を基に綿密に計画した。特に、成否は最後の壁をどう攻略するにかかると、時期を早め、12本爪のアイゼン、スクリューピトンなどを用意した。荷物はチッタゴンまで船、チッタゴン→カトマンズ間は飛行機とした。この年、関西からは同志社大のダウラギリ、大阪市立大のカンジロバと旧知の人達の遠征隊が出た。そこでチッタゴン→カトマンズ間は同志社と共同で1機をチャーターした。この任務は三枝さんと黒岩君がやつてくれた。現地では3次隊の時より2週間も早く出発してベースキャンプへ急いだ。メンバーは3次隊の住吉、三枝、渡部さんと私、新しく田井、豊坂、大笹、大野さんと石原、黒岩が参加した。

登攀ルートはP1を巻かず、ほとんど尾根通しに行き、前半にC3予定地までトレースして休養した。再度登り

始めたらラッセルが深く、休養中に1層ぐらい積もったのではないかと思われた。C2からC3への途中で小さな鳥が雪面を歩いているのが見えた。西の方角には星が見えた。ヒマラヤでは昼でも星が見えるという話を実感した。NHKで取り上げられたヒマラヤを渡る鶴は、前の年に住吉さんと発見した。私が先頭を歩いていて「何か飛んでるで！」と言われ、荷物を下ろして上を見たら、鳥が太陽光線を受けてキラキラ光りながら飛んでいた。この写真が後で大発見になり、鶴の調査隊が2回ぐらい出たと聞く。

C3からC4へのルート工作は、渡部さんと私のどちらかが先頭に立って釣瓶のように行動した。10月13日に3次の最高到達点に達した。1年前に置いてきたロープが白くなっていた。18日にはC5ができた。C3で休養していた私は、19日にC4、20日にC5へ登って、できるならば頂上を目指したいと思っていた。頂上からアンナプルナを見たい、これで自分に課せられた責任はまっとうできる、人生の一区切りになるのかな、爺さんとの約束果たせるかななどと、高所ボケの頭で考えていた。予定通り、黒岩君と一緒にC4へ上がった。翌日に備えて準備を終え、テントにいた時、イラ・ツェリンが大声で「上から落ちてきたー」。登山靴に足をつっこみ、

黒い点に向かって走った。後から酸素の用意をして持ってくるようにと言って。その後の記憶はあまりない。C3へは走って下りた。暗くなっていた。C3に着いて隊長にどう報告したかも定かでない。腑抜けのようになって眠れぬ夜を過ごした。翌日は上がる気力も失い、ポーツとしていたと思う。怒られ、育てられた人が、この世からいなくなつた。ベースキャンプにはどのように下りたのか、いまだに記憶が欠落している。茶毘にふして遺骨をスカーフに包み、軽くなつたワントンを背負い、トポトポと帰りのキャラバンを歩いた。

終わりに

今思えば、大学に入って山岳部に入れてもらい、教育してもらい、ヒマラヤにまで行かせてもらい、「もらいの人生」かな……。でも「純粹培養」されて良かったと思っている。良き先輩達に恵まれ、良い経験をさせていただいた。阪大のポートル部で頑張っている息子にも言い聞かせている。「絶対やめるな。苦しくても、ハンディがあっても」。山岳部卒業の親父が言うのだからと。山岳部で教えていただいたこと、経験したことを礎にして、もっと頑張っていきたいと思っている。できれば社会に對しても。あすは渡部洋先輩の命日。ワントンは工エな

あ。26歳のままや。夕方、ヒマラヤの方角を向いて合掌。なんだか怒られそうな気がする。「頑張りが足らん！」と。

(1973年工学部卒、2002年10月記)

P 29とアプサラサスの思い出

三澤 日出夫

1959年入部の私は、卒業後も現役の合宿に参加したことがあり、69年のP 29第3次遠征、76年のアプサラサス遠征に参加するまで、現役時代を含めて足かけ約18年間、阪大で山登りを楽しませていただきました。この期間は、私の人生の30%近くに達します。この度、編集者からP 29とアプサラサス遠征についての原稿を依頼されましたので、貴重な紙面をお借りして思い出を綴らせていただきます。

P 29遠征の直前には、アポロ11号による人類初の月面着陸がなされました。アプサラサス遠征準備中には、政界を揺るがしたロッキード事件が発覚し、帰国時には、毛沢東主席の死去のあおりで、北京経由の航空路が有無を言わず南回りに変更されました。このような世情と

か、個人的な出来事とか、登山そのものとはかわりない思い出もたくさんあります。

P 29遠征は私にとって初めての海外渡航で、パスポート・外貨・検疫等すべて初めてのことばかりでした。特に日本から香港経由バンコクまでの船旅は、その後も経験しなかつただけに、今も新鮮な記憶のままで残っています。カトマンズではネパールの言葉を覚えようと努力し、奇妙な数字については、走っているタクシーのナンバープレートを読みとれるほどになりました。

長いキャラバンで苦しめられたのは、山蛭とイラクサでした。手足に吸い付き、血を吸って大きくなつた蛭を剥ぎ取るのは、ぞっとする体験でした。イラクサの葉で手足を擦った時は、刃こぼれした剃刀で切りつけられたような痛みが走りました。

登り始めて驚いたのは、氷の硬さでした。日本の山の氷の硬さを氷屋で売っている製氷に例えると、ヒマラヤの氷河の氷はコンクリートのように硬く思えました。そして、一番強かった印象は、何と言っても高度障害でした。ぐったりと気だるい、何かしようとしても体がついてこないという、あの感じは、他に例えようのないものでした。そして、最後は、登頂に成功できずに下山し始めたときの虚脱感でした。

アプサラサス遠征では、パキスタンの言葉を覚えようという気にならず、片言の英語によるリエゾンオフィサーとの会話と、役所での必要な会話がほとんどすべてでした。宗教・文化に対する興味の無さというよりも、P29では「会計係」、アプサラサスでは「隊長」という立場の違いによるものだったかも知れません。困惑したの

あの時

8月3日(火) 晴
よいよC1(約4000
貯地点) 建設だ。我々は、

重い荷にぶうぶう言いながらも意気揚々と出発した。デポ地の異常に気がついたのは、その手前のクレバスを、確保しながら一人ずつ慎重に横断している時だった。初めはよく分からなかったが、近づくにつれ、まさかと思われる事態となつていくことが分かった。食糧を入れていた大きなビニール袋はズタズタに引き裂かれ、段ボール箱は破られ、中の食糧は足の踏み場もないほどに散乱していたのだ。特に、焼きそばの被害が大きかった。我々は呆然とその場に立ちつくした。いったい誰が！ 気を取り直して利用できそうなものを拾い集めにかかった。

周囲の足跡と落ちていた羽毛から、犯人は鳥であると断定できた。糞さえ見つかった。これほどのことをやるんだから、かなり大型で、しかも嘴の鋭い猛禽類に違いない。それ

ローガンのワシと焼きそば

も5、6羽だろう。まさかこんな雪と氷の世界に鳥がいようなどとは夢にも思わなかった。入山以来、飛んでいるところを見たこともないんだから。しかし、なんて鳥どもだ！ 我々はワシであると考えた。とつ捕まえて焼鳥にして食ってしまったのではない。

C1建設という第1ステップを踏み出す筈だった日に、こんな災難のために再びBCにテントを張らねばならないとは惨めなことであった。

◇ これは1976年に大学の友人ら3名と、北米第2の高峰、カナダ・ローガン峰(5951ft)に出かけた際の報告から抜粋したものである。幸い、その後の食糧を切り詰めて8月24日、登頂に成功し、致命的な痛手にはならなかったものの、今も忘れられない思い出である。残念ながら、犯人と思われるワシには最後までお目にかかれなかった。

(木嶋 良雄)

は、入国後1週間ほどで起こる原因不明の下痢とダニでした。下痢は全隊員がやられました。ダニはゲストハウスの天井から落ちてくるもので、朝、目覚めると、体が痒くて2つの小さな赤い斑点が見つかります。これがダニに噛まれた痕で、防備のしようが無く、テントを張って寝る方が安眠できました。また、この遠征の特徴は資金不足でコックを雇えなかったことで、イスラマバードを出てから帰るまで食事はすべて隊員自ら作ったことです。

アプサラサス遠征で5000ft近くまで登った時、「7年前のP29で、なぜ、あれだけの頑張りしかできなかったのか」と不思議に思いました。これは私自身が一度、高所順応を経験したお陰かも知れません。氷河も、一度経験すると、クレバスの状態の予測ができ、

コンケーブの水河でもコンベックスの水河でもルート選定を正しくできました。シアチエン氷河のスケールの大きさと午後の増水のすごさには度肝を抜かれました。また、イングス河上流の荒涼とした風景は、テレビに映し出される中近東のニュースを見るたびに思い起こされます。

創立50周年の喜びとは裏腹に、わが阪大山岳会にとつてかけがえのない徳永、尾藤両先輩を相次いで失い、4人いた私達の同期生の一人、山本久夫君が先年、事もあろうに北穂で遭難死しました。故人となられた諸先輩、同輩のご冥福をお祈り申し上げます。

(1963年工学部卒)

ビッグホワイトピークと雪男の足跡

二 木 節 夫

阪大山岳会の第1次P29遠征の前年に当たる1960年春、私は、全日本山岳連盟（現在の日本山岳協会）が主催した東海地区山岳連盟ジュガール・ヒマール登山隊に参加した。当時、川崎航空機工業・岐阜製作所の山岳部員として登山活動をしていたためだ。それまでの海外

登山は日本山岳会が主体になっていて、各県山岳連盟は国内の登山指導に専念していた。しかし、初めて連盟にも外貨割り当てがつくことになり、その第1回として計画されたのがこの隊であった。

東海岳連（愛知、岐阜、三重3県の社会人山岳団体の集合体）は早くからヒマラヤ遠征の希望を持つており、59年初頭より登山計画を練る会合を再三開いた結果、目標の山をジュガール・ヒマールの主峰ビッグホワイトピーク（7083¹）と決めた。その数日後、伊勢湾台風が東海地方を襲い、3県とも甚大な被害を受けたため、1カ月後に控えた第14回国民体育大会への参加を辞退したほどだった。しかし、しばらくたつと、台風被害に意気消沈するものかどうかとの空気が強まり、積極的に各方面と折衝した結果、遠征隊を派遣する岳連として承認されたのであった。

隊員は、伊藤久行隊長（岐阜県山岳連盟理事長、41歳）はじめ20代中心の8名。私は29歳で、会計と渉外、それに特殊装備（無線通信機、酸素吸入器）の調達、維持管理が役割であった。登山中は、氷河上の荷上げの主力を務めたうえ、第3次アタックメンバーとして最後のチャンスに賭ける役割であった。

登山ルートに選んだプルビチャチュンプ氷河は当初考

えていたより随分長大で、結局、キャンプはC4まで設けることになった。このため、荷上げに当たる隊員は連日、キャンプ間を往復することになり、アタツクの残り日数が少なくなつてしまった。1次、2次の失敗を受けて、私が第3次アタツクメンバーとして頂上を間近に仰ぐアタツクキャンプに着いた時、すでにモンスーンが襲来していて登頂をあきらめざるを得ない状況になつていた。

こうして東海岳連による第1次ビッグホワイトピーク遠征は不成功に終わったが、その後、第2次遠征隊（東京都、大阪府両岳連合同隊）に引き継がれ、そして第3次の東京都岳連遠征隊によつて、ついに登頂に成功することができたのである。

余談になるが、この登山で荷上げの途中、私は、氷河を横切っている雪男と思われる足跡を発見した。普通の人間の足より若干大きい5本指の足跡で、ピッケルをそばに置いて写真を撮つた。これが中日新聞に載つたため、「雪男は本当にいるのか」という質問を多くの人から受けた。それ以前からいくつもの遠征隊が足跡を発見しているし、雪男らしき人影を見た人もいる。しかし、誰も現実の姿を写真に撮つた人はいなかつた。その後、世間の関心が強まり、日本を含めた各国から雪男探検隊、あるいは遠征隊が派遣されたが、すべて失敗している。足

跡さえ発見されない状況が続いて、とうとう世間も話題にしなくなつた。

昨今、ヒマラヤには毎年、多くの登山隊が入っているが、いまだに雪男に関するニュースは聞かれない。全く不思議なことだが、私の見た足跡は、この世の最後の雪男のものではなかつたか。雪男はいた。しかし、ついに人前に姿を現さないまま絶滅してしまつたのであろうか。

（1954年工学部卒）

ロブジェピーク遠征記

奥山宏臣

1982年3月から4月にかけて、草尾、小松、奥山という現役4年生3人のメンバーで、ネパールヒマラヤのロブジェピーク遠征に出かけました。山行内容は遠征と言うにはおこがましいものでしたが、山岳部としては76年のアプサラサス遠征以来の海外山行ということになり、OBの方々には随分とお世話になりました。もう20年以上も前のことで、手書きの報告書しか残せませんでしたので、この紙面をお借りして我々の山行を紹介させ

ていただきたいと思ひます。

当時のネパールは海外からの登山者の受け入れに積極的で、「トレッキング許可で登れる6000呎の山々」などという写真入りのパンフレットまで出回っていました。ロブジェピークもその一つで、クーンブヒマールにある6119呎の独立峰は、周囲をエヴェレスト、ローツェといった8000呎峰に囲まれた魅力的な対象でした。何よりのメリットは、登山申請が簡単なこと、登山料が200^{ドル}と経済的であつたことです。とはいへ、我々にとつては初めての海外遠征であることには変わりなく、古い記録を頼りに随分と心細い思いをして準備をしたように思ひます。いつものように、山の装備は積み残さず、日常の雑事はたつぷりと積み残したまま飛行機に飛び乗つたのが3月10日のこと。バンコクで飛行機を乗り継ぎ、11日にカトマンズに到着しました。

現地のエージェントがルクラへの航空券、シェルパの手配、登山許可の申請と手際よく済ませてくれ、翌12日にはキャラバンの起点であるルクラの飛行場に降り立っていました。ルクラから4700^呎のベースキャンプ（BC）までは標高差1900^呎、7日間の行程でした。途中の村には登山者にベッドと温かい食事を提供してくれる宿も完備されていて、キャラバンはのんびりした快

適な滑り出しとなりました。しかし、さすがに4000^呎を超える頃から、薄く乾いた空気のせいか、咳や頭痛に悩まされることになりました。いよいよヒマラヤ登山の始まりです。

まるで醒めることのない二日酔いのようなつた我々を元気づけてくれたのは、行く手にどこまでも続くヒマラヤの山々でした。キャラバンを開始して5日目の朝、前日まで降り続いた雪がやんだペリチエから、目指すロブジェピークが間近に望まれました。岩と氷だけのモノトーンの色彩。鋭利な稜線と、ヒマラヤ襲の作る柔らかな曲線のコントラスト。そして見上げれば深い紺碧の空。ロブジェは小ぶりながらも紛れもなく、我々が憧憬を抱いてきたヒマラヤでした。BCまではさらに1日余りの行程でしたが、皆のペースも速まりがちでした。

そんな高揚とは裏腹に、BCからの山登りは少々残念な結果になってしまいました。悪天候に高山病、日程不足、装備不足が重なり、停滞を除けばわずか5日間の登山活動で、登頂は早々とあきらめることになってしまったのです。BCから5100^呎のC1、5650^呎のC2と順調に高度を稼いだのですが、C2で3日間の降雪に見舞われ、アタックに出た最終日は表層雪崩にあり、稜線上でしばらく立ちつくしてしまいました。結局、

我々の最高到達点は5700^呎あたりで、頂上まであと400^呎余りを残していました。ただ、稜線直下に覆いかぶさるような青々とした氷河はいかにも手強そうであり、残りの日程やFIXロープの不足を考えれば、引き返すのも仕方ないかなという思いでした。氷河の蒼氷にピッケルとアイゼンを打ち込んでみたいという未練は残りましたが、同級生3人でここまで来れてよかつたなという思いがあつたのも事実です。

BCを撤収して近くの村に戻つた翌日、エヴェレストを間近に望めるカラパタールまで遠足に行きました。ここからのエヴェレストは、距離感が麻痺しているせいか、思いのほか近くに感じられました。しかし、わずか数歩で息切れする5000^呎の高地から、さらに4000^呎近い標高差を考えた時、その頂はやはり遙か彼方のものであることに違いはありません。でも、8000^呎は無理でも7000^呎はどうなんやろ？などと思いを巡らせながら、我々の初めての海外遠征は幕を閉じることになりました。

帰りのキャラバンは、神戸大と関学の山仲間も加わり、賑やかな道中となりました。エヴェレスト街道は、来た時に比べて緑も格段に多くなり、クーンブヒマールにも遅い春の到来です。途中に寄り道した村では、水田に囲

まれたわらぶき屋根の横に桜が咲いていました。懐かしい山里の景色を見て、そろそろ里心がついてきたようです。青々とした氷河との再会を夢見つつ、4月5日にルクラを後にして、我々の山岳部に入って4回目の春休みが終わりました。

(1984年医学部卒)

アイランドピーク遠征の思い出

大 倉 徹 雄

この遠征は1992年3月、1期上の紫藤圭介氏と行ったもので、就職前だけに全日程が20日間とタイトなものだった。その結果、高度順応に十分な時間を掛けられなかつたため、残念ながら紫藤氏が高山病のためアタックに参加できなかつたが、私は同行の現地ガイドと頂上を踏むことが出来た。

アイランドピークは、ローツェから南に伸びる支稜にある、上部が氷で覆われた標高6189^呎の山で、別名イムジャ・ツェとも呼ばれている。技術的に困難なところはなく、トレッキングパーミッションで登れる600

0 級級であり、またアプローチがクーンブ方面のトレッキングコースであることから、日程が限られ、トレッキングも充実させたい我々にはいいターゲットだった。以下、アタック前後の状況を記す。

3月20日、エベレスト街道の町、デインボチエから東にそれて、2ピッチでチュクンに到着。ここからイムジヤ氷河方面に1ピッチ進み、標高5150 級のBCに到着した。アマ・ダブラムを最終右手に見ながら進むので、非常に快適だった。BCでは、高山病で敗退してきた日本人パーティーが撤収しているところで、激励される。

翌朝、アタックに備えて午前3時に起床したものの、頭痛がひどく、とても歩ける状態ではなく、バファリンを飲んで寝る。3時間ほど寝て、ようやく回復したので、8時に出発した。薄っすらと雪のかぶったガレ場の踏み跡を登っていくと、5800 級付近で氷河となった。氷河は夏の雪渓程度の硬さでアイゼンが良く効き、クレバースに注意すれば技術的には特に問題はなかった。「頂上直下の雪壁」とガイドブックに書かれていた所もフレイク状の氷のホールドが無数にあり、難易度Ⅱ級程度でザイルを出すことはなかった。しかし、さすがに標高が高いのはつらく、氷河に入ったあたりから息が上がるようになり、頂上直下では20歩進んではそれ以上の時間立ち

止まって休んだ。標高6000 級というと、空気が平地の2分の1の薄さか、仕方ないな、などと考えつつ、牛歩のペースで午後1時半、頂上に到着。

頂上は細長く、同程度の高さのポコが4つほど並んでおり、ちよつといやらしそうな最後のポコを除いて、ゆつくりと一通り歩いた後、休憩する。天気は雲が多く、北側にさらに2000 級高く聳えているであろうロツエの南壁は隠れていたが、南に目を向けると目の前にアマ・ダブラム、遠くにマカルーが見渡せ、幸せな気分に入る。ただ一つ、頂上に何故かカラスがいたのは興ざめだった。

のんびりと休憩した後、往路を引き返すが、もはやふらふらである。BCで小休止した後、さらにチュクンまで下ることにするが、荷をポーターに持つてもらっている（日程に余裕がないので、ガイドの意見により雇っていた）のに、全然ペースが上がらない。来るときはチュクンからBCまで1ピッチだったが、帰りは2ピッチ半もかかり、真つ暗な中、ヘッドランプや眼鏡も無く（ポーターが持つていった）何も見えない状態で、ようやく到着した。もはや登頂の喜びをかみしめる余裕もないほだだった。

翌日、一気にナムチエ・バザールへ下り、デインボチ

エで別れていた紫藤氏と合流。夜は当然のごとく宴会となり、2、3 罍入りのやかんで出てくるチャン（発酵中で、わずかに発泡しているどぶろく）を3つ空にして、さらにロキシ―（蒸留酒）も飲む。夢心地だった。

ガイド同伴のアタックであったが、ザイルを出さなかったことで、一応、自力で登ったという満足感があった。しかし、ガイド無しだった場合に、間違えずにルートフアインディングが出来ただろうか。あの体力的に余裕がなかった状態では少し疑問であった。

最後になりましたが、この遠征に際して山岳会から資金援助をしていただきました。厚く御礼申し上げます。

（1990年工学部卒）



（ネーブル・ブリガダ）

△再録▽

P 29の十年

篠田軍治

阪大山岳会がP 29を選んだのは、いかにもむづかしい
そんな山だからである。その上に相当な高度をもつ独
立峰であること、マナスル三山のうちの唯一の未踏峰
であることである。むづかしい山である以上、一回で
登頂することはむづかしい。だから何回も何回もやっ
てみて、登頂までの過程を楽しむことができようと思
った。

だから一九六一年春の第一回遠征のときには、簡単
に登れてしまつてはつまらない、予想が裏切られたこ
とになるとは思いながらも、できれば登頂したい。少
なくとも登れる山を登らずに帰つて来るようでは仕方
がない。やはり何とかして登頂したいと思つて、それ
なりに努力をした。

P 29の写真を見ると、遠くからとつたのには頂上か
出ているが、近くからとつたのは、頂上附近が出てい
るのはあつても、どれが頂上かはわからない。こんな

山は近くの六甲山を始めとして、高さの程度は違つて
も、日本の山にも沢山ある。日本の山では地図にルー
トが出ているので、どの方角から登つたらよいか考え
る必要はない。しかし、若し未登頂だつたらどうする
か。こうした考え方からルートをみつつけようとしたが、
その前にきめなければならないのは東面か西面かであ
る。

当時（一九六〇年）、東面はマナスル側からの写真
だけだったが、相当な困難が予想され、その上にブリ
ガンダキの谷にはマナスル以来のサマ部落の問題があ
る。そこで一応西面にしぼつて遠征計画をたてたが、
P 29の基部に達するにはどこから入つたらよいかわか
らない。ムシコーラからか、それともマルシャンディ
を更に北に遡つてトンジエの附近の方がよいか、全く
見当がつかなかった。そんなわけでカトマンズでも相
当聞き込みに努力し、どうやらムシコーラの谷から基
部に行けそうだと結論に達したので、そこで最終的に
西面という線が出た。結果から見れば基部にはムシコ
ーラからでもトンジエ附近からでも行けることがわか
つたが、隊員の数から考えてトンジエ・ルートまで偵
察隊を出すことは無理であつた。

偵察隊、本隊の行動は報告に詳しく述べてある通り

である。要するに、あの時期に危険なアイス・フオー
ルで長期間活動するのは不可能であった。それなら他
にルートはなかったか。左岸の岩場も候補に上った。
これとても当時の登攀技術では時間的に問題にならな
かった。又、若し実行していたとしたら、モンズーン
が近づくと共に漸く活発になった本峰の氷の棚からず
り落ちる大型の雪崩で遭難は避けることができなかつ
たであろう。

第一次隊が西尾根から登ろうとして、登頂は不可能
に近いという結論を出した以上、六三年秋の第二次隊
は東面、東尾根からということになる。結果は報告に
あるように東尾根から本峰基部六三〇〇mに達し、東
面からの登頂は困難ではあるが不可能ではないという
結論に達した。第二次隊は帰途ラルキヤラを越えマル
シヤンデイに出て第一次隊の帰りのルートを逆にベ
ス・キャンプに出て、西面と東面を比較して、西面
の方が遙かに困難という結論を得た。僅か二年余りしか
経っていないにも拘らず、ツラギ氷河の様相には多少
の変化が認められ、アイス・フオールの流動がさまざま
じいことが立証された。今後西面をルートに選んで第
二登を試みるとすれば、時期を選ぶことと、一シーズ
ンにやってしまうという考えは捨てるべきであろう。

なお第二次隊は生葉関係の貴重な成果を挙げている。

私はネパール政府の登山禁止令がまだ解除にならな
い六七年三月、阪大を定年退職した。山岳部は恩地裕
教授を部長として、新しい活動を開始し、積雪期黒
部上廊下の完全遡行などの成果を挙げた。このときの
メンバーが第三次隊に貢献してくれるものと期待をも
っていたところ、六八年秋ミュンヘンで非公式ながら
ネパール政府ヒマラヤ解禁の情報を入手した。帰国後
間もなく住吉から第三次隊の相談が持ちかけられて来
た。もうプレモンズーンは間に合わない。どうしても
六九年ポストモンズーンである。

ここでP 29ほどの高峰の初登頂を狙うのにポストで
よいかどうかが問題になった。しかし私は第二次隊の
岩峰の霧氷の写真から、リダンダ、ブンゲンコーラの
二つの谷からの上昇気流の凄さを想像し、春には東尾
根のルートは危険にさらされる恐れがあると考え、む
しろ秋を選ぶべきだと思っていた。この想像は六九年
の第三次隊の東尾根のルートが六三年の第二次隊と違
っていたことから、半ば当たとも見られるが、本当
のことは春に行ってみなければわからない。第二次ま
ではR、すなわち研究段階であるが、第三次はD、す
なわち開発というか登頂段階である。従って、その立

場から第三次の人選、装備も検討された。ルートは第二次隊の見付けたものそのものと言ってよいが、頂上直下の氷壁は生やさしいものでなく、あと五〇〇mを残して時間切れで撤退を余儀なくされた。

第四次は水野祥太郎名誉教授を隊長、第三次の住吉隊長が副隊長として実際の指揮に当たった。七〇年の秋である。第三次の荷物輸送は非常にスムーズに行き、その後の遠征隊のひな型になり、高所馴化も非常にうまく行ったので、それらの経験を生かすと同時に、第三次で不完全であったアイスハーケン、アイゼン、氷壁用テント等を増強して第三次よりもずっと早く行動に移って、氷壁での行動日数に余裕をもたせるようにした。六九年秋はヨーロッパは非常に天気がよかったが、ヒマラヤは期待したほどでなかった。同じ山を四回もやったら、よい天候に恵まれることもあろうと、大きな期待を寄せていた。

結果は登頂に成功し十年にわたるP29遠征に終止符をうつことができたが、渡部、ハクバツエリンという二人の貴い犠牲を払ってしまった。そして、P29には幾多の未知の世界が残されてしまった。山頂附近の写真すらない。二人の遭難の直接原因は氷塊の衝撃と確信しているが、これも遺品からの推論で、議論の余地

はあろう。

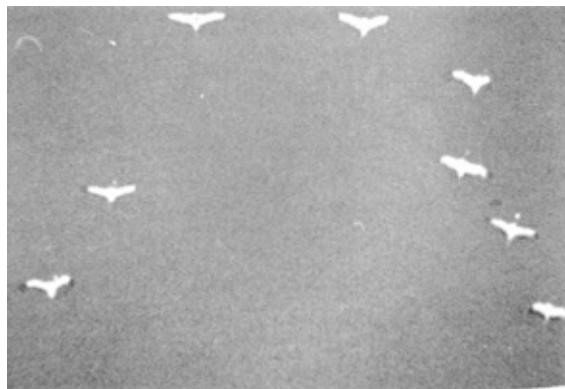
六一年秋、第一次隊が帰ってから梅池の山の家計画に追われていた頃、阪大山岳部として最初の遭難者を出した。遅く入部して来てまだなじみの少ない新人であった。今度は若い層の中で、最も慎重な渡部の遭難である。彼の遭難によって多くのものが未知のままに残された。かえすがえすも残念でならない。

(「P-29 1961-1970」より)

P29隊の見た「そでぐる鶴」について

篠田軍治

阪大山岳部の第三次P29遠征隊が一九六九年十月十二日にP29東尾根で、南へ飛び去る白い大きな鳥を見て、モンsoon明けを感じたという報告を聞いたとき、私は第一次の西面ベースキャンプで鳥が自由に飛んでいるのを見て、そのエネルギーはどうして得られるのか疑問に思ったが、よく観察すると上昇気流をうまく利用していることに気づいた。このことから渡り鳥がヒマラヤを越えるためには偏西風をうまく利用した



P29隊の見たそでぐる鶴

グライダー飛行であろうと考えたが、翌一九七〇年第四次隊が日も同じ十月十一、二両日、同じような鳥の群を見て住吉仙也が望遠写真撮影に成功した。その写真を見ると鳥の群は全部羽を拡げている。これは明らかにグライダー式の帆走である。ジェット・ストリームを利用して幾日もかかって南へ飛んで行くわけであって、この間羽ばたきをしないからエネルギーの損失

はない筈である。ここまで
はわかって、
これが何の鳥
で、どこから
飛んで来て、
どこで越冬す
るかは全くわ
からない。
近頃になつ
て松田雄一氏
の努力でこれ
が解明された。
同氏は阪大隊
以外にいくつ

かの隊の記録、多くの文献を参照した上、鳥類、気象の専門家の協力を得て、この鶴の群は「そでぐるづる」で、ソ連のヤクート地方で繁殖し、今まで揚子江地方で越冬すると思われるのが、どうやらヒマラヤを越えてガンジス河で越冬するものであると結論した。
このようにして阪大隊のとつた写真から、これが「そでぐるづる」という世界で二番目に少ない鶴であって、しかもその繁殖地、越冬地までも明らかにわたるのは喜ばしいことである。

「そでぐるづる」がどうしてヒマラヤのような高い山を越えるかが疑問視されているようである。谷を通れば驚に襲われる怖れがあるからとも言われているようだが、飛行にジェット・ストリームを使うものとするれば、これは高いほど速いし、空気密度は小さいから揚力も小さくなる代りに空気抵抗も小さくなるので、結局、高空ほどエネルギーの損失が少なくて飛び易くなる筈である。また高空のジェット・ストリームは安定しているから、風向、風速の変化しやすすい山に近い高度を通るよりも遙かに有利な筈である。

（「追悼 篠田軍治」より）

アプサラサス登頂（一九七六年）

石原 敏 雄

はじめに

P二九峰に四回の遠征隊を送り出し、一九七〇年には宿願の初登頂を果した大阪大学山岳会のヒマラヤへの情熱は、若い現役に受け継がれていた。ヒマラヤへの憧憬はいよいよ強く、夢はますます大きくふくらんでいた。シアチェン流域の七〇〇〇メートル処女峰を狙っていた我々は、一九七六年二月、パキスタン政府より第一志望のアプサラサス登山許可を得た。夢はついに現実となった。

アプサラサス登山の計画段階で次の点がもつとも議論された。まず、登頂ルートの選定であった。静岡大学隊、神戸大学隊から西面の写真を頂き、アプサラサス氷河内院から南稜に、可能性の高い登路を想定した。しかし、東面には未知の要素が多く、偵察の必要が痛感された。つぎに、長いアプローチに伴う輸送上の困難が予想された。これらは我々を悩ませる問題であると同時に、アプサラサス登山を一層魅力あるものにし

た。

以上のことをふまえて、登山計画を具体的に検討し、次のような原則にもとづいて準備を進めた。軽装備の機動力豊かな隊で、長いアプローチの輸送を少人数で敏速かつスムーズに行い、この間に予定している偵察などに適宜柔軟に対処しようと考えた。また、A Cを頂上近くに設け、ローテーションによる全員登頂を計画した。国内の冬山行に準じた装備を用意し、荷上げと安全性の面から南稜ルートに予想される固定用ロープを準備した。B Cまでの食料は現地購入を優先させ、登山期間の食料は徹底的に軽量化をはかった。この結果、味覚、献立、カロリーなどは二次的なものになってしまった。このような基本計画は、我々の乏しい資金の面からも好都合であった。

アプローチ

ピラフオンド峠を遠望できるナラムに、我々のキャラバンが到着したのは六月一日だった。本隊が五月三日にパキスタンに入国してから、わずか一ヶ月たらずの敏速な行動日程だった。隊員八名、連絡将校、コック一名、人夫九二名で構成されたキャラバンが、カパルを出発してから九日目のことだった。もう一日行程

のアリブランサまでのキャラバンは、残雪の多いことを理由に、カバル以来、連絡将校が反対していた。見たところ、アリブランサまで、モレーン伝いに容易に行けそうだったが、ナラムがキャラバン最終地になってしまった。ピラフオンド峠への荷上げに、二十名の人夫を雇った。彼らに食料を支給し、テント、若干の装備を貸与した。

翌日より荷上げが開始された。隊員にとっては、本格的な登山活動の開始であった。四日間でアリブランサ、さらに八日を要して峠までの荷上げをほぼ完了した。峠からBCまでの輸送には、ロロフオンド・キャンプ、シアチェン・キャンプを中継地として、隊員と七名の人夫が従事した。この輸送にあてた一ヶ月の間に悪天で全員が停滞したのは、たった一日という好天に恵まれた。六月二十六日にBCが建設され、七月二日にはすべての物資が集結した。連絡将校はアリブランサよりゴマに下って、我々の帰りを待つことになった。

登路決定

一方、アプサラサス氷河内院にC1を設けるべくルート偵察が行なわれた。アプサラサス氷河の入口には

高度差二〇〇メートル程のアイスフォールがあり、大きなクレバスが口を開けていた。クレバス帯を抜け、南稜末端を北側に廻り込んだ内院に、七月三日、C1を設けた。ここはアプサラサス西面の登路観察には絶好の地点であった。

ピラフオンド峠を越えてから、正面に聳えるアプサラサ山群の登路観察を続けた。南峰から伸びる南稜および、東に派生した顕著な支尾根にテラム・シェール氷河から登路を求めるとは、頂上までの距離が長く不利だと判断した。当初の計画どおり、西面に登路を求め、アプサラサス氷河内院にC1を設けた。

C1から西面のルートを詳しく偵察した。南稜のジャンクション・ピナクルから上部は、南稜を辿って南峰に到り、そこから吊り尾根のような主峰と南峰のコルを経て容易に主峰に達せられそうに思えた。ジャンクション・ピナクルまでは南稜のコルからリッツを登るルートと、ジャンクション・ピナクルへ直接突き上げる側稜を登るルートの二つが考えられた。南稜のコル直下にある、急傾斜の氷壁には、小規模な懸垂氷河が数ヶ所にあるが、幸にもルートから外れ、雪崩の恐れも小さかった。アイゼンの前爪が心地よく喰い込む硬さの氷壁に、コルに達するルートを拓くことはさほ

ど困難ではなかった。一方、南稜のジャンクシオン・ピナクルから派生した側稜は、アプサラサス氷河の内院へ急激に落ち込み、その末端は再び盛り上って、内院を二分していた。この側稜は上から、雪のバットレス、幅広い雪稜と続き、なかほどには大きな懸垂氷河が掛り、その下は急峻な氷壁、下部は瘠せた雪稜となつて、側稜のコルまで一気に落ち込んでいた。南稜コル下の氷壁に比べて、雪崩の安全性に差異はないが、技術的に困難な個所が予想された。しかし、ジャンクシオン・ピナクルまで全ルートに固定ロープを設置すれば、数ヶ所の休憩地が得られ、迂回ルートにはなるが、荷上げに適すると判断し、登頂ルートをこの側稜に決定した。

登攀・登頂

七月八日には、C1の荷上げが完了し、BCは、若干の帰路用食料などを残して撤収された。人夫は、八月十二日の再来を約して、黒いモレーンの上を飛ぶように帰っていった。いよいよ八名の隊員だけの登攀が始まった。

翌日、C1を側稜のコル直下に移動した。瘠せた雪稜、懸垂氷河下の急峻な氷壁に、固定ロープは毎日少

しづつ着実に伸びていった。午後の日射しをまともに受ける、西面に打たれたフィクスバー、スクリュー・ハーケンは、翌朝打ち直さなければならぬ程、氷雪の融解が著しかった。昼下りの雪稜は股まで落ち込んだ。懸垂氷河を巻き、雪に埋れた大きなクレバスの中にC2を設ける。C2まで七〇〇メートルのロープを固定した。C2への荷上げは、骨の折れるつらい仕事だった。

C2から眺められるサルトロ・カンリ、K12の南方から、モンスーンの襲来を思わせる雲堤がだんだんと迫り、今まで安定していた天候は二十日から大きく崩れた。気温は意外に高く、ぼたん雪の降る悪天の中、C3へのルートが拓かれた。ジャンクシオン直下の急峻な雪のバットレス下から、南稜にトラバースした。すでに、C2から五〇〇メートルの固定用ロープを設置し、ほとんど使い果したため、このトラバースは固定ロープのない緊張を強いられるものとなった。

C1の六人用テントが放棄され、C2に隊員が集結して、頂上攻撃態勢が整ったのは二十四日だった。翌々日には、ジャンクシオン・ピナクルの岩峰下にC3が設けられた。この頃より気温は下り、強風に粉雪の飛ぶ日が多くなった。

七月二十八日、悪天ではあったが、石原、吉田はC3から比較的傾斜の緩くなつた南稜を登り、南峰直下の氷壁に登攀用ロープ六十メートルを固定してから南峰の肩に達した。更に、東面の雪壁を登り、十四時三十分、南峰に初登頂した。頂上は、恐竜の背のような鋭い雪稜で、テラム側は垂直に切れ落ち、馬乗りになることも出来なかつた。主峰と南峰のゴルヘは、南峰の肩から東面をトラバースする以外にないことを、ガス の切れ間に確めた。二十九、三十日とAC建設を試みるが、悪天のため途中で引き返した。毎日続く風雪のため食料は底をつき、C3でAC用食料の半分が使用された。

八月四日、天候はわずかに回復の兆しを見せた。最後のチャンス を明日のアタックにかけ、C3を出発した。天気はしだいに良くなつてきた。そして、われわれは南峰の東面をトラバースして、主峰と南峰のゴルヘにACを設け、四名の隊員がAC入りを果した。午後からは、久し振りに晴れ渡り、国境稜線の向うに連なるチベットの山波も夕日に赤く染まつた。

好天の期待もむなししく、翌日、翌々日は、テントから一步も出られない程の嵐が続いた。六日、撤退命令がACにトランシーバーで伝えられた。嵐の咆哮の中、

ACを撤収し、下山を開始した。ところが、南峰のトラバースに入ると、雲が切れ始め、青空が見え出した。隊員の要請で、もう一日の猶予がアタック隊に与えられた。このトラバース・ルートまで下つてきて、長い高所滞在による消耗の為か、突然不調になつた隊員をそのままC3へ降り、C3から一名上がり、ACは再び三名の隊員で占められた。

八月七日は穏やかに明け、稲垣、藪田、宮本は二時間三十分の容易な登行で、九時、主峰に初登頂した。

おわりに

今回の登頂は、恵まれた天候に負うところが大きかつた。アプローチから登山期間の前半まで、安定した好天が続いた。登山期間の後半は、長期の悪天に見舞われたが、食料の喰い延しをして、最後に好天のチャンスをつかんだ。その好天は、撤収からアリブランスに下山するまで続き、身心共に消耗しきつていたわれわれには天恵の到りであつた。

予想を上回る現地での物価、特に輸送費の高騰はわれわれの予算を圧迫した。止むなく計画の縮小を図り、現地で再三、隊荷の一部をデポした。學術用機器類等を山岳地帯まで持参できなかったことは心残りであつ

た。隊員は、特に輸送に相当な労力を費したが、これは輸送費の節減に役立つと共に、高度順化の為に良かったと思われる。しかし、それが長期間に亘つたため、疲労を蓄積させることになったかも知れない。

種々の要因から、当初の全員登頂は成し遂げられなかったが、主峰に三名、南峰に二名が登頂し、全員が七〇〇メートルの高度を経験するという一応の成果を収め、全員無事に帰国できたことは幸運であつた。

△記録概要▽

活動期間 一九七六年五月〜八月

目的 アプサラサス初登頂

隊の名称 大阪大学カラコルム遠征隊

隊の構成

隊長 三沢日出夫 (36)、副隊長 石原敏雄 (28)

隊員 栗原完治 (33)、稲垣佳夫 (28)、藪田勝久 (25)、

宮本敬正 (21)、吉田真三 (21)

医師 三木哲郎 (25)

連絡将校 M O B A S H I R A H M A D (23)

〔行動概要〕五月二十一日カパル発、サルト口河、ピラフォンド谷を経て六月一日ナラム着。ピラフォンド峠を越え、シアチェン氷河を横断して、六月二十六日

テラム・シエール氷河上にBC (五二〇〇メートル) を建設。七月三日C 1 (五七〇〇メートル)、二十日C 2 (六二〇〇メートル)、二十六日C 3 (六七〇〇メートル) を建設。七月二十八日C 3より石原、吉田は南峰 (七一七メートル) に初登頂。八月四日AC (七〇〇メートル) 建設。七日稲垣、藪田、宮本は主峰 (七二四五メートル) に初登頂。十四日BCを撤収、往路を引き返し八月二十四日カパル着。

〔山岳〕1976、77年合併号より転載)

1984年カラコルム・サンゲマルマール 登頂／遠征を振り返って

松尾敬志

我々は幸運にもサンゲマルマール峰の頂上を極めることができた。幸運と言ったのは、決して自分達の力を卑下し謙遜して言ったものではなく、BC建設より登頂までの過程を振り返れば、さながら良くできたドラマを見ているように、危ない橋を渡りながらも首尾よく大団円を迎えたように感じられるからである。実

際、登頂した頃にはモンストーンの影響が出はじめていた。もし日程が三、四日長びいていれば、情況は一段と厳しさを増しており、全員登頂の可能性は低かったと思われる。天（自然）の恵みと言うべきであろう。

（中略）

私はサンゲマルマールを取りまく自然に祝福され、これに融和し登った。私は幸福を感じる。さらに嬉しいことに、私には仲間がいた。仲間とは隊員諸兄のことである。今回の登山隊の特色は、山岳部の構成・人間関係をそのまま引継いでいることにある。もちろん私をはじめ隊の主要メンバーはOBであり、大阪大学山岳会の会員ではあるが、彼らはほとんど学生であり、若手OBとして部活動にも参与していた。また私自身も山岳部監督として部活動を見守る立場にあった。従って隊の構成は、山岳部11回生で監督の私が、山岳部5、6回生及び現役（4回生以下）を率いる形となった。学年序列という縦の糸、同学年という横の糸で結ばれたこの隊は、登山期間を通じて人間関係を軌轢を生じたことはほとんど無かった。もちろん全員登頂に成功したことで、その軌轢が顕在化しなかったとも考えられるが、よしんば登頂に成功しなくても、それほど破綻をきたさなかつたと思われる。もし今回の登頂

成功の一因としてチームワークの良さが挙げられるなら、隊長として冥利に尽きると言うものである。

余談となるが、大学のクラブとしての山岳部（別に山岳部だけとは限らないが）の役割の一つとして、その活動を通じて各人に自分に対する自信をつけさせることが重要であると私は常々考えている。引つ込み思案であった者が部活動により自分に自信を持ち、大きく飛躍する例を何度も目の当りに見てきたからである。大プロジェクト「サンゲマルマール登山」を成功させたという自信を持って隊員達が実社会へ出て行くことを思うと、私は内心ほくそ笑むのである。サンゲマルマールの豊かな自然に囲まれ、気の合った仲間と力を合わせて懸命に登ったという記憶は、思い出す度に、さながら蓮の蕾が泥水より水面へ浮かび、開花して香気を漂わすように私の心を幸福感で満たすのである。そして、この記憶は汲めど尽きない泉であり、私の宝である。（後略）

◇

サンゲマルマールはバキスタン北部のカラコルム山脈・バツーラ山群に属する独立峰で、C7、5000無名峰より南にのびた支尾根上、ハサナバッド氷河（シスパー氷河）とムチチュール氷河の分水嶺として聳え

立っている。西にハチンダールキツシュ、東にシスパ
ーレ、ウルタールの鋭峰を待らし、屏風の様なバツ
ーの大岩壁で北を取り囲まれた姿は、さながら堅固な
城塞に守られたお姫様とでも言おうか。南に開けたハ
サナバッド谷の彼方には、フンザ川をはさんで右にラ
カボシ、左にディラン、さらにマルピティン、スパン
テイクと続いている。(中略) サンゲマルマールの高
度については6、949mと7、050mの2説があ
るが、ここでは全て後者においておいた。

◇

〔参加メンバー〕

隊長 Ⅱ 松尾 敬志 (30才、大阪大学歯学部助手)

隊員 Ⅱ 広田 雅彦 (27才、川崎重工勤務)

奥山 宏臣 (24才、大阪大学医学部附属病院

勤務)

上月登喜男 (24才、大阪大学理学部大学院学

生)

大石 真也 (23才、大阪大学工学部大学院学

生)

野口 明 (23才、大阪大学基礎工学部大学

院学生)

榎原 淳 (23才、大阪大学工学部大学院学

佐藤 健哉 (23才、大阪大学工学部大学院学
生)大西 啓之 (21才、大阪大学人間科学部学
生)

水川 朋吉 (20才、大阪大学理学部学生)

宮田 俊一 (20才、大阪大学工学部学生)

〔行動記録〕

5月18日 先発隊 (上月・野口) 成田発

25日 本隊 (松尾・他5名) 成田発

6月1日 後発隊 (広田・奥山・大石) 成田発

2日 ブリーフィング。夜、バスにてラワルピ

ンデイ発

3日 アリアバッド着

5日 キャラバン開始

↓モース↓ヤーバサ↓バツコール

8日 ↓イルキツシュ、BC建設

(中略)

〔アタック〕

7月11日。うつすらと白みかけた空に星が最後のま

たたきを繰り返す頃、3峰ピークに並んだ2つのテン

ト、その1つに灯りがともる。中では奥山・野口・水

川が朝食のラーメンを作りつつ出発の準備に余念がない。上月・榊原・大西はもう1つのテント、まだシユラフの中でまるくなっている。アタックは昨日C3入りした元気な3人が先導、最後のルート工作にあたり、残りの3人はフィックスが張り終わるのを見計らってこれに合流、ともども頂上に立つという時間差攻撃だ。1時間ばかり遅れて後発隊の3人も起床。先発隊の3人は既にアイゼンを付けている。

いつになく無口でもくもくと用意する各人の胸にはさまざまな思いが去来しているのであろう。遠征を決意した当初、暗中模索のうちに話を聞きに行き、資料を集め、山を選んで計画を立ててみても、これで良いのか、本当に遠征に出れるのかと不安続きの日々であった。アプリケーションを出したところで事態は同じ。まだ来ぬ許可にイライラしながら年が明け、パキスタン観光省からの手紙を見て初めて「行けるんだ」と実感するや、今度は一転して大忙し。装備・食糧の寄附願いに会社を廻り、一方で遠征資金の捻出にアルバイト・金策にと走る。自然、大学も休みがち。出発間際は連日深夜まで梱包作業に励んだものであった。しかし、その陰では人知れず捨ててきたものの、犠牲にしてきたものも少なくないに違いない。そうした全てのこ

とが今報われるのだ。否、報われるというのは的確でない。煩雑な手続きも登山のうちであり、遠征は、登頂そのものよりも、むしろ、そこに至る様々な困難を克服していくプロセスにこそ意義がある。ここでは登頂はあくまで結果であり、我々は一つのキリをつけようとしているに過ぎない。

午前4時5分。先発隊の3人がC3を出る。本峰は黒いシルエツト。空気は冷たく、ピンと張りつめている。消え残るトレースを踏んで2峰基部へ。さらに2回のアプザイレンからトラバースに移る。インシャアラ。ピンよ抜けるなど祈りつつフィックスをつかんでの手すりトラバースだ。氷河のラッセルもそこそこに1つ目のクレバスに到着。これを越してフィックス終了点までは快調なペースで進む。2つ目のクレバスは小さく容易。ここより左上して西稜に取りつくつもりであったが、直上して頂上雪田をつめる方が早い。キックステップからダブルアックスへと傾斜が増し、雪質も堅雪から氷に変わる。フィックスを張りながらの前進となるや、たちまちスピードダウン。やがて後発隊の3人が追いついて一緒になる。陽もあたりだし寒気はそう厳しくないが、ルート工作が終わるのを待ってじっとしているのはつらいものだ。トップにまか

せきりで自分は一步も動けないのがもどかしく、折から湧き上がってきたガスに、時間切れにならないかなどと余計なことばかり頭に浮かぶ。それでもフィックスは着実に伸び、岩のインゼルから一部ザラメ状になって足を踏み入れる度に崩壊していく破砕帯のような箇所を過ぎれば西稜のジャンクションピーク。もはやザイルは要らない。ピークは目の前、3つ目のポコだ。水川と榎原が入れ代わりたち代わりラッセルして行く。上月・野口・大西が遅れて続き、最後尾を奥山が締める。3つ目のポコに達してアンザイレン。雪庇を踏み抜かぬようにピークを探す。

午後1時20分。もうこれ以上高い所はない。登り切ったのだ。すぐさまC2のレッドアローズ（注Ⅱチームの呼称）とトランシーバー交信。各自、喜びの声を伝えてはテープに録音。残念ながら視界は利かずパノラマも望めないが、レモンティーで祝って記念撮影。皆、押さえていても自然と笑みがこぼれる。30分ばかり頂上の空気を満喫して下りにかかるが、何か名残惜しく足も進まない。記念の石を拾い、2次アタックにそなえてフィックスをチェックしながらゆっくりと下る。日も傾き、だんだん冷気が忍びよるにつけ、ようやくピッチも上がり、C3帰幕は午後7時。今夜は最

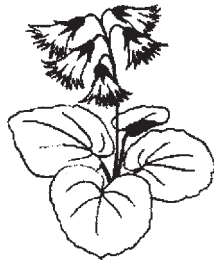
高の夜だ。

翌日は朝寝。ぐっすり休養をとってレッドアローズと交代。「すべり台」でぶつかり、健闘を祈って別れる。イエローサブマリンとブルーインバルス（注Ⅱ同）はC2のテント1つを撤収してC1へ。

7月13日。午前5時。2次アタック出発。メンパーは松尾・大石・佐藤・宮田の4人だ。フィックスは頂上直下までベタ張り、安全かつ時間的にも格段に速い。しかし自らの手でルートを拓き、1次アタックで登頂したいのは誰とて同じ思いであろう。それも誰が1次でなければならぬというわけではなく、単なるロイテイションの巡り合わせとなればなおさらである。不運というしかないが、そのことを口に出して言う者はいない。むしろ素直に祝福し、健闘を祈り合える。そんな仲間を誇りに、又有難く思う。

午前11時。2次隊も遂に頂上到着。世の中、結構平等にできている。残りものには福があるのとえ通り、今日は昼になつてもいっこうにガスが湧かず、空是一片の雲とてない上天気だ。ナンガバルバット他カラコルムの様々な高峰が見渡せる。パノラマを写真に撮り、1次アタックと同様にトランシーバーで感想を録音。聞いているのはC1の6人。全員が登頂できたことが

何よりも嬉しい。後は慎重に下るだけだ。
(1986年刊・登山隊報告書より。この記録は非
常に膨大なものなので、アタック記録だけを再録する
とともに、一部、順序を入れ替えた)



イワカミ

第3部

山岳部いまむかし

若手会員座談会

「大学山岳部はどこへ」

大学山岳部が存続の危機に立たされている。若者のレジャーが年々多様化するなか、山岳部に入ってくる学生が少なくなっているため、大学によっては部員不足から休眠状態のところも出ている。阪大山岳部も例外ではなく、慢性的な部員不足がもとで、山行日数の短期化、初歩的なミスなどが目立っている。大学山岳部の現状と今後のあり方について若手OBに話し合ってもらった。

△出席者△敬称略▽

光永 正樹（1995年理学部卒）

加門 洋一郎（1998年基礎工学部卒）

卯城 鉄平（1999年理学部卒）

△司会△高田 邦雄▽

（2002年3月24日、阪大工学部会議室で）

——現役山岳部の弱体化が目立っている。今年の春山について、2泊3日の八ヶ岳しかやれないというのはさ

びしい限りだ。この現状をどう見るか。

卯城 今の状態じゃ、しょうがないかなあ、と思います。結局、僕らの下の学年がつかなくなかったんです。

僕が4年の時、新人が2人入ってきました。医学部山岳部からも数人が合流してきて、トレーニングもかなりやっただんですが、彼らにしてみれば厳しかったのか、みんな逃げ出しちゃって。あの新人2人が残っていてくれたら、加門君たちにもうまくつなげたかもしれないと思うんですけど。

加門 医学部の連中も、やる気のある者もいたんですけど、続かなかったですね。こちらの支援態勢もよくなかったのかもしれないけど、一緒に山に登っていても、何か隔たりがありました。そういうことで、僕らの時代でさえ、すでに部として形をなしていなかったから、今の連中はかわいそうですよ。

卯城 OBとして、もう少し積極的に入って行ってもよかったですかなあ、と今は思っています。しかし、「バックアップするよ」と言っても、現役の方から何も言っていなかったし、僕自身も現役時代はOBにいろいろ言われるのはいやだったですね。

光永 少し時代が違うけど、僕らの現役のころは辞めるやつはあまりいなかったね。リーダーに代表されるよ



うに、「山登りはこうあるべき」とか、「ビシビシ厳しくやらないといけない」とか言う者がいた半面、そうじゃない人間もたくさんいた。そういう中で、ほんわかムードというか、悪く言えば、なあなあでやっていあって、そうじゃない人間も続けられたんじゃないかと思う。

加門

結局、人員の問題ですよ。今の時代、毎年毎年、

きちんとメンバーがそろってやれるというのは無理ですよ。それでなくても部員が少ないんですから。僕らの時も3、4人で登ったこともありましたが、そうなると、よほど気が合わないと、山行を続けるのは難しい。それと、少し話がそれますが、近年、山に雪が少なくなっただのもレベル低下につながっていると思います。冬山なんかでも、ラッセルを予想して行ってみたら、

山岳部の現状について語り合う若手会員。左から光永、卯城、加門の各君

雪が全然なかったりして。

——部員数が少ないということだけど、最近では、やはり入ってくる者が少ないということなのか。

卯城

入ってくる者がいないということはないが、ハイキングの延長でとらえられることもあって困るんですよ。山岳部でやってるような山登りというのは、1年、2年とやって、いろいろなことを覚えていくうちに段々おもしろくなるものんだけど、そこまで行かないうちに辞めちゃう。だから、本当におもしろいところまではいってないだろうと思うんです。やはり、山を楽しむにはある程度の蓄積が必要ですよ。

結局

世の中が豊かになり過ぎて、山岳部というのが、若者の選択肢の中になくなってきているんです。アウトドアまでは行くんだけど、せいぜいハイキング止まりで、そこから先には行かない。そんな厳しいことやると、ほかに楽しいことはいくらでもあるって感じですね。ワンダーフォーゲル部なんかも、以前は「部員が増えすぎて困っている」と言っていたのが、最近はずごく減っているようですね。

加門

いつ事故で死ぬかもしれない部に誰が入るかということです。僕だって、初めは何もわからずに入っただ、先輩に連れて行ってもらううちに、山ってきれいだ

なあ、いいなあと思うようになり、何とか続けられた。その点では感謝しています。しかし、リーダーを引き継いで院生になったあと、次のリーダーをやる部員がいなために、2度目のリーダーをやらざるをえなかったのは計算外でした。

卯城 厳しさという点では、今の現役にしても、自分では厳しいことをやってみようというつもりですけど、

あの時

1957年昭和32年

の冬山は、厳冬期赤牛岳登頂と、我々新人6名のための槍平合宿であった。赤牛隊8名は大野間沢経由で双六に入り、新人隊は、前半は赤牛隊のサポートをし、後半は槍平小屋で指導を受ける計画であった。

X食料係長は中央市場へ行き、赤牛隊用として5^キはあるのかという牛肉の塊を購入した。新人用としては魚肉ソーセージを選んだ。牛肉は注意深く運ばれ、宿舎である飯場の軒先の雪の中に安置された。そして、この牛肉の塊を大野間乗越までポツカする大役に新人のH君が指名された。

2日後、大野間沢に入り、前日のトレースが終わると、雪は股から腰に達した。雪崩の恐怖におびえつつ、黙々と、ラッセルを続けた。急傾斜帯に入ると雪は胸に達した。12時

牛肉の塊の行方

から見ると、そうは思えない。本当は、厳しいことを段階を踏んで積み重ねていく中で、山登りの楽しさが分かってくると思うんですけど。——光永君は社会人山岳会のメンバーと一緒にマナスルへ行つたよね。大学山岳部と比べて、彼らの山登りはどう違った？

間の奮闘の後、大野間乗越に到着、サポートも遂に終わった。昼食をとザックを下ろし始めた時、食料係長の悲鳴がとどろいた。H君のザックにある筈の牛肉の塊がないのに気付いたのである。あろうことが、H君はけさ牛肉を掘り出すのを忘れたのだ。

○リーダーの出した結論は、計画は予定通り進める、牛肉は取りに戻らないという妥当なものであった。新人達はその日の昼食用に持参した魚肉ソーセージを、せめてもの穴埋めにと提出した。

12日後、厳冬期登頂に成功した赤牛隊は無事下山。一方、新人達は、赤牛隊の「置き土産」の牛肉の塊をひっそり槍平へ。そして、ステーキや肉入り雑煮に舌鼓を打った。この訓練にはB、S両先輩も参加してくださったが、先輩方曰く、「おまえら、ええもん食うとるなあ。」

(玉井 康雄)

の登り方をよく知ってるという感じでした。僕も山岳部で一通りやつてたつもりだったけど、レベルが違いました。歩き方一つとつても、同じペースで2、3時間歩き続ける。山岳部だと、遅れる者のペースに合わせるんだけどね。キックステップなんか1時間も2時間間も続けて平気で、完全に実力主義の世界でした。僕は、最終キャンプの少し先、7600^ノあたり

まで上げてもらいましたが、実力が違い、自信を失うくらいでした。

卯城 大学山岳部だと50分歩いて10分休みが普通だけど、やはり社会人は意識が高いですよ。実は、クライミングをやってる高校生で山岳部に入っている連中が結構多いんですが、そういう連中が大学に、またウチに入ってくるかは疑問ですね。今、いちばん元気なのはフリーターなんですから。意識も高いですしね。

——大学山岳部のあり方ともからむが、では、こういう少ない人数の中で、どういう山登りをめざしているんだろういいのか。また、このままで大学山岳部は続いていくのかという点についてどう思うか。

加門 僕は、続いていくとは思わないですね。人数が少ないのであれば、一人ひとりが強くなるしかないんですけど、今のままでは存続さえ危ぶまれますよ。

卯城 比較的元気にやっつる大学山岳部の場合、一人ひとりが別々の目標を持っていて、同好会のようになっている例もあります。集まっている方がメリットがあるというんです。それに、僕の知っている同世代の連中の中には、大学山岳部に所属しながら、実質は社会人山岳会で行動している連中も多いですね。

光永 山岳部のあり方は基本的には現役が考えること

だが、山登りって楽しいんだから、できるだけ大きな山行を経験してほしいね。1週間以上の合宿とか、長い縦走とか、大学山岳部でしかできない山行を楽しみ、入部してきた時の思いに近づけることが大切じゃないかな。その点、リーダーは、こういう所に行きたいとか、自分の持っているものを、分かりやすく部員に説明してやってほしい。今は、思っていることと、実際にやっていることにギャップがあるように思いますね。



ツバキ

思い出の人々

半世紀におよぶ阪大山岳会の歴史を振り返る時、会今日は多くの先人たちの努力に支えられていることを忘れることができない。記念誌をまとめるに当たり、惜しまれながら世を去った先人たちの思い出を会員諸氏に寄せてもらった。(順不同、敬称略)

篠田 軍治 (1990年死去、元会長) 剛秘めた山岳会の父

大島 輝 夫



篠田軍治先生は、わが大阪大学山岳会の父であり、また日本山岳会の戦前から続く唯一の支部である関西支部の戦後復興の母であった。温厚な性格であったが、内には剛を秘めておられるようであった。

今の千葉県船橋市に1904年(明治37年)に生まれ、

旧制東京府立第三中学校(今の都立両国高校)時代から北アルプスに登られていた。20年9月、旧制松本高等学校に入学し、発足直後の同校山岳部で積雪期登山もされた。京都帝国大学理学部物理学科卒業後、同大学工学部冶金工科大学院に進み、29年に阪大の前身である大阪工業大学に助教として着任され、学生と共に登山をされた。現在のX線による表面分析の先駆的仕事をされ、日本応用物理学会会長、日本学術会議会員をされ、74年には勲二等瑞宝章を授与された。日本山岳会には41年に入会され、89年には名誉会員になられた。

先生の山歴 旧制中学時代の登山については、故日高信六郎氏(日本山岳会名誉会員)の著書『朝の山 残照の山』(1969年発行)の中の「中房温泉の日本アルプス登山者名簿」に「大正9年(1920年)7月 東京府立第三中学校山岳旅行隊十名のなかには船橋町の篠田軍治氏(本会評議員)があり」とある。昔、先生に「大正池のできる前の上高地をご存知ですか」とお聞きしたところ、「ちょっとのところで見られなかった」との返事であった。大正池は、先生の旧制中学入学の前年、15年に焼岳の噴火によって梓川がせき止められてきたのである。松校時代の登山については、かつて先生と一緒に確か猿倉からスキーで降りた際、「積雪期に、このような大木の周りにできた空

洞で一夜を過ごしたことがある」との話を伺った。

日本山岳会関西支部 故梶本徳次郎氏の話では、戦後、関西支部を復興しようとした時、阪大に山の好きな先生がいると聞いて、野田の工学部に支部長就任をお願いに行ったとのことだった。先生は月一回の委員会には必ず出席された。この頃のこととは本会発刊の『追悼 篠田軍治』に太田敬氏が書いておられる。

マナスル 日本山岳会のマナスル登山に際し、先生は川崎航空機（現在の川崎重工業）と酸素吸入器の開発をされた。隊員の選考についても関西支部から出すよう努力され、関西学院大学の学生であった藤木高嶺氏に日本山岳会に入って立候補するよう勧められたが、藤木氏が朝日新聞社に入社し、マナスルは毎日新聞社の後援となったので、これは御破算となった。先生は、阪大の徳永君だけを推薦したのでないことを特記しておきたい。

ナイロンザイル事件 この件については書くべきことは多いが、ここでは一つだけにする。蒲郡での実験の直後に、立ち会った登山具商に聞いたところ、「ザイルがあんなに簡単に切れるとは思わなかった。もう怖くてザイルは売れませんわ」と言われた。この方は今でも篠田先生は登山用ザイル開発の功労者だと言っておられる。日本山岳会が先生を名誉会員に決定した時、会員らから

取り消し要求の手紙が当時の山田会長宛に寄せられた。山田会長からこの問題の処理を依頼された藤平副会長は会報550号（1991年）を増刊号として発行された。この時、私は多くの資料を調査して見解を執筆したが、これは藤平氏が手を加えられたものである。取り消しを要求した方の中には、この増刊号を読んで「わかりました」と山田会長に手紙を寄せた方もいる。

阪大山岳会は最近、海外遠征も途絶えているが、再び遠征隊を送り、先生の墓前に報告したいものである。

（1949年理学部卒）

水野 祥太郎（1984年死去、元会長）
妥協排した多忙の人

住 吉 仙 也

先生は実に多忙な人だった。77歳で亡くなられたあとでも、墓前で「心安らかにお休み下さい」と言ったら、「何を言うんだ。僕にはまだまだしなくてはならないことがある。忙しいんだ」と怒鳴られるだろう。診察、手術、回診、講義、会議、原稿等々、文字通り、寸暇もない日常。これが整形外科ドクター、水野の毎日であった。

私が先生と面識を得たのは、1959年のヒマルチュ



り遠征後で、「登山家の水野祥太郎」としてお付き合い
いただいた。次いで63年、外科を破門になった私は、先
生の誘いで改めて阪大整形外科に入り、医者としても教
えを受けることになる。医学における先生の姿勢は、登
山におけるのと全く同じであった。進歩的、積極的、独
創的、理論的、国際的と言えようか。強いて相違をあげ
るなら、登山と医学の質的な違いから、登山では青年期
に、医学では壮年期以後に花開いたと考えられる。若い
時の先生にとつて、日本の登山界はまだ揺籃期にあった
故に、のびのびと信念を実行されたであろう。しかし、
医学においては、すでに出来上がった組織や習慣があつ
た。しかも、先生は、それが多分に因循姑息なものと思
えておられた。組織につきまとう制約や波風を立てまい
とする処世を嫌い、妥協を許さぬ先生にとつては多くの
壁と敵があつたと思われる。登山の場では、いつもニコ
ニコされていた笑顔の奥には、医学における孤独が隠さ
れていたに違いない。

医学教育、研究での厳し
さは、若い医者にとつて叱
咤激励というより、恐ろし
いと感じた者も多かった。
国際的であれ、慣例に流さ

れるな、オリジナリティーを持って、寛容と沈黙、怯懦を
はき違えるな……。1967年から数年間は、アフガニ
スタンのカーブルに整形外科チームを派遣された。その
頃出版された『砂漠の国の病院で』（朝日新聞社刊）
の一部を引用させていただく。

「海外協力の道を本格的に歩くことは、相当の困難も
あり、一見ムダと見えることもあるかも知れない。しか
し、これは大国日本が当然ふんでいき、登つていかねば
ならない、ひとつの階段なのである。そういう確信のも
とに、私は歩いていったつもりである」

「世界の低開発国においても、いままでのように世界
から孤立した日本にありがちな、あの独善を振りまわし
たのでは、相手にしてもらえなくなっている。医学の世
界でも、すべての分野が、欧米にたいして一対一で応接
できるものでなければ勝負にはならない」

先生の「人の足」に向けられた興味、研究は若い時か
らである。卒業して外科教室に入られ、出張で帝人病院
（三原市）に勤務の頃、すでに論文を発表されている。ま
た、自分の理論に基づいて登山靴を靴屋に作らせ、自身で
テストされたことは、山の古い友人周知のことである。大
学にあつても地方病院にあつても、その時の教授の指導に
よるものではなく、自分独りで選り、ライフワークの一つ

と定め、生涯にわたって研究を続けられた。その対象は、人だけでなく、比較解剖学として他の動物の足にも向けられた。絶滅した恐竜の足は、その股関節と共に、あの巨大な体重が負荷されるので、この上ない興味の対象になり、恐竜については古い歴史と共に精通されていた。

葬儀の日、このライフワークの一つが『ヒトの足、その謎にみちたもの』（一般書）として上梓されたことは先生の面目躍如たるものであり、私は不思議な感動を覚えた。ご逝去後、神戸・御影のご自宅に伺った。最も初期の市営住宅で、狭い部屋であった。医書はほとんどなく、原稿、資料、スライド写真のファイルに囲まれて、老年になってマスターされたワープロの新鋭機が静かに置かれていた。

(1954年医学部卒)

徳永 篤司 (2000年死去、元会長)
情熱と沈着さに敬服

加藤 幹 太

少年時代からの友人であった徳永篤司君は、多才な人物であったから、将来何をして成功するであろうとは思っていたが、山に対する情熱を持続させて一流の登山

家に数えられるようになるとは考えていなかった。おそらく、佐谷健吉氏との出会いが、彼のその後に大きい影響を与えたと思う。



浪高山岳部の先輩である佐谷氏は、海軍より復員して間もなく、私たち(徳永、家田、加藤)の前に現れた。今西寿雄氏は復員が遅れていて、佐谷氏は浪高の若手現役をしごくために出てきたのであった。この鬼軍曹のような佐谷氏(実際は大尉)の山登りは過酷で勇壮なものであった。

1946年(昭和21年)10月の平川沢二本松尾根登攀に初めて同行した私たちは、猛烈な急傾斜のブツシュウの中で繰り返し「木登り」をさせられた。雪に押さえつけられたブツシュウは谷に向かって斜めに生えている。靴は枝で滑り、顔は傷だらけになった。とにかく真っ直ぐに、困難を排して直登する人だった。その佐谷氏の山への情熱が48年1月に徳永と二人で鹿島槍北壁のラッシュアタックを成功させることになり、徳永は佐谷流の後継者となってゆく。

徳永の企画力と実行力、さらに外交手腕などによって

阪大山岳部という全学組織が出来上がり、関西学生山岳連盟も復活した。篠田先生のご指導もあり、優秀な部員が顔を揃えてきた。冬の白馬主稜完登とか後立山逆縦走とか記録に残る成功に、徳永はリーダー、指導者として活躍した。私も何度か、これらの山行に参加したが、あまり書かれていない思い出を記しておく。

55年頃と思うが、夏に北岳バットレスを徳永と二人で登った。第1尾根と言っていたが、正確にはよく分からずにいる。おそらく登られていない岩壁に取り付いていた。私がトップで、オーバーハング気味の岩をもてあまして進退きわまつてしまった。

「落ちるかも知れんぞ」と徳永に声をかけると、彼は「落ちてこい」と答えた。しかし、彼の足場も怪しいもので、私は必死の思いで手の力でよじ登った。何度か危ない目に遭っているが、自分が落下する覚悟をしたのは初めてであった。そして、彼の沈着さには常に敬服に値するものがあつた。

卓越した外科医でもあつた徳永は「思い出の人」になつてしまった。阪大山岳会の親分のおうであつた彼の存在は、忘れ得ぬ人として長く人々の心に残るであろう。

(1952年理学部卒)

恩地 裕 (1988年死去、元山岳部長)
現役相手に痛飲も

大工原 恭

恩地先生は、篠田軍治先生の後任として1967年4月から、79年3月に香川医科大学副学長として転任されるまでの12年間に、第2代の山岳部長を務められた。



65年に奈良県立医大から、母校の阪大に新設された麻醉科教授に就任され、山岳部長を依頼された頃は、日本初の救急救命センターである特殊救急部新設の仕事で非常にお忙しい時であつた。しかし、篠田先生から

「中之島にいる者は恩地部長の下働きをするように」と言われて、私が教授室に伺つた時は、「篠田先生に頼まれては仕方がない」とおっしゃりながらも、満更迷惑でもない顔付きであつた。何しろ、山に登るために松本高校に進学したといわれ、篠田先生とは先輩後輩の關係にあつた。後で知つたことだが、松高時代に積雪期の前穂

写真は、病院の案内カウンターに座る恩地院長。1984年12月、朝日新聞に掲載された。

高東壁初登攀の記録を持っておられたのである。

そんなことで、山岳部の用件が出来ること、教授室を訪ねることになった。教室では大変厳しいことで有名であったから、なぜ歯学部若造が大きな顔をして教授室に入りにできるのか、不思議がった教室員も多かったと聞く。用件の大半は合宿計画や報告書に目を通していただくことであつたが、ワープロなど無い時代で、手書きの原稿である。先生は「もっと字を丁寧書くように」と小言を漏らされながらも、きちんと目を通され、細かく添削して下さつた。お酒がお好きだつたようで、時間がある時は新人歓迎合宿などにも参加して下さつた。そんな時、現役と大いに飲まれ、そのあと宝塚のご自宅まで押しかけた悪童どもが遂に先生を酔いつぶれさせて、奥様にまでご迷惑をかけてしまったこともある。

忘れられないのは、先生が山岳部長の間に起こつた2回の遭難事件である。その時のことは「時報」19号に追悼文として書いたが、いずれの場合も先生は右往左往する私達を指揮してテキパキと処置を進めて下さつた。1回目の事件は先生の予言通り、翌日には全員が無事下山して事が済んだが、2回目の第4次P29遠征隊の時は渡部洋君とハクパ・ツェリンを喪う結果となつてしまった。特に、この第4次隊は、資金集めなどを含めて全面的に

ご支援頂いていたから、ご心痛も大きかつたに違いない。その時、「もう山岳部長を辞めたい」とご家族に漏らされたそうである。大変な御苦労をおかけしてしまつて、今でも申し訳なかつたと思つている。

香川医大に赴任された後、ゴルフを始められ、ハンデイ18まで腕を上げられたとのことである。先生は香川医大附属病院長として現役のまま68歳で亡くなられたが、もしお元氣であつたなら、夏の白馬集会にも参加され、ユーモアを交えた毒舌でOB連をチクチクといじめながらゴルフを楽しまれたに相違ない。

(1963年歯学部卒)

山田 朝治 (2000年死去、元山岳部長)
気さくで大きな人物

金 谷 明

山田先生と初めてお会いしたのは、山岳部3年、サブリーダーの時でした。前任部長の恩地先生が香川医科大学に転任されるにあたり、後任として紹介される山岳会総会の場だったと記憶しております。精密工学専攻の、学内で力のある方と聞いていましたので、ご挨拶する時は大変緊張しました。しかし、お話しさせて頂くと、非常に

気さくで、関西弁丸出しのいいおっさんというイメージが
びつたりの方でした。



年度が替わって1979年
度に私がチーフリーダーに
なるとともに、接する機会が
増えました。私のいた土木工
学科と精密工学科とは建物
が隣同士とあって、頻繁に伺

っては山岳部の活動状況を報告したものです。報告に上がる
日の夜は常にフリーにしています。というのは、今は立ち
退きで無くなっていますが、お初天神脇の居酒屋街の1軒、
元タカラジエヌ（元と言っても大元）が一人でやっている
店に頻繁にお誘い頂き、閉店までしたま飲ませて頂くこと
が多かったからです。その際、お聞きした色々な人生訓、失
敗談等は今の私の生き方に大きく影響していると思います。
年輪的にも息子のように思っ接して下さったのではないで
しょうか。

プライベートなことでも大変お世話になりました。当
時、私は部活動を熱心にやりすぎたせいで、10月1日の
就職解禁日には卒業単位が足らず、ほぼ就職をあきらめ
ていました。10月中の前期試験でほぼ単位をクリアして、
やっと卒業できる見込みとなりましたが、すでに企業の

採用活動は終わっていたのです。先生は、そんな状況を
知ると、私の担当教授に今からでも採用してくれること
ろを探してやってくれとお願ひして下さり、無事就職で
きたわけです。後年、その教授と会った時、山田先生に
頼まれば動かんとしやあない、とおっしゃっていたの
を聞き、改めて先生の大きさを感じました。
世代を超えて、大きな方と親密に接することが出来た
のは自分にとって貴重な財産だと思ひます。
(1980年工学部卒)

丸山 与兵衛（1980年死去、対岳館初代館主）
後立山開拓支えた名ガイド

加藤 幹 太

私が初めて細野を訪れたのは1943年（昭和18年）
夏だった。戦時であったが、山好きの人たちはひそかに
北アルプスなどを登っていた。浪高尋常科4年だった私
と家田、徳永の3人は、1年下の小川八郎君を加え、雫
石先生をリーダーに鹿島槍をめざしていた。私にとって
は山岳部に入って初めての山行で、細野から、白馬三山
をはじめとする後立山連峰を眺めて、心は躍った。

当時の細野は典型的な北国の農村であった。与兵衛さ



ん宅は農業のほか養蚕もしておられ、与兵衛さん自身は確か村役場に勤めておられたように思う。家族は奥さんと庄司君ら子供たち、それに母上のオババが健在であつた。残念ながら私自身は与兵衛さんと山行を共にしたことはないが、浪高山岳部の多くの先輩が与兵衛さんをガイドに後立山の開拓に幾多の成功を収めた。盛岡

英治郎、中村英碩、今西寿雄、佐谷健吉さんたちである。

与兵衛さんは、温顔の中に精悍な信州人を思わせる美男子であつた。私は何度も細野へ行き、スキーや山登りを楽しんだが、対岳館に泊まっている時、スペインジョ（藁ぐつ）を履いてサブリュックを負い、くぐり戸を開けて入って来る姿に、山男の片鱗を見た思いがした。

戦後まもなく、浪高山岳部関係者が与兵衛さんを大阪へ招き、何人かの家に泊まってもらったことがある。私の家へも来てもらつて歓談できたが、その際、私の父と話が合つて、酒を酌み交わしながら夜遅くまで楽しんでおられたことも懐かしい思い出である。

雫石先生はかつて、古い農家の頃の細野をしきりに懐かしがって「細野二世（庄司くんの世代）は、少年時代

の細野、あの煙い囲炉裏端と馬屋の藁の臭いとを覚えているであろう。だが、成人しつづつある三世の人たちに至っては細野が農村であつたことも忘れてしまうのではあるまいか」と述べておられた。同感である。しかし、旅館街に変貌したことも、細野にとっては祝福すべきことであつたに違いない。浪高と阪大の対岳館との長い付き合いには与兵衛さんの存在は大きいものがあつた。

（1952年理学部卒）

家田 千尋（1970年死去）

忘れられぬ実践的指導

川 島 勇



家田さんは、私が初めて本格的な登山指導を直接受けたリーダーである。

1950年4月、阪大に入り、山岳部に入部後すぐ、道場・百丈岩でのトレーニングキャンプ（総勢9名）に参加した。家田リーダーは、大柄ではないが、色浅黒く、精悍な風貌だった。キビキビした動きと指示でトレーニングを取り仕切つてい

て、練達の山男という印象を受けた。5月の春山「槍より燕へ縦走」(リーダー家田、6名)にも早速、参加させてもらった。5日目、雨にやられて、燕の手前で私が動けなくなつた。4名を先行させ、家田リーダーは私と共にビバークした。その時、意識が薄れかかる中で、家田リーダーの叱咤激励の声を聞いた記憶が残っている。翌日、仲間に支えられて燕山荘にたどり着くことができた。これをはじめ

めとして大小の山行を共にし、登山技術と、山行の厳しき、楽しさを教えてもらうことになる。52年春山は「小日向より不帰往復」という阪大山岳部初の極地法登山であった。事前の周到な準備と家田リーダーの強力な指導の下に、積雪期の稜線上にC3(天狗池)を設置し、不帰を越えて唐松岳登頂に成功した。アタックの任務は故・尾藤昭二君と私に与えられた。51年

あの時

1956年(昭和31年)

1月の冬山合宿(双六―鷺羽)の撤収の日、私はス

キーの不調から、みんなより遅れて栃尾に下山、午後2時発のバスに一人で乗った。バスが動き出して約30分、蒲田川に沿って走っている時、突然、体が宙に浮いたようになって座席から放り出された。バスが急カーブを曲がりきれず、10以下の雪の河原に転落したのだ。意識が戻るまで多少の時間を要したと思う。手の指から順に動かしてみても手足には異常がないことを確認した。頭と腰は強打したようだったが、出血は鼻からだけであった。下校中の小学生4人をはじめ他の数人の乗客にも重傷者はいなかった。とにかく脱出をと、横倒しになったバスの割れた窓ガラスの破片を取り去り、そこから順に脱出するのを手伝って、道路まで登った。雪まじりの強い風が吹き付け、道路も凍っていた。近くの飯場に

バス転落のあとで…

入って焚き火をし、待つこと約1時間、通りかかったトラックに乗せてもらい、6時に船津に着いた。しかし、高山行きの最終バスは出たあとで、バス会社の用意した宿に泊まることになった。

案内された宿はこぎれいな新築で、掘り炬燵のある立派な部屋に通された。ほどなくバス会社の出張所長という人物が来て、「費用は会社がちまますので、どうぞ、こゆつくり」とのこと。おかげで、たつぷり湯につかり、美酒とご馳走を楽しんだのであった。それから3週間の悪天候と寒さと飢え、つい先ほどのフィナーレとも言うべきアクシデント、すべてが幻の彼方へ消えていきそうな夜であった。帰阪してしばらくの1月26日、徳永篤司氏のマナスル速征壮行会が美津濃の地下食堂で開かれた。この話をしたが、みんな半信半疑の様子であった。(西川 元夫)

夏のカクネ里合宿(リーダー家田)には参加できなかったが、翌年夏の2回目のカクネ里合宿(リーダー尾藤)には、家田さんらによるカンパのおかげで参加することができ、山本光二君と中央ルンゼ第4登、故・坪井君と直接尾根初登のチャンスを与えてもらった。54年の卒業以後、私は遠く北海道に離れていて、その地で家田さんの訃報を聞くことになった。85

年夏の梅池集会のと、故・徳永会長に連れられて登った遠見尾根の「家田の地蔵」の前に立った時は感無量であった。振り返ると、旧制浪速高校山岳部の理念と技術は、徳永・加藤・家田各氏によって阪大山岳部にもたらされ、家田さんの実践的指導によって次代に伝えられたのではないかと思う。

(1954年工学部卒)

尾藤 昭二(2001年死去) 前向きで几帳面な先輩

宍戸 元



現役時代、山岳部員で医学部第1外科に入局した者が何人かいた。徳永、尾藤、坪井の各先輩、後輩では兵庫医大の豊坂らがいる。そんな我々にとって20世紀末からの3年間は何ともいえない時期であった。1999年に坪井、2000年に徳永、2001年には尾藤の3先輩がこの世を去っていった。学生時代以来、いつまでも若いと思いついてきた我々も、もはや若くは

ないことを鮮明に知らされる出来事だった。

2001年3月の尾藤さんの葬儀には多くの参列者があった。その中から誰言うともなく「次は宍戸だ」という声が上がった。山岳部から第1外科と同じルートを歩んだ者に対する単なるつじつま合わせだったのだろうか、こればかりは簡単につきあえるものではない。

海軍経理学校、旧制大阪高等学校にも在籍した尾藤先輩は、実際の年齢よりも、何でも相談に乗ってもらえる兄貴という感じだった。1954年の春山、第1回の積雪期の下の廊下は、尾藤さんの現役最後の山行だったが、本流を見るまでもなく失敗に終わった。帰りの中央線では、夜汽車の通路に座って話し込んだ。この後、私がチーフリーダーを引き受け、積雪期の下の廊下横断を成功させることとなった。外科医としては、同じ第1外科でも先輩は脳神経外科、私は呼吸器外科と異なった分野で、手術のチームを組んだことはない。学会の共同演者になったこともない。54年の春山がパートナーとして行動出来た数少ない機会だったと思う。

大阪厚生年金病院に最後にお見舞いに行った時、「循環器系疾病は死期がわからない。しかし、(僕のような)腫瘍系の病気は死期がはっきりしている。自分なりの人生の幕引きが出来る」と言われ、返す言葉に困った。

その言を實行するかのように、亡くなる1年前に「私の雑文集」（A4版58頁）、「近江逍遙」（同171頁）を出版された。常に前向きに行動するだけでなく、平常から詳細な記録と整理が成されていた賜物だと思う。同じように、厚生年金病院の定年退職を契機に「大阪厚生年金病院脳神経外科の歩み」（同204頁）を書いている。24年間に脳神経外科の開設、3千余例の手術、その多忙な臨床勤務の中で100余例の論文を発表している。ライフワークの脳神経外科、山登り、趣味の世界と幅広く活躍された。敬服して余りある。

（1957年医学部卒）

坪井 圭之助（1999年死去）
強運でタフな同期生

川島 勇

坪井君は1950年に入学・入部した同年兵で、大小の山行を共にした山仲間の一人である。奇妙なことに、彼のことで真つ先に頭に浮かぶのは、山岳部の室室のあった医学部記念館屋上でのザイル作りの光景である。大久保OBの尽力で入手した長巻きの麻ロープを30日間隔に切断し、端末処理をして油をすり込み、鉄環に通して



しごく作業であった。また、入部直後の夏山合宿後の縦走では、針ノ木岳から白馬岳まで共に歩いた。クールではあったが、頼もしい山男であった。

51年春山「後立山逆縦走」にはサポート隊として共に参加した。針ノ木岳からスバリ岳への下りで黒部側の急斜面をトラバース中、彼が腐れ雪に足を取られて滑落した。幸い、小さなガレ場に止まったが、少しずれていたら黒部への深い谷に落ち込んでいただろう。強運の人である傷は軽く、加藤リーダー、大久保OBの適切な処置と治療で無事下山できた。52年春山は、家田リーダーの下で、阪大山岳部初めての極地法登山による「小日向より不帰往復」に成功した。この時の最終キャンプ態勢では、彼はC2に、私はC3にいた。52年夏山「カクネ里合宿」では、私とザイルパーティーを組んで直接尾根初登に成功した。彼の確実なザイルさばきと冷静な判断が成功につながった。53年春山、再度の「後立山逆縦走」では、彼はサポートB隊として八方尾根から鹿島槍に至り、針ノ木から縦走してきたアタック隊（住吉、川島）を迎えて唐松まで同行し、アタック隊の白馬までの縦走成功を確実なものにした。

54年、私は北海道に赴任し、坪井君とは遠く離れた。83年、大阪支店長として戻った時、歓迎してくれた山仲間が一人が坪井君であった。間もなく彼が心臓病で危ないと感じ、暗たんたる思いがした。驚くべきことに回復し、倉敷の篠田先生のお見舞いに一緒に参加した。その後の倉敷CCでのゴルフコンペではグロス93、ネット66の好成績で優勝した。タフな男である。

その後、私は東京に転じ、病も得て、彼と会う機会はなかった。99年8月、白馬集会で再会し、お互いの健康を喜び合った。しかし、その年12月、彼の訃報を聞くことになってしまった。

(1954年工学部卒)

佐藤 茂 (1993年死去)
忘れぬ異郷での出会い

玉井 康 雄

1969年(昭和44年)8月のカトマンズ空港。「うおっつ、タマイ!」と叫びながら、カラベル機から駆け降りてきたギョロ目の男。手には早くもピッケルを持っている。誰であろう、佐藤先輩ではないか。佐藤さんが毎日新聞の記者として日本山岳会エベレスト南壁偵察隊に

参加することは薄々聞いていたが、現地第3次P29隊の出發準備に追われていた中での思いがけない出会いだった。その後、同偵察隊から入った情報によると、同行した新聞記者がクライマーとして南壁に取り付きたがっていると評判だったそう。



初めて会ったのは57年4月、中之島の山岳部室でだった。どこかで見たことがあると思っていると、自分は一浪で、高校は灘高と自己紹介した。これでわかった。この一見異様な仏文志望の先輩の姿を同じ高校で見っていたに違いない。

66年7月、佐藤さんから突然、「どこかに行かへんか」と電話があった。黒四ダムサイト近くの平ノ小屋で1泊し、五色ガ原を経て立山の東面からダムに戻るといのが佐藤プランであった。この年は雪解けが極めて遅く、立山の頂に立って見ると、弥陀ヶ原は一面の雪に覆われていた。その日の宿は地獄谷の房治の湯で、夏山準備のため小屋の若い人たちも入っていた。夕食後は若い人たちも交えて歓談となり、佐藤さんの富山支局時代の話も飛び出すなど、気さくな人柄も手伝って楽しい一夜となった。床についてか

らは、ネパールの登山禁止令でストップしていたP29遠征について語り合おうち、眠り込んでしまった。

最終日は快晴で、立山頂上から内蔵助平へ向けてグリセードで飛ばした。途中、「猫の耳」の双耳峯が美しい地点で写真を撮ったり、スノーブリッジを慎重に渡ったりして黒部本流に出た。この間、約50分。本流を小さい吊り橋で渡り、ジグザグのトラック道を登ってダムサイトにたどり着いた。あとはバスで大町に出て別れを告げた。

P29遠征の後は互いに猛烈に忙しくなり、ゆっくり会うチャンスがなかった。やっと時間が取れそうになった中で、佐藤さんは我々を残して逝ってしまった。

(1961年理学部卒)

渡部 洋 (1970年死去) 冒険心豊かなロマンチスト

石 浜 高 明

渡部洋君(通称ワンタン)は1963年(昭和38年)に山岳部に入ってきた。学部は理学部で生物学科であった。私は1年上だったので、何度となく山行を共にしたものであった。彼と同学年の入部者も多く、多士済々で

あった。



高校時代は柔道部にいたとのことで、筋骨隆々たる体躯の持ち主であった。それでいて、鳴き声だけで鳥の名前を言い当てることができるなど、花鳥風月を愛でるロマンチスト、かつ快男児であった。音楽はビートルズの熱烈なファンで、テントの中でよくビートルズナンバーを聞かされたものだった。私は感性がなかったためか、ただ騒がしいとしか感じなかったが、「石ヤン(小生のこと)、ビートルズは20世紀最高の音楽家やで」と言っていた。まさしくそのとおりとなった。

確か、彼が2年生の時だったと思う。山岳部の仲間と黒部川の源流から黒四ダムまでゴムボートで溪流下りを成功させた。マスコミで報道されておれば十分話題性があったと思うが、写真を撮っていないだったので信憑性を実証することができず、公にできなかったのは非常に残念であった。彼はこのように冒険心に富んだ男でもあった。ヘミングウェイの「老人と海」も気に入っていた。巨大なカジキマグロを追いかける執念に深い感銘を受け

ていた。彼自身も決心すると最後までやり遂げないと気がすまない性格であった。これが彼をしてP29峰のサミッターにした所以であるような気がする。

最後に山行を共にしたのは、登頂前年の第3次P29峰遠征であった。さまざまな苦勞があったが、実に楽しい遠征であった。頂上に続く最後の氷壁で彼とアンザインして登行を試みたが、威圧的な壁に阻まれ、撤退を余儀なくされた。その下降時に私がスリップして滑落し始めた時、彼が身を挺して止めてくれたことは今でも鮮明に記憶している。もし、彼が健在であれば、それなりに名を上げていたであろう、大阪大学山岳会の歴史を飾る人材の一人であったらと思う。若々しいままの風貌がいつまでも脳裏に焼き付いている。

(1966年工学部卒)



欧州アルプスの山スキー・オートルート
シャモニーツェルマット間 辻川 眞

写真で見る半世紀



黒部川下廊下の主要部 別山
沢落ち口付近を望む。黒部本
流は雪崩で埋められ、流れは
全く見えない（1956年3月、
鳴沢尾根のC 2付近から）

1955年度冬山合宿
（双六～鷺羽）の
参加者。このメン
バーの大半が下廊
下横断にも活躍し
た（1955年12月、
大沼沢で、毎日新
聞の石野カメラマ
ン写す）





第1次P29遠征隊本隊が出発
(1961年3月10日、羽田空港で)

マナスル登頂報告会 立つのは徳永
篤司隊員。左隣は篠田軍治会長、右
隣は水野祥太郎氏(1956年)



第2次P29遠征隊壮行会
(1963年8月22日)



至福のひとつ
1961年8月、夏山合宿
後の縦走の途中、雲ノ
平で

新人歓迎キャンプ
1962年5月、裏六甲・
赤子谷で。当時は部員
がこんなにたくさんい
た

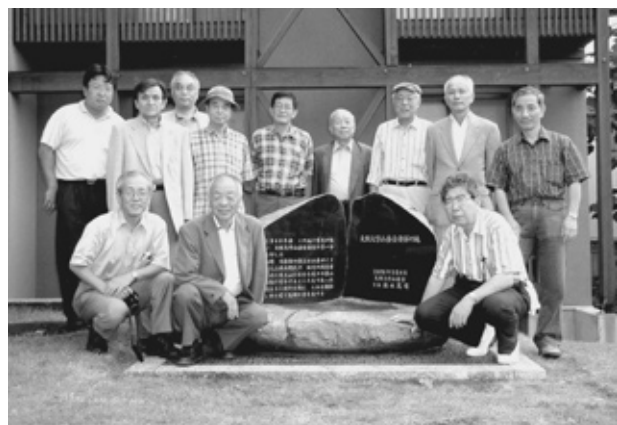


1963年3月、春山合宿
で蓮華温泉上部の雪原
に行くサポート隊



撤収の日 1964年7月、立山・内蔵助平での夏山合宿を終えて内蔵助山荘前で。中列左端に渡部洋君（P29登頂者）の姿も見える

1983年12月 冬山合宿
（横尾尾根～槍ヶ岳）
横尾尾根で



完成した50周年記念碑
早速、碑を囲んで記念
撮影（2001年 8月26
日）

思い出すまま

民族薬物学を考える

難波 恒雄

人生は正に塞翁が馬である。1954年（昭和29年）、大学を卒業して、何となく大学院へ進んだとき、修士論文のテーマが正倉院薬物の「黒黄連」の研究であった。2年間の悪戦苦闘の末、このものが現在でも漢薬市場にある「胡黄連」と同一物で、ネパールヒマラヤから中国雲南省西部の標高3500¹m辺りに生育するゴマノハグサ科の *Picrothiza kurroa* Royle ex Benth または *P. scrophulariflora* Pennel の地下部であることを証明した。今から1250年近い昔、ヒマラヤの高山帯の植物が遙々海を渡って日本にまで来ていたのである。大変な口マンを感じた。何時か、この植物の生育している所に行き、花を見たいものだという夢に駆り立てられた。

博士論文のテーマは附子・烏頭類の研究であった。この生薬は、毒草として有名なトリカブト類の地下部で、

当時、分類学的にはまだはつきりと整理されていない植物群であった。特に日本産のトリカブト (*Aconitum* spp.) は、分類が大変厄介な植物で、しかも沖縄を除いて日本全国に分布している植物である。3年間、毎年7月から10月の花期に、北は北海道の利尻山から南は九州の阿蘇、霧島山までの高原から高山へトリカブトを採集して廻った。そして日本産トリカブト属を新しく分類し、漢薬附子・烏頭類の基源を確定し、博士論文にした。大雪山の旭岳ではヒグマに出あったこともあったし、中国山脈では獣道に迷い込み、何度か野宿したこともあった。殆どが単独行であったから、事故が起きなかったのは幸運といえよう。

このような実績が63年のP29第2次遠征隊参加に繋がったのであろう。念願のヒマラヤでの薬物調査をする機会に恵まれた。この時の調査行では正に眼から鱗が落ちる思いをした。今迄大学で学んできた生薬学や薬用植物学が、このヒマラヤの地では全くといって良いほど役に立たなかった。と云うのは、我々がそれまで学んできた薬用植物は、ヨーロッパや中国の知識であったからである。ネパールヒマラヤの中部から東部地域は、植物分布的に日華区系に入り、日本の植物と非常に似た植物も分布しているが、その利用法が全く異なっていた。伝統的

或いは伝承的な薬物は、夫々の民族の文化遺産であり、その民族の居住している生活環境、生きざま等とも深い関係がある。それ故、薬物のフィールド調査を行う場合、単に薬物の調査だけでなく、それを用いている民族の調査をも兼ねて行う必要がある。言語、宗教、他民族との交流関係、生活様式など凡て薬物文化と関連しているからである。

民族薬物学という新しい学問のジャンルを思考するようになったのは、63年のヒマラヤ調査行からであった。その後、フィールド・ウイルスに感染したのであるうか、今日迄の約40年間に海外へ出かけた回数は130回近く（学会出張も含めて）、特にアジア、アフリカ等、国数で約35ヶ国、延べ2000日近くをフィールドで暮らしてきた。そのうちネパールヒマラヤへは11回、延べ400日近くになる。

地球上に生をうけた人類にとって、絶対真理である生と死の狭間に存在する老と病から如何にして逃避し、生き抜くかは大きな命題であった。人類は長い歴史の中で、老・病に対し試行錯誤を重ねた末、癒しの物質として食物や薬物を発見し、医療の法則を開発してきたのである。物質でない癒しの思想は宗教として体系付けられてきた。癒しの物質としての薬物は、19世紀の中頃まではすべて

天然三界の鉱物、動物、植物であった。特に現在では植物が80%以上を占めている。これら天然薬物は現在でも世界各地で用いられており、地域や民族によって用い方の異なるものもあり、一つの薬物文化を形成している。

こうした民族薬物 (*Ethno-medicines, Ethno materia medica*) は、長年の経験の積み重ねの上に得られた知識であって、伝統薬物と民間薬に大別される。文字を発明した民族は、彼らの体験を記録として残し、伝統医学 (*Traditional medicine*) としての医療体系を構築してきた。この伝統医学の理論に基づいて用いられる薬物が伝統薬物 (*Traditional medicines*) である。また、文字を持たない民族は、口伝により次世代へ知識を伝えてきた。こうした医療を伝承医学・民間医療 (*Folk medicine*) といっている薬物が民間薬 (*Folk medicines*) である。インドのアーユルヴェーダ (*Ayurveda*) や中国の中医学 (日本では漢方医学) で用いられる薬物は伝統薬物であるが、それらの医学理論に従わずに用いる薬物は民間的用法のいわゆる民間薬である。我々が民族薬物の調査を行うとき、現地調査以外に文献調査も一緒に行うのはその為である。世界は狭いようで広い。多くの民族薬物はまだ完全に調査されておらず、民族薬物学 (*Ethno-pharmacology*) の研究は、近代文明が世界中に行き亘る前に今後も早急

に続行する必要がある。既に幾つかの少数民族の薬物文化は消え去っている。今迄現地調査を続けてきて、こうした苦い経験を幾度か味わった。

最後に、こうした新しい学問を考えるきっかけを与えてくれたヒマラヤ行きを御支援下さった大阪大学山岳会の方々に感謝すると共に、後に続く有志の方々の出現に期待したいものである。

(1954年医学部薬学科卒、

元富山医科薬科大学名誉教授 2004年7月死去)

JAC 関西支部の山行

久保三朗

篠田軍治先生のご勧誘で日本山岳会(JAC)に入会したのは、阪大を卒業した年の1952年(昭和27年)だった。当時、先生はJAC関西支部長で、大島(輝夫)さんを紹介者という段取りまでちゃんとつけてくださったのお誘いであつた。ところが、皮肉なことに、世の中はその頃から高度成長の超繁忙時代になり、さる鉄鋼会社に勤めた私も、山登りどころではない生活を送らざ

るを得ないことになつた。

せっかく入れてもらったJACも阪大山岳会も全く、無沙汰、マナスルもP29も新聞記事だけ。ご承知のようにそれがようやく沈静したのは昭和50年代に入ってから進出先の神奈川から、更に茨城へ新工場を建てて移る計画が一転撤退となつて帰阪。そこへJACから支部活動へ参加しないかとお誘いが来た。JACは阪大OBにも会員が多いが、どちらかというと、かつて活躍された方のサロンのみでよしといった傾向の強い会(特に関西支部は)であつた。それが、やっぱり山岳会ならば自分達で山行を持ちましょうやという動きが始まつた時だったようである。

久しぶりに関西へ帰り、昔のあそこは、ここは、果たせないままのかしこは、と思い始めた私にはまことに好都合であつたので、喜んで加えてもらった。山から遠ざかつていた間の高速道路、林道、RV車などの発達は著しいものがあつたから、山行のはかどり方は昔に比すべくもなく、宿願を果たすこと次々。以降、現在に至るまで幾多の山行を楽しませてもらっている。

年月の経過は人の変遷も伴い、間もなく支部委員の委嘱を受け、お世話になるばかりではと、お引き受けして私も山行運営にたずさわるようになった。年齢の割には

戦前からの関西の山の文献や記事に多く触れていたし、古い方からの伝聞など不思議によく覚えていて、あまり人の行かない山も知っていた上、地図を読んで歩くことが得意だったから、山行委員としては適任だったのだろう。古くから持っていた本の中に、何かにつけて参考にした住友山岳会の「近畿の山と谷」があつたが、その

山岳会長の大島堅造氏が輝夫さんの御父君であつたのも有縁のことであつた。その山行委員もなかなか代わつてくれる人もないまま、今日まで、15年以上もつとめてしまった。この間、支部行事としての山行のみならず、参加者の間から自然発生的に出してきた、いわば有志山行でも方々へ行つたし、更に派生的に誕生したグループが会員外の人も加えて活動を始め、それに誘われての山行でも少なからぬ回を重ねている。

あの時

1969年8月28日夕、甲田吉彦君と私を乗せたトラックは、蒸し暑いカスカツの街を出発した。第3次P29登山隊の荷物を800^キ離れたカトマンズに運ぶ旅だった。日本なら1日余りの行程だが、インドではそうはいかなかつた。

2時間も走らぬうちにトラックは動かなくなり、パンクの修理。我々2人は助手席の隙間にやつと座れる状態で、運転席の上の幌入れが寝場所になつた。困つたのは運転手との会話。英単語を繋ぎ合わせればとの期待は裏切られた。数語しかないヒンディー語の語彙から「ジャルデイ(急げ)」を連発したが、日射が強くなると「ガラン(暑い)」と言って木陰に車を止め、てこでも動かこうとしない。甲田君が一計を案じる。「ボクシス(チツプ)を弾むから、ジャルデイ」

パトナ付近でガンジス河を横断。一面水浸しで、何台もの車がぬかるみに放置されてい

インド平原輸送記

る中を通過し、もうすぐ国境の街ラクソールという時、ガーンという大きな音がして車は急停止。助手君が脱兎のごとく来た方向へ走る。やがて外れたユニバーサルジョイント(駆動力を後輪に伝える連結部)を抱えて戻ってきた。

万事休すと青くなつたが、何とか修理できたくソールに到着した。しかし、まだ終わりはなかつた。普段は無表情の運転手が「約束のボクシスを」と、必死の形相で迫ってきたのだ。野次馬に囲まれ、値切つた額を渡そうかと思案している時、英語のできる紳士が助け舟を出してくれ、ようやく脱出することができた。

国境を越えたビルガンジで待ち受けていた三澤、牧野両氏の顔を見た途端、胸に熱いものが込み上げてきた。30数年を経た今も、この3日間のことはまざまざと思い出す。何かしかのボクシスを気前よく渡すのであつたという後悔とともに。

(黒田 治朗)

出てきた、いわば有志山行でも方々へ行つたし、更に派生的に誕生したグループが会員外の人も加えて活動を始め、それに誘われての山行でも少なからぬ回を重ねている。支部山行は「支部会員どなたでもお越し下さい」で考えねばならなかつたから、勢い、すべて控え目の設定にしなければならなかつた(特にスキー登山において)が、有志の方は精いっぱい(といつても年齢相応に

だが）計画できたから、爽りもまた大きいものがあつた。地域的にも支部山行は近畿一円を離れることはあまりなかったが、有志の方では因但、奥美濃は勿論、飛騨、信越から東北、北海道などへと相当な遠出もした。更に、ここ数年毎冬の、ヨーロッパ・アルプスの大きな山群見て歩きを兼ねたスキー行なども、この延長線上にあるものである。これではチロル、ドロミテ、ベルナーオーバーラント、ヴァノワーズ、ベルニナ等へ行っている。

体技的登山―情感的登山、あるいは冒険的登山―思索的登山という考え方があつた。登山をスポーツ分類でとらえるならば、表に立つのは前者であろう。しかし、心の内面の喜び、例えば、良い音楽に出合うような、そういう感動を求めている志向が登山には強くあつた。それが後者であろう。私の山行は初めからまさにこれであつた。それでこそ運動能力の衰えたこの年齢に至るまで、行こうという意思の源泉が涸れることなく続けて来られたのだと思う。

私の人生の後半も終りに近いが、篠田先生に入れてもらつたJACの舞台で、自分の性（しょう）に合った後者主体の山行を多数持てたことを幸せに思っている。

（1952年工学部卒）

女子部員の草分けとして

三 枝 礼 子

阪大山岳部に女子学生が入つたのは1952年（昭和27年）のことで、浜さん（旧姓井上）ら入部希望者3人がそろつて初めて山岳部の部屋に行つたような記憶がある。部屋は中之島の学生部の屋上にあつて、番小屋のような小部屋だつた。それまで私は、六甲山周辺で植物採集をしていただけで、山登りなんて全く知らなかつたのだから、どういうわけで山岳部に入ろうと考へたのか不思議である。

女子学生を入れることについてはOBや上級部員の間で相当議論があつたのだ――と、卒業後何年かしてから聞いた。とにかく日帰りのトレーニング山行に連れて行って様子を見ようという話にでもなつたのだろうか、ロックガーデンとか六甲保塁岩とか、仁川や道場等でのトレーニングにはいつも声を掛けて頂き、必ずくっついて行つた。たまたま、この年は初夏から初冬まで毎週のように岩登りトレーニングの計画があつた。

会長の篠田軍治先生やリーダーだつた方々はどれほどのお気遣いだつたことだろう、と今にして思うのである

が、その時は何もかも目新しく面白く、小学1年生が学校へ行くような感じで、ひたすら歩いて歩いてきた。毎週の例会にもたいてい出席した。そのうち、男子グループに紛れ込んでいることに慣れてしまい、他の運動部のように女子部をつくるということには全く思い及ばなかった。1年ばかり経つと、新入女子部員は事実上、私だけになっていた。

そんな状況だったため、積雪期の山も比較的早いうちから参加する結果になった。「手加減はせん」ということだったけれども、小柄な私と男子との体力差は歴然であり、リーダーをはじめ同行の方々からは、目立たない形で常にかかと手加減を頂戴していた。見かけは大きいが軽い医療品の箱とか、先に減っていく食料などの荷は、まず私に回ってきた。私は何食わぬ顔で、いっぱしの部員みたいに歩いてきたから、たまに飯場などへ立ち寄ると、そんなこととは知らない人々がびつくりしたように見ていた。

現役最後の山行は55年春の「鳴沢岳から黒部へ」だった。計画の途中、後立の新越乗越で、鳴沢頂上方面へ向かう隊と分かれて大町へ下山。入社式に間に合うように夜行列車で東京へ帰った。山岳部にはその後、新たに数名の女子学生が入ったが、私は東京で就職したため、山行を共にする機会はなかった。

東京の都心は、思いのほか山に近かった。日曜・祭日と往復夜行列車をうまく組み合わせると、上越、八ヶ岳、南ア、中央アをはじめ、東北の山々も射程距離内となる。篠田教授のお奨めに従って、卒業と同時に日本山岳会に入会したおかげで、間もなく先輩の方々の山行のお供に加わったり、数年のうちには東京勤務の阪大山岳会メンバーもできたりという具合で、会社の仕事をやりくりしては3、4日程度の新雪・残雪の山歩きを続けることができた。同年配の女性だけのグループで歩いたのもその頃からで、これもまた新鮮で楽しい経験だった。

新しい女子部員を含む阪大山岳会グループと富士吉田駅で落ち合って富士山に登ったのは57年の正月。これが、その年の暮れからの、現役女子と合同での「仙丈・駒登山」(三枝、森川、一山)につながった。後で考えてみると、阪大山岳会の女子だけで積雪期登山をしたのはこれが初めてであった。ほどほどに風雪停滞があつて(に恵まれて)、休養日は十分、まずまず満足という結果だった。それで調子付いたわけではないが、翌58年の暮れから正月には、その時の3名と東京の山仲間と一緒に木曾御嶽に登って、たつぷりと強風に吹かれた。帰りの林間スキーは、歩いた方が速そうな人も何人か——だった。現役最後の春山の帰りには、「もう雪山を歩くことは

ないだろう」と感慨に浸ったのだが、その後も小規模ながら手応えある雪山散歩から縁が切れることはなかった。そのうち、69年と70年のヒマラヤP29登山隊（第3次と4次）に加えて頂き、またまた十分すぎるくらい氷と雪の上を上り下りしてしまった。

古希を過ぎ、山は遙か彼方になったけれども、この15年余りはヒマラヤの国の国語の縦走、つまりネパール語辞典の編纂が続いている。ネパール語から日本語へが済んで、逆縦走（日→ネ辞典）も近く終了の見込みである。

（1955年薬学部卒）

新聞記者同行の冬山合宿

岡田博司

手元に山岳部時代（1954年—58年）の切り抜き帳がある。当時は、多くの新聞が各大学山岳部の夏、冬、春山合宿計画を大々的に紹介し「厳冬期初の……」などと全くエリートの扱われ方であった。それにしても、55年の冬山は、新聞記者が同行し、正月紙面の半ページを使って写真5枚入りで報道され、圧巻であった。毎日新

聞社の石野記者（写真部所属）を加えた本隊を見送りに、篠田先生と水野健次郎OB（美津濃社長）が、当時は貴重品とも言うべき駿河屋の羊羹を6、7棹も携えて大阪駅へ見送りに来ていただいたのも、新聞社のカメラマン同行という快挙によるところ大であった。

私は2年生部員で、憧れの先輩、上級部員と一緒に冬の雲ノ平、黒部源流を踏破するぞ、とワクワクしていた。56年春には徳永先輩がマナスル遠征に参加されるというこの時代、誰もが登山のあらゆることをヒマラヤに結び付けて考えていた。が、われわれは重いばかりで性能の悪い装備、食パン、クラッカーと脱脂粉乳ばかりの食料で、ただひたすら雪との格闘に終始し、夢と現実は甚だしく異なるものであった。

12月25日、中尾集落から入山し、1月13日、同集落のガイド、中畠氏宅へ帰着するまでの間、まともに行動できたのは5日に満たず、極寒のテントの中と、逃げ込んだ三俣蓮華の小屋、サボート隊は双六小屋で停滞するのみ。後半は1日2食、1食につきトースト2枚または三分粥という哀れさで、長い停滞日の話題は、何でもよいから腹いっぱい食べたい、ということばかりだった。

1月12日、待ちに待った快晴。朝6時から撤退作業を始め、大野間乗越着が午後4時半。ここからすごい深雪

の大野間沢をスキーで下る。数日行くと転ぶ。荷物が重いので起き上がれない。雪との悪戦苦闘を数時間、蒲田川の飯場に着いたのは午前2時であった。西川さんと片山さんは、夜が明けるまで別々に雪穴を掘って体力保存を図り、われわれが最後の米でお粥を作り舌鼓を打っていたところに合流した。デブリのご真ん中で夜を明かすのは気持ちのよいものではなかったという。

山行としては散々な目に遭った冬山であったが、数年前、その思い出を語る会を催した。そこで新たに判明したことを付け加えておかねばならない。

1月14日、中尾集落から栃尾のバス停まで西川さんはスキーの調子が悪く、一人だけ予定のバスに乗り遅れる。そして後のバスが蒲田川に転落した。西川さんの話によると、気がつくとバスは横転していた、頭から血が流れていたが、手足をそつと動かすと動くではないか。早速、窓ガラスを割って通学の小学生を救助した。今なら大きな交通事故になっていただろう、とのことであった。そして、この衝撃で飯場から事故までの記憶が完全に喪失していることが判明し、一段と会が盛り上がった。

登山がまさしく忍耐の学校であり、先輩たちのバテるのを見て、その人間性に触れ、様々な精神的なものを学び、中堅部員としての自覚が持てたことなど、私には強

く思い出に残る山行の一つとなった。あれから半世紀たつて、あのころ憧れたヤングハズバンドやロングスタフ、シプトン、スマイスらはいないにしても、その未裔たちにとつて登山とは一体どのようなものであろうか。

(1958年法学部卒)

阪大山岳会50周年にあたって

丸山庄司

阪大山岳会が創設された翌年、1950年の夏、私は、阪大の夏山合宿後の北アルプス縦走に連れて行ってもらいました。高校生の時でした。全員が針ノ木谷に集結し、数名ずつのパーティーを組んでの出発でした。私たちは、黒部川を遡り、東沢を経て、裏銀座コースから北穂、湊沢、上高地のルートをたどることになりました。メンバーは加藤幹太、大久保勝己、家田千尋、細見一仁、岡本隆一各氏と私の6名だったと思います。

平の小屋に通じる吊り橋の踏み板が破損していて針金に足をかけて渡ったかと思うと、腰まで浸かっていた渡渉、悪戦苦闘の高巻き、東沢には山賊が出るとうわさの中

で岩魚釣りの2人組に出会ったことも。そして、北穂の登りを急ぎよ取り止め、大キレットから横尾本谷を一直線に下降して徳沢園などに、変化に富んだ1週間ほどの山行きでした。当時の私はスキーのトレーニングを兼ねて白馬岳方面の山はよく歩いていましたが、テントを使つての登山道を外れた山行きは初めての経験でした。

これがきっかけで山にとりつかれ、涸沢のスキー合宿でも、練習をサボつて前穂北尾根の5・6のコルから前穂、奥穂、ジャンダルムへ、また北穂へと歩いたり、秋の北鎌尾根など北アルプスを中心に歩き続けたものでした。その後、北アルプス一帯のガイドの資格を取得してガイドをしたり、山岳救助隊の活動に携わつたりすることもできました。夏山オンリーで、冬山までの本格的なものではなかったものの、この若い時の経験は私の財産になっています。

こうして長々と思い出の山行きについて書いたのは、きつかけをつくつてくれた阪大の皆さんに感謝を表したいからです。とはいえ、阪大の皆さんともっと深く長いお付き合いをさせていただいたのは父与兵衛であり、母や祖母でした。

昔の細野では家ごとに利用する学校が決まっています、我が家は浪高とは28年（昭和3年）から、その後、阪大

に引き継がれ、現在に至っています。記録を見ると、父の冬山での同行も浪高、阪大OBの人たちが多く見られます。「おれの家に寄つて1杯のお茶でも飲んで山に入った人はうちのお客。無事で帰ってくるまでは、おれの責任だ」というのが父のガイド精神でした。それに合わせるかのように祖母は炊きたてのご飯を神棚に供えて登山の無事を祈り、出発前にその白いご飯を数粒食べてもらいながら「気を付けてのう」と送り出していたの思い出します。戦後のスキーブームで細野も民宿となり、訪れる層が広がっても、「学生は大事にしてやらねばいけねえ」と言うのが父の口癖でした。

65年、両親は阪大山岳会に招かれ、大阪見物をしたことがあります。その時、毎日新聞に「与兵衛さん 大阪ぶらり 北アの老ガイド、阪大山岳会招く」と掲載され、父はその記事を大切にしていたので、今も保存しています。父60歳、母52歳の時でした。

5年前の8月、土蔵の2階を改装して山岳関係の資料や用具を展示しました。展示品は、家にあつたものや、コツコツ集めたものですが、やはり父の物と阪大関係者の物が多く、父の名を冠して「与兵衛倶楽部」と名づけました。そして月末の阪大山岳会の集会に何とか間に合わせる事ができたのでした。狭い展示室ですが、この

日に見てもらいたい人がいたのです。それは徳永篤司さんです。体調がよくなり欠席とのことで、待ち人来たらず。しかも、その直後の9月4日に亡くなられたとの報に接し、二重のショックでした。「50周年記念碑建立」のお話を伺ったのも、その狭い展示室でのことでした。

徳永会長の発案で、阪大山岳会の顕彰と、父をはじめ細野の人たちに感謝の意を表す碑として我が家の敷地内に建てたいとのことでした。私も喜んで即答しました。

こうして徳永会長の遺志となった記念碑建立の準備は会員の皆さんのご努力で着々と進められ、先年夏、盛大に除幕式が行われました。碑の設置場所からは鹿島槍、五竜、八方尾根、白馬連山が一望でき、道路に近いこともあって、立ち止まって見てくれる人もあります。また、私にまで感謝状をいただき、恐縮しています。これから我が家が責任を持って碑をお守りしていきます。

父から始まった長い交流は、私に、更に息子の徹也にと、3代にわたって引き継がれてきました。今後も心して皆さんをお迎えます。OB、現役の皆さん、気軽に立ち寄り、記念碑を訪ね、「与兵衛倶楽部」でくつろいで下さい。終わりに阪大山岳会が50周年を節目として益々ご発展されるようお祈りしてやみません。

(対岳館館主、名誉会員)

梅の木寮と思い出の人々

山本彰 三

阪大の山小屋、梅の木寮建設に我を忘れたのは、もう40年余りも昔のこと。故・篠田軍治先生が「窓枠は関西鉄工所から寄付されるんだ。社長が教え子なんだ」と言っ、広瀬貞雄さんになつたと思うが、同社に寸法を連絡するよう指示されたことがあった。しばらくして届いた特製の窓枠は見るからに頑丈なもので、どんな強風や吹雪、雪の重さにも耐えられそうだった。その関西鉄工所の建物を、最近、大阪・鶴見緑地近くで見つけた。前を通るたびに、梅の木寮と、篠田先生や当時の仲間たちのことが心をよぎる。

大学の山小屋は、京大の笹ヶ峰小屋の歴史が示すように、それぞれに由緒があり、その大学のロマンチズムの一端を表す存在だ。篠田先生は「演習林を持つ農学部があれば、大学の雰囲気も変わるんだが……」と時々こぼされていたが、それだけ教室外の学生との接触を大切にされていたのだろう。そして、山小屋を持つことは、先生を含め山岳部員なら誰もが一度は描いた夢だったの

ではなからうか。しかし、その建設は山岳部単独でも無理な話だった。そのうえ、話の持ち上がった1960年秋は安保騒動の後で、学生運動の限界を知らされたせいも、我々は何か無力感も味わっていた。

そんななか、体育会委員だった部員の辻光弘君が、スキー部の早石雅宥、ワングダーフォーゲル部の森島憲治両委員を説得し、体育会の事業として3部が協力して山小屋を建設することを申し合わせた。だが、先立つ資金はゼロ。まず「呼び水が必要」と、スキー部が中心になってダンスパーティーを計画し、女子大などでパーティー

券を無制限に売りまくった。その結果、大阪ミナミの美人座は超満員、しかも女子学生の方が圧倒的に多く、随分、苦情を聞かされたが、おかげで「呼び水」の資金は集まった。これを受けて若杉長英・体育会委員長（スキー部）が大学当局に3部の熱意を説き、篠田先生が発起人となっ



完成直後の梶の木寮。左の人物が山本氏

て建設準備委員会が発足、学生部の保田氏が事務を担当されることになった。また、スキー部の水野祥太郎、ワングダーフォーゲル部の渡辺両先生も篠田先生の呼びかけに応じて準備委員を引き受けられた。61年秋だったと思うが、この準備委員会は赤堀四郎総長を委員長とする建設委員会に発展、大学として関西財界に寄付を依頼することが決まった。

募金趣意書の文案が検討された委員会では、森川学生部長が「…山小屋の建設は喫緊の要事…」の文言挿入を提案、その言い回しの古さが妙に印象的だったのを覚えている。

しかし、募金への反応は鈍かった。高度成長の先行きにかげりが見え出していたからだ。そのせいで募金活動の中心になられた篠田先生がご苦労されたのは知っていたが、竣工後も工事代金（総額約800万円、当時の大卒初任給は約2万円）が払えず、ご自身の退職金から300万円を出されたと後日聞いた。以来、篠田先生に大変なご苦労をかけてしまったと、ずっと申し訳なく思っている。

当時、私たち学生は、そんな募金の窮状をよそに、建設計画に夢中だった。特に、どこに建設するかの議論は限りなかったが、長野県の梶池開発計画や地元との協力などを考慮したうえで、建設地は梶池高原の一角、「神ノ田圃」と決まった。この場所は、かつて「塩の道」と呼ばれた旧千国

街道沿いの5カ村（千国、杓掛、親の原など）の入会地で、62年5月頃、用地として100坪を借地することになった。設計は工学部構築科の紙野桂人先生が担当し、山岳部員の木原秀幸君が手伝った。雪の消える6月末から工事が始まったが、神ノ田圃は標高1700メートルの高地で、親の原からは細い登山道しかなかった。資材の運搬は人力に頼るほかに、その歩荷代は工事費のかなりの部分を占めた。そこ

で、費用軽減を兼ねて山小屋建設に自分たちの足跡を残したいとの思いから、3つの部は、歩荷を学生も分担したいと申し入れたのだ。これは、やはり神ノ田圃にある早大小屋の建設時に和田一男氏ら早大山岳部員が歩荷をしたのが地元の語り草になっているのに影響されたと思う。62年の夏休み1カ月間、3部のメンバーをはじめ応援部員を含め延べ約900人の学生が歩荷に参加した。山岳、スキー両部員は杓掛

あの時

食い物の恨みは恐ろしいもので、合宿の食事のことは今でも覚えている。

ある合宿の食料係は、塩辛いのと辛子の辛いのは、字が同じだから同じものである、という発想のもと、塩を少なくして唐辛子をたくさん入れたカレーやスープを作った。さらに彼は、辛い味は砂糖の甘さで中和されるという考えの持ち主で、辛子を入れ過ぎた時、砂糖を加えた。こうなつては食えたものではないまして私は唐辛子の辛いのは苦手なので、大いに閉口した。

ある夏の真砂沢での合宿では、食料係が塩の必要量の計算を誤り、必要量の半分も持つて行かなかつたため、1回分の塩の使用量を制限した。しかし、汗をかく夏に薄味のものばかりでは体もつはずがない。当然、皆から文句が出て、遂に食料係が剣沢小屋まで（当時は真砂沢に小屋はなかつた）塩を買いに出

食い物の恨み三題

かけた。その頃、まだ元氣だつた佐伯文蔵さんが出てきて、塩の計算を誤るとは何事かと大変叱られた末、やつと分けてもらった。下山後の合宿報告会で、このことが先輩にはれ、小屋を頼るとは何事かと、またさんざん油を絞られた。

我々の頃の夏の合宿では、皆がベースキャンプに戻つて来た時、スキムミルクを1杯ずつ飲む習慣があつた。このため、エッセン当番の時間を見計らつて大鍋にスキムミルクを作るのだが、何しろ常に腹が減つているから、つい規定量の1杯以上をこつり飲んでしまう。さらに、早く戻つた連中は、エッセン当番の新人を脅して1杯以上飲む。

しかし、これでは当然、後から戻つてきた連中の分が足らなくなつてしまつてから、鍋に水を加えて薄める。これを、ミルクならぬ「ミズク」と称したものだ。

（大工原 恭）

の猪俣氏宅、ワンダーフオーゲル部員は早大小屋に分宿し、荷物は途中の赤又ケで中継した。それぞれ2時間の登りだつた。柱など長尺物は歩荷を専門とする人に任せ、学生は砂利などを運んだ。しかし、一人当たり何十キログラムもの歩荷は山岳部員以外には難しく、山岳部員の負担は厳しいものとなつた。一方、食糧の消費量は予想を超えた。5カ村

一带から米や卵が底をつき、辻君が新人を連れて細野まで徒歩で調達に行くこともしばしばだった。歩荷に明け暮れた1カ月だったが、そのつらさの割に費用の削減にはつながらなかったと、後日、事務局の保田氏に聞き、少々落胆したものだ。

62年11月、小山屋は竣工した。赤堀、篠田、渡辺各先生も現地まで登られて開所式が行われ、「梅の木寮」と命名された。先生方は、地元で謝意を伝える会合のため、すぐ下山されたが、私は辻、栗原完治、畑中薫君らと小屋に泊まった。畑中君が歩荷で苦闘したストーブでは、周辺で切った白樺が勢いよく燃えた。その夜、どんな話をしたかは忘れてしまったが、差し入れの牛肉をステーキにし、動けなくなるほど食べたのを覚えている。2階で美津濃から贈られたシユラフにもぐつても、興奮と火の始末への心配で眠れなかった。翌朝、寝不足で朦朧とした中で、白馬の稜線が赤く染まるのを見た時、やっと達成感が込み上げてきた。ヒノキの香りの中に差し込む白い光と静寂は侵しがたく神聖でさえあった。

あれから40余年、梅の木寮は撤去され、跡地は熊笹に覆われてしまったが、あの時の先生方や大学職員、仲間たち、地元の方々との交流が、まるで昨日のことのように思い出される。殊に、赤堀、篠田、水野、渡辺の各先

生方は、学生たちの夢を真正面から受け止め、実現に努力していただいた。先生方の高潔な人格と温かい人柄に接することができたのは、私の人生にとって喜びであり、誇りになっている。あのころの先生方と同じ年頃になった今、自分の未熟さと力不足を痛感させられる。果たして、若い人たちの夢に賭けて自分を捧げることができだろうか。教育者としての先生方の気概と思いの深さを今になってかみしめている。

(1963年法学部卒)

遭難救助がもとで新聞記者に

高田邦雄

記者として40年間勤めた朝日新聞社を今春退職したが、人の運命とは分らないものだ、つくづく思う。もう山岳会内でも忘れられつつある話だが、私が朝日に入ったのは、山岳部の夏山合宿での遭難救助がきっかけであった。

話は1962年(昭和37年)8月6日にさかのぼる。先年、解体撤去された阪大山の家・梅の木寮建設の資材

ボツカを終えた直後の穂高・潤沢合宿のことだ。その日は、当時3年の私と田村俊秀OB（医学部専門課程4年）、秋濃俊郎君（基礎工2年）の3人がザイルパーティーを組んで、ジャンダルの飛驒側を登った。登り終えてジャンダルの頂上に着いたのは午後1時ごろ。深い霧だった。その霧の中から突然、2人の中年の登山者が現れた。西穂から来たらしく、女性と見られる1人は疲れ切った様子で、頭部に包帯のようなものを巻き、そこから血がにじみ出ている。「どうしたんですか」と聞くと、連れの男性は「妻が転落したんです。ちよつと、ここまで下ろしてくれませんか」といわれても、ジャンダルムから奥穂までは、ロバの耳、馬ノ背と続く、名うての難所。束ねたばかりのザイルを解いて奥さんに結び、3人がかりの救出行となった。やがて危険個所を過ぎたあたりで、先行したご主人の連絡で駆けつけた穂高小屋の人に奥さんを引き渡して、帰りを急いだ。テント地に戻ったのは夕刻。帰りが遅いので心配していたみんなから、ひどく怒られたのを覚えている。

話はこれだけのことだが、これが「命の恩人を捜して」と朝日新聞で紹介されたことで大騒ぎに。やがて「阪大山岳部員だった」の続報で3人の名前まで紹介され、ついには、この年度の「朝日・明るい社会賞」まで頂戴す

ることになった。

当時の私は、卒業後の進路について、ぼんやりと「総合商社にでも」と考える一方、できれば卒業前にP29の次の遠征への参加をねらっていた。それが、新聞記者の取材を受けるうちに気が変わってしまった。「パイロットか新聞記者に」という小学生時代の夢がぶりかえしたのである。「本多勝一、藤木高嶺の後に……」というわけだ。早速、「明るい社会賞」で面識を得た朝日の幹部に相談に行くと、「筆記試験に合格したら、いらつしやい。推薦しましょう」とはいえ、新聞社の入社試験は競争率何百倍もの難関。そこでひねり出したのが、大学を1年留年して受験勉強に励むかたわら、P29遠征にも備えよとの両面作戦だった。P29の方はネパール政府の登山禁止令で夢に終わってしまったが、新聞社受験は首尾よく筆記試験をパス。面接試験でも、前年冬の薬師岳での愛知大生大量遭難について質問されるなど手ごたえ十分で、採用が決まった。

初任地は富山支局。入社早々の5月連休には、劔岳・三ノ窓で神戸の女性パーティー4人が凍死する事件があり、他社をさしおいて現場へ。特ダネ写真をものにすることができた。「山記者」のスタートであった。これをきっかけに県警山岳警備隊の協力スタッフである芦峠寺

のガイドに食い込み、年末になると、彼らが駐在する剣岳登山基地の馬場島に通った。土産の肉や魚、野菜をかっいで登り、「遭難警戒」と称して数日間、警備隊の詰所に滞在した。そのかたわら、地方版で「立山ガイド」の連載記事も執筆した。

山との縁は富山から転勤しても続いた。入社4年目の冬、広島支局で平和問題を担当していた時、やはり剣岳周辺で数件の大量遭難が起き、本社から「登山装備を用意して、すぐに来い」。大阪の本社に着くと、いきなりポラロイドカメラと無線機を渡され、大阪空港で待機するヘリコプターに。そして馬場島小屋の近くの雪の中に放り出された。この時は毎日新聞社会部におられた故・佐藤茂先輩が後から登ってこられ、予期せぬ取材合戦となった。今も忘れられないのは、その夜、私は富山時代そのままに詰所の温かい布団にくるまり、佐藤先輩は冷たい土間でシユラフにという事態になったことだ。旧知のガイドの厚意を断りきれなかったことを後々まで悔やんだものだった。

入社5年目、大阪本社で社会部へ。あこがれの藤木記者とも対面し、いよいよ「山記者」の本領発揮と心は躍った。が、「山」に対する当時の社内の空気は冷たかった。「山の遭難と漁船の遭難のどちらがニュースとして重要

か」「もう山の遭難を大きく取り上げるのはやめよう」というのだ。出番もないまま、やがて社会部長から「大阪空港を担当してくれ」との要請。ヒコキも山に次いで大好きだったので、異存はなく、毎日、空港に通った。大阪万国博間近のところで、赤軍派に乗っ取られた「よど」号が大阪空港に着陸するかもしれないと大騒ぎになったこともあった。だが、これも4カ月ほどのこと。今度は「経済部からもらいがかかっている」。この異動は、山と完全に縁が切れることでもあり、気が進まなかったが、「先方のご指名だ。断れないよ」と、部長は冷たかった。この時、28歳。結局、経済記者生活は50代半ばまで続いた。この間、1976年のアプサラサス遠征の時だったと思うが、山岳会の先輩から「副隊長で行く気はないか」と打診を受けた。しかし、経済記者として最も脂が乗った時期で、断らざるを得なかった。今思うと、「一度きりの人生。なぜ思い切って行けなかったのか」と悔いも残るが、当時は、夜討ち朝駆けの毎日で、それどころではなかった。

これで大きな山行とは縁が切れてしまったが、かといって山を忘れたわけではない。2人の息子が幼い頃は、八ヶ岳や立山・剣に連れて行っただけ、近年は、屋久島の宮之浦岳、そして学生時代に足を踏み入れていなかった

中央アルプスの木曾駒―空木の縦走にも出かけた。02年2月にはニュージーランドに行き、マウントクックを眺めてきた。次は欧州アルプス、そしてヒマラヤへと、順に高い山への計画を練っている。もちろん、山麓のトレッキングで眺めるのだが、それを思うだけで心は十分癒される。思えば、山岳部での経験は、生涯にわたる、ぜいたくな夢を与えてくれたと改めて感謝している。

(1965年経済学部卒)



カトマンズ ボトナート・ストゥーバ 辻川 眞

資
料
編

大阪大学山岳会の歩み

- 1949 6 大阪大学山岳会発足 戦後初の全学組織。篠田軍治氏が会長に就任
12 白馬岳主稜登攀（厳冬期初登、登頂は50年1月2日）
- 50 3 八方尾根より鹿島槍ヶ岳往復
- 51 3 後立山逆縦走（第1次、失敗）
7 鹿島槍・カクネ里合宿（蝶左、P Iなど）
9 北岳バットレス登攀（第2尾根新ルートなど）
- 52 3 小日向尾根より不帰往復
7 鹿島槍・カクネ里合宿（直接尾根、蝶右、中央ルンゼなど）
- 53 3 後立山逆縦走・針ノ木岳～白馬岳
12 穂高・天狗のコルより槍ヶ岳往復
- 54 3 春の黒部へ 渡河ルートなど偵察
12 鹿島槍東尾根
- 56 3 黒部川下廊下、積雪期初横断
(春 日本山岳会マナスル第3次遠征隊に徳永篤司会員が参加)
12 北岳バットレス第4尾根
- 57 12 双六岳より赤牛岳往復 女子冬山合宿・南ア仙丈岳
- 58 3 天狗尾根より爺岳、五竜岳
12 濁沢岳西尾根より北穂高岳、奥穂高岳
- 59 3 黒部川上廊下、積雪期初横断
(春 日本山岳会ヒマルチュリ遠征隊に住吉仙也会員が参加)
- 60 3 薬師岳東面
真砂尾根から劔岳・ハツ峰I峰東面
(春 東海岳連ジュガール・ヒマール遠征隊に二木節夫会員が参加)
- 61 春 ヒマラヤP29峰第1次遠征隊派遣
7 劔岳・真砂沢合宿 チンネ、大窓で2名負傷
11 富士山水雪訓練で、堀井昭彦君が滑落死
- 62 11 阪大山の家「樺の木寮」が完成
- 63 秋 P29峰第2次遠征隊派遣
3 日本海から五竜岳縦走
- 64 3 双六から黒部川上流経由、針ノ木岳往復
- 67 3 黒部川上廊下、積雪期完全遡行
- 69 秋 P29峰第3次遠征隊派遣
- 70 10 P29峰第4次遠征隊派遣、初登頂に成功(登頂後、渡部洋隊員とシェルパが滑落事故で死亡)
- 76 8 カラコルム・アブサラス峰に初登頂
- 82 3 現役3名がヒマラヤ・ロブジェピーク遠征
水野祥太郎氏が第2代会長に就任
- 84 7 バツラ山群・サンゲマルマール峰に初登頂
10 徳永篤司氏が第3代会長に就任
- 89 春 戸叶聡会員ら4名、クーンブヒマールのクスム・カングルへ
- 92 3 大倉徹雄会員がヒマラヤ・アイランドピーク登頂
- 93 11 劔岳で飯田真宏君が滑落死
- (95 秋 光永正樹会員がカトマンズクラブ・マナスル遠征隊に参加)
- 98 医学部山岳部が阪大山岳部に合流
- 99 8 創立50周年記念集会を長野県白馬村・対岳館で開催
秋 阪大山の家「樺の木寮」が解体・消滅
- 2001 6 大野義照氏が第4代会長に就任
8 創立50周年記念碑を対岳館に建立

記録に見る戦前の山岳部活動

◆日本山岳会会報

No. 16 (1932年=昭和7年6月)

「木曾駒に友を訪ねて」大阪工業大学学友会山岳部、1931年12月の遭難報告

「関西学生山岳連盟報告第三号：冬の八ヶ岳」大阪帝国大学山岳部、連盟事務所は大阪帝国大学山岳部内
No. 20 (同11月)

「木曾駒ヶ岳遭難事情 井戸、中川両君の遭難事情」1932年9月、大阪工業大学学友会山岳部

No. 94 (1940年=昭和15年5・6月)

「春の白馬頂上より糸魚川へ」盛岡英治郎、細野の大谷定雄との山行(4月～5月)

No. 97 (同9月)

「民族の足」水野祥太郎

No. 98 (同10月)

「夏の山旅から」盛岡英治郎、丸山與兵衛の召集解除による帰村山旅(8月)

No. 99 (同11月)

「白馬岳南股奥における遭難について」大阪高等学校旅行部、1940年9月発行遭難顛末報告より(部長桑原武夫の承諾下)

◆雑誌「ケルン」

第2号(1933.7)水野祥太郎訳「マッターホーンの東壁」

第3号(1933.8)水野祥太郎訳「マッターホーンの南壁の初登攀」

第4号(1933.9)盛岡英治郎「白馬鑓南山稜を試む」(浪高山岳部、同行者=丸山与兵衛、1933)

第6号(1933.11)盛岡英治郎「白馬鑓南山稜の完登」(浪高山岳部、同行者=小林信次、河原暲、1933)

第6号(1933.11)水野祥太郎訳「デイク・タウに挑んで」

第12号(1934.5)盛岡英治郎「杓子二子尾根を」(浪高山岳部、同行者=丸山与兵衛、1934)

第13号(1934.6)水野祥太郎訳「嵐のひと夏」

第16号(1934.9)盛岡英治郎「猿倉の一日」(浪高山岳部：関西学生山岳連盟隨筆集)

第17号(1934.10)水野祥太郎訳「マッターホーン西壁の完登」

同 盛岡英治郎「夏の白馬直接尾根」(浪高山岳部、同行者=河原暲、中村英石、1934)

第19号(1934.12)水野祥太郎「遠征タクティック小論」

同 関西学生山岳連盟総会の記事「連盟常任委員に盛岡英次郎(大阪高校)」

(注：浪速高校の誤りであろう)

第21号(1935.2)水野祥太郎訳「塵雪崩の風圧問題」

同 水野祥太郎「術派論の立場から」

同 盛岡英治郎「積雪期の白馬と杓子岳」(浪高山岳部、同行者=河原暲、中村英石、1934)

第27号(1935.8)山岳会彙報に関西学生山岳連盟報告第六号発行予定の記事

「白馬岳の登山史と通路に就て」(盛岡：浪高)、

「清水本谷」(盛岡：浪高)、「大川澤源流」(中村：浪高)

第28号(1935.9)入江保太、盛岡英治郎「冠帽六座及びその附近」(入江氏は同志社)

第29号(1935.10)盛岡英治郎「白馬岳の裏通り」

第30号(1935.11)「収獲を語る一関西学校山岳部員」盛岡英治郎(浪速高校)

第34号(1936.3)盛岡英治郎「済州島漢峰山の冬」(関西学生山岳連盟、京城帝大山岳部共同登山隊)

第35号(1936.4)山岳文献抄に「済州島の遭難」(盛岡英治郎、文芸春秋三月号)の記事

(まとめ・山田靖則)

旧会報「時報」総目次

時報No.	文献No.	表 題	筆 者	ページ	発行、編集
01	001	時報第1号に寄せて	篠田軍治	2	1950.01
	002	春の雨飾東南稜	大島輝夫	5	大島輝夫
	003	剣沢合宿(1949.8)	家田千尋	7	
	004	新雪の北岳-バットレス第2尾根登攀	加藤幹太	11	
	005	厳冬期の白馬主稜	徳永篤司	18	
	006	山岳会記録(1948.1~1950.1)		27	
02	001	新入部員に望む	篠田軍治	1	1950.07
	002	八方より鹿島槍へ(1950.3)	久保三朗	2	
	003	春山に用いられた計画的ビヴェークとしての雪洞	家田千尋	7	
	004	5月の槍より燕へ	田島 汎	11	
	005	集会・山行記録(1949.12~1950.6)		17	
03	001	偶感	篠田軍治	2	1952.02
	002	南股概説(1950.7 南股合宿)	大島輝夫	4	川島 勇
	003	ベニヤ板マットについて(1950.12 杓子尾根合宿)	大島輝夫	10	
	004	後立山逆縦走計画の失敗(1951.3)	徳永・加藤・川島	12	
	005	夏の鹿島槍カクネ里	家田千尋	17	
	006	1951年秋山・冬山(北岳バットレス・頂上幕営・他)	大島	41	
	007	我らの歩み-回顧と展望	大島	43	
	008	山行記録(1950.6~1951.8)		47	
	009	集会記録(1951.4~1951.9)		64	
04	001	季節外れの山	篠田軍治	2	1952.06
	002	北岳概説	徳永篤司	4	川島 勇
	003	北岳第二尾根の新ルート(1951.9)	徳永篤司	8	
	004	1952年春山合宿 小日向より不帰往復(極地法)	家田千尋	17	
	005	新しい装備の試み(ナイロンザイル、蒸器、他)	大島・川島・久保	35	
	006	山行記録(1951.9~1952.6)		39	
	007	集会記録(1951.10~1952.6)		45	
05	001	針木谷の憶い出	篠田軍治	1	1953.06
	002	進むべき道-今後の課題	大島輝夫	2	尾藤昭二
	003	1952年夏山 カクネ里合宿	(尾藤)	9	
	004	1952年冬山合宿 聖赤石・木曾駒・大沢・スキー	(尾藤)	16	
	005	冬の聖岳	尾藤昭二	16	
	006	冬季南アの積雪及び天候について	尾藤昭二	20	
	007	春山合宿 後立山逆縦走	尾藤昭二	23	
	008	山行記録(1952.6~1953.5)		35	
	009	集会記録(1952.6~1953.5)		44	
06	001	失われた登山技術	篠田軍治	2	1954.06
	002	研究 極地法の運営について	尾藤昭二	4	坪井圭之助
	003	冬山報告 冬の穂高(極地法)	山本光二	15	
	004	春山報告 春の黒部へ	尾藤昭二	27	
	005	ナイロンテントについて(寄付金報告含む)	尾藤昭二	33	
	006	山行記録(1953.6~1954.6)		35	
	007	集会記録(1953.6~1954.5)		47	

時報№	文献№	表 題	筆 者	ページ	発行、編集
07	001	新卒業部員諸兄へ	徳永篤司		1956. 01
	002	より高き山へー1953年度を省みて	川島 勇	1	宍戸 元
	003	冬山 鹿島槍東尾根合宿 (1954年)	坪井圭之助	8	
	004	春山合宿 (後立から黒部へ)	宍戸 元	17	
	005	春山食糧報告	木村裕一	28	
	006	ナイロン2号テント製作報告	坪井	31	
	007	山行記録 (1954. 7 ~ 1955. 6)		33	
	008	集会記録 (1954. 6 ~ 1955. 5)		45	
08	001	これからのザイル	篠田軍治	2	
	002	縁の下の力持ー特にリーダーの諸君に	田島 汎	3	乾 正
	003	夏山合宿 (1955年 北岳バットレス)	木村裕一	5	
	004	1955年夏山 黒部源流から蒲田川へ	岡田・東	15	
	005	冬山合宿 (1955年度) 双六、鷲羽、三俣蓮華	木村	16	
	006	春山合宿 (1955年度) 春の黒部下廊下横断について	宍戸 元	28	
	007	1956年度冬山 北岳バットレス	(西川)	42	
	008	1956年度春山 烏帽子小屋から黒部上廊下偵察 (失敗)	(岡田)	54	
	009	「マナスル通信」山岳会の諸兄へ (サマ・ベースキャンプより)	徳永篤司	63	
	010	山行記録 (1955. 8 ~ 1957. 3)		68	
09	001	A. A. Cオバリン会長をたずねて	篠田軍治	2	
	002	1957年度冬山合宿 1、双六岳ー赤牛岳往復	岡田博司・宍戸元	5	米林外茂男
	003	2、槍平新人合宿	村瀬・笠松・田村	13	
	004	3、仙丈岳女子冬山合宿	一山幸代	16	
	005	1957年度春山合宿 天狗尾根より極地法による五龍岳 および爺岳 (1958. 3)	兼清喜雄	18	
	006	1957年度夏山 穂高合宿報告	岡田博司	30	
	007	冬山食糧 特製パンについて	野田憲一郎	32	
	008	冬用テント製作報告 (ビニロン1号)	宍戸 元	34	
	009	一般山行報告 (1957. 4 ~ 1958. 3) 20件	山本、他	36	
	010	岩登りトレーニング記録 (1957. 5 ~ 1957. 12)		48	
10	001	遠征雑感	篠田軍治	2	
	002	1958年度春山合宿 黒部川上ノ廊下積雪期初横断	山本信樹	4	佐藤 茂
	003	冬山合宿 涸沢岳西尾根より北穂高・奥穂高岳	山本信樹	32	
	004	新人スキー合宿 (平湯)	兼清喜雄	43	
	005	夏山、劔合宿	兼清喜雄	44	
	006	ヒマルチュリだよりー徳永篤司氏への手紙より	住吉仙也	46	
	007	一般山行報告 (1958. 4 ~ 1958. 1) 25件	野田、他	50	
	008	岩登りトレーニング記録 (1958. 4 ~ 1959. 3)		73	
11	001	前山	篠田軍治	2	
	002	昭和34年度 (1959年度) を回顧する	野田憲一郎	4	佐藤 茂
	003	1959年度冬山合宿 1、スバリ岳、赤沢岳周辺	(田村・田井)	6	
	004	2、白根三山ー大唐松尾根	(野田)	23	
	005	1959年度春山合宿 1、薬師岳東面	(田井)	29	
	006	2、真砂尾根から劔岳八ツ峰1峰	(佐藤)	49	
	007	夏山合宿 (1959年) 千丈沢及び槍ヶ岳周辺	(野田)	71	
	008	一般山行報告 (1958. 4 ~ 1959. 10) 18件	大島、他	74	

時報№	文献№	表 題	筆 者	ページ	発行、編集
11	009	ピーク29峰遠征（登山計画をめぐって）	徳永篤司	94	
	010	エヴェレスト遠征（1953年）に於ける食糧計画	L.G.C.ピュウ（徳永訳）	103	
12	001	山の家その他	篠田軍治	1	1963. 09 高橋雄二
	002	リーダー所感—37年度（1962年度）を回顧して	梶本孝治	3	
	003	1961年11月富士山遭難報告（堀井昭彦君）	酒井次郎	5	
	004	1960年度夏山合宿 千丈沢をベースとして	広瀬貞雄	13	
	005	冬山合宿 南アルプス	田村俊秀	15	
	006	春山合宿 八つ峰を末端から	酒井次郎	22	
	007	一般山行報告（1960. 4～1960. 11） 24件		27	
	008	1961年度夏山合宿 剣岳1峰東面を中心として	（酒井）	29	
	009	冬山合宿 ゼミナールと近畿の山歩き	広瀬貞雄	34	
	010	春山合宿 北又—イブリ山—朝日岳—白馬岳	梶本孝治	37	
	011	一般山行報告（1961. 4～1961. 11） 23件		57	
	012	1962年度夏山合宿 山小屋建設のボッカと穂高岳澗沢合宿	梶本孝治	62	
	013	冬山合宿 樽池より白馬三山	梶本孝治	66	
	014	春山合宿 日本海より五龍岳へ	横尾秀次郎	85	
	015	一般山行報告（1962. 4～1962. 11） 16件		111	
	016	トレーニング記録（1962. 3～1962. 12）		116	
	017	部会における研究発表（1962. 3～1962. 12）		118	
	018	一般山行記録 立石・黒部上廊下（1960年夏） 北アルプスの中央部横断（1961. 5）	佐藤 毅	119	
019	東沢谷二の沢・口元のたる沢、赤牛沢（1962. 5）	玉井康雄	124		
020	ある山行（烏帽子岳—赤牛岳—薬師岳）5月	牧野大輔	128		
021	上の廊下（1962. 8）	笠松卓爾	130		
022	樽ノ木寮建設候補地決定の過程	高田邦雄	133		
023	山の家について（設計面より）	浜田彰三	137		
024	山小屋（樽ノ木寮）のこと	紙野桂人・木原秀幸	139		
025	ピーク29峰遠征日誌	栗原完治	140		
026	高度の人体に及ぼす影響（その1）		141		
027		L.G.C.ピュウ M.P.ウオード 徳永・松久・坪井訳	148		
13	001	テンジンとガーマー博士	篠田軍治	1	1965. 06 畑中 薫
	002	日本に於ける登山	横尾秀次郎	2	
	003	1963年度夏山合宿 立山東面	（横尾）	5	
	004	秋山合宿 双六、薬師、笠、裏銀	（牧野、他）	14	
	005	冬山合宿 三峰川より北岳	播本	15	
	006	聖岳より塩見岳	高田	20	
	007	樽ノ木寮周辺にて（新人パーティ）	大川	28	
	008	春山合宿 双六より針木岳及び三俣新人合宿	牧野、他	39	
	009	自由山行（1963. 5～1964. 3） 8件		71	
	010	早月尾根より内蔵ノ助平を経て黒部往復（1963. 5）	吉川	72	
	011	小黒部谷溯行（1963. 8）	中村	75	
	012	コイカクシュル内—ペテガリ岳—中ノ川縦走（1963. 8）	原 治左エ門	79	
	013	大峰・舟ノ川地獄谷、3泊4日1000円の山行（1963. 9）	高田邦雄	84	

時報№	文献№	表 題	筆 者	ページ	発行、編集
13	014	1963年度の活動 (1963.3～1964.4)		86	
	015	ソロクンブ紀行 (1963.12～1964.1)	田村俊秀	89	
	016	ヒマラヤの旅-山と人と	笠松卓爾	128	
	017	高度の人体に及ぼす影響 (その2)	L.G.C.ビュウ M.P.ウオード 徳永・松久・坪井訳	167	
	018	会員蔵書一覧 (ヒマラヤ、アルプス、紀行、技術他)		177	
14	001	山岳部と留年問題	篠田軍治	1	1966.09
	002	1964年度リーダー所感	牧野大輔	7	打出英樹
	003	夏山合宿 於 立山内蔵ノ助平	(牧野)	10	出雲路敬孝
	004	夏山縦走 (剣北方、冷池、口元のタル沢、柳又、槍パーティ)	(原、他)	15	三好 亮
	005	冬山合宿 立山大日尾根ポーラー	(牧野)	17	
	006	樽池新人合宿	(原)	21	
	007	春山合宿 赤谷尾根より剣岳ポーラー	原 治左エ門	26	
	008	自由山行記録 (1964.4～1964.11) 15件		44	
	009	個人山行 口元ノタル沢	栗原完治	48	
	010	1965年度リーダー所感-40年度を顧みて	原 治左エ門	51	
	011	夏山合宿 於 剣岳二股	原 治左エ門	53	
	012	冬山合宿 後立山縦走 針ノ木、赤沢、鹿島槍	(石浜)	61	
	013	表銀縦走 燕岳-常念岳	(畑中)	63	
	014	新人樽池合宿	(原)	64	
	015	春山合宿 双六から立山縦走	渡部 洋	67	
	016	自由山行記録 (1965.4～1965.11) 15件		77	
	017	個人山行 八ツ峰1峰東面より剣 (5月)	(大笹)	81	
	018	剣-黒部別山-黒四ダム (5月)	(石浜)	86	
	019	清水谷湖行 (7、8月)	(黒田)	89	
	020	登山と高圧酸素手術	恩地 裕	97	
	021	富士山の一年	玉井康雄	99	
	15	001	グリンデルワルト再遊	篠田軍治	1
002		30年目の白馬	恩地 裕	2	打出英樹
		1966年度			の場幹史
003		リーダー所感 昭和41年度を振り返って	渡部 洋	3	
004		5月山行 東谷ガンドウ尾根	辻	5	
005		朝日-白馬-突坂尾根 (仮称)	山田	6	
006		飯豊山主稜線縦走	糸井	10	
007		大峰縦走	田村 孝	13	
008		夏山合宿 於 剣岳・二股 (剣尾根上半、東大谷G1、6峰三ノ窓側フェイス、別山南尾根、チンネ)	辻・田中・山田他	16	
009		夏山山行 高天ヶ原パーティ	田中	22	
010		裏銀座パーティ	的場	22	
011		黒部上ノ廊下湖行	山田	23	
012		黒部上ノ廊下下降	渡部・的場	26	
013		大峰山三嵩谷	岡田	28	
014	10月山行 海谷-妙高	(渡部)	29		

時報№	文獻№	表 題	筆 者	ページ	発行、編集	
15	015	黒部上の廊下周辺偵察	山田	29		
	016	南アルプス南半縦走	石原	33		
	017	11月山行 表銀パーティ	甲田寿男	34		
	018	黒部偵察 濁一東沢一赤牛一水晶一雲の平	田中	34		
	019	黒部偵察 赤牛一北西尾根一口元のタル沢	的場	36		
	020	初冬の後立 (鹿島槍ヶ岳から五竜岳へ)	黒田	37		
	021	比良山 (貫井谷)	(的場)	39		
	022	冬山合宿 南アルプス 白根三山縦走	佐々木	41		
	023	〃 塩見一北岳縦走	糸井	42		
	024	中央アルプス 南駒ヶ岳	黒田	45		
	025	新人合宿 (白馬天狗原)	渡部	45		
	026	春山合宿 葛一烏帽子一東沢乗越	細川	49		
		1967年度				
	027	リーダー所感 1967年度を振り返って	甲田吉彦	55		
	028	5月山行 槍ヶ岳北鎌尾根	(甲田)	56		
	029	東北朝日連峰山行	田村	57		
	030	烏帽子一東沢一赤牛一霞平一高天ヶ原一三俣	的場・田中	60		
	031	新人山行 (鈴北岳一藤原岳一愛知川ダム)	(稲垣)	66		
	032	夏山合宿 槍ヶ岳 千丈沢にて (赤岳、D稜、天上沢、C稜ツルム、小槍、A稜側稜、小槍尾根他)	甲田吉彦 他	68		
	033	夏山山行 北アルプス縦走1 (高天ヶ原一池の平)	竹林	75		
	034	北アルプス縦走2 (三俣一太郎兵衛平)	田村	76		
	035	剣岳チンネ登攀	山田	77		
	036	黒部上の廊下遡行1	田中	78		
	037	黒部上の廊下遡行2	中岡	80		
	038	黒部上の廊下ゴムボート下降	渡部・黒田	81		
	039	祖母谷一室堂、小山行	(中岡)	85		
040	黒部上の廊下核心部	的場幹史	86			
041	10月山行 南アルプス北半	大西	93			
042	魚沼パーティ	山田	94			
043	六兵衛谷偵察	(竹林)	96			
044	穂高山行	甲田	97			
045	11月山行 水晶荷上げ (春山用デボ)	甲田	98			
046	双六から後立縦走	甲田	98			
047	御岳アイゼン合宿	(甲田)	100			
048	冬山合宿 白馬突坂尾根	甲田・山田	101			
049	新人冬山合宿 (阪大小屋)	寒川・的場	102			
050	春山合宿 積雪期黒部上の廊下完全トレース	甲田吉彦、他	105			
16	001	山登りの原点	篠田軍治	1	1978. 10 森 保知、 他	
	002	山岳部長を退任するに当って	恩地 裕			
	003	リーダー所感 1968年度を顧みて	山田靖則			
	004	1969年度を顧みて	石原敏雄			
	005	1970年度をふり返って	稲垣佳夫			
	006	1971年度を顧みて	大宅幸夫、藪田勝久			
	007	1972年度をふり返って	高橋正身			

時報№	文献№	表 題	筆 者	ページ	発行、編集	
16	008	1973年度をふり返って	上松一雄	6		
	009	1974年度を顧みて	後藤正教	7		
	010	1975年度をふり返って	松尾敬志	8		
	011	1976年度をふり返って	佐野威和雄	8		
	012	1977年度を顧みて	明神 知	9		
		1968年度				
	013	5月山行	白馬岳主稜	寒川		11
	014		穂高周辺	山田		11
	015		白山	田村		13
	016		立山中央山稜（OB山行）	吉川		13
	017	夏山定着合宿	劔岳周辺 BC二股	山田、岡田、黒岩他		13
	018	夏山縦走	劔岳－笠ヶ岳縦走	山田		17
	019		劔岳－槍ヶ岳縦走	黒岩		18
	020		劔岳－東沢縦走	中岡		19
	021		笠ヶ岳第1岩稜登攀	山田		19
	022	夏山個人山行	小太郎岩	岡田		21
	023	秋山個人山行	南アルプス南半縦走	山田		21
	024		南アルプス北半	黒岩		23
	025		大峰山神童子谷遡行	石原		23
	026	11月偵察山行	劔・立山東面（真砂尾根、立山中央山稜、別山南尾根、八ツ峰4稜、3稜、丸山中央壁ダイレクトルート）	石原、田村、山田他		23
	027	御岳アイゼン合宿		中川		29
	028	冬山合宿	新人白馬天狗原合宿	（田村）		30
	029		突坂尾根より白馬岳初縦走	石原		31
	030		突坂尾根パーティ救援対策本部報告	大工原		33
		1969年度				
	031	5月山行	立山東面定着	（中岡）		37
	032		新人歓迎大峰山行	黒岩		38
	033	夏山定着合宿	槍ヶ岳 BC千丈沢	（石原）		39
	034	夏山縦走	北アルプス北部横断	稲垣		45
	035		裏銀縦走	（黒岩）		46
	036		黒部上ノ廊下	（大西）		47
	037		北アルプス南部横断	（石原）		48
	038	夏山個人山行	穂高岩登山行	黒岩		48
039	11月偵察山行	杓子双子尾根－後立山縦走	（中岡）	50		
040	御岳アイゼン合宿		（中岡）	51		
041	冬山合宿	杓子岳双子尾根	中岡	51		
	1970年度					
042	4月個人山行	八ヶ岳縦走	（高橋）	53		
043	5月山行	中央アルプス縦走	（稲垣）	54		
044		穂高・槍縦走	石原	54		
045		大峰山横断	藪田	55		
046		新人歓迎大杉谷山行	（大宅）	56		
047	夏山定着合宿	劔岳 BC二股	（稲垣）	56		

時報No.	文獻No.	表 題	筆 者	ページ	発行、編集	
16	048	夏山縦走 中谷ー毛勝山	(大宅)	59		
	049	黒部 (上ノ廊下・高天ヶ原)	(稲垣・高橋)	61		
	050	秋山個人山行 荒川三山縦走	高橋	63		
	051	北岳バットレス	大宅	63		
	052	11月偵察山行 魚沼三山 八海山偵察	(大宅)	64		
	053	郡界尾根偵察	(大西)	66		
	054	駒ヶ岳ー中ノ岳偵察	(稲垣)	69		
	055	御岳アイゼン合宿	稲垣	70		
	056	冬山合宿 後立山縦走	稲垣	70		
	057	遠見尾根 (新人)	大西	71		
	058	春山合宿 魚沼三山縦走	(稲垣)	72		
	1971年度					
	059	5月山行 戸隠山塊 (P1尾根、ダイレクト尾根)	(高橋)	77		
	060	大峰七面山南壁試登	(藪田)	78		
	061	新人歓迎白馬山行	大宅	78		
	062	夏山定着合宿 劔岳 BC池ノ谷	(大宅)	79		
063	夏山縦走 後立・東谷	(藪田)	82			
064	丸山東壁 緑ルート	(大宅)	84			
065	北アルプス横断	(高橋)	85			
066	秋山個人山行 北アルプス縦走	(藪田)	85			
067	中央アルプス単独行	大宅幸夫	86			
068	11月偵察山行 サンナビキ尾根偵察	(藪田)	86			
069	劔岳北方稜線偵察	(高橋)	87			
070	御岳アイゼン合宿	(藪田)	89			
071	冬山合宿 塩見岳蝙蝠尾根	(藪田)	89			
072	鋸岳ー甲斐駒ヶ岳	(黒岩)	90			
073	中央アルプス滑川奥三ノ沢	石原	90			
074	春山合宿 劔岳北方稜線	(藪田)	92			
1972年度						
075	5月山行 新人歓迎白馬山行	(高橋)	95			
076	大峰神童子谷	(藪田)	96			
077	夏山定着合宿 槍ヶ岳 BC千丈沢	(藪田)	97			
078	秋山個人山行 裏劔	後藤	98			
079	11月偵察山行 扇沢周辺	(藪田)	98			
080	御岳アイゼン合宿	(高橋)	100			
081	冬山合宿 蓮華東尾根	(高橋)	100			
082	春山合宿 杓子岳双子尾根	(上松)	101			
083	阪大小屋合宿 (白馬主稜)	(高橋)	103			
1973年度						
084	5月山行 大峰山北部 (新人歓迎)	佐野	107			
085	夏山定着合宿 劔岳 BC池ノ平	上松、藪田、松浦	107			
086	夏山縦走 北海道・東大雪縦走	上松	110			
087	秋山個人山行 南アルプス南部縦走	(後藤)	111			
088	11月偵察山行 薬師岳	木嶋	112			
089	御岳アイゼン合宿	上松	113			

時報№	文献№	表 題	筆 者	ページ	発行、編集	
16	090	冬山合宿 薬師岳	藪田	113		
	091	春山合宿 北海道・東大雪山域	根本、上松	115		
		1974年度				
	092	5月山行 新人歓迎白馬山行	後藤	121		
	093	穂高山行	上松	121		
	094	夏山定着合宿 黒部源流 BC 兎平	後藤、他	122		
	095	夏山縦走 立山ー西穂縦走	後藤	126		
	096	槍ヶ岳周辺	根本	127		
	097	11月偵察山行 横尾尾根偵察	宮本	127		
	098	鹿島槍天狗尾根偵察	明神	128		
	099	御岳アイゼン合宿	後藤	130		
	100	冬山合宿 横尾尾根	森・後藤	130		
	101	春山合宿 鹿島槍天狗尾根～爺ヶ岳東尾根	後藤	132		
		1975年度				
	102	5月山行 新人歓迎白馬山行	松尾	135		
	103	北鎌尾根	山口	135		
	104	魚沼三山縦走	吉田	136		
	105	夏山定着合宿 穂高岳 BC 奥又白池～涸沢	(松尾)	137		
	106	夏山縦走 劔岳北方稜線	西畑	139		
	107	黒部上ノ廊下	吉田	140		
	108	南アルプス奥西河内廻行	重田	141		
	109	十勝岳ー化雲岳縦走	森(保)	141		
	110	11月偵察山行 奥大日尾根偵察	岡部	142		
	111	小窓尾根偵察	木嶋	143		
	112	前穂北尾根偵察	宮本	144		
	113	御岳アイゼン合宿	(松尾)	145		
	114	冬山合宿 白馬岳	木嶋	145		
	115	前穂北尾根	山口	146		
	116	春山合宿 奥大日尾根～劔岳	近藤	147		
		1976年度				
	117	5月山行 新人歓迎白馬山行	西畑	151		
118	白馬スキーツアー	岡部	151			
119	前穂高	重田	152			
120	滝谷	佐野	152			
121	夏山定着合宿 劔岳 BC 二股～真砂	(佐野)	153			
122	夏山縦走 後立山縦走	森(保)	157			
123	南アルプス縦走	住田	158			
124	秋山個人山行 穂高池巡り山行	広田・重田	158			
125	北岳パットレス	渡辺	159			
126	槍ヶ岳(千丈沢)	近藤	159			
127	11月偵察山行 劔岳北方稜線偵察	近藤	160			
128	抜戸岳南尾根偵察	森(保)	161			
129	表銀一笠ヶ岳偵察	森(良)	161			
130	三ノ窓荷上げ	岡部(祐)	162			
131	池ノ平山荷上げ	岡部(友)	163			

時報№	文獻№	表 題	筆 者	ページ	発行、編集		
16	132	冬山合宿 劔岳・早月尾根	広田・森（保）	163			
	133	劔岳・北方稜線	佐野	165			
	134	石鎚山	近藤	168			
	135	春山合宿 表銀座縦走	近藤	169			
	136	抜戸岳南尾根	明神	170			
	137	弓折岳南尾根	岡部（友）	171			
		1977年度					
	138	5月山行 新人歓迎白馬山行	重田	173			
	139	明神岳東稜	広田	173			
	140	北岳バットレス	住田、金谷、岡部	174			
	141	劔岳・八ツ峰縦走	近藤	176			
	142	夏山定着合宿 槍ヶ岳・千丈沢周辺	山口、他	178			
	143	夏山縦走 南アルプス縦走	広田・村田	186			
	144	雲ノ平・劔岳縦走	片山・浅井・森	187			
	145	滝谷ー西穂縦走	西尾	188			
	146	下又白谷とヒシ形岩壁	山口	189			
	147	秋山個人山行 鹿島槍ー五竜岳	浅井・金谷	190			
	148	荒川本谷廻行	村田・広田	191			
	149	11月偵察山行 毛勝山西北尾根偵察	明神・西尾	192			
	150	宇奈月尾根偵察	木嶋	193			
	151	明神岳V峰西南尾根偵察	重田	194			
	152	小窓尾根偵察	住田	195			
	153	三ノ窓荷上げ	岡部（友）	196			
	154	御岳アイゼン合宿	森（保）	196			
	155	冬山合宿 毛勝山・西北尾根	明神・浅井	197			
	156	明神岳・V峰西南尾根	山口	198			
	157	劔岳・小窓尾根	森（保）・住田	199			
	17	001	山岳部長に就任して（昭和56年11月1日記）	山田朝治		1982.4	越智栄次郎 他
		002	篠田会長の発病とその経過	徳永篤司			
003		1978年度をふり返って	森 保知				
004		1979年度をふり返って	金谷 明				
005		1980年度をふり返って	浅井利彦				
		1977年度					
006		春山合宿 赤谷山サポート隊	浅井	1			
007		宇奈月～赤谷山縦走	森・渡辺	2			
		1978年度					
008		5月山行 岳沢定着合宿	森・村田・浅井他	5			
009		夏山定着合宿 穂高周辺 B C横尾本谷～涸沢	渡辺、他	8			
010		夏山縦走 後立山縦走（扇沢ー朝日岳）	広田	16			
011		南アルプス縦走（奥西河内岳ー北岳）	金谷	17			
012		10月個人山行 大台ヶ原堂倉谷廻行	西尾	18			
013		大台ヶ原東ノ川廻行	西尾	19			
014		中央アルプス縦走	村田	20			
015	11月偵察山行 ブナ立尾根ー槍ヶ岳偵察	金谷	20				
016	西穂主稜線偵察（1次）	広田	22				

時報№	文獻№	表 題	筆 者	ページ	発行、編集	
17	017	西穂主稜線偵察（2次）	森	24		
	018	御岳アイゼン合宿	森・岡部(祐)・草野	25		
	019	冬山合宿 横尾尾根～槍ヶ岳	岡部(祐)・浅井	26		
	020	穂高主稜線縦走	森	27		
	021	春山合宿 裏銀座コース（烏帽子～槍ヶ岳）	金谷・科野	29		
		1979年度				
	022	5月山行 白馬岳新歓山行	越智・佐々木	31		
	023	後立山偵察（唐松～種池）	広田・科野	31		
	024	劔岳八ツ峰	西尾	32		
	025	夏山定着合宿 劔岳周辺 B C真砂	金谷、他	34		
	026	夏山縦走 立山～槍ヶ岳	上月	40		
	027	南アルプス縦走（北岳～茶臼岳）	越智	41		
	028	劔岳北方稜線（毛勝山～白萩山）	佐々木	42		
	029	黒部川上ノ廊下	科野	42		
	030	10月個人山行 白馬岳～親不知（榎海新道）	越智	44		
	031	八ヶ岳	奥山	45		
	032	11月偵察山行 劔御前デポ	越智	45		
	033	後立山偵察（五竜岳～種池）	村田	46		
	034	奥大日尾根偵察	大石	47		
	035	雄山東尾根偵察	奥山・西尾	48		
	036	アイゼン合宿 白馬大池周辺	越智	50		
	037	冬山合宿 遠見尾根～五竜	上月、西尾・奥山	51		
	038	後立山縦走	広田	52		
	039	春山合宿 雄山東尾根隊	奥山	53		
	040	奥大日尾根～劔岳・立山	浅井・奥山・越智	54		
		1980年度				
	041	5月山行 新人歓迎山行（岳沢）	湊本、他	57		
	042	劔尾根	西尾	59		
	043	北鎌尾根～岳沢縦走	佐々木	61		
	044	南アルプス（鋸岳～甲斐駒）	越智	62		
	045	夏山定着合宿 劔岳周辺 B C真砂	（浅井）	62		
	046	夏山縦走 南アルプス全山縦走	上月	70		
	047	越後三山～朝日岳縦走	稻成	71		
	048	後立山縦走	畑	72		
	049	北海道（大雪山周辺）	小松	72		
	050	10月個人山行 中央アルプス縦走	上月	74		
	051	八ヶ岳縦走	畑	74		
	052	白山縦走	佐藤	74		
	053	後立山縦走（白馬～爺ヶ岳）	越智	76		
	054	奥秩父縦走（笛吹川東川～瑞牆山）	小杉	76		
055	11月偵察山行 毛勝山西北尾根偵察	上月	77			
056	駒ヶ岳～ウドの頭偵察	房本	78			
057	天狗尾根第1次偵察	大石	79			
058	天狗尾根第2次偵察	草尾	80			
059	後立山デポ	野口	81			

時報№	文獻№	表 題	筆 者	ページ	発行、編集	
17	060	魚沼三山偵察山行	大浜	82		
	061	アイゼン合宿 於 木曾駒	越智	82		
	062	冬山合宿 毛勝山北方稜線	上月	84		
	063	毛勝山西北尾根	畑	85		
	064	春山合宿 表銀座縦走	科野・畑	87		
	065	天狗尾根～蓮華岳	佐藤	88		
18	001	巻頭言	徳永篤司	1986. 02		
	002	徳永篤司新会長を迎えて	山田朝治			
	003	1981年度を振り返って	科野昌蔵			
	004	1982年度を振り返って	上月登喜男			
	005	1983年度を振り返って	佐藤建哉			
	006	1984年度を振り返って	森藤正人			
		1981年度				
	007	5月山行 猫の耳偵察	(科野)	2		
	008	硫黄尾根	(草尾)	2		
	009	劔大滝試登 大滝尾根	野口	3		
	010	新歓 (内蔵助平)	(科野)	5		
	011	夏山合宿 涸沢	(科野)	6		
	012	甲斐駒周辺	(奥山)	11		
	013	猫の耳偵察	(科野)	11		
	014	錫丈岳登攀～金木戸谷	上月	12		
	015	北方稜線縦走	居安	12		
	016	南アルプス縦走	森藤	13		
	017	個人山行 谷川岳 一ノ倉沢烏帽子沢奥壁登攀	(越智)	14		
	018	奥美濃 金丸谷	(畑)	14		
	019	(偵察山行) 槍ヶ岳デボ	(佐々木)	15		
	020	硫黄岳デボ	(奥山)	16		
	021	劔岳デボ	(奥山)	16		
	022	後立山偵察	(越智)	16		
	023	御岳アイゼン合宿	森藤	15		
	024	冬山合宿 硫黄尾根	大石	17		
	025	弓折南尾根～槍ヶ岳	(科野)	19		
	026	春山合宿 八方尾根～親不知	(上月)	20		
	027	白馬～鹿島槍	(野口)	21		
		1982年度				
	028	5月山行 北鎌尾根～西穂高縦走	(佐藤)	24		
029	劔尾根	(越智)	24			
030	劔沢 (新歓)	(上月)	25			
031	夏山合宿 真砂 (定着)	(上月)	27			
032	北アルプス縦走	(佐藤)	32			
033	南アルプス縦走	今村	32			
034	海谷山群 不動川	越智	33			
035	個人山行 大峰山系沢登り	(森藤)	35			
036	奥鐘山	(越智)	35			
037	偵察山行 唐沢岳東尾根偵察	森藤	36			

時報№.	文獻№.	表 題	筆 者	ページ	発行、編集	
18	038	劔岳デポ山行	野口	37		
	039	憲三尾根偵察	今村	38		
	040	御岳アイゼン合宿	(上月)	39		
	041	冬山合宿 劔岳源治郎尾根	大石	39		
	042	早月尾根	今村	40		
	043	春山合宿 憲三尾根～笠ヶ岳	大西	41		
	044	春山○B山行 劔岳ハツ峰	野口	42		
	045	荒沢奥壁北稜	畑	43		
		1983年度				
	046	5月山行 前穂北尾根～西穂	(大石)	45		
	047	涸沢定着	水川	45		
	048	鹿島槍 東尾根偵察	今村	46		
	049	槍ヶ岳事故報告 (榊原転落)	榊原	47		
	050	夏山合宿 穂高周辺	(畑)	49		
	051	南アルプス全山縦走	(宮田)	51		
	052	南ア赤石沢	大西	52		
	053	北アルプス縦走	大西	53		
	054	個人山行 飯豊・朝日	戸叶	54		
	055	大山・蒜山縦走	水川	55		
	056	偵察山行 春山デポ (種池)	戸叶	55		
	057	北鎌尾根偵察	(佐藤)	55		
	058	横尾尾根偵察	水川	56		
	059	御岳アイゼン合宿	戸叶	57		
	060	冬山合宿 北鎌尾根～槍ヶ岳～横尾尾根	(佐藤)	57		
	061	横尾尾根	水川	58		
	062	春山合宿 鹿島槍東尾根	大西	59		
		1984年度				
	063	新歎合宿 於 白馬岳	(森藤)	62		
	064	夏山合宿 於 真砂	(森藤)	62		
	065	笠ヶ岳～朝日岳 縦走	(戸叶)	64		
	066	個人山行 京都北山	(宮田)	65		
	067	偵察山行 劔岳北方稜線偵察 (赤谷山デポ)	大西	65		
	068	奥大日尾根偵察	(今村)	67		
069	毛勝山西北尾根偵察	奥山	68			
070	宇奈月尾根～ウドの頭偵察	(野口)	68			
071	アイゼン合宿 於 木曾駒	奥山	70			
072	冬山合宿 毛勝山西北尾根	森藤	70			
073	春山合宿 奥大日尾根～劔岳・立山	水川	71			
074	宇奈月～赤谷山縦走	戸叶	72			
075	アブサラサス1峰初登頂 (1976)	石原敏雄	74			
076	サンゲマルマル初登頂 (1984)	上月登喜男	76			
077	大阪大学山岳会 記録 (行事)		80			
078	大阪大学山岳会 役員・会則		80			
19	001	今はなき先輩岳人を想う	徳永篤司		1989.05 来村宗紀	
	002	1985年度を振り返って	水川朋吉			

時報№	文献№	表 題	筆 者	ページ	発行、編集	
19	003	1986年度をふり返って	戸叶 聡			
	004	1987年度をふり返って	来村宗紀			
		1985年度				
	005	5月山行 表銀座～裏銀座縦走	藤田	1		
	006	新歓合宿 別山平	宮田	3		
	007	夏山合宿 真砂定着	(水川)	4		
	008	夏山縦走 朝日岳～室堂縦走	東条	11		
	009	南アルプス縦走	柴田	12		
	010	上高地～親不知縦走	紫藤	13		
	011	個人山行 八ヶ岳縦走	東条	14		
	012	黒部下ノ廊下	柴田	14		
	013	頸城縦走	紫藤	14		
	014	偵察山行 劔岳・北仙人尾根偵察	宮田	15		
	015	燕～槍～中崎尾根	来村	16		
	016	アイゼン合宿 木曾・御岳	藤田	17		
	017	冬山合宿 劔岳・北仙人尾根	宮田	18		
			1986年度			
	018	ブレ春山 八ヶ岳定着	来村	21		
	019	春山合宿 笠ヶ岳～槍ヶ岳	戸叶	21		
	020	ポスト春山 天狗尾根	戸叶	22		
	021	5月山行 穂高・岳沢新歓合宿	戸叶	23		
	022	白馬主稜	戸叶	24		
	023	春山偵察山行 黒部五郎南西尾根～裏銀	紫藤	25		
	024	夏山合宿 涸沢	戸叶・来村	25		
	025	夏山縦走 尾瀬～平ヶ岳縦走	紫藤	33		
	026	谷川岳定着	来村	34		
	027	大雪山系縦走	鈴木	39		
	028	後立山縦走	大倉	39		
	029	個人山行 大峰・孔雀又谷	大倉	39		
	030	穂高屏風岩	(大西)	40		
	031	劔山・三嶺 (四国)	東条	41		
	032	偵察山行 白馬・突坂尾根偵察	戸叶	41		
	033	赤谷尾根～劔岳	来村	43		
	034	白馬～八方尾根	奥山	44		
	035	アイゼン合宿 木曾・御岳	紫藤	45		
	036	冬山合宿 白馬・突坂尾根	戸叶	46		
			1987年度			
	037	ブレ春山 八ヶ岳定着	藤田	49		
	038	春山合宿 遠見尾根～白馬岳	来村	49		
	039	赤谷尾根～劔岳	藤田	51		
	040	新歓合宿 涸沢	紫藤	52		
	041	S字峡横断・ガンドウ尾根偵察と八ツ峰敗退	戸叶	55		
	042	夏山定着 劔岳・真砂	来村	57		
	043	夏山縦走 甲斐駒赤石沢と北岳バットレス	来村	63		
	044	東北岩井又谷	紫藤	67		

時報№	文獻№	表 題	筆 者	ページ	発行、編集	
19	045	南アルプス縦走	大倉	68		
	046	個人山行 大峰・下多古谷	大倉	69		
	047	台高（東ノ川本流）敗退	蔭山	69		
	048	アイゼン合宿 御岳	大倉	69		
	049	偵察山行 明神西南稜～槍ヶ岳	藤田	70		
	050	冬山合宿 明神西南稜～槍	来村・藤田	75		
			大阪大学山岳会の部			
	051	追悼 水野祥太郎先生			81	
	052	パウル エルニ氏の便り（スイスの登山家）	水野祥太郎氏遺稿		81	
	053	追悼（水野先生）	徳永篤司		84	
	054	恩地裕先生			85	
	055	恩地裕氏の前穂奥又白側に於ける行動記録及び登攀記			85	
	056	恩地裕先生を偲ぶ	大工原 恭		93	
	057	松久博君を偲んで	徳永篤司		95	
	058	昭和62年度行事報告 総会			97	
	059	榎ノ木寮例会			98	
	060	東京支部懇親会	明神		100	
	061	榎ノ木寮開設25周年 記念式典			102	
	062	榎ノ木寮建設からUSA	山本彰三		103	
063	榎ノ木寮建設時の山岳部	梶本孝治		103		
064	私の青春25年	畑中 薫		104		
065	会員寄稿 篠田先生語録（その一）	山本光二		105		
066	ヒマラヤ・トレッキング雑感	辻川 真		106		
067	谷川岳 滝沢リッジ	越智栄次郎		108		
068	会員の近況（吉見俊一、他30名）			109		
069	山岳会記録（集会、行事、昭和61年～63年）			114		
20	001	序	大野義照	1	1996.09	
	002	山登りに就いての随想	徳永篤司	2	川上和幸	
	003	1988年度を振り返って	紫藤圭介	4		
	004	1989年度を振り返って	大倉徹雄	5		
	005	1990年度を振り返って	蔭山 健	5		
	006	1991年度を振り返って	枳尾豪人	7		
	007	1992年度を振り返って	森 政人	8		
	008	1993年度を振り返って	川上和幸	9		
	009	1994年度を振り返って	光永正樹	9		
			1988年度			
	010	五月合宿 剣沢	（紫藤）		16	
	011	夏山定着合宿 真砂	（紫藤）		17	
	012	夏山縦走合宿 上高地～黒部五郎～五色ヶ原～雷鳥平～大日岳～称名滝	（大倉）		21	
	013	黒部峡谷黒薙川柳又谷完全廻行	紫藤		22	
	014	偵察山行 表銀～槍	大倉		23	
	015	毛勝～東芦見尾根	（紫藤）		24	
016	アイゼン合宿 御嶽山	枳尾		26		

時報No.	文献No.	表 題	筆 者	ページ	発行、編集
20	017	冬山合宿 毛勝 東芦見尾根	(紫藤)	27	
	018	春山合宿 表銀座から槍ヶ岳縦走	大倉	28	
		1989年度			
	019	新人歓迎合宿 涸沢	蔭山	32	
	020	夏山定着合宿 涸沢	大倉・栃尾・蔭山	33	
	021	夏山縦走合宿 南アルプス縦走	森	36	
	022	秋山個人山行 黒部川下ノ廊下	(栃尾)	38	
	023	安曇川猪谷 (比良)	(栃尾)	38	
	024	アイゼン合宿 御岳	栃尾	39	
	025	冬山合宿 鳩峰～北葛岳～蓮華岳	大倉	39	
	026	春山合宿 天狗尾根～鹿島槍～爺南尾根	(蔭山)	41	
	027	三月山行 赤岩尾根～鹿島槍ヶ岳～牛首尾根～S字峡～ガンドウ尾根～剣岳～早月尾根	藤田	43	
		1990年度			
	028	新人歓迎合宿 剣沢	蔭山	49	
	029	個人山行 丸山東壁	蔭山	50	
	030	夏山定着合宿 真砂沢	(蔭山)	52	
	031	夏山縦走合宿 槍～親不知	栃尾	55	
	032	南アルプス甲斐駒ヶ岳	蔭山	56	
	033	明星山P 6 南壁	(蔭山)	58	
	034	春山偵察合宿 湯俣～雲ノ平～薬師沢小屋～太郎小屋～折立	栃尾	60	
	035	冬山偵察山行 雄山東尾根～真砂尾根	(蔭山)	62	
	036	アイゼン合宿 御岳	(蔭山)	64	
	037	剣岳・小窓尾根 (関西学生生山岳連盟隊)	蔭山	64	
	038	冬山合宿 雄山東尾根	(蔭山)	66	
	039	八ヶ岳 (横岳西壁)	(蔭山)	67	
	040	春山合宿 湯俣～雲ノ平～薬師岳～神岡新道	栃尾	68	
		1991年度			
	041	新人歓迎合宿 岳沢	森	72	
	042	個人山行 安曇川 奥ノ深谷	(栃尾)	73	
	043	夏山定着合宿 真砂	光永	73	
	044	夏山縦走合宿 中房温泉～槍ヶ岳～雲ノ平～有峰口	藤田	75	
	045	偵察合宿 大日尾根～奥大日岳	森	76	
	046	アイゼン合宿 御嶽山	寺田	76	
	047	冬山合宿 大日尾根～奥大日岳	栃尾	77	
	048	春山合宿 白峰三山縦走	(森)	79	
		1992年度			
	049	新人歓迎合宿 涸沢	(森)	84	
	050	夏山定着合宿 涸沢	(森)	85	
		夏山縦走合宿			
	051	扇沢～鹿島槍ガ岳～五竜岳～白馬～朝日岳～親不知	(光永)	91	
	052	燕岳～常念岳～蝶ガ岳～横尾～上高地～西穂山荘	(寺田)	92	
	053	裏銀座縦走	(川上)	93	
	054	偵察合宿 大明神尾根	(森)	94	

時報№	文獻№	表 題	筆 者	ページ	発行、編集	
20	055	弓折南尾根～笠ヶ岳	光永	95		
	056	アイゼン合宿 御嶽山	溝西	96		
	057	冬山合宿 大明神尾根	森	96		
	058	春山合宿 弓折南尾根～笠ヶ岳	光永	98		
	059	中央アルプス縦走	(川上)	100		
	060	大山北壁 鏡岩ルート	光永	101		
	1993年度					
	061	新人歓迎合宿 白馬大池	寺田	104		
	062	白馬双子尾根隊	(藤田)	104		
	063	ブレ夏山合宿 小川山夏山ブレ合宿	(光永)	105		
	064	南アルプス深南部	(青木)	106		
	065	夏山定着合宿 真砂	(川上)	108		
	066	夏山縦走合宿 南アルプス縦走	溝西	110		
	067	後立山縦走	中西	113		
	068	赤木沢縦走	川口泰宏	113		
	069	個人山行 明星山南壁マニフェストルート	光永	114		
	070	白山	(飯田)	116		
	071	石鎚山縦走	(尾崎)	117		
	072	偵察山行 表銀座～上高地縦走	寺田	117		
	073	早月尾根 (飯田真宏遭難、特別号参照)		118		
074	南アルプス鋸岳縦走	(光永)	118			
075	中崎尾根～槍ヶ岳	(川上)	119			
076	冬山合宿 白馬大池	(川上)	120			
077	ブレ春山合宿 大山	光永	120			
078	春山合宿 中崎尾根	(川上)	121			
079	鋸岳～甲斐駒ヶ岳	光永	121			
080	中房温泉～大天井岳～常念岳～ 蝶ガ岳～上高地～沢渡	寺田	124			
081	白馬岳	光永	125			
1994年度						
082	新人歓迎合宿 剣沢	光永	128			
083	ブレ夏山合宿 小川山	(尾崎)	129			
084	白山	(給田)	130			
085	南アルプス深南部	(青木)	130			
086	夏山定着合宿 真砂	(光永)	134			
087	夏山縦走合宿 南アルプス縦走	青木	143			
088	後立山	川口	147			
089	個人山行 安曇川へく谷	(尾崎)	148			
090	奥鐘山西壁 浦島太郎ルート	光永	148			
091	大峰山脈縦走	中西	148			
092	中央アルプス南部	青木	149			
093	偵察合宿 仙人山 (樺平～阿曾原小屋～池の平小屋)	(藤田)	150			
094	仙人山 (樺平～坊主山～仙人山～阿曾原)	寺田	150			
095	中央アルプス偵察山行	(青木)	152			
096	表銀座～槍	(尾崎)	153			

時報№	文献№	表 題	筆 者	ページ	発行、編集
20	097	僧ヶ岳偵察山行	中西	154	
	098	アイゼン合宿 御岳	(光永)	155	
	099	冬山合宿 宇奈月温泉～僧ヶ岳	(川上)	155	
	100	北仙人尾根	寺田	156	
	101	池の平小屋と田中正雄さんのこと	大工原 恭	159	
	102	1992年アイランドピーク遠征報告書	紫藤圭助・大倉徹雄	163	
特別号					
S 1	001	はじめに	篠田軍治	1	1963. 01 梶本孝治
	002	戦後10年の歩み 後立山連峰から黒部へ		2	
	003	リーダー雑感 昭和29年を回顧	宍戸 元	20	
	004	昭和31年を回顧	木村裕一	22	
	005	昭和35年を回顧	田村俊秀	23	
	006	合宿考	尾藤昭二	25	
	007	合宿考	山本信樹	27	
	008	学生登山をふりかえって	岡田博司	29	
		合宿記録			
	009	1949年春山 雨飾東南稜	大島輝夫	32	
	010	夏山 剣沢合宿	家田千尋	33	
	011	冬山 厳冬期の白馬岳主稜	徳永篤司	36	
	012	1950年春山 八方より鹿島槍往復	久保三朗	42	
	013	夏山 南股合宿	大島輝夫	47	
	014	冬山 杓子、双子尾根	(家田)	52	
	015	1951年春山 後立山逆縦走計画の失敗	徳永篤司	53	
	016	夏山 鹿島槍カクネ里合宿	家田千尋	57	
	017	冬山 1. 北岳合宿	大島輝夫	76	
	018	2. 八方尾根合宿	大島輝夫	78	
	019	1952年春山 小日向より不帰往復	家田千尋	79	
	020	夏山 カクネ里合宿	川島・田島・大村	89	
	021	冬山 冬の聖岳	尾藤昭二	95	
	022	1953年春山 後立山逆縦走	尾藤昭二	99	
	023	夏山 剣沢合宿	(川島)	107	
	024	冬山 天狗の科尔より槍往復	山本光二	115	
	025	1954年春山 春の黒部へ	尾藤昭二	108	
	026	夏山 南股合宿	宍戸 元	124	
	027	冬山 鹿島槍東尾根	坪井圭之助	125	
	028	1955年春山 鳴沢岳より黒部へ	宍戸 元	132	
	029	夏山 北岳合宿	木村裕一	141	
	030	冬山 双六、笠、鷲羽岳	木村裕一	147	
	031	1956年春山 春の黒部下廊下横断について	宍戸 元	154	
	032	冬山 北岳バットレス	(西川)	164	
	033	1957年春山 烏帽子小屋から黒部上廊下偵察	(岡田)	172	
	034	夏山 穂高合宿	岡田博司	178	
	035	冬山 1. 双六岳ー赤牛岳往復	岡田博司・宍戸元	180	
	036	2. 槍平新人合宿	村瀬・笠松・田村	183	

時報№	文献№	表 題	筆 者	ページ	発行、編集
	037	3. 仙丈岳女子冬山合宿	一山幸代	185	
	038	1958年春山 天狗尾根より極地法による五竜岳・爺岳	兼清喜雄	187	
	039	夏山 劔岳トレーニング	兼清喜雄	194	
	040	冬山 潤沢岳西尾根より奥穂高岳	山本信樹	195	
	041	1959年春山 黒部上ノ廊下積雪期初横断	山本信樹	201	
	042	夏山 千丈沢及び槍ヶ岳周辺	野田憲一郎	211	
	043	冬山 1. スバリ岳及び赤沢岳周辺	田村俊秀・田井英男	213	
	044	2. 白根三山ー大唐松尾根	(野田)	221	
	045	1960年春山 薬師岳東面	(田井)	224	
	046	真砂尾根から劔岳八ツ峰 1 峰	佐藤 茂	233	
	047	夏山 千丈沢をベースとして	(田村)	242	
	048	冬山 南アルプス	田村・前沢・西垣他	244	
	049	1961年春山 八ツ峰を末端から	酒井次郎	250	
	050	夏山 劔岳 1 峰東面を中心として	(酒井)	255	
	051	山行記録年表 (1948. 1～1962. 3、時報 1 号～12号)		260	
特別号		1993年11月 春山偵察合宿事故報告書 (飯田真宏君 劔岳にて遭難)			
S 2	001	序文	大野義照	2	
	002	事故報告の部			
		1. 春山偵察山行計画		4	
		2. 事故発生から遺体の収容までの行動概要		5	
		3. 事故検討会概要	森藤	7	
		4. 山岳部における山歴 (1992. 8～1993. 11)		11	
	003	追悼の部	飯田真理子 他19名	13	

(作成・川島 勇)

あとがき

「山岳会の50年史を作らなあかんのぞ、その時は頼むぜ」。2000年秋に亡くなった徳永篤司前会長から協力を要請されたのはいつだったろうか。また、お元気な時だったから、多分、白馬村の対岳館で創立50周年記念集会のあった1999年夏ごろのことだろう。長年、新聞社で文章をいじり、現会報「OUMC」の編集も担当していた私としては「まあ仕方がない」くらいの軽い気持ちで引き受けたのを覚えている。その時から今回の完成まで足かけ7年。我ながら驚くほどの長丁場となったが、まずは責任を果たせてほつとしてゐる。

これほど時間がかかったのは、言いだしつべの徳永前会長の死去に加え、まずは「遺言」である50周年記念碑の建立が急がねばならなかったことがあげられる。50年史の第1回編集委員会が開かれ、刊行準備がスタートしたのは、記念碑が完成した2001年末のことだった。滑り出しこそ、依頼した原稿の集まりもよく、「これなら半年もあれば……」と夕力をくくつたが、その後の原稿の到着はさつぱり。そのうち、編集担当者の私が仕事で和歌山県に赴任し、2年間、奈良の自宅を離れることになった。そして、自宅に戻った途端、今度は心臓手術で入院という予想外の事態に。もちろん、この間も原稿の遅れている会員への催促は欠かさなかったが、なかなか前に進まず、最後は「今月中にいただかねば、他の方に交代してもらいます」などと脅し半分的手段に訴える始末だった。

編集に当たって最も重要視したのは、創設以来、半世紀余りに及ぶ山岳会の活動の軌跡をできるだけ分かりやすく紹介すること。会員の寄稿だけではこの課題をクリアするのは難しかったため、「再録」という形で過去の記録にも紙数を割いた。また、2003年には日本山岳会からの依頼を受けて、阪大における戦前の山岳部活動について古参会員への聞き取り調査を実施することになり、その結果を50年史にどう反映させるかも課題になった。議論の末、戦前の山岳部に関する史実がいまひとつはっきりしないことなどから、会創立以前の歴史は「前史」としてごく簡単に紹介する程度にとどめることになった。ただ、戦前の歴史を無視するわけにはいかないので、タイトルには「戦後」という言葉を入れることにした。

以上が刊行までの大まかな経過で、早くに原稿をいただき、いつになったら出来上がるのかと気をもまれた会員諸氏にお詫びを申し上げたい。内容については「もつとアカデミックなもの」とか「時代に合わせて写真を多く」とか、色々なご意見があったが、紙数の制約や資料不足などからほとんども反映できなかつた。ご批判を待ちたい。

それにしても心配なのは、部員不足による現役山岳部の窮状だ。「戦後半世紀の歩み」で苦勞した編集者としては、ぜひとも「次は100年史を」と期待したいところである。阪大山岳部と阪大山岳会がそれまで生き延びられることを祈るばかりである。

(編集委員会を代表して 高田邦雄記)

後立山からヒマラヤへ

—— 戦後半世紀の歩み

発行 二〇〇五年十一月
発行者 大野 義 照
編集 大阪大学山岳会

記念誌編集委員会
印刷・製本 有限会社 関西インク

